

---

Fate/not rebellion ~ 反逆しない軍人の聖杯探索 ~

RYUZEN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate/not rebellion 反逆しない軍人の聖杯探索

### 【Nコード】

N1537T

### 【作者名】

RYUZEN

### 【あらすじ】

第四次聖杯戦争。衛宮切嗣は万全を期して召喚に挑んだ。しかし召喚に応じたサーヴァントはアーサー王とは全く違う騎士で……。イレギュラーな聖杯戦争。ならば結末もまたイレギュラーとなるのが必定。一つの歯車の狂いは全ての歯車を狂わせ、ここに有り得ぬ邂逅が実現する。これは帝国最強騎士による聖杯探索の物語。

# SEARCH 1 魔人が呼ばれた日

聖杯は一つきり。

奇跡を欲するのなら、汝。

自らの力を以って、最強を証明せよ。

手段は問われぬ。

魔術師でなくとも結構。

聖杯は、ただ勝者の手に委ねられるだろう。

一人の男の話をしよう。

彼は英雄だった。そして誰よりも軍人として完璧であった。

命を賭けてでも任務を遂行し、命令があれば肉親ですら排除する。

必然、誰よりも軍人として完璧だった男は英雄となった。

ブリタニアの魔人。

それが彼に与えられた名。

他のどの騎士よりも悪辣で、歴代最強とまで謳われた彼の異名。

そして彼は救国の大英雄となった。

祖国を奸賊から取り戻し、世界の独裁を阻止する事にも成功した。

だが、代償として彼は失いすぎた。  
愛する者を、愛した者達を。

三度。目の前で愛した女を喪った。

だからこそ彼にもう一つ異名が与えられる。

『悲恋の騎士』

それが彼のもう一つの渾名にして呪い。

これは異世界の騎士が辿った聖杯探索の物語。

魔人は一人の冷酷な正義の味方と出会う。

対峙するは嘗ての英雄豪傑達。挑むは魔術師殺しと歴代最強の帝

国騎士

彼の名は

永遠に終わらないかのような雪の中。

その城はあった。

時代錯誤も良い所の古めかしい古城。

そこに住むのはアインツベルンという一族。

嘗て聖杯を手に入れかけ、以来十世紀、聖杯を求め続け純潔を保ち続けた家である。

アインツベルンは聖杯探求の末、遂には聖杯を自ら作り出すまでに到った。しかし彼等の力をもってしても聖杯の器は用意出来ても中身は用意する事が出来なかった。

だからこそアインツベルンは極東の島国日本の魔術師二家と手を結ぶ。

それがマキリと遠坂。

聖杯戦争。

七人の魔術師と七人のサーヴァントが万能の願望機『聖杯』を求めて殺しあう。

これによって『』への道をつくり第三魔法、魂の物質化へと至る。それがアインツベルン十世紀に渡る悲願。だが彼の一族は過去三度に渡って行われた聖杯戦争の全てにおいて敗北してきた。

その理由の一つが彼等の魔術が戦闘向きでないことがある。

だからこそ万全を期す為に、アインツベルンは純潔を冒してまで、対魔術師戦に特化した男である魔術師殺し衛宮切嗣を雇い入れた。しかし三度敗れた彼らは慎重だった。

彼らはコーンウォールより発掘させた聖遺物、アーサー・ペンドラゴンが所持していた聖剣の鞘を触媒にするという完璧な布陣を敷き詰めた。

過去三度の聖杯戦争にて最後まで勝ち残った最優のサーヴァント、セイバーのクラスに彼の騎士王を招く。正に磐石なる布陣。

古城の一室には二人の人影がいた。

一人は銀髪の女性、アイリスフィール・フォン・アインツベルン。そしてもう一人がアインツベルンが雇ったメイガス・マーダ衛宮切嗣。

魔方陣の中心。

セイバーのマスターになる予定の切嗣が粛々とサーヴァント召喚の詠唱を唱える。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。  
繰り返すつどに五度。  
ただ、満たされる刻を破却する」

大気のマナが震動する。

そこに現れる存在の強大さを世界が察知しているのだろうか。

「 告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。  
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」  
誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、  
我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、  
抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ  
「！」

そして詠唱が完了した。

溢れたエーテルは切嗣の視界を塞ぐ。そして次に目を開くと、そこには一人の男が立っていた。

「問おう」

「一安心する。どうやら召喚は成功したようだ。」

魔法陣の中心に純白の騎士服と純白のマントに身を包んだ男がいた。切嗣としては鎧で武装した姿で現れるかと思っていたが、それは大した問題ではない。これで出てきたアーサー王が可憐な少女だったならば大問題であるが。

光に照らされてそのサーヴァントの顔が映し出される。

随分と若い。その顔に刻まれた皺などから判断して、もしかした

らアイリスフィールよりも若いかもしれない。尤もサーヴァントは全盛期の姿で呼び出されるので、見た目の年齢など当にはならないが。

「お前が俺のマスターか？」

それが彼の第一声だった。

透き通った声は、アインツベルンの城には良く響いた。

召喚が成功した所で切嗣の思考は次の段階へと移行する。

先ず手始めにこのサーヴァントの機能を確認しなければならない。それと……。

珍しく暗鬱になる。

アーサー王といえば騎士の中の騎士。自分のような殺し方に、騎士道だなんだと難癖をつけてくるだろう。さて如何に使うか、それが問題だ。

しかし切嗣は確認のつもりで、先ず訊ねた。

「そうだ、僕がお前のマスターだ。

で、お前のクラスはセイバーで、そして真名はアーサーで間違いないか？」

「アーサー？」

怪訝になる。

どうも反応が妙だ。まるで変なものを見るような目で切嗣を見ている。

「あー。一つ誤解があるようだから訂正しておこう。

残念ながら俺はアーサー王じゃあない」

「アーサー王では、ない、だと……！？」

戦場において常に冷静さを失わない切嗣であったが、流石にこの時ばかりは驚愕で目を見開いた。

まさか失敗したというのか。万全を期して行った召喚が。有り得ない。魔法陣は完璧だ。時間も切嗣が最も力を出せる時刻だ。不備はない。肝心の触媒にも『全て遠き理想郷』という一級品を使ったのだ。それがよもや、アーサー王ではない、だと。

嘘を言っているようには思えない。いや嘘をつく理由がない。この男は、セイバーは至って真面目な顔つきだ。

「なに心配することはないさ、マスター」

「……………」

自分の呼んだサーヴァントの声が届く。

「俺は確かにアーサー王じゃあない。それは認めるさ」

だが、とセイバーは言葉を区切る。

「この身は帝国最強の騎士を冠して尚も歴代最強と謳われた騎士。そして騎士王アーサーと戦い、そして勝利した英霊でもある」

その日。



アインツベルンの混乱といたら、とても一言では言い表せないようなものだった。

特にアハト翁などは八つ当たりとばかりに切嗣に怒鳴り散らしたほどだ。

だが既に切嗣は頭を切り替えていた。

アーサー王ではなかった？

別に構わない。違うなら違うなりに戦術を立てればいい。

だが切嗣の度肝を抜いたのは、セイバーの真名のことであった。

「平行世界の英霊、だって……？」

「そうだ、マスター。」

この世界に俺の英雄譚も歴史も存在しない。つまり知名度補正が皆無ということだ」

英霊の座とは通常の時間軸から引き離された場所にある。

だから論理的には未来からだろうと平行世界からだろうと、サーヴァントは召喚されるが、それでも切嗣には腑に落ちない事が多々あった。

「いいだろう。それは分かった。」

だが触媒としたアーサー王の鞘は一級品の聖遺物だ。

なのに何故お前が召喚された。アーサー王と縁のある英霊なのか？」

「察しがいいな、その通りだ。」

詳しい説明は省くが、生前俺は騎士王と戦い、結果、彼の聖剣を譲り受けた、というよりは強奪したのさ。その辺りが理由なんだろうが………奇妙だな。

剣なら兎も角、鞘とは縁なんてない。いやまで。屁理屈とはいえあ

るにはあるが……。しかしそれでも普通ならアーサーが召喚されるはず。  
もしかしたらマスター。よっぽど性格的にアーサー王と相性悪かったんじゃないか？」

「……………」

そうかもしれない。

確かに騎士の代表とでもいうべきアーサーと自分との相性は最悪だろう。

しかしとなるとだ。

「聖剣を強奪したといったな。つまりは」

「さつきといい随分と頭が回るな。

尤もエクスカリバーは強奪したものであっても所有者であつても使い手ではない。しかしだ。マスター、俺の宝具は先に教えた通りだ。それにもう一つの宝具もある。

もっとも俺としては、ライダーとして召喚されたほうが都合が良かったのだが」

「ライダー？」

「気にするな、マスター。

使えない宝具を今更考えても仕方ない。もっと生産的にいこう」

「そうか。じゃあお前のスペックを全て教える」

すると素直にセイバーは語りだした。

自身の宝具から始まり保有スキルや得意な分野。

話を聞き終わって、切嗣は思わず天を仰いだ。

(まさか、これ程とはな……)

相性が悪いのじゃない。逆だ。相性が良すぎるのだ。

セイバーはその騎士服とは裏腹に、潜入や暗殺、はたまた工作にも優れていると言った。

おまけに近代兵器を得意としているとも。まるで英霊の座が自分に合わせたサーヴァントを選んでくれたような錯覚すら覚える。

「ところでマスター」

「なんだ？」

「その可愛らしい貴婦人は一体どちらかな？」

「え、私？」

にやにやとセイバーが言う。

はつきり言っただけの目は切嗣にとっては不愉快極まるものだった。だからさっさと釘を刺しておくことにする。

「彼女は僕の”妻”のアイリだ」

「よ、宜しくねセイバー」

妻という部分を強調して言う。

切嗣にはなんとなくセイバーの性格の一端が理解できていた。この目、そして雰囲気。間違いなくこのサーヴァント、かなりの好色だ。

「おやおや残念だ。このような麗しい貴婦人が私のマスターであったのならば、騎士として永久の忠誠を誓ったというのに」

「上手ね。お世辞でも嬉しいわ」

「冗談なものか。貴女の美貌、もし生前の私が見かけていたら、迷わずに声をかけていただろう。美しいという言葉すら霞むほど、貴女の美は素晴らしい」

「……………」

「そう睨むなよ、切嗣。安心するといい。俺は未亡人には手を出すが人妻には手を出さない。というより略奪愛は趣味じゃないさ」

まったく腹の立つサーヴァントである。

これで小奇麗な騎士道を語るようなサーヴァントだったならば、完全にただの道具として扱い、会話すらしないで済んだであろうが、何の因果かこのセイバーは近代戦、それもゲリラ戦や市街戦にも通じているプロフェッショナルときた。

戦術的な意味でも会話しない訳にはいかないだろう。

こうして衛宮切嗣とセイバーの聖杯戦争は幕を開けた。

この先にどんな運命が待っているのか。どんな激戦が待っているのかを二人は知らない。



## SEARCH 2 ジンクス

聖杯。

多くの伝承に現れる万能の願望機。

彼の有名なアーサー王伝説においても聖杯は登場し、多くの騎士が聖杯探索へと駆り出された。

しかし結局アーサーは聖杯を手に入れる事は出来なかった。そして何の因果か、聖杯を求めて争う四度目の決戦にも招かれなかった。これはそんな物語。

セイバー召喚から数日。

当初の予定通りセイバーのマスターである切嗣は一足先に冬木市へと発っていた。

セイバーのほうは切嗣との同行を具申ししていたが、切嗣のほうは却下した。呼び出したサーヴァントが彼の騎士王ではなかった為に根底の戦略に狂いが生じたが、それでも元々臨機応変に物事に対処することが得意な切嗣である。直ぐに新たな戦略を組み立て直した。

序盤は情報収集に徹する。

これがセイバーと切嗣が話し合った結果出した戦略だった。

そもそも聖杯戦争の勝敗を分けるのはサーヴァント、引いてはサ

「サーヴァントの最終兵器たる”宝具”だ。宝具とは英霊と共に語り継がれる伝説の武器、または伝承が形となったもの。英霊の宝具は其々が一級品の神秘の塊であり必殺の武器だ。」

しかし逆を言うならば、英霊にも弱点というものがある。そして宝具の真の力を開放するには、その宝具の真名を口にしなければならぬ以上、宝具を使えば必ずそのサーヴァントの名が知れてしまう。

英霊同士が激突する聖杯戦争において真名が知れるというのは大きなハンデだ。サーヴァントは全て歴史は伝説に名を遺した者達であるが、それ故に名が知ればその英霊の弱点までも晒してしまうことになるのだ。

例えるのならば、相手のサーヴァントの真名がアキレスだった分かったとしよう。

そうなるとその無敵の能力も理解してしまうが、同時に倒すには踵を狙えばいいということも分かってしまうのだ。

平行世界の英霊たるセイバーはマスターへの隠蔽こそ完璧であり決してマスターがその真名を暴くことは出来ないだろうが、逆にサーヴァントはそうではない。英霊の座という通常的时间軸より切り離された場所にいる彼らサーヴァントはセイバーの真名も知っているだろう。その偉業や伝説も。

これが知名度の低い守護者などなら兎も角、生憎とセイバーの真名は元の世界では有名に過ぎる。

だからこそ序盤は出来る限り諜報や情報収集に徹して、こちらの手札を隠し通す。そして中盤から終盤に差し掛かったところで、切り札を暴いた敵のサーヴァントを狩るという作戦。

しかしそんな事くらいまでは素人でも考え付く。

切嗣が魔術師殺しと呼ばれたのは、魔術の技量が人並み外れていたからではない。その狡猾さ、結果を冷徹に追い求める非情さこそ

切嗣最大の武器。

この作戦は戦略の一部に過ぎない。

情報収集に徹する傍ら、切嗣は戦うマスターの側面を狙い、セイバーは時には表舞台で、時には裏方へと臨機応変に戦場を変えて敵を消耗させる。それこそが真の狙い。

その戦略の一環として、当面の拠点となる冬木市のとある家の用意をして、大体の下準備を済ませる為に切嗣は一足先に日本へと向かったのだ。

セイバーの同行を却下したのは、聖杯戦争の行く末を左右する聖杯の運び手たるアイリスフィールの護衛のためだ。尤もセイバーにはアイリスフィールの役割など知らされていないが。

飛行機の中。

そのファーストクラスにアイリスフィールと、霊体化して姿こそ見えないセイバーがいた。

飛行機は後もう僅かで日本に到着する。

つまり始まるのだ。アインツベルンの祈願、いや切嗣の祈願を叶えるための、人類史上最後の戦争が。だけどやはり今まで一度も城の外に出たことのないアイリスフィールにとっては、飛行機から眺めるソラというのは新鮮だ。

というより機内販売一つですら新鮮である。貴婦人として最低限の嗜みは守りつつも、やはり興奮は抑えきれないようで、子供のような天真爛漫さで窓の外を見ていた。

「随分と楽しんでいるようだな、アイリスフィール。もしかして飛行機は初めてなのか？」

霊体化したまま小声でセイバーが言った。



「ええ初めて。飛行機に乗るのも、城の外に出るのも。切嗣から外の写真は一杯見せて貰ったけど、やっぱり生で見るとは違いわ」

「城の外に出るのが初めて？」

「つまり箱入りということか。成程、それなら納得だ」

「セイバーも似たような経験があるの？」

「ああ。こう見えて俺も箱入りさ。

物心ついてからずっと剣術や格闘術、礼儀作法にダンス、バイオリン、乗馬などを叩き込まれていたからな。話し相手といったら腹黒い大人ばっかだった」

「それは分かるわ」

アイリスフィールも同じようなものだ。

ホムンクルスとして、ただ聖杯戦争に勝利する為に製造された人形。周りにいたのは従順なアインツベルン製ホムンクルスのメイドや使用人達と、一癖もある魔術師ばかりだった。

切嗣と娘のイリヤを除いては。

「そう神妙な顔になる必要なんてない。

確かに子供の頃はそんなもんだったが、少ないながらも同年代の友達はいたさ」

「友達……」

そういえば自分には夫も娘もいるが友達はいない。

近い年頃の知り合いといえば切嗣の助手であり相棒の久宇舞弥がいるが、彼女とはどうにも話にくい。余り綺麗な感情ではないが、女としての嫉妬心もあるのだろう。自分は戦いになれば役に立たないが、彼女は戦いでも立派に切嗣を支えているのだから。

それにしても友達。

アイリスフィールはこの聖杯戦争で自分の最後を想像できるが故に、僅かに与えられた時間を思いつきり使いたかった。だから何気なしに隣のセイバーに、

「ねえセイバー。もし良かったら私の友達になってくれないかしら？」

「おろ」

思わず吹き出しそうになる。

まさか伝説に名を遺した英霊ともあろうものが「おろ」なんて間抜けな声をあげるとは。

そういう所は人間と変わらないのだな、と納得する。

「ええと、その……ごめんなさい。思いつきでこんな事言っちゃって。

だけど迷惑じゃなかったら」

アイリスフィールがあたふたするのを面白がっているのか、セイバーはくつくつと笑うと、

「今日は良い日だ。友達が一人増えてしまった」

悪戯っぽく言った。

途端、空気が緩まる。

「けど友達といっても私、何をどうしたらいいか」

ホムンクルスとしてある知識と、切嗣から教わった知識を総動員して友達としての行動パターンを探る。娘や夫との接し方は慣れたが、全く未知の友人とは一体全体どう接したらいいのか。

「なに、そう難しく考える事はない。

経験則からいって、共に戦い共に盃を酌み交わせば何時の間にか友情なんて築けてるものさ。

そうだな。では冬木に到着したらお勧めのブレンドをご馳走しよう。こっに見えて、俺は珈琲には煩いからな」

「サーヴァントなのに、珈琲？」

「不思議か？」

だがサーヴァントといえど生前は人間だ。

当たり前のように食べ物を食べるし、趣味の一つや二つあるさ。

まあとある馬鹿は人間として不適合な趣味の奴がいたが……」

遠い目をするセイバー。

きつと生前のことを思い起こしているのだろう。

アイリスフィールはセイバーが平行世界の英霊だということは知っていたも、詳しくどんな活躍をしたのか、どんな人生を歩んだのかは知らない。

だけど英霊となった以上、その人生には多くの苦難があったのだろう。その事はなんとなくアイリスフィールにも分かった。

「しかし嫌な予感がする」

「どうしたの、セイバー？」

「実はだ。俺の乗った飛行機は墜落するという嫌なジンクスがあったな。」

お陰で中東でゲリラになったりロシアで白熊と戦ったりと色々散々な目にあっただよ」

「考え過ぎじゃないかしら。」

聖杯戦争は冬木で行われるのよ」

「そうだけど……………うつむ」

アイリスフィールには霊体化したセイバーを見ることは出来ないが、なにやら考え込んでいる。

だけど嫌な気はしない。

こうやって警告してくれたのも自分の身を案じての事なのだろうから。

(あれ……………?)

そこでふと、機内の雰囲気が変わったことに気付いた。

隣のセイバーを見ると、驚いたことにセイバーは実体化していた。

「セイ、」

一体どうしたのか。

理由を聞こうとアイリスフィールが口を開くが、それは急に傾いた飛行機のせいで最後まで言い終わることはなかった。

「きゃっ！」

「あちらこちらで上がる悲鳴。

無理はない。今まで普通に飛んでいた飛行機が突然右に傾いたのだ。

しかしそれだけじゃない。他の乗客には分からないであろうが魔術師でありホムンクルスであるアイリスフィールには分かった。飛行機の横を猛烈なスピードで通過する閃光を。

「気の早いマスターとサーヴァントがいたものだ」

「そんな。それじゃあ、まさか！」

「ご名答。聖杯戦争第一戦の幕開けということだ。

こういう時どこぞの馬鹿だったら『ありえない』とか言っただろうな」

飛行機内という限られた空間。正体不明の敵サーヴァント。

そんな絶体絶命の状況でありながらセイバーは面白そうに笑って見せた。

土壇場においてこの余裕。成程これが英霊なのか。人でありながら人の身に余る偉業を成し遂げた存在。貧弱な人の体で強大な神秘をも打倒する無双の騎士。

アイリスフィールは英霊という存在に、人として正直に憧憬の念を抱いた。

SEARCH 2

ジ  
ン  
ク  
ス（後書き）

初っ端から戦闘。

次回は皆大好き赤い人との戦いです。

守護者。

英霊の中でも特に信仰心のない者は、世界の滅亡を防ぐ『守護者』として世界に使役される。しかし世界の滅亡を防ぐ、というのは滅亡の要因たる人間を完膚無きにまで殺しつくすことだ。

そこに慈悲もなければ救いもない。守護者は危機に直面している人を救うのではない。危機に直面している人間を皆殺しにして、何の危機に晒されていない多数を守るのだ。

第一射から数秒後。

即座に予想外の狙撃に対応した 最高の狙撃手 でもあるセイバーは日本へと向かう旅客機の上に立っていた。もしこの光景を一般人が見れば驚愕することだろう。

現在この旅客機の手速度は約毎秒0.2km。到底人間が耐えられる風速ではない。

もし人間だったのなら、当の昔に風に飛ばされ海の藻屑……いや空の藻屑となっている

（遠距離からの狙撃。となるとアーチャーか）

セイバーはそう判断する。

魔術師であつても戦闘車ではないアイリスフィールにはわからなかつたかもしれないが、あの時旅客機の直ぐ横を通過していったのは矢だ。

ならば必然的に敵サーヴァントは弓兵ということになる。

「切嗣に連絡……いや、止めておこう」

推測するに最低でも現在の自分とアーチャーの距離は8km。

アーチャーのサーヴァントはその名の通り弓を主体としたサーヴァントであり、かなりの距離まで正確無比な狙撃が可能だ。

しかし先程の狙撃はセイバーの目から見ても実にお粗末なものだつた。

標的が巨大な旅客機だつたから兎も角として標的が人間サイズだつたら恐らく外していただろう。

セイバーは敵アーチャーの正確な狙撃が可能とする距離は3km  
7kmと推測する。

「しかし危なかつた」

セイバーの持つ最大の武器。

ランクにしてA++に相当する最高ランクの直感は、もはや数手先の未来を予知する事を可能にしている。故にセイバーは目を閉じても目を開いている時と同じように行動できるし、トラップや暗殺などの手段にもアドバンテージがある。

最初の狙撃を未然に察知し、自身の宝具で旅客機の制御を乗っ取ることによって狙撃を避けることが出来たのも直感スキルあつてこそだ。

もしこれがなければ、矢は間違ひなく飛行機に命中していただろう。

「さて、と」



セイバーは生前の経験則。そして戦術眼を生かし状況判断に努める。

この旅客機は秒速200mで飛行している。  
そして敵アーチャーがいると思われる場所はここから6km〜7kmだろう。となれば勝負は本当に一度きり。

セイバーの宝具の一つ『オウル・ハイル・ソルジャー軍人に栄光を』はセイバーの触れたものを何であろうとランクE〜D相当の宝具へとする事を可能にしている。

宝具化した旅客機を破壊することは先ほどまでのチンケな矢では不可能だ。ランクは低いとはいえ宝具は宝具。宝具ですらない矢風情に落とされるほど軟ではない。

既に矢次早に打ち出された矢が数本。旅客機へと命中しているが決定打どころか大した傷すらつけられていないのだ。

最初は避けようかと考えたセイバーであったが、どんどん距離を縮めていくにつれてアーチャーの矢の命中率は格段に上がっている。

これで操っているのが戦闘機などなら兎も角、戦闘用に作られていない旅客機ではそんな無茶苦茶な機動は不可能だ。

ランクAの騎乗スキルを使えば限界を超えたスペックを発揮させることは容易であるが、余りにも限界を超えすぎたスペックは発揮させられない。

時間が進むにつれてアーチャーとの距離は縮まっていく。

セイバーの脳裏には34通りの行動パターンがある。  
だが大きく二つに分けると、切り札を切るか否かだ。

切り札をきれば、この場を確実に切り抜ける自信がある。

しかしもしそれをすれば聖杯戦争序盤から自分の切り札を晒してしまうことになる。

セイバーとしてもそれは避けたい。手札を出来る限り隠し通す戦略を立てたばかりだというのに、早々からその戦略を破壊するほど馬鹿らしい事もない。

ただセイバーは一つの戦略に拘って敗北するほど愚かではない。幾ら綿密に立てた戦略でもそれが最終的に勝利へと繋がらないのであれば、あっさりとその戦略を捨てる柔軟さを持ち合わせている。

メリットとデメリット。

リスクとリターン。護衛対象たるアイリスフィールの安全。今後の戦略。戦力不明のアーチャー。そしてこういう時は最も頼りになる自分の直感と戦闘倫理。

それら全てを天秤にかけ、

「

」

切り札をきることにした。

セイバーの直感は告げていた。次の一撃は敵サーヴァントにとって必殺足りえるものだと。

故に出し惜しみはやめる。

それに宝具を開放する際に最も危ぶまれるのは真名解放により自分の正体が相手に知られることだが、ここは地上から遠く離れたソラ。真名解放したとしても、その真名が他者に聞かれる心配は皆無。宝具の効果までは隠し通せないだろうが、アーチャー一人に知られただけというのならば、まだ幾らでもやりようはある。こんな戦場たる冬木以外で戦っているサーヴァントなど、自分とアーチャー以外のサーヴァントもないであろうし。

生前から使い続けたライフルを出現させる。

自身と共に英霊の座にまで招かれた武装は例えるなら体の一部。呼び出すのは至極簡単だ。言ってしまうえば世界一簡単な召喚とでもいうのだろうか。自身の一部であるが故に召喚するのは呼吸するのと同じくらい自然に行える。

静かに銃を構える。

そして静かに目を閉じる。狙撃手が目を閉じるなど通常なら考えられぬ愚行であるが、ことセイバーの場合は常識は通用しない。

平行世界の英霊である彼には知名度による恩恵が得られない。それ故にスキルの幾つかは消失しているのだ。その失ったスキルの一つが『千里眼』。動体視力や遠くの敵を視認するのに不可欠な技能である。弓兵に必要な敵を視認するための『眼』がないセイバーでは、狙撃手として十全の力を発揮することは不可能だ。

だがしかし、そのような言い訳を絶対にセイバーはしない。

（右腕がなくなれば左腕を使えばいい。両腕が無ければ足で蹴り殺せばいい。四肢がないなら、敵の喉笛を噛み切ればいい。どんなコンディションでも一流の結果を出すのがプロフェッショナルだ）

武装や体調などを言い訳にしているようなら彼は英雄などと呼ばれてはいない。

如何なる戦局、如何なる状態でも最高の結果を叩き出す。それこそセイバーにとっての誇りだった。

だからセイバーは静かに目を閉じた。その規格外の直感を頼りに、目標の位置を特定するために。

時間にして一秒にも満たない刹那。されどこの戦場において刹那の時間は無限へ化ける。

深く、深く、深く、自己を埋没させ。

(見つけたッ！)

目標の位置が分かれば簡単だ。

既に自分の為すべきことは決まっている。

セイバーはゆっくりトリガーを引いた。

現在海上を飛行中の旅客機より遠く離れた高台に、その男。赤い外套を纏いしサーヴァントの姿があった。見た目から察するに年頃は二十代後半から三十代前半辺り。銀髪に近い白髪と浅黒い肌が特徴的な男だ。どこの国の人間なのかは流石に分からないが顔立ちには東洋人のそれ。浅黒い肌から推察するに中東の出身ではないかと思われる。

鷹の如き眼光で男が直視しているのは唯一つ。

真っ直ぐにこちらに向かってきている旅客機だ。

マスターからの情報が正しいのならば、あそこにアインツベルンのマスターであるアイリスフィール・フォン・アインツベルンが搭乗しているのだろう。

実を言えば彼も彼のマスターもこんなちゃん狙撃で敵マスターとサーヴァントを仕留められると思っていた訳ではない。

最初の一撃は単なる様子見。彼が正確な狙撃を可能とする距離は約4km。初弾を射る時点では10kmも離れていた旅客機に正確無比な狙撃を行うことは不可能だった。

だからこそその様子見なのだ。最初の一撃、旅客機を撃墜しないほ

ど威力を抑えた一撃で出方を伺い、それから対応を決める。

最低でも旅客機に矢を命中させることは出来ると踏んでいた彼とそのマスターであったが、どんな手品を使ったのか唐突に大きく旋回した旅客機は、直線で飛来する矢を見事に躲けて見せ、尚且つ秒速200mのスピードでこちらに接近しているときた。

ここで彼にある選択肢は二つ。

即ち撤退するか迎撃するか、である。

彼の持つ遠距離最大火力の一撃を叩き込む、というのはマスターによって却下された。マスターとはつまり魔術師。魔術師というのは魔術の漏洩をなによりも嫌う。遙か昔ならまだしも、厳しく情報の統制された現代社会で一般人を魔術で殺さないし記憶消去などすれば必ず矛盾が生まれてしまう。それを完全に隠蔽するのは個人の力では難しい。魔術協会や聖堂教会などの大組織ならばマスコミ操作や証拠隠滅などはお手の物だろうが、個人で一般人に魔術をかける際にはその隠蔽には最大限の注意を払わなければならないのだ。だからこそ旅客機を一機丸ごと宝具で破壊するなんていう行為は出来ない。やるのは様子見の一撃まで。なにかの原因不明の事故で済ませられる範囲に留めなければならぬのだ。

それらを踏まえた上で、彼は弓という名の銃口に凶悪な弾丸を装填した。

弾丸の名は赤原<sup>フルンディング</sup>猟犬。本来の用途は剣。しかし彼はそれを矢として使う。

一度解き放たればどこまでも標的を追い続ける猟犬。余り魔力は込めすぎない。あくまでも標的たる敵サーヴァントだけを確実に破壊するために。

弦を引く。

既に敵サーヴァントの姿は『千里眼』のスキルを有する彼には目視可能な場所にいる。

だが近づかれ過ぎてはいけない。別に彼としては接近戦は望むところであるのだが、今は狙撃に専念するようにとマスターから命が下っている。

例えその命令に疑問があったとしても別に興味もない。彼はサーヴァントとしてマスターに実に従順であるが、誰が知り得ようか。マスターの命令にただ従順であり皮肉の一つも言わないというのは、彼自身がマスターに対して完全な無関心であるということに。

もつといえは彼はこの聖杯戦争そのものに無関心だ。何故ならば彼の目的は此度の聖杯戦争ではなく次の儀。第五次こそが本命なのだから。

それでも令呪の縛りがあるのならば逆らう訳にもいかない。

だから彼はただ一体の機械として、同時に幼き頃に自分に呪いを植え付けた男への僅かばかりの怨嗟と愛を込めて、トリガーを、

「

！」

瞬間、彼は即座に弓矢を消した。

千里眼スキルを持つ彼には見える。旅客機から放たれた魔弾が真っ直ぐにこちらに向かっているのが。しかもただの魔弾ではない。

あれは宝具。真名を開放し力を解き放った必殺の魔弾だ。

自身の魔弾を解き放ってから防御したのでは、間に合わない。

殺られる前に殺られる。数多くの修羅場を潜り抜けた戦術眼は正確にそのことを伝えた。

だからこそ彼はまたセイバーと同じように瞳を閉じ、自己に埋没していく。

「I am the bone of my sword.」

その腕に力がとれる。それは生前から彼が使い続けた最も自分に相性のいい詠唱だ。

取り出すのは嘗てトロイア戦争にて英雄アイアスの使用した盾。

その花卉の一枚一枚が古の城塞に匹敵するとまで言われた、投擲武器に対しては無敵を誇る結界宝具にして彼にとっての最高の守り。その宝具の名は。

「熾<sup>ロー・アイアス</sup>天覆う七つの円冠！」

魔弾と花卉が激突した。

因果律の逆転。必中の呪いを宿した弾丸は、この絶対的防御の前に停止を余儀なくされる。

最初は盾を貫いてでも前へと進もうとした弾丸だが、やがて熾<sup>アイアス</sup>天覆う七つの円冠の前に膝を屈し、完全に力を失い地面へと落ちた。

「クッ　　今回は痛み分け、か」

彼は皮肉気に苦笑する。

こちらは相手の一撃を確かに防げた。

しかしそのせいでこちらの必殺の一撃は放てなかった。

今から放とうとしても遅い。その間に秒速200mで飛行している旅客機はここに到達してしまうだろう。マスターの命令で今は近接戦闘を避けるように言われている以上、ここは一時退却しなければならぬだろう。

「何の因果か彼女ではないようだが、中々に奇妙なサーヴァントを引き当てたものだな。爺さん」

ポツリと言い残し、彼は霊体化し姿を消した。

旅客機の上。

当面の危険が去ったことを敵アーチャーの気配が消えて数分してから、漸く確信したセイバーはアイリスフィールのもとへと戻った。当然人目につくので霊体化して。

「セイバー、敵のサーヴァントは」

「撤退した。当面の危険は去ったよ。」

どうにかこの飛行機も撃墜せず済みそうだ」

そう言っつてセイバーは笑う。

だが内心では出来る限り飛行機などの旅客機には乗りたくないと思っていた。

もしかしたら本当に変な呪いでも掛かっているのかもしれない。こつも旅客機や輸送機に乗る旅に奇襲を受けるのはただの偶然か、それとも呪いなのか。英霊たるセイバーをもつてしても分からなかった。

「そう、良かった。ここにいる人たちを巻き込まずに済んで」

「……………ああ、そうだな」

アイリスフィールは周りにいる乗客たちを見つめていた。

客の種類は様々だ。如何にもビジネスマンといった男もいるし、太った成金のような男もいれば、幼いアイリスフィールの娘であるイリヤと同じ年くらいの少女だっている。



「記憶のほうは……」

「安心して。しっかりと消しておいたわ」

最初の一矢が迫った際、旅客機の制御を乗っ取るためにセイバーは一時的に実体化してしまった。

その直後の衝撃に襲われてセイバーのことを正しく認識出来た人は少ないと思うが、それでも記憶は消しておかなければならない。

「それにしても、まさか飛行機の中で襲われるだなんて。たぶん、今までの聖杯戦争でも初めての事よ。それに如何して私達がこの飛行機に乗っているって分かったのかしら」

「それは分からない。だが聖杯戦争参加者ならばアインツベルンの名を知らない筈がないだろうから………もしかしたら、予め網を張っていたのかもしれないな」

機内に機長からの状況説明が伝えられる。

なんでも一時的に機体の制御が不可能になり、猛烈な突風で機体が傾きもしたが、現在は全く問題なく飛行中であるとのことだ。

魔術の隠ぺいにおいても、これなら問題なさそうだ。

「しかし聖杯戦争。」

古今東西の英雄豪傑が集うとは知っていたが、これ程とは」

セイバーとして歴代最強とまで謳われた騎士だ。

だが聖杯戦争には容易く最強を引き摺り下ろす最強達が勢揃いしている。

「不謹慎かもしれないが、少し愉しくなってきた」

まだ見ぬサーヴァントは五騎。

恐らくそのどれもが最強を名乗るに相応しい猛者ばかりなのだろう。

そんな猛者との戦いを想像し、セイバーは微かに笑みを浮かべた。

### SEARCH 3

### 刹那の激闘（後書き）

余談ですが……今回の戦闘時間は10秒です。

しかし考えれば考えるほど性格的相性最悪の二人です。紅茶と珈琲的な意味でも。

一緒に泣いた時に、 はじめてお互いがどんなに愛し合っているのかが分かるものだ。

それは恋人だけに限った話ではないだろう。共に笑い共に泣き共に戦えば、自分たちがどのような友情で結ばれているのかが分かるものだ。

切嗣によって招かれたサーヴァント、セイバーもそうだ。

彼にも戦友と呼べる人間たちがいた。その中には性格的に大いに問題ある人物もいたが、それでも友人であることには変わらない。

敵アーチャーの襲撃より数時間。

その後は大したハプニングもなく当面の拠点である日本邸宅へと到着した。

なんでも切嗣が極秘裏に購入しておいた曰くつきの物件らしい。本来ならアインツベルンのマスターは冬木郊外にある森の深くにある城を拠点とするのだが、聖杯戦争のようなミニマムな戦いでは頑強な要塞を築くよりも、居場所を察知されないことのほうが重要だ。

切嗣の購入した日本邸宅はちょっとした豪邸並みの広さがあるが、その解放された空間は魔術師の居城としては不適合とさえいえる。

だからこそ敵であるマスターの目を避けやすい。その人物が魔術師として優秀であればあるほど魔術師殺し衛宮切嗣にとって読み安い相手だ。

だがしかし、彼とて幾度となく激しい戦場を潜り抜けたとはいえ、これ程までにイレギュラーが続くと頭を抱えたくなるというものだ。アイリスフィールとセイバーを乗せた飛行機が飛行中に狙撃された。しかもそんな大胆な行動をしていながら敵サーヴァントの情報は対して掴めておらず、神秘の隠匿も完璧ときた。

切嗣が事前に掴んだ相手のマスターでそのような作戦を実行できるほどの大胆さと知性を併せ持つ人物は少ない。

遠坂の頭首にも間桐のマスターにも、そして時計塔の天才魔術師と名高いケイネス・エルメロイでも無理だろう。間桐のマスターはズブの素人。遠坂とケイネスは優秀な魔術師であるが、戦場のプロフェッショナルではない。

そうなると切嗣の脳裏にはある人物の名が思い浮かぶ。

「言峰、綺礼」

元聖堂教会の代行者であり、現在は魔術協会へと鞍替えをして遠坂の弟子となっている男。

魔術師殺し衛宮切嗣をもつてしても底知れぬ男ならば、あのような大胆な作戦を実行に移すことも、そして完璧に魔術の痕跡を隠蔽することも可能だろう。

なにせあの男の父親は此度の聖杯戦争の監督役なのだ。息子である言峰綺礼も参加者とはいえ何らかの繋がりがあるだろう。

というより実際に内通しているのかもしれない。最悪の場合、師である遠坂ともグルという可能性だってある。

というより監督役の息子が聖杯戦争に参加することが前代未聞なのだ。

「セイバー」

「おいおい、そう睨んでくれるなよ。」

あの時、アイリスフィールと一緒に飛行機から飛び降りるのは簡単だったが、そんな事すればこれ幸いとばかりアーチャーが火力の一撃を叩き込んできたかもしれないんだ」

正論だ。

恐らく敵サーヴァントが弓兵にしては弱い攻撃を何度も繰り出してきたのは、一重に魔術の隠ぺいのためだ。魔術師だけではなく一般人の乗る旅客機を宝具によって撃墜するというのは避けたかったのだろう。ならばアイリスフィールとセイバーが一般人の乗る飛行機から離れてしまえば、もはや火力の出し惜しみをする必要はない。最悪の場合、アイリスフィールと再び会うことも、そして聖杯を掴むことも不可能になっていたかもしれないのだ。

「分かった。宝具使用の件はもういい」

「そうかい？」

おどけたように笑うセイバーを無視して切嗣は戦略を立て直す。アーチャーと交戦したのは冬木から離れた場所なので、アーチャーとそのマスター以外にはセイバーの宝具の情報を知られてはいないだろう。

けれどそれが何時崩れるか分からない。聖杯戦争の戦術の一つに『同盟』というのがある。サーヴァントの力量は平均するとそう大差はない。故に二対一になれば余程優れたサーヴァントでもない限り敗北は必至だ。そしてもしアーチャーのペアが他サーヴァントと同盟すればセイバーの宝具の情報が知られてしまうだろう。

もし出来るのであれば早々にアーチャーを倒したい所であるが、もし無理に倒そうとすれば逆に他のサーヴァントにセイバーの情報を

が渡りかねない。

サーヴァント同士が雌雄を決するとなれば宝具の打ち合いになるのは必然。アーチャーを倒してセイバーの情報を知られないようにするために、他のサーヴァントにセイバーの宝具を露見させるのは全く意味がないのだ。

アイリスフィールによって防音の結界を張られた邸宅。  
そこでセイバーは与えられた装備の確認をしていた。

「あー、確か久宇舞弥だったか。  
エリア11……じゃなかった。

日本っていう国は銃火器の所有やら何やらは禁止じゃなかったのか？」

セイバーは切嗣の助手である女性、久宇舞弥が非合法に持ち込んだ銃火器の類を指さして言った。

そこには割とポピュラーな銃などからアインツベルン製の剣、ライフル、サブマシンガン、対物ライフルまである。マフィア組織も真っ青な品々。当然、銃の携帯すら許可されていない日本では違法だ。

「独自のルートがありますので」

「魔術師専門の、か？」

「……………」

久宇舞弥は応えない。説明する意味はないと踏んだのだろうか。

事実セイバーの興味はこの銃火器達がどのような経緯を通じて自分の手にやってきたかではない。この新しい武器達の性能だ。試に銃の一丁を手に取り撃ってみる。手に伝わる痺れ。

「うん、こんな具合か。火薬を使う銃っていうのも新鮮だ」

セイバーの生きた世界では、銃は全て電磁式のコイルガンだった。それ故にこの世界の銃火器は、性能が似ているものはあるとはいえ新鮮なのだ。

「出来れば戦車や戦闘機、いや爆撃機も欲しい所だ」

「流石にそれは……」

流石の切嗣達でも戦車や爆撃機は用意出来ないようだ。

尤もセイバー自身、別に本気で言った訳ではない。大体もし仮に爆撃機を手に入れられたとしても置く場所がない。というより爆撃機で冬木の街を飛び回れば監督役から一発でレッドカードが出るのは確実である。

ちなみに丁度同じころ、ライダーのサーヴァントも自身のマスタ―に爆撃機を欲しいと願っていることをセイバーは知らない。

「まあいい。本当なら全部を隅々まで試してみたいが……」

流石に対物ライフルを試し撃ちする訳にもいかない。

それに簡単なものとはいえ防音の結界を長く張り続けていれば敵サーヴァントに発見されるかもしれないのだ。結界が優れているか否かは基本的に 結界を張っている事が気づかれないか で決まる。その存在を誇示するような結界は三流。張っている事に結界内部にいる人間にも気づかれなくて一流だ。



アイリスフィールの張った防音の結界は、その難易度の低さもあって優秀な魔術師でも分からぬような高度な結界であるが、規格外の魔術師であるキャスターのサーヴァントならば現代の魔術など簡単に見破ってしまうかもしれない。そろそろ結界は解かなければならないだろう。

「どちらへ？」

「少し休む。この世界には俺の知らない音楽や書物が多くある。異文化交流……いや異世界交流というのは新鮮だね」

彼の世界とこの世界の歴史は、ジョージ・ワシントンの革命、神聖ブリタニア帝国の誕生などから大きく違っている。すると当然ながらその後には生まれる音楽や作品なども違ってくるのだ。

ビートルズ、マイケル・ジャクソン、ロバート・ジョンソン、B・キングなどの存在は、セイバーにとっては実に刺激的だった。

「久しぶりの現世。そして全く未知の世界。楽しまなければ損だろ  
う」

聖杯戦争のシステムを作り上げた始まりの御三家の一角。

間桐の家の地下魔術工房では一人の残骸がサーヴァント召喚の詠唱を行っていた。

男の名は間桐雁夜。魔道の家に生まれながらマキリの魔術を嫌い、幼馴染の葵の協力もあって出奔した者である。

本来ならば彼はもう二度と魔道と関わる筈のない男であった。

けれど彼は舞い戻る。此度の聖杯戦争にマスターとして参加する

ために。

勝者の願いを叶える万能の願望器たる聖杯。けれど雁夜は私利私欲で参加したのではない。

彼の願いとは、初恋の女性であり恋敵の妻でもある遠坂葵の娘であり、間桐の家に養子に出されてしまった遠坂桜を救う為である。

間桐の魔術は蟲だ。その身に蟲を宿し操る事こそマキリの魔術。恐らく桜は自分の身代わりとなつて間桐に巢食う妖怪たる間桐臓硯によつて地獄すら生易しい、修行という名の拷問を課しているのだらう。

そんな事、雁夜は認められない。葵の為にも桜を助け出し、桜を間桐へ養子に出した遠坂時臣を問い詰める。その為に彼は戻つてきたのだ。一度は否定し逃げ出した間桐の家に。

臓硯との直接交渉で出された桜を遠坂に戻す条件は一つ。聖杯を手に入れることだ。そも桜という存在も聖杯を手に入れる為のもの。臓硯としても聖杯さえ手に入れてしまえば桜など如何でもいいのだらう。

雁夜はその条件を承諾し、マスターとして参加する為に魔道に身を落とした。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する」

その末路がこれだ。

間桐雁夜が魔道を身に刻んだ時間はたったの一年。

しかし魔術というのは一年やそこらで身に刻める程甘いものではない。

無理な修練の結果、間桐雁夜という男はその寿命の殆どを失い、後は死ぬのを待つだけの残骸であった。

「 告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。  
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」  
誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、  
我は常世総ての悪を敷く者」

それでも救いたい子がいた。

笑顔を守りたい女性がいた。

そして狂おしいほど憎い男がいた。

だから間桐雁夜は戦うのだ。

「されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。

汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手繰る者」

通常の詠唱に特殊な一文を加える。

サーヴァントの中でも最狂と呼ばれるクラス。過去のマスター達  
のいずれもが、その手綱を掴み切れず敗退していった呪われた曰く  
つき。

雁夜は気づいていない。

いや気づいていたとしてみ認めようとはしない。

臓硯のほうは雁夜は魔術師としては未熟過ぎるから召喚したサー  
ヴァントは必ず弱体化する。それを防ぐために、狂化という理性を  
失わせる代わりにステータスをランクアップさせる特性を持つバー  
サーカーを召喚することで補強するというが、ただでさえマスター  
として貧弱な雁夜が魔力消費の激しいバーサーカーをサーヴァント  
とすれば供給が追いつかず破綻するのは目に見えている。

それでも敢えて雁夜にバーサーカーを召喚させるのは、間桐臓硯にとってこの聖杯戦争で勝ち抜く気がないからに他ならない。理由は多々あるが、簡単に言えば必勝を期するための様子見ということだろう。

遠坂の頭首は気づいてさえいないが、間桐臓硯、この数百年を生きた妖怪は聖杯の異常にもいち早く気づいており、此度は手出しをしないと決めていたのだ。

だから間桐雁夜の必死さとは逆に臓硯にとって此度は『遊び』ではない。

間桐雁夜にとっては命を懸けた、間桐臓硯にとっては遊びに過ぎない第四次聖杯戦争は、雁夜が詠唱を終えると共に幕を開く。

「汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ　　！」

人間の血によって描かれた魔法陣が怪しく光る。

そして人の血肉に酔いしれたサーヴァントがまった一騎。この冬木の地に舞い降りた。

「問おう」

召喚の余波で薄れゆく意識の中。

間桐雁夜はあり得ぬ声を聴いた。

自身の呼んだものはバーサーカー。口のきけぬ狂戦士のはず。

「お前の大切なモノはなんだア？」

嗚呼、と雁夜は確信する。

確かにバーサーカーでありながら意識を保っているようだ。が、

この男は紛れもなく狂戦士。それも血に飢え殺人に狂った吸血鬼なのだ。

「じほっ」

雁夜の腹に強い衝撃が走る。

それが自身の呼び出したサーヴァントに蹴り飛ばされたからと知ったのは数秒後のことだった。

「外れだなア。弱い、腑抜けている、貧弱すぎる、抜けている、枯れている。

なんだア？ この残骸は。こんなボロ雑巾のような猿が私の主人とマスターはな。

私も随分と落魄れたものだ。まったく不幸なことだ。

折角楽しい楽しい殺戮場に招かれたというのにイ。これでは白けるじゃないか。

なア聞いているのか、猿ウ？」

(なんだ、こいつは……………?)

雁夜は自身に問う。

サーヴァントとは英霊。過去の英雄がなるものではないのか。

なのに自身が呼び出したこの男は、英雄どころか寧ろ英雄に退治されるべき悪鬼ではないか。

その男バーサーカーが自身の獲物らしいナイフを手に取る。

殺される！

そう思い目を瞑った雁夜だったが、何も起きない。

「ほほオ。ボロ雑巾のようなマスターと思っていたが、気が利くな

ア。

こんな極上の生贄を用意していたとは。評価が少しばかり上がりそオだ」

生贄、だと。

雁夜の目に力がともる。

広がる視界。バーサーカーが歩み寄っているのは、自分が身を挺してでも救おうと思った少女。遠坂葵の娘、遠坂桜だ。

「教えよう」

バーサーカーが桜に言う。

「お前の大事な物とはなんだ？」

「……………」

「恐怖に身が竦んで答える事すら出来ないかア？」

では懇切丁寧に教えよう。一番大切なもの、それは命だア！  
さあ貴様等の命を弾けさせるオ！」

常人ならば恐怖で気絶しかねない程どす黒い殺意。

それを受けた桜は

全くの無表情。

命乞いするでもなくパニックになるでもなく、ただ一言。

「はい」

短い返事。

それが今の遠坂桜という少女の全てを現していた。

地獄すら生易しく思える拷問。死を上回る苦痛。

この少女にとって死は不幸ではなく幸福。悲劇ではなく福音なのだ。

間桐雁夜は認めざるを得なかった。

「おい小娘」

「なんですか？

私を殺してくれるんじゃないんですか？」

「……………」

バーサーカーは白けたようにナイフを仕舞う。

「殺さないんですか？」

再度、桜が問うた。

「いいかア小娘。私は人の一番大切なモノを奪うのが好きだア。死にたがりの小娘は私の獲物じゃあないんだよ」

「もしかして怖気着いたんですか、サーヴァントなのに」

「あア？」

「私を殺せないんですか？」

「良いだろう。そんなに言うなら仕方ない。

小娘。今現在お前のいる地獄よりも、どんな地獄よりも深い地獄へ墮としてやる」





あんな小娘の為に命を懸けるとは。ああ、お前はある意味において私よりも狂ってる。

お前、本当に人間なのかア？」

「五月蠅い。俺は、俺は

」

「永遠と愛に狂え。その狂いを私は肯定しよう、マイ・マスター」

## SEARCH 4

### サクラ 狂う（後書き）

まあ……… なんとというか雁夜はご愁傷様と言う他ありません。

きっと彼の幸運スキルはE-でしょう。

反逆しない軍人では勝利フラグの塊だった吸血鬼。原作では死亡フラグの塊だった吸血鬼。

最初はオレンジという候補もあったんですけどね、アンリ・マユをオレンジで汚染しそうなので止めました。

すべての人間にとりて、共通のあらゆる多くの禍いのうち最大なるものは悲しみなり

英雄と呼ばれる者に平穩という文字はない。

平穩がないからこそその英雄。いや英雄だからこそ平穩がないのか。否、もしかしたならば世界が英雄という存在を生み出すために平穩は失われるのかもしれない。

夢を見ていた。

こことは別の異なる平行世界。

そこにも自分の知る世界と同じように戦争があつた。

しかし自分の経験してきた戦争とは規模が違う。

世界の三分の一を有する神聖ブリタニア帝国の侵略戦争は、欧州・中東・ロシア・そして日本までも向けられた。

一代の巨人シャルル・ジ・ブリタニアによる徹底した実力主義。数百年の伝統。

兵の質、物量、決断力、国家元首。その全てにおいて他の列国を上回るブリタニアは強かつた。

そのブリタニアの更に頂点。

皇帝シャルル・ジ・ブリタニアの直属騎士たるナイト・オブ・ラウンズ。一人一人が一騎当千の猛者揃い。ラウンズへの選定基準は

唯一つ。純粹なる強さ。そこに血筋も身分も関係ない。事実として先代ナイトオブシックスは平民出の少女だ。

しかしそんな帝国にも影が差す。

実質的に帝国のナンバーツーであった第二皇子であり帝国宰相たるシュナイゼル・エル・ブリタニアとエリア11、つまりは日本独立を成し遂げた指導者、仮面の男ゼロが手を組んで反乱を起こしたのだ。

帝国はシュナイゼルによって乗っ取られ、唯一真実を知っていた当時のナイトオブツーと第11皇子ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアは国を追われた。

しかし彼等は諦めなかった。

ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアのアースガルズの下に集ったのは精鋭といえど僅か千人弱。

対するシュナイゼルとゼロは世界のほぼ半分。つまりは総勢30億。

余りにも馬鹿らしい戦力差。

それでも幾度となく命を懸けた激闘を潜り抜けた彼等はやがて帝国を取り戻し、最終決戦ではシュナイゼルを討ち取る事にも成功した。

その後は再び世界に平穏が訪れる。

優しい世界、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが目指した弱者が一方的に虐げられることのない世界。無論、流れゆく歴史の中でその平穏は永遠ではなかったが、それでも多くの人々が理不尽に虐げられない世の中を実現させたのだ。

アースガルズに集ったものはルルーシュ・ヴィ・ブリタニアを初め、その後の人生を幸福に生きたという。

「ただ、そこにあの男の姿はない。誰よりも帝国に忠実で、生涯一度も私欲で戦う事なかった歴代最強の帝国騎士。」

その男は最後の最期まで戦い続け、そして死んだのだ。

目が覚めた。

飛び込んでくる朝日。

「弛んでるな。」

僕らしくもない。行動中に転寝とはね」

思わず自嘲した。

昔の自分はそうじゃなかった。

行動中は感情の一切を排除して一週間だって眠らずに戦い続けられたというのに。

やはりアイリを妻としイリヤを授かってから……………鈍っているのかもしれない。

時計を見ると五時二十分三十二秒。

再び意識を完全に覚醒させる。

切嗣の視界にいるのは一人の女性と……………。

「なんだ、あれは？」

切嗣は思わず頭を抱える。

アイリスフィルの隣。そこには何故か現代の洋服を着こなしたセイバーがいたのだから。

切嗣が頭を抱えている頃。

当のアイリスフィールとセイバーはかなり遅めの昼食を取った後だった。

「しかし実体化して街を歩くのはいい。

どこか生き返ったみたいだ………ってそのまんまか」

快活に笑うセイバー。

だがそれとは対照的にアイリスフィールのほうは何処となくグツタリとしている。

「おいおい、大丈夫か？」

「い、いえ………まさか、あんな食べ物がこの世に存在していたなんて……」

二人が食事をした店の名は泰山。

この辺りでは少しばかり有名な中華料理屋である。

「ああ、中々に程よい辛さだった」

「もしかして美味しかったの？ あのラー油と唐辛子を百年間ぐらい煮込んで合体事故のあげく私外道マーボー今後トモヨロシクみたいな料理が美味しかったと、そう言うのかしらセイバー！」

「？ 結構イケたけどな。

前に部下の一人が作ったオスシとかいうのは甘かったが、辛いのもいい。

実家では食べたことのない味だった」

「それはそうよ」

どこか奇妙奇天烈な味覚の持ち主たるセイバーに、多少ゲンナリしつつアイリスフィールは歩みを進める。ちなみに言うと、二人はただこうして歩いている訳ではない。こうやって散策していれば必ずや敵サーヴァントの目に触れる。

そうやって目立つ行動をしてサーヴァントを引き寄せている間に、陰に隠れた切嗣が敵のマスターを仕留めるといふ、謂わば囮作戦だ。

というのが切嗣の話した作戦なのだが、アイリスフィールはもしかしたら別の理由があるのではないかと考えている。

切嗣は妻である自分の事を何かと気にかけてくれている。だから今回の作戦にしても、今まで一度も城の外に出たことなかったアイリスフィールに外を歩かせてあげたのかもしれない。

そんな切嗣の気遣いに女として嬉しく思いつつも、妻として申し訳なる気持ちの二つが、アイリスフィールの胸にはあった。

勿論気遣い自体は嬉しい。けれど、自分と言う存在が切嗣の重荷になっているのではないかと思うと心苦しいのだ。

隣にいるセイバーを見る。アイリスフィールが一人で歩くのは寂しいと洩らした事もあり、セイバーは適当に店で取り繕った洋服を着こんでいる。

こんな事をサーヴァントに聞くのもどうかと思うが、どうせ共通の話題など余りないのだ。

ならば人生の先輩？ であるセイバーに聞くのもいいかもしれない。

それに何となくこういった恋愛関係については良いアドバイスを聞けるような気がするし。

「ねえ、セイバー」

「アイリスフィール、どうやらお出ましになったようだ」

「ッ！」

「さて、これだけ気配が丸分かりなんだ。

アサシンではないな。バーサーカーの狂気も感じられない。  
となるとランサーかライダーか……」

キャスターは直接セイバー相手に戦闘を挑むようなサーヴァントではないし、アーチャーならば遠距離からの狙撃をしてくるだろう。となるとセイバーの言うとおり敵サーヴァントは恐らくランサーかライダー。

「誘ってる。どうする、アイリスフィール？」

「今ならば撒くことも出来るが」

「追いましょう」

そう切嗣の作戦とは罔。

自分とセイバーという如何にもなマスターとサーヴァントをチラつかせ、それに食いついた敵を側面から叩く。だったらこれは切嗣の望んだ状況のはず。

「イエス、マイ・ロード」

暫く歩くとそれなりに広い公園に辿り着いた。

人払いの結界が張られている為に一般人の姿はない。



「よう」

「！」

ピタリと足を止める。

人気がない事を除けば全くもって日常的といえるその公園の中心に、この世でもそうお目にかかれない非日常が佇んでいた。

全身を覆う蒼い軽鎧。猛犬のような鋭い眼光。

そして何よりも、その男が持つ長柄の獲物、槍。

先ず間違いなくサーヴァント中最速とされるランサーだろう。

その隣にもう一人、男が佇んでいる。西洋人らしい金髪に整った顔立ち。傲慢不遜ともされる余裕さ。恐らく彼こそがランサーのマスターたる魔術師なのだろう。

セイバーも今は先ほどまでの私服ではなく武装を済ませていた。

アインツベルン製の剣を握るセイバーは、決して敵ランサーに迫力負けしていない。

「ほほう剣か。こいつは嬉しいねえ。」

初っ端から最優と噂されるセイバーのサーヴァントと見える事が出来ようとはな

「そういうお前も分かり易い。」

その槍がお前をランサーのサーヴァントと如実に教えてくれている

「はっ。クラスなんぞ戦ってみれば自ずと分かるもんだろうが」

「それは話が早い。では早速……」

「待ちたまえ」

セイバーが剣を構えると、それに割って入るように男の音が響く。ランサーのマスターだ。

「私はアーチボルト家九代目頭首、ケイネス・エルメロイ・アーチボルト」

ケイネスと名乗った魔術師はアイリスフィールを見る。  
名乗れ、という事だろう。

「始まりの御三家が一つ。アインツベルン家代表。  
アイリスフィール・フォン・アインツベルンです。ランサーのマスター」

にやにやと笑うランサー。

まるでオーケストラの指揮者のように腕を広げるケイネス。

「結構。ではアインツベルンのマスターよ。」

求める聖杯に命と誇りを賭して、尋常に立ち合うではないか」

【クラス】セイバー

【マスター】衛宮切嗣

【真名】 ????

【性別】 男性

【身長・体重】 190cm 81kg

【属性】 秩序・中庸

【筋力】 A 【魔力】 B

【耐久】 B 【幸運】 C

【敏捷】 A 【宝具】 B

【クラス別能力】

対魔力：A

最高ランクの対魔力。

現代のいかなる魔術師もセイバーを傷つける事は出来ない。

騎乗：A

乗り物に騎乗する才能。

ただし幻想種はその限りではない。

【保有スキル】

直感：A++

最高ランクの直感。

数手先の未来までを完全に予知し、擬似的な遠視、遠未来視すら可能とする。

また狙撃時に有利な補正が加えられる効果があり、幻覚や惑乱の類も無力化してしまう。

悲恋：C

悲恋の騎士。スキルというよりは英霊としての呪い。

セイバーが本気で恋をした女性は高確率で「死の運命」に引き摺られ決してしまい、決して添い遂げられる事はない。これを打ち破るには同ランク以上のLuckが必要。

あくまで本気で恋をした相手限定であり、洗脳などによって植え付けられた感情、ないし肉体関係を結んだだけの相手には効果を発揮しない。

女殺し：C

究極の女つたらし。異常なほど女性を魅了する天性の才覚、及びそれを成す技能。

知名度補正により能力が下がっているが、本来のランクはA。

もしランクAだった場合は魔眼でいうなら『黄金』に匹敵するほど強力な魅了、更には女性相手の戦闘で優位な補正がつけられる効果がある。

出世運：A

セイバーが望む望まないに関わらず、あらゆる運に恵まれ異常なスピードで出世していく。その力は三年でパイロットから軍総帥の地位に到るほど。

心眼（真）：B

修行・鍛錬によって培った洞察力。

僅かでも勝機があるのならば、それを手繰り寄せられる。

## 【宝具】

オウル・ハイル・ソルジャー  
軍人に栄光を

ランク：A+

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：30人

セイバーが触れた物はなんであろうとランクD〜E相当の武器として自らの宝具とする事が可能。宝具化した兵器・武器のランクはセイバーのその武器に対する熟練度で決定し、使い慣れた武器ならばD、使い慣れない武器はEとなる。

また元からそれ以上のランクである宝具を手にした場合は、そのままのランクでセイバーの支配下におかれてしまう。

デーモン・オブ・ブリタニア  
魔人の如き銃口

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：2〜4

最大補足：1人

セイバーの象徴と言うべき宝具。

彼の撃った弾丸は必ず頭部を吹き飛ばす、という逸話が一つ概念となった一つの業。

近〜中距離では使用出来ないが、遠距離から一方的に、因果逆転の呪いである”必ず命中する”という効果の銃弾を発射するので非常に殺傷能力に優れている。

狙う場所はセイバーの意思で選定可能。

SEARCH 5      アイルランドより愛をこめて (後書き)

次回はランサー、ではなくケイネス無双。

そして続々と出てくるサーヴァント達です。

暴政は地獄と同様に容易に征服することはできない。しかし我々には戦いが苦しければ苦しいほど、勝利はますます輝かしいという慰めがある。

目の前に立ち塞がる巨大な壁を乗り越えた時の爽快感を知っているだろうか？ 人は長い人生の中で必ず苦難に直面する。すると大抵の人間の選択肢は超えるか、立ち竦むか、諦めるかに限られる。しかし超えるというのは難しい。なにせ壁は巨大なのだから。

しかしだからこそ、それを乗り越えたときの快感は何にも変え難いのである。

戦闘の気配。

その懐かしい感覚に、此度の聖杯戦争において騎兵ライダーのクラスを預かったサーヴァントは直ぐに反応した。

「ほほう、間に合ったようだな」

主戦場たる公園が良く見渡せるビルの屋上にライダーとそのマスターたる魔術師ウェイバーは陣取っていた。

実をいうとライダーも街中で気配を隠そうともせず、寧ろこれ見

よがしに放っていたサーヴァントの存在には気づいていたのだが、そのサーヴァントが標的としたのは幸か不幸か自分ではなくもう一人街にいたらしいサーヴァントだった。

その事を知るや否やライダーの行動は速く、マスターであるウェイバーの首根っこを引っ捕まえてこのビルまで連れてきたという訳だ。

「なあライダー。あの二人、どんなサーヴァントか分かるか？」

「余の見立てが正しいのならば、青い方は獲物からしてランサー、白い方は……そのランサーと真っ向から戦おうというのだ。であれば最優のセイバーのサーヴァントと見るが適当だろうて」

「セイバーにランサー」

剣士と槍兵。

最優と最速を冠した二つのクラスは、この聖杯戦争においても選定基準が厳しい。

謂わば優勝候補といふべきサーヴァントのだが、そんな二騎がこつも早く激突しようとは。

ウェイバー・ベルベットはこれから始まるであろう戦いを固唾をのんで見守った。

セイバーとランサーの激突は時臣の弟子であり、監督役の息子である言峰綺礼にも察知された。

当分の拠点である薄汚れたアパートの一室に漆黒の僧衣はミスマツチであり、そこだけ世界から切り離されたかのような錯覚を覚える。



言峰は師である時臣に情報を伝えたと、自身のサーヴァントであるアサシンとラインを使って視界の共有を行う。

もし此処に衛宮切嗣がいたのならば気づいただろう。

聖杯戦争において言峰と師である時臣は敵同士。聖杯を求めあつて争う間柄というのに連絡を取り合っている理由が。

そう言峰は聖杯を手に入れる為に聖杯戦争に参加したのではない。聖堂教会と父、そして時臣の思惑があり遠坂家当主遠坂時臣に聖杯を委ねる為に協力しているのだ。

冬木の聖杯は本物の聖杯ではない。

願望器という機能があるだけのレプリカだ。

その願望器たる聖杯の真の利用法とは、全ての魔術師が等しく目指す頂』への到達である。

本来聖堂教会は魔術師の目指す』などに一切興味ない。だといふのに何故こうやって意図的に教会の手駒である言峰綺礼を使い遠坂時臣を勝たせようかというかと、それはもう聖杯という存在が』への到達だけではなく、真実万能の願望器として機能してしまうからに他ならない。

極論からいえば、聖杯を手に入れたマスターが世界征服なり人類滅亡なりを考えた場合、それが正しく叶えられる可能性も無きにも非ずなのだ。

だからこそ聖堂教会は遠坂時臣を勝者にしようとする。遠坂時臣は今の世では珍しいほど魔術師らしい魔術師だ。』への到達を第一として、厳しい修練に身を置いている。

単純に言えば聖堂教会にとって時臣が』への到達などという訳のわからない願いを叶えてくれたほうが都合が良いのだ。

だから言峰は遠坂時臣の弟子となり魔術を学び、この聖杯戦争に参加した。当初は何もない空っぽの目的。けれど運命の悪戯か神の采配か、言峰綺礼はこの聖杯戦争に一つの目的を見出した。

「衛宮、切嗣……」

その男の名を呟く。

自分と同じ求めても何も得られなかった者。

だが自分とは違うのは、切嗣は見つけたのだ。自分とは違い答えを見つけたのだ。

故に切嗣と会いその答えを問いただす。言峰綺礼にとっての聖杯戦争だった。

しかし先ずは役目を果たさなければならぬ。

遠坂時臣を聖杯戦争の勝利者にする。聖堂教会の代行者として執行すべき命がある。

沈黙する両者。セイバーとランサー。

けれどそんな時、二人の丁度中心へ舞い降りた一枚の葉っぱが合図になった。

「はあああああ！」

「ハッ  
！」

激突する二人の騎士。

剣と槍が交差する。その様子をアイリスフィールは目視する事さえ叶わなかった。

高速を超えた超高速で放たれるランサーの突き。見えない。魔術を使って視力を強化したとしても目視出来ない。

別に何らかの宝具が使われている訳でも魔術で隠蔽されている訳でもない。

ただ純粹に速すぎて見れないのだ。

しかしその見えない槍をセイバーは次々に捌いていく。

まるで既にそこに槍が来るのが分かっているかのように動き先回りし、槍の軌道をずらし、そして逆襲の一撃を叩き込む。

正に人知を超えた戦い。

そう、これが英雄同士の決闘だ。

槍が。剣が。二人の得物が振るわれる度に地面が割れ、風が唸り、轟音が響く。

「フッ！」

ランサーの槍を捌く。

超高速で突かれる槍は、このセイバーには見えていた。

最速の名に恥じぬ最速の槍捌きはセイバーをもつてしてもお目に掛かったことがない。

(この男、強い……)

そのランサーの強さをセイバーは素直に認めた。

今までの突きをどうにか凌ぎきっているセイバーだったが、それは彼の有する直感あってこそその成果。もしもソレがなかったのなら

ば一体全体どのように転がっていたか……。

もはや未来予知の領域に届く直感を越えた動き。未来を覆す技量。それを為しえる怪物との戦闘は、彼が最期に経験した一騎打ち以来であった。

ランサーは強い。

その技量も経験も何もかもが頭一つ飛び抜けている。

セイバーは元の世界において最強であった。

昔でこそ彼を上回る使い手は多くいたが、最期に近付いた頃にはもう彼に匹敵する技量の持ち主は敵の総大将一人となっていた。

それがどうだろうか。今こうして自分は互いの命を削りあつて戦っている。これが聖杯戦争。その時代において世界最強となった者達が殺し合う決戦場。そこに役割は違えどハズレはない。暗殺者ならば暗殺の、騎兵ならば騎乗の、魔術師であれば魔術の、弓兵であれば弓の、そして槍兵と剣士ならば白兵戦の、其々の最強が見える戦いの儀である。

セイバーは自身の血が滾るのを抑えられなかった。

無論、我を失ったりはしない。幼い頃からの徹底した教育により生まれた鉄壁の理性は、何があるうと彼が狂うことを許さない。

しかした。

セイバーとて一人の男。であれば、この遠い世界で巡り合った好敵手に興奮せずにはいられない。

「やるじゃねえか。いいぜ、どこの英霊だ！」

「どこに聖杯戦争で真名を名乗る馬鹿がいる！」

「そりゃそうか。たつく面倒な縛りがあるもんだ！」

多少言葉を交わして、再び激突する二人。

けれどセイバーは失念していた。

この場にいる敵はランサー一人ではないことを。

堂々と姿を晒していた敵魔術師の存在を。

「沸き立て、我が血潮」  
Fever, me i sanguis

ケイネスの詠唱に反応し、足元にある壺から水銀が出てきた。かなりの量だ。総重量は100kを超えるだろう。

「自立防御、自動索敵、指定攻撃」

魔術師ですらないセイバーだったが聖杯から与えられた知識によって理解できた。

あれは魔術礼装だ。通常魔術師の製作する魔術礼装には大きく分けて所有者の能力をブーストするものと限定的な魔術行使に特化したものの二つがあるが、恐らくあの水銀は後者だろう。

「礼装、ヴォールメン・ハイドログラム月霊髓液！」

ケイネスの言葉で恐るべき礼装が完全に起動する。

重量にして100kgを超えた水銀はまるで生きているかのように自在に動いている。恐らくケイネスが魔力を流すなりを操作しているのだろう。それ以上の事は魔術に関しては完全な門外漢であるセイバーには分からない。

そしてケイネスの操る水銀。それが向かう先は。

Scalp  
「斬！」

「ちい！」

数手先の未来。

アイリスフィールドが水銀の刃で切り裂かれる光景を見たセイバーは慌ててアイリスフィールドのカバーに入る。

迫りくる水銀の刃。それに対してセイバーは自身の体を盾として、その刃に切り裂かれ体から血が流れた。

「なにっ!?!」

セイバーが驚愕する。

自身にある対魔力はA。こと魔術に対しては最強の防御である。現存する魔法でさえ防ぐ自身がセイバーにはある。それがあろうことか魔術によって傷つけられた。

「ふふふ。セイバーの対魔力とはいえ万能ではない。例え魔術そのものの効果がなかったとしても……………」

「そういうこと……………」

気を付けて、セイバー。その水銀は貴方の対魔力でも防ぐことは出来ないわ」

「どづついうことだ？」

「流石はアインツベルンの魔術師。フム、千年の研鑽は伊達ではないということ、か」

ケイネスは語る。

まるで自分の最高傑作を紹介するように自慢気に。

「我が魔術礼装。 ヴォールメン・ハイドロクラム 月霊髄液は私自身の魔力を充填する事により意のままに操作することを可能とした水銀……。

そう対魔力は魔術を無効化する能力であり打ち消す能力ではない。魔力が通っているだけで魔術によって構成されている訳ではない水銀を打ち消す事は不可能なのだよ。

そしてこの水銀による高圧の刃は、チタンでもダイヤモンドでも容易く切り裂く。」

確かに対魔力は鉄をも溶かしつくす魔術や転移術式、それに結界など直接的に効果を発揮する魔術は無効化できるだろう。

しかし強化した鉄パイプによる打撃など、間接的な魔術を無効化することは出来ないのだ。

「分かり易い説明をどうも。こんな場所で戦っていないで教師でも目指したらどうだ？」

「君に言われるまでもなく私は時計塔の講師だよ、セイバーのサーヴァント」

「そうかい、だが忘れてないか」

みるみる内にセイバーの傷が塞がっていく。元々浅い傷であったが数秒もすれば傷は跡形もなく消え去っていた。

「サーヴァントがどんな存在なのかを」

今でこそ実体化しているが、サーヴァントは霊体だ。

如何に魔力の通った水銀だとしても霊体であるサーヴァントを傷つけるのは至難の業だ。ましてや倒すなど。

忘れてはならない事だが、サーヴァントとは存在そのものが一級の神秘の塊なのだ。数少ない魔法使いであってもその制御など不可能と言われるほどの怪物。

そんな彼等を人の身で打倒しようと考えるのであれば、霊体に対して強力な効果を発揮する礼装か、数少ない現存する宝具や名剣、でも持つてくるしかない。それもなければAランク相当の魔術を使うかだ。幾らケイネスの礼装が、チタンやダイヤモンドを切り裂けたところで、人間霊ではなく精霊の域にあるサーヴァントを切り裂くことは無理なのだ。

「無論、知っているとも。私は降霊術は私の専門とする分野だ。英霊という存在についても十分に知っているとも」

「なら、覚悟はいいな」

セイバーが駆ける。

その刃が狙うは魔術師でありながらサーヴァントに挑んだ愚者。

「おっと、悪いがそうはさせねえな」

無論それをケイネス・エルメロイのサーヴァントたるランサーが指を加えて見ている筈がない。

ケイネスの盾となるかのように立ち塞がるランサーがセイバーの剣を受け止める。

「ランサー！ そのままセイバーを抑えている！」

「あいよー！」



「邪魔を……！」

ケイネスがアイリスフィールに迫る。アイリスフィールのほうも針金を使った魔術で応戦するが、その程度の攻撃が水銀の防御に守られたケイネスに届くはずがない。

幾らアイリスフィールがホムンクルスだとしても、幾ら魔力量では上回っていたとしても、時計塔で第一線で活躍していたケイネスとは魔術に費やした時間が違う、濃度が違う。そしてなにより才能が違う。

セイバーは今すぐにでもアイリスフィールを助けに行かなければならないが、それをランサーが邪魔をする。もし無理をして助けに入れば、その隙にランサーに背後から突き刺されるだろう。

(だったら……)

しかしセイバーは活路を見出す。

彼にある戦闘に使えるスキルは一つだけではない。

直感という究極の才能ともう一つあるスキル。それが心眼。才能ではなく鍛錬と経験を積めば誰にでも得られる凡人の能力である。

凡人とは程遠い男であるセイバーだが、幼い頃より戦場を故郷とし、戦いの疲れを戦いで癒してきたセイバーにとってこのスキルは身近なものだ。

直感による数手先までの未来予知。

心眼による最適な行動の選択。

その二つが、彼を歴代最強の帝国騎士とまで呼ばせた所以だ。

セイバーが懐から黒い物体をポンッと投げる。

まるでパイナップルのような形状のそれがランサーの瞳に映し出される。

この時代に召喚されたサーヴァントは全員が現代の知識を聖杯から与えられている。

日本語が話せないセイバーが苦も無く日本語を使いこなしているのもそれが原因だ。

そして現代の知識の範囲は、現代における武装などにも当てはまる。つまりは、

「こいつはッ！」

そういうこと。

銃や火薬などが一切ない時代の人間であっても『手榴弾』を知識として知っているということだ。

爆発、轟音。

間一髪難を逃れたランサーだったが、その隙についてセイバーはアイリスフィールの下に辿り着く。

襲いかかる水銀の刃を剣で両断すると、アイリスフィールを抱きかかえ後方へ距離をとった。

「無事か？」

「ええ、大丈夫よ。けど気を付けてセイバー！」

あの男、魔術師としての技量は十分天才と呼べる域よ」

「天才ねえ。」

たつく、面倒だな。幾ら切ったところで水銀は水銀。

直ぐに元通りか。ただ固いだけなら簡単だが、柔軟さを持ちあさせ

ているものは何時の世も強い」

セイバーが斬った水銀は既に大本の水銀とくっ付き完全に修復されてきた。

単純な物理的ダメージであの魔術礼装を破壊するのは困難だろう。いや別にあの魔術礼装を完全破壊しなくとも、それを操るケイネスさえ殺してしまえば関係ない。水銀の防御にしてもランクにしてAを誇るセイバーの筋力ならば容易に突破できる。

しかしそれをランサーが許してくれない。ケイネスを攻撃しようと思えばランサーがカバーに入り、かといってランサーを仕留めようとすればマスターのほうアイリスフィールドを狙ってしまう。

で、あるのならば方法は一つ。アイリスフィールドを守る位置から敵に対して攻撃を仕掛ければいい。

セイバーは人払いの結果で誰もいなくなった道に放置されていた軽トラックの前に降り立つ。

その胴体部分に思いつきり腕を突き刺すと、そのままケイネスに向かって放り投げた。

「サーヴァントともあるうものが、その程度の浅知恵に出ようとはな。

このケイネス・エルメロイに恐れをなしたか」

余裕で高速で放り投げられた軽トラックの射線上に立っているケイネス。

成程、軽トラックの激突でも容易く防いでみせる自信があるのだろう。

(掛かったな)

にやり、と心の中で笑う。

あの軽トラックはただの軽トラックではない。

セイバーの『オウル・ハイル・ソルジャー軍人に栄光を』によって宝具化された軽トラックなのだ。

基本的にセイバーの『オウル・ハイル・ソルジャー軍人に栄光を』は体の一部分が触れているモノにしか効果はない。離れた場所にある物体を宝具にすることは不可能。

しかし、だ。これには例外がある。一つはミサイルや銃など。これ等は着弾ないし撃ち落とされたり防がれたりなどするまでは宝具化を保ち続ける。

だがそれ以外の宝具にした物体であっても、セイバーの手を離れておおよそ十秒〜二十秒程度は宝具のまま保ち続けるのだ。

故に今現在ケイネスに迫っているのは宝具化した軽トラック。その衝撃、その威力は通常の軽トラックの激突とは比べ物にならない。

(やった)

そう確信した直後、ケイネスの前に一つの影が立ち塞がる。

ランサーだ。どうやら軽トラックが宝具化していることを察知したらしい。

だがセイバーの攻撃手段はこれだけではない。英霊にはある意味において真名解放以上の奥の手が一応存在する。それは『壊れた幻想』。名前の通り魔力と神秘の塊である自身の宝具を爆発させる技だ。無論、英霊にとっての最終兵器たる宝具を爆破させるなど通常は不可能だ。一度爆発させてしまった宝具は新たに再構成するにしても時間も魔力も掛かるのだから。

しかしセイバーの投げた軽トラックは宝具であっても使い捨ての効くモノ。つまりは……。

「弾ける」

その一言で、宝具として籠っていた魔力、それが軽トラックに入っていたガソリンをも巻き込んで爆発した。無論、通常のサーヴァントの宝具を爆破したよりも威力は格段に落ちるが、水銀の壁を突破するには十分すぎるほどの破壊力だ。

「たつく随分と危ねえ真似するじゃねえか」

「ランサー」

でありながらランサーとそのマスターは生きていた。

無傷ではなく多少煤けているが、戦闘には全く支障がないように伺える。

「流星は最速のサーヴァント、見事だ」

「ぬかせ。しかし解せんな。

近代兵器を使い、あまつさえ車を宝具にする剣士など聞いた事が無いぞ」

「そういうお前はさっき面白い事をやっていたな。

爆炎を避けるために空間に刻んだ文字………俺の知識に狂いがないければ、あれはルーン魔術とかいうものだろう?」

「ちっ、見られたか。だが俺も見たぞ。

貴様の宝具の一端を。だがよもは貴様の宝具がそれだけという事もあるまい?」

隠してんだらう。本物を」

セイバーの持つ剣は名剣であり宝具化していたとしても本当の意味で宝具ではない。

最優のセイバーの宝具が、まさか物を宝具化するだけではないだろうというランサーの推理だった。

そのランサーの推理が正しいからこそ、逆に笑みを浮かべてみせる。

張り詰める雰囲気。ランサーも槍を構える。恐らく宝具を開帳する算段だろう。

対してセイバーは。

「ところでランサー。一つ確認していいか？」

セイバーが地面から道路標識を抜き取る。

「なんだ？」

「決着をつけるのはいいが、別にアレを倒してしまっても構わないのだろう」

ランサーがその意味不明な言葉に尋ね返す前に、セイバーは手につかんだ道路標識を街灯の上に投げた。空を切るかと思われた道路標識は、しかし街灯の真上を通過する寸前、そこにいた見えな何かによって破壊された。

「呵呵呵呵、これは驚いた。

この儂の存在に気づいていたか、いや愉快愉快」

「気配遮断だけではなく透明化とは恐れ入ったが、生憎と勘がいいのが自慢だな」

街灯の上にいたサーヴァントが漸く姿を現す。  
燃えるように赤い髪。西洋人ではなく東洋人らしい顔立ち。  
中華風の衣装を纏った武芸者。

「アサシンのサーヴァントか？」

ランサーが問うた。  
するとその男は、

「左様。儂はこの聖杯戦争、アサシンのクラスによって呼ばれた」

アサシン、セイバー、ランサー。

三つのクラスが一堂に集結した。

だが三人は知らない。まだこの戦いを見守る『馬鹿』がいることを。

## SEARCH 6

### 魔人と猛犬（後書き）

EXTRAからのゲスト参入です。

現状唯一マスターとサーヴァントも原作通りなウェイバー達がちよつとしたオアシスです。

え？ どうしてケイネスがあんなに強いかって？

いえいえケイネスは最初っから優れた魔術師ですよ。

Fate/zeroで一番戦闘力が強いマスターは言峰でしょうが、魔術師として一番優秀なのは間違いなくケイネスでしょう。



理想と現実の間で迷う様ほど人間らしい姿は無い。そしてそれは、笑えるほど尊くて、泣けるほど滑稽なのだ。

大きな理想を抱いた者は、やがて現実という壁にぶち当たる。どれだけ目指したとしても、大きすぎる理想は悠然と聳える現実によって踏み碎かれる。

世界とはかくも無常でありながらも、そして尊い。

唐突に表れたその武者にランサーも、そしてアイリスフィールとケイネスまでもが固まる。

アサシンとはその名の示す通り『暗殺者』のサーヴァントだ。

クラス別技能として『気配遮断』を有しサーヴァントよりもマスターを積極的に狙う為にマスターの天敵ともされるクラスだ。

しかしアサシンは暗殺者であるが故に真つ向勝負は弱い。真つ向勝負で他のサーヴァントには勝てないからこそマスターを狙うのであり、暗殺者がその姿を敵の眼前に晒してしまうというのは、ある意味において致命的なことだ。

でありながら、このアサシンにはそういった焦りが微塵も感じら

れない。

寧ろこの状況を愉しんでいるような気さえする。

「まさか、ずっとアサシンに見張られたというの？」

「呵呵呵呵、いやそうではない。

儂がここに来たのはつい先ほど。尤も此処に来たのは、であって暫し遠くより見てはおったがな」

恐らくその言葉に間違いがないだろう。

セイバーがアサシンの気配を感じたのはアサシンの言う通りつい先ほど。

（しかし遠くより見ていたと言ったが、その時の気配は全く分からなかった。

アサシンのクラスの気配遮断を過小評価していたか？ いや、俺自身が直感を充てにし過ぎたか）

セイバーは自身の直感に自信を持っていたが、常識外の連中が跋扈する聖杯戦争においては多少評価を下げる必要があるかもしれないと考える。

彼の直感は半径数百メートルを完全にカバー出来る程のものであり、スナイパーによる狙撃など絶対に許さないものであった。しかし聖杯戦争に呼ばれるサーヴァントは容易くその常識を打ち破ってくる。

「フン！ このケイネス・エルメロイの崇高なる決闘を望みきし、あまつさえその勝利を横から奪い取るうとするとは許しておけぬ。ランサー。今直ぐあのサーヴァントを始末しろ！」

「あいよ。けどケイネス。  
アサシンの相手しようにも、その間にセイバーがお前を狙ってくるぞ?」

「おいおい失礼だな、ランサー。  
俺は此処でぼんやりと戦いが終わるのを待つてやるが?」

「で、戦って疲弊した生き残った方を仕留めるってか。  
その結構な衣装と違って随分と姑息じゃねえか」

「さあ、なんのことかな?」

「クツハハハハハハハ。成程、考えてみればこの中でマスターが近くにおらんのは儂のみ。  
では暗殺者らしくマスターを狙おうとするか」

「.....」

「.....」

「.....」

完全なる膠着状態。

たった一つの場所に三騎集まったサーヴァント達は、全く動けずに立ち竦むばかり。

考えてみれば簡単なことだ。

ここにいるサーヴァントは三人。うちマスターが共にあるのはランサーとセイバー。そう、サーヴァントだけではなくマスターもいるのだ。

サーヴァント三人だけならまだ良かった。上手い具合に立ち回り、

即興で共闘する事も出来ただろう。だがマスターがいることでやこしい事になる。

基本的にマスターはサーヴァントに勝てない。というより相対すれば一方的に虐殺されるのがオチだ。もしもランサーがアサシンに向かったとしたら、その隙に守りの薄いマスターをセイバーが容易く屠るのは想像に難しくない。それはセイバーも同様。

例えるならば三国時代だ。二つだけなら雌雄を決背ればいい。だが三国あるが故に、一つを打倒したとしても第三者が漁夫の利をもつていつてしまう。

ともすれば、この三者の中で最も有利な位置にいるのはアサシンだろう。

アイリスフィールから伝えられたアサシンの敏捷ランクはA。

仮にランサーが自分がアサシンに挑んだところで、残った一方はマスターを狙うだろう。そうすれば挑んだ方は敗退する。その後アサシンも疲弊するかもしれないが、その敏捷性を活かして逃げればいい。

セイバーたる自分の敏捷はAであるが、気配遮断まで使い透明化したアサシンを追撃出来るかどうか100%の自信はない。

逆に一番不利なのがセイバーたる己だ。

もし仮に自分とランサーの二人でアサシンに挑んだとしても、その隙についてマスターであるケイネスがアイリスフィールを狙うだろう。

そしてアイリスフィールではケイネス・エルメロイには勝てない。それは先ほどの戦闘でも分かっていることである。

するとセイバーの役割とは出来る限りこの膠着状態を引き伸ばし、陰に潜む己のマスター。衛宮切嗣の動きを待つしかない。

(それに見方を変えれば好機でもある)

今現在自分以外の二人のサーヴァントは身動きの取れない状態にある。

つまりサーヴァントが動けない上に、視線はこの戦場だけに釘づけになっているのだ。これは切嗣の作戦であるサーヴァントとマスターの注目を集めるという条件をクリアしている。

それ故にセイバーは動かない。

ランサーもケイネスが現状を完全に把握して、先に動けば不利になる事が分かりきっている為に動くに動けない。

アサシンのほうも直接戦闘に自信がないのか、マスターからの指示がないからなのか動かない。

つまり完璧なる膠着状態。その気になれば街一つ容易く葬り去るサーヴァントが三体揃っていないながらも場は静まったままだった。

「AAAAAAAAALaLaLaLaLaLaLaLaLaLaie!!!!!!  
!!!」

「はっ?」

「んっ?」

「はて?」

三者三様に呆ける。

すると天から雷鳴を纏い牛馬にひかれた戦車チャリオットが轟音を響かせながら下りてきた。

その戦車を容易く乗りこなし騎乗するのは一目でサーヴァントと分かる古風な格好をした大男。

戦車に騎乗して現れたことから察するにクラス名はライダー。つまりは騎乗兵。

「三人とも、武器を収めよ。王の御前である」

その巨漢に似合う馬鹿でかい声が響いた。

音量は戦車の纏っていた雷鳴にも劣らない……いや寧ろ雷よりデカイ声だった。

王というだけあって成程、かなりの威厳だ。

セイバーの生前の記憶でもこれほどの覇気を持つ人物はそうお目に掛かったことがない。

「我が名は征服王イスカンドル、此度の聖杯戦争ではライダーのクラスで現界している」

「……………は？」

サーヴァントどころか魔術師まで一緒になって呆ける。

蒼い槍兵が、中華風の武芸者が、白い剣士が、アインツベルンのホームクルスが、時計塔のエリート講師が。ある意味こんな出身も生きた時代も違う者達の心を一つにしたのは、このライダーが初めてではないだろうか。

「真名を、名乗った？」

「しかもイスカンドルだと」

「マケドニアの征服王イスカンドル。成程、彼の王ならばライダーのサーヴァントとして招かれるのも合点が行くが」

「何を考えている。サーヴァントが真名をばらすとは……」

「何かの作戦なのか馬鹿なのか……」

「何を……考えてやがりますか。」

くおの馬ッ鹿はああああ!!」

「どうやら馬鹿のようだな」

セイバーがマスターらしい小柄の少年を見て呟く。

「おいセイバー。確かさつき』どこに聖杯戦争で真名を名乗る馬鹿がいる!』って言ってたよな」

「その馬鹿が実在したんだろ、そこに」

「そう褒めるでない。照れるではないか」

「『褒めてない!』」

サーヴァント三人が同時にツッコミを入れる。

もしかしたらサーヴァントがこんな息の合ったツッコミを披露したのは、この第四次聖杯戦争が初めてかもしれない。

「ほう、誰かと思えば君だったのか。ウェイバーくん」

「け、ケイネス先生……!」

冷たい、恨みさえ籠った声。

やや緩まった空気が再び引き締まる。

ライダーのマスターらしい少年は、ランサーのマスターであるケイネスの姿を確認すると顔をこわばらせた。まるで、というより思いつきり恐怖しているように見える。

「いったい何を血迷って私の聖遺物を盗み出したのかと思えば……  
……よりもよって君自身が聖杯戦争に参加する腹だったとはねえ。  
残念だ。実に残念だなあ。可愛い教え子には幸せになってもらいたかったんだがね。ウェイバー、君のような凡才には、凡才なりに平庸で平和な人生を手に入れられるはずだったのにねえ」

話を聞く内にセイバーにも多少の事情が呑み込めた。

ようするにウェイバーという魔術師は、どんな理由があったのか知らないがケイネスの聖遺物、つまり英霊を召喚する為の触媒を盗み出し、そしてこの聖杯戦争に参加したのだろう。

となればケイネスが本来召喚する予定だったのはイスカンドル。ランサーはスペアだったのだろう。ライダーがスペアという可能性もあるが、征服王ほどの英霊をスペアにするとは考えづらい。

「致し方ないなあウェイバー君。君については、私が特別に課外授業を受け持ってあげようではないか。魔術師同士が殺し合うという本当の意味……その恐怖と苦痛とを、余すところなく教えてあげるよ。光栄に思いたまえ」

完全にライダー

ウェイバーとかいったか

は完全にビビっていた。

どうやら時計塔時代からそう仲は良くなかったらしい。寧ろ険悪だったと考えるべきか。

「ふふん。ほれ坊主、さっさと何か言い返さんか」



「え」

「え、ではない。このまま言われ続けて悔しくないのか。お主も男なら、こつガツンと言いつ返し返して見せよ！」

「だ、だけど……」

「だけども糞もあるまいて。ほれ、さつさとせい！」

ライダーが戦車からウェイバーとかいうらしい少年を引つ張り出すとケイネスの前に立たせる。

どうにもこの二人はマスターとサーヴァントの立場が入れ替わっているように感じられる。

「私は構わんよ、ウェイバーくん。」

未熟とはいえ君も魔術師。そして私から盗み出されたとはいえ、征服王イスカンダルのマスターでもある。精々無い背を伸ばして言い返すと言いつ

「……………！」

何の言葉が癪に障ったのかウェイバーの顔が引き締まる。

だがあれは『覚悟』を決めたというより、ムカついてヤケクソになつたような顔だ。

「……………」

「……………」





であれば、それに見合う理由がある筈なのだ。

もしくは先ほどの行為と同じく『馬鹿』な理由があるかなのだが。

「それなのだがな。うぬらとは聖杯を求めて相争う巡り合わせだが…… 矛を交えるより先に、まずは問うておくことがある。うぬら各々が聖杯に何を願うのかは知らぬ。

だが今一度考えてみよ。その願望、天地を喰らう大望に比してなお、まだ重いものであるのかどうか」

「天地を喰らう、大望？」

「然り。余は征服王イスカンドル。大望とは即ち『世界征服』に他ならん！」

「ふうーん。で、世界征服を目指す大王様は一体何がお望みで？」

「噛み砕いて言うのだな。

「一つ我が軍門に降り、聖杯を譲る気はないか？ さすれば余は貴様らを朋友として遇し、世界を制する快悦を共に分かち合う所存である」

『はあ？』

異口同音に口をそろえて言う。

ある意味、真名を初っ端から暴露した事よりも理解不能な行動だ。稀代の天才なのか馬鹿なのか。

「馬鹿だな」

「馬鹿ね」

「馬鹿だ」

「馬鹿すぎる」

「馬鹿」

全員が再び口を揃えて言った。

大体、聖杯を手に入れられるのは最後まで生き残った一組だけだ。なのに他のサーヴァントを勧誘することが余りにも破天荒で馬鹿だ。

「まあなんだ。その馬鹿さ加減は嫌いじゃねえが断る。

騎士の忠義を安く見るんじゃねえぞ。マスターの事は多少融通が効かなくてヘタレな所はあるが、気に入っているしな。それで裏切ったらおい、俺は畜生にも劣る屑になるだろ」

「呵呵呵呵呵呵、儂もランサーと同じく。

世界を犯す大望、惹かれぬ訳ではないが、マスターには娑婆に呼び出してくれた恩があるのでな」

ランサーとアサシンが勧誘を蹴る。

残ったのはセイバーだ。多少目を瞑ったセイバーに、イスカンダルが子供のように期待した視線を浮かべるが。

「却下だ。恩義には信義をもって応えるのが信条でね。今生の主君と定めた訳でもないが、一応聖杯戦争の期間中は仕えなければならぬ主だ。現世へと召喚してくれた義理もある」

「対応は応相談だが……？」

「……くどい！」

三人からバツサリ切って捨てられる。

確かに征服王の威容はそこいらの一般人なら問答無用に『うん』と頷かせるレベルであるが、生憎と三人はサーヴァント。そこいらの一般人と同じ尺度なわけではない。

「……………」

その時、最高の直感スキルを有するセイバーは気づいた。

それはこれから起こる光景。遠方から飛来した一筋の閃光がこの一帯を破壊し尽くす、そんな光景。

(アサシンがない?)

さてはアサシンのほうも気づいたか。

セイバーはアイリスフィールに静かにしているようジェスチャーを送ると、そのまま抱きかかえ跳躍した。

「ムッ」

「ほっ」

気配遮断スキルをもたないセイバーの動きは流石に気づかれたらしい。

同時に飛来してくる閃光にも気づいたらしい二人は己がマスターを引っ張るとそのまま退避する。

着弾、衝撃。

螺旋という歪な形をした矢は地面に突き刺さると、空間を歪めそ

して爆散した。

「これは、またアーチャーか」

射線方向上を見る。

しかし既にそこにアーチャーの姿はない。

どうやら先の一撃だけ放って引き上げたらしい。

「セイバー。アーチャーを追える？」

「無理だ。飛来してきた宝具に集中し過ぎたのもあるが、アーチャーめ。上手い男だ。弓兵が近付かれれば弱いというのを良くわかっている」

「飛行機での一件といい、厄介な相手ね」

「ああ」

もしかしたら今まで自分の相対した他三体のサーヴァントの誰よりも手強いかもしれない。

狡猾に立ち回り、二度まで相対していながらセイバーにはアーチャーの真名に全く心当たりがない。

見るとランサーがケイネスを連れて跳躍していくのが見えた。アーチャーを追ったか、もしくは一時退却したか。どちらにせよ。

「アイリスフィール。こちらも一回退くぞ。

これ以上ここにいれば切り札をきる事になるかもしれない。

ランサーがルーン魔術を扱う槍兵と分かっただけ良しとしよう」

「そうね」

セイバーはアイリスフィールを抱きかかえると、そのまま疾走する。

衛宮切嗣とセイバーにとって二戦目となる聖杯戦争は、予期せぬ狙撃により唐突に終わりを告げた。

その頃。

公園に集まったサーヴァント達へ一方的に攻撃を仕掛けた当人は、マスターのもとへの期間中一人の男と相對していた。

セイバーのそれと酷似している純白の騎士服。セイバーのとは違いオレンジ色のマント。

如何にも騎士然とした出で立ちをしているというのに、その男の放つ濃密な殺意が全てを台無しにしている。

「クハハツハハツハハツハハハハハハハハハハ、こんばんわア！ア  
ーチャア！」

「まさか、バーサーカーのサーヴァント。

これは驚いた。自意識を保ったままのバーサーカーなど聞いた事もない」

「そいつアどオモ、アーチャアアアアアアアアアアアアアアア！」

月明かりに照らされ男の顔が露わになる。

端正なその顔立ちが狂気と血液で歪んでいた。





SEARCH7

馬鹿（後書き）

ウェイバーがヤケクソになってケイネスを罵倒。

そして次回は吸血鬼VS赤い人ですね。

この二人、セイバーとは別の意味で相性最悪そうです。

## SEARCH 8

正義の味方 対 異界の吸血鬼(前書き)

初めに一つ。

・ルキアーノ外道全力全開

・反逆しない軍人と合わせても最悪のグロテスクなシーン

などなどが含まれます。

もつとも立派な武器はもつとも大きな悪をなす。知恵深き人は武器に頼ることはしない。彼は平和を尊ぶ。彼は勝つても喜ぶことをしない。戦勝を喜ぶことは殺人を喜ぶことを意味する。殺人を喜ぶような人は、人生の目的に達することはできない。

これには一つだけ例外がある。目的を達することは出来ないと言うが、殺人という行為そのものが目的である者だ。彼は吸血鬼。人の最も大切なモノを奪いつくし血を喰らい歌う。背徳の虜となった彼は止まることなどない。何故ならば彼は鬼。鬼に人の理は通じない。もしも鬼と語らう事が出来る者がいるのであれば、その者の内面にもまた鬼が巣食っているのかもしれないのだ。

出会うはずのない二人。

出会ってはならぬ二人。

そんな両者は今ここに邂逅した。

日が闇に潜み、月明かりが照らし出す時刻に。

赤い外套に身を包んだ武人。

白い騎士服に身を包んだ狂戦士。

「しかしなア、アーチャー？」



「おおい、アーチャー。運命ってエやつを信じるかア？」

「運命だと？」

「ああ。私もちィとばかり前までは信じていなかったねエ。

「ただど違った！ 『運命』ってエやつは私を見放してはいなかったッ！」

「あいつはいた！ この喉が渴いて疼く面白おかしい場所に！ この素晴らしい最高の殺戮場にッ！」

「それが堪らなく、私は愛おしい。これ以上もなくッ！」

「あいつ、だと？」

その口ぶりからして、このバーサーカーの生前の知り合いが他サ  
ーヴァントにいたと考えていいだろう。となれば恐らくはセイバー。

あの白騎士の騎士服とこの男の騎士服には共通するものがある。  
いや、というよりはマント以外はほとんど同じだ。

「そオだア！ ついでに私の同類にも会えたしねエ」

「……………」

「おやア？ 違ったかア……？」

私の見立てだと、お前も私と同じ『守護者』だと思っただんだがねエ」

「さて、これから聖杯を賭けて殺し合う我等に、そのような問答は  
不要と考えるがね」

「そついうな。そつだ、アーチャー。」

「サッカーって知ってる？」

「知っているが、それがどうしたのかね？  
まさか剣と剣を交える戦いではなく、サッカーで決着をつけることで  
も」

「それこそまさかだア。ただの、殺し合う前の余興だ」  
するとバーサーカーは真つ黒いボールを取り出す。  
そのまま巧みにリフティングをすると、

「シュート」

仮にもサーヴァントの蹴り。

弾丸のようなスピードでボールが自分に迫ってきた。  
恐ろしい速さだ。プロのサッカー選手でもとれるかどうか怪しい  
レベル。

だが舐めて貰っては困る。歪なれどこの身もサーヴァント。自ら  
に刻まれた千里眼はこの程度のスピードのボール、容易く受け止め  
られる。

「ナイスキャッチ」

バーサーカーが悪戯の成功した子供の用に、無邪気であり邪悪な  
笑みを浮かべた。

「余興はこれで終わりか。まったく下らない事を考えるサーヴァン  
トがいた……もの……」

そこで漸く気づいた。  
如何してボールから赤い液体が流れている。

どうしてこのボールはこんなにも肌色をしている。  
どうしてこのボールはこんなにもこわれている。  
ドウシテコンナニ、このボールはピンク色ナノダロウ。

ギョロ、とボールの力ない瞳が射抜く。

それは幼い少女だった。年の頃は十歳やそこらだろう。艶やかな黒髪。黒くて透明な瞳。可愛らしい少女は後十年もすれば魅力的な女性になるだろう。

だけど、それはこのボールの暖かさからして数時間ほど前までの話。

彼女はもうそんな可愛らしい面影の殆どを抉られていた。サーヴアントの力で蹴られたからだろう。顔の皮は剥がれピンク色の中身が見えていた。舌は弾け飛び、自分の腕についていた。見るものを魅了した瞳は恐怖に歪み、片方の目はポタポタと流れ落ちていく。

その惨状、その悲劇に彼の中にある摩耗した光景の一部がフラッシュバックする。

地獄だった。一面の地獄。戦争という人が作り出してしまった際限なき地獄だ。兵士だけではない。女も子供も、生まれたばかりの赤子も。

一切の情けも容赦もなく死んでいく。そう、今まさに自分の腕の中にあるボールの少女のように。

「貴様……!!」

「怒ったのか、アーチャー？」

お前も守護者なら同じよちな事をしてきただろオ？

毎回毎回、呼び出しては殺しつくして。呼び出されては虐殺し。

なのに、どうして、そんなに怒ってるんだア？」



ケラケラとバーサーカーが不愉快に笑う。

「そつだな、確かに私はお前も言う通り殺してきたさ。守護者は危機に瀕した人間を救うのではない。危機に瀕している人間を虐殺し、平穩の中にいる人間を救うただの殺戮者だ」

「ならば……」

「しかし、個人的に……バーサーカー。貴様の存在が不愉快だ」

語るべき言葉などはなかった。

別に正義の味方を気取る気など一切ない。

喜怒哀楽、全ての感情を排除した。

少女の為？ この男を野放しにすれば多くの人々が死ぬから？

否、これはただの自己満足だ。あの男の存在が不快だ。まるで守護者である自分を見ているかのようで、自分の選択した結果を嘲笑うように。

104

だが彼は知らない。

彼が呼び出した干将莫耶を握る手に力がこもっていたことに。

無垢なる命が目の前の男に惨殺されたことに義憤していることを。

英霊　　は気づいていなかった。

「ハハハハハハハハハハハハ　　ッ！

こいつア傑作じゃアないかア！　まさか一丁前に怒り狂ってるのか

ア？

私と同じ殺戮者様でありながらア！」

「黙れ。口を閉じる、バーサーカー」

バーサーカーが得物であるらしい赤いナイフを投擲してくる。常人であれば避ける事すら叶わぬ刹那。されど同じサーヴァント相手にこの程度の小細工が必殺足りえるはずがない。

投擲された五つのナイフ。その悉くを干将で叩き落とす。

「やアるなア！」

「ッ！」

電撃戦。

そう言つとシツクリくるだろう。

ナイフはバーサーカーにとつて囿に過ぎなかった。自分がナイフを叩き落とした僅かな隙をついてバーサーカーが両手に其々二本のナイフを持ち、文字通り雷光のように接近してきた。

バーサーカーのナイフを受け止めた。手が痺れる。筋力においてバーサーカーを下回る自身ではまともに受けることは不可能と判断。ならば真つ向から受けはしない。巧みに受け流し体制を立て直す。

「中々剣士のほうも様になつてるじゃアないかッ！」

狂つたバーサーカーの攻撃の手は緩まない。

しかし厄介なことにこのバーサーカーは性格こそ狂っているが、戦闘においては全く狂っていないということだ。自分がフェイントをかけても、冷静にそれに対処してしまう。

ならば選択肢は一つ。

余り長く時間をかければ、セイバーとランサーの戦いのように他のサーヴァントがやってくるかもしれない。なによりバーサーカーを一分一秒としてこの世界に留めておきたくない。

答えは一つだ。自身における必殺をもってバーサーカーを打倒する。

「鶴翼、欠落ヲ不ラズ」

バーサーカーへ手にある干将莫耶を投擲する。

されどバーサーカーとてそう安々くらうほど生易しい相手ではない。

簡単にそれを払ってしまう。だが干将莫耶を投擲した真の狙いは別にある。

「自らの武器を捨てるとは血迷ったの、か？」

バーサーカーが驚愕した。

無理はないだろう。何故ならば投擲したはずの干将莫耶が再び自分の手に出現していたのだから。

「心技 泰山ニ至リ」

再度、再々度として投擲される干将莫耶。

鈍い金属音を響かせつつも、投擲した干将莫耶達は一向にバーサーカーへ傷の一つも負わせていない。

「心技 黄河ヲ渡ル」

「下らないな。下らな過ぎるぞオ！」

バーサーカーが叫ぶ。

しかし、もう遅い。バーサーカーは罫に嵌った。

「  
唯名 別天二納メ」

都合四度目の干将莫耶を取り出した。  
だがそれは先程までとは違っている。

其々の干将莫耶は強化の魔術により巨大化していた。黒と白の羽のように広がる夫婦剣。それはまるで天に羽ばたこうとする大鷲が如き威容を誇っていた。

「また同じ剣かア？ 多少は強化したようだが、そんな猿の浅ちが  
あ……………！」

背後から戻ってきた干将がバーサーカーの体を切り裂いた。

「なんだ、これはア！！ 何故剣が後ろ、から……………」

バーサーカーも漸くそれに気づいた。自らを中心にして飛び回る干将莫耶の結界に。

夫婦剣、干将莫耶はそれほど高いランクの宝具ではないが、一つの特性がある。

それは黒と白の夫婦剣は互いに引き合うということだ。しかもバーサーカーの周りを飛び交う干将莫耶は合わせて六つ。六つの干将莫耶が織りなす螺旋は、狂戦士を閉じ込める牢獄となった。

「  
両雄、共二命ヲ別！」

「なっ、待てエ！」

待つ理由などない。

牢獄に閉じ込められ動きの取れなくなったバーサーカーへと容赦なく突き進み、

「はああああああああああああああああああああああああああああ

「この、猿がアアアアアアアアアアアア!

「はッ!」

飛び散る鮮血。

強化された干将莫耶は、バーサーカーの体を縦に真つ二つに切り裂いた。

だが攻撃はそれだけで終わらない。

強化した干将莫耶をそのまま突き刺したまま後方に跳躍する。すると六つの干将莫耶達が一斉にバーサーカーの五体に突き刺さった。それを確認し、最後に一言。全てを終わらせる合言葉を呟く。

「ブロックンファンタズム  
壊れた幻想」

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

絶叫。そして爆音。

飛び散る肉片。バーサーカーは木端微塵になった。

「確かに私にお前を否定する権利もなければ義務もない。  
私とて唯一の望みも叶えられぬ此処にいるのは、ただ八つ当たりの為だ。

それでも……………いや、これは下らん感傷だな」

一言だけ残し赤い外套の騎士は消える。霊体化したのだろう。  
だが先程の『ブロックンファンタズム壊れた幻想』。

本当に壊した幻想は、もしかしたらバーサーカーではなく

。

最後に一度だけ赤い騎士は戦場を振り返る。

視線の先にあるのは大地に転がった少女の亡骸の欠片。

彼はそれを広うと、なにかを呟く。

するとどんな 魔術 を使ったのか、少女の亡骸は焼失した。

そして今度こそ、その男はその場から立ち去った。

だが悪夢は終わらない。

赤い騎士の立ち去った戦場。

そこで蠢く影が一つ。

干将莫耶の爆発により木端微塵になった肉体。

それらが集まっていき、やがて元の姿を形作る。

「クツクツクつ、初っ端ながら厄介なサーヴァントに出くわしたものだア。」

まさかこのルキアーノ・ブラッドリーを十回分殺してみせるとはなア」

バーサーカー、いやルキアーノ・ブラッドリーは狂々と笑う。

何故確実に死んだ筈の彼が生きているのか。

それは彼の持つ宝具が原因だ。

『ヴァンパイア・オブ・ブリタニア  
吸血鬼の如き肢体』

英霊・魔術師など関係なく、人間以上の生命体を殺した数だけ自分の命のストックにする。

それが英霊としてのルキアーノ・ブラッドリーの能力だった。常に奪い、他人の大切なものを奪い続けてきたブリタニアの吸血鬼、その象徴。

「さて、と。あいつに会いに行きたい所だが………流石にあいつと対峙するってエのに、命のストックが二十程度じゃア足りないなア。アーチャーの奴に半分は奪われたし」

もつと多くの人間を殺す必要がある。

彼の宝具はその人間の格に関わらず、全ての人間以上の生命体に同じ効果を発揮するので、質よりも量が重要となってくるのだ。

「さアてと、殺しにいきますかねエ」

今日もルキアーノ・ブラッドリーは街を徘徊する。

新たなる獲物を求めて。魔術的痕跡や物的証拠を何も残さず。ブリタニアの吸血鬼は今宵も人の血肉をさ迷い歩く。

【クラス】バーサーカー

【マスター】間桐雁夜

【真名】ルキアーノ・ブラッドリー

【性別】男性

【属性】混沌・狂

【筋力】 B 【魔力】 D

【耐久】 C 【幸運】 D

【敏捷】 A 【宝具】 B

【クラス別能力】

狂化：A++

全パラメーターをワンランク上昇させる。

また元々『狂い』を象徴する英霊である為に、狂化によって思考能力を奪われない。

【保有スキル】

心眼（偽）：B

直感・第六感による危険回避。

天性の才覚であり努力で培われたものではない。

投擲：A

ナイフを投擲する技能。

速射性と命中率に優れる。

精神汚染：B

精神が通常の人間の範疇から外れているため、精神干渉等をを低確率でシャットアウトできる。

意思疎通には問題ないが、常識的人間からは嫌悪感をもたれ易い。

戦闘続行：A++

生還能力。瀕死の傷でも戦闘を続け、決定的な致命傷を負わない限り生き延びる。

宝具と併用する事で不死身の肉体を得ている。

【宝具】



ヴァンパイア・オブ・ブリタニア  
吸血鬼の如き肢体

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：30人

命のストック。人間またはそれ以上の生命体を殺した数だけ、自らの命をストックする能力。

無垢なる民草五百人を殺しつしたのならば、ルキアーノを殺すには五百回殺害するか、一度に五百回殺戮する攻撃をする必要がある。ストックする数に上限はない。

殺せば殺すほどに強くなっているルキアーノならではの宝具といえよう。

さてさて前回のおバカ空間とは打って変わり、最初から最後までシリアスオンリーでした。

ちなみにルキアーノの宝具。わりと熱心な型月ファンなら似たような能力の人を二人は思いつくかと思います。その二人とは「ネロ・カオス」と「ヘラクレス」です。

ただやはり似ていても詳細は別物です。

先ずルキアーノは殺せば殺すほど命のストックが増えていきますが、教授のように666を全て殺す威力を喰らわせなければならぬ、という事はありません。一度殺せば一度死にます。強力な一撃を喰らわせれば複数人分殺すこともできます。

また教授のように何か特定の生命体（真祖）などを取り込んで強くなる、のようなこともないです。幾ら取り込んでも戦闘力は変わりません。

またヘラクレスのように防御効果はありません。宝具や魔術を無効化なんていうのも不可能です。

ただ優れているのは、ストックの容易さ。そしてストックする命に限界がないことです。

ぶっちゃけ一万人殺せば一万人分のストックができます。ヘラクレスの場合は通常の魔術師が一生分かけてようやく一つ分のストックだというのに。

まあなんとというか、下手な吸血鬼より遥かに吸血鬼らしいルキアーノでしたw



理想主義のない現実主義は無意味である。現実主義のない理想主義は無血液である。

歴代最強騎士たる男が決して『王』に向かない理由がここにある。確かに属国の王にもなれるだろう。一組織のトップにもなれるだろう。

しかし決して自らが本当の頂点たる『皇帝』になることはできない。彼にはロマンチストな一面があっても、彼には自ら成し遂げたい理想や夢、願望が致命的なまでに欠けているのだ。

暗い、薄暗い廃ビルの中。

赤い騎士が仕留めそこなった吸血鬼は、再び無垢な一般人を狩ろうとしていた。

「おおい、聞いてますかア？」

ペチペチと手でその人間の頬を叩く。

必死に目を閉じて恐怖から逃れようとしている少年を嘲笑うかのようだ。

「おいおい。ママに教わらなかったのかア？」

人のお話は相手の目を見て聞きましょオってエさア」

「ひィ！」

「尤も、そのママはお前の横で分解してるけどねエ」

少年の母親だった物を掴む。

そう物だ。遺体ですらない。

人間としての原型を留めぬほどに犯されたソレは、遺体ではなく物だった。

残骸とすら呼べない。なにせ人間としての残滓を何一つ残していないのだから。

だが少年はまだ絶望してはいない。

何故なら少年の年頃にとって等しく一番のヒーローである『父親』はまだ生きていたのだから。

無残に破壊された母親とは違い父親は五体満足で寝かされている。

「さアて、ここで問題です。

何故この私、ルキアーノ・ブラッドリーはママを殺しちゃったというのにパパだけは生かしているでしょオか？」

「が、助け」

「？寸前で神の愛に目覚めたから

？殺しに飽きたから

？君の目の前で愛しいパパを殺すため

さアして、どれでしょオかア？ 正解したらご褒美に命を上げよう」

その時だ。

ゆっくりと父親が意識を取り戻していく。

少年の顔が希望に満ちていく。

そつだ。幼い少年にとつて自分の父親はヒーローだ。

出来ない事なんて何も無い。TVの中のヒーローよりも身近にいるヒーローなのだ。

「パパ！」

少年が助けを求める。

「直樹！」

父親が反応した。

彼はまだ上手く状況が掴めていないだろう。

なにせ気づけば目の前に涙で顔をグチャグチャにした息子がいて、知りもしない場所にいたのだから。

だが彼は父親だった。理屈ではなく本能で今が息子の危機だと判断した。

「パパア？ それが少年、お前の答えだなア。

残念！ 不正解、答えは？だよオ」

「ち、ちが

」

「貴様、直樹に何をす、ぐお」

ルキアーノが軽く腕を振るう。

サーヴァントの一撃に、容易く成人男性の肉体は弾き飛ばされた。

「残念だ。本当に残念だア。」



お前の妻の一番大切なモノも自分の命だった」

「ぐほっ！」

ルキアーノの蹴りが父親を再び吹っ飛ばした。

「なア、如何してお前を最期まで残したか分かるかア？

それはお前の一番大切なものが家族だからだア。  
だから最後まで残した」

「黙れえ！」

「ほオら見るオ。お前の一番大切な『家族』は皆奪われたぞ。  
この私に。ルキアーノ・ブラッドリーに」

「ああああああああああア

ッ！」

憤怒の形相で襲ってきた父親の両腕を切り裂く。  
飛び散る鮮血。追い打ちをかけるようにナイフを腹に突き刺した。

「ぐお、があ

」

「クツクツクツクツ、そこでこうなる。

一番大切なモノを奪ったお前に残った大切なモノはなんだア？  
それは復讐だア。今お前はこう考えている。

『刺し違えてでも目の前の男をぶっ殺す』ってエいう風になア」

「が、ころして……やる……」



「けど残念。」

お前は一番大切なモノ復讐すら為しえない」

ルキアーノが静かに父親の脳髓を抉った。

脳漿をまき散らせながらも、末期に何かを叫ぼうとして、やがて動かなくなる。

この一家は皆死んだのだ。

「カツカツカツ、また派手に喰い散らかしたもののよ、バーサーカーよ」

「ああ？ 誰かと思えば、雁夜の家にいた爺じゃアないかア。どうしたア。お前も混ざりに来たのかア？」

「それも悪くないと言っておくが、此度は少々助言にの」

「助言？」

「然り。見た限り魔術的痕跡や物的証拠の隠蔽は完璧に近いようだが……」

「それがルールだろオ。」

下らないが監督役に目をつけられるのは得策ではないからなア」

「カツカツカツ、それは知っておる。」

監督役にせよセカンドオーナーである遠坂の子役にせよ、魔術の隠匿さえ完璧であるのならばサーヴァントによる魂喰いは許容するであらう」

「ならば……」

「だがバーサーカーよ。お主は余りにもやり過ぎた。先程、儂の下に監督役から警告が届いた。

これ以上、一般人を害するようであればペナルティーを下すと」

「ほほう」

ルキアーノは決して馬鹿ではない。

幾らサーヴァントとはいえど監督役に目をつけられては得策ではないと理解している。

間違つてはならないが、この男はただ欲望のままに人を殺すだけの殺人鬼ではない。

社会的に黙認された上で人を殺す、最も性質の悪い殺人鬼だ。

なによりも生前の彼は軍人であり貴族。

国家にしる聖堂教会にしる、組織を敵に回す事の恐ろしさは心得ている。

サーヴァントとして人間相手には圧倒的なアドバンテージをもっているとしても、巨大な組織の一員である監督役を敵に回せば、どのような事態になるか分かったものではない。

「カッカ、なにそう落ち込む必要もあるまいて」

「とうとうと？」

「監督役は確かにこの冬木においては並外れた情報収集力がある。だが逆に、冬木以外で起きた殺人を、果たしてサーヴァントの所業と判断出来るであろうかの」

「そういう事が」

ニヤリとルキアーノが笑う。  
どうやらこの老人とは仲良くなれそうだ。

「ところでバーサーカーよ。

一つ、尋ねたい事があるのだがの」

「なんだア？」

「お主は聖杯に何を求めるのだ。

いや、それ以前に何故雁夜のような出来損ないに従っておる。

儂の見る限り、あの愚か者に従う事を良しとする殊勝な性格にも思えんのでな」

「それは簡単だよ、蟲爺」

ルキアーノの口元が禍々しく歪む。

「私が仮に勝者となったとして、私が聖杯に託す願いは『間桐桜と遠坂葵の死』だア」

「かつ、カツカツカツカツカツ！ それは面白い事を考えたものよの、バーサーカー！。

成程成程、彼奴には勝利がない。例え運命の悪戯で聖杯を掴めたとしても、彼奴に待っているのは己が願いの崩壊。実に、実に面白い」

「傑作だろオ！ 雁夜には運命が二つある。

脱落し死ぬか、聖杯を掴み絶望するかだア。

どちらに転んでも雁夜は不幸になる。救われることは決してない！」

吸血鬼と吸血蟲。

二つの影はやがて消える。

冬木とは違う街へと。獲物を探して。

時は少し遡る。

夕闇の中、ビルの屋上からとあるホテルの一室を凝視するセイバーの姿があった。

あのホテルの最上階を丸ごと貸し切っている男の名はケイネス・エルメロイ。

己のマスター、衛宮切嗣が調べてきた情報、間違いはない。

「さてさて、ランサー。第二戦といこうか」

セイバーの手にあるのは対物ライフル。

この破壊力ならば、例え水銀の守りであろうと容易く突破してみせるだろう。

それにもしランサーとケイネスが生き残ったとしても問題はない。忘れてはならないが、セイバーは剣士なのだ。

ランサーとケイネスも自分たちの拠点が『狙撃』されたと知れば、間違いなくアーチャーの仕業と考えるだろう。

ケイネスが死ねば良し。

ライバルが一人減るのだから。

ケイネスが生き延びても良し。

その怒りの矛先はアーチャーに向けられる。

セイバーと衛宮切嗣に損はない。

そしてセイバー自身、この世界では民衆用のストーリーを用意する必要もないのだから、思いつきりやれる。躊躇する必要もない。

照準、発砲。

理想的な軌道を描き、対物ライフルから解き放たれた閃光が飛ぶ。そして着弾。ホテルの最上階から巨大な爆風が上がった。

「Good night! 良い夢を、ロード・エルメロイ」

その夜。

偵察を終えた切嗣は漸く帰路についた。

それにしても今日は思ったよりも収穫の多い一日だった。

一番の利はライダーのサーヴァント、イスカンドルの真名が知れたことだろう。

正直あんな馬鹿に世界は一度征服されかかったのかと思うと、やるせない気分になるのを抑えられないがそれは置いておく。

次にランサーの情報。卓越した槍使いでルーン魔術師となると候補は限られる。

切嗣の脳内にはランサーの候補が三人ほど浮かび上がっていた。尤もランサーに関してはマスターであるロード・エルメロイの情報を得られたのも大きい。

当初切嗣はケイネスのことをただのインテリで戦闘には向かないと予想していたが、あの魔術礼装はかなり厄介な代物であった。

もし初見で相対したのなら苦戦は免れなかつただろう。最悪、  
返り討ちになつていたかもしれない。

だが手の内さえ知つてしまえば対策のしようはある。

尤もその必要はなくなるかもしれない。

つい数時間ほど前にセイバーから連絡があつた。

それによるとケイネスの拠点であるホテルに対物ライフルの一撃  
を叩き込んだそうだ。

既にケイネス・エルメロイは脱落している可能性も十分にある。

あの水銀も宝具化した対物ライフルの一撃を防げる筈がない。生き  
ているかどうかはランサーの能力次第だろう。

懸念事項といえば、アサシンの情報については余り得られなかつ  
た事だが、そこまで求めるのは贅沢というものだろう。

なによりセイバーの情報を殆ど晒さずに、これだけの成果を得た  
のは上々だ。

そうして当面の拠点である日本邸宅に帰還した切嗣はあり得ない  
物を見る。

そこは異空間だった。

「帰つたか、切嗣。お前も食べるか」

「なんだ、これは……」

そこに謎の空間が再現していた。

如何にも日本建築らしい畳の床。

だが可笑しいのは、何故かそこに如何にもな西洋風長テーブルが  
鎮座している。

というよりテーブルに置かれた豪華なフルコースはなんだというのだ。

まさか舞弥が……？

有り得ない。彼女もちよつとした料理くらいは作れるだろうが、こんなプロのシェフが腕を凝らしたかのようなフルコースが作れる訳がない。

自分の妻であるアイリも違つたろう。アインツベルンは貴族であるから、このような料理を食べた事はあるが、食べる事と作ることは全くの別物だ。

となると最後の候補はセイバーになるのだが……。

それこそ「まさか」だ。

「セイバー、説明しろ。これは一体どういうことだ？」

「どつという事も何も、見ての通り食事を楽しんでいるのだが」

「そんな事は知っている。

そもそもこの料理は一体誰が用意した。いやそれ以前にサーバーヴァントに食事は必要ないだろう？」

「質問は一つずつにしろというに。

まあいい。先ず俺が食事をしていることだが………これは娯楽だ」

「娯楽、だと？」

「そうとも。

折角の現世、戦いだけというのも味がないだろう？」

「ま、食材の出費に関してはサーバーヴァントにやる気を出させる為の必要経費と割り切れ」

言いながら優雅にステーキを口に運ぶセイバー。  
その仕草が妙に様になっているのが逆にイラつく。

「いいだろう。」

それでお前が指示通りに動くというのなら、勝手にしろ」

本当は聖杯戦争中に娯楽などやる気があるのか、と怒鳴りたくなる衝動を抑える。

幾ら切嗣といえどサーヴァントという道具なしで聖杯戦争を勝ち抜くことは不可能だ。

食事を与えて、サーヴァントが命令通り動くというのであれば安い出費だ。生真面目だが騎士の誇りなどという下らないモノを持ちだして命令通りに動かないサーヴァントよりかは遥かにマシだと、自分を納得させた。だがしかし。

「で、一体これは誰が作った？」

はつきり言ってセイバーが料理をするとは到底思えない。

いや、サーヴァントが料理をすること自体は不思議ではないだろう。サーヴァントといえど生前は人間。特に銃が当たり前のように存在する近代の英霊ならば、家庭料理の一つや二つ出来ても不思議ではない。

だが、それはあくまでも家庭料理の場合だ。

今長テーブルに並べられている料理は、その分野に疎い切嗣から見ても三ツ星。少なくとも家庭料理の範疇でこなせるレベルではない。

「その種は、これだ」



セイバーがパチンと指を鳴らす。

するとどうだろうか。セイバーの隣に一人の女性が現れた。アッシュブロンドの髪。腰まで届くロングヘア。なにより彼女はまるでサーヴァントのように出現したのだ。これが現すことは、

「まさか召喚魔術？」

「惜しいな。正確には展開だ。

主任、説明を」

主任と呼ばれた女性は切嗣に会釈すると語りだす。

「私は生前、卿の部下であり、卿の一部品として共に聖杯に招かれたのです。

ですので私を呼び出すのは召喚というより、通常のサーヴァントが槍などの武装を展開するのと同義かと」

「そういう事だ。理解したか、切嗣」

つまり主任と呼ばれた女性は、セイバーにとってランサーの槍などと同じようなものだったのだろう。部下というよりも英霊としての一部。であるが故に召喚ではなく展開、と。

「ほら。なにそこで突っ立っている。

これは我が祖国の料理だな。お前も食べたらどうだ？」

「そうよ。切嗣、初めて見た料理だけど、本当に美味しいわよ」

一緒に料理を食べていたらしいアイリスフィールが顔を綻ばせながら言っ。

なんとなくセイバーのことを少し理解してしまった。

このサーヴァントは器用なのだ。どんなに壮絶な戦いの中でも、容易く仕事とプライベート、戦いと遊びを切り替えられる。今こうしている時にでも、サーヴァントが襲って来れば即座にセイバーは対応するだろう。

アイリスフィールという妻を得て、イリヤスフィールという娘を授かり、殺人マシーンと人間を行ったり来たりしている己とは違って。

アイリからの勧めもあり、珈琲を一杯飲む。

口の中で広がる濃厚な味わい。

「……………」

認めるしかなかった。

美味しい。今まで飲んだどの珈琲よりも。

「

」

一つ気づいた。

セイバーが主任と呼んだあの女性。彼女とセイバーの関係は、自分と久宇舞弥との関係に酷似していることに。

前に、セイバーがポツリと洩らした事がある。

自分は愛した女を一人残らず失ってきた男だと。

嗚呼、そんな所まで衛宮切嗣とセイバーは酷似してしまっている。自分もまた死なせてきた。二人の女性を。

ならばセイバーの最期こそ、衛宮切嗣が辿る末期なのかもしれない。

い。  
ふと、そんな感傷を抱いた。

召喚：E

主任を呼び出す。

一応『召喚』というカテゴリーにあるが、主任という存在は英霊レナードにとっての内臓であり付属品なので、実際には通常の英霊が槍や剣を取り出すのと全く変わらない。

前話から続き外道全開なルキアーノ。

しかし前回の赤い人は書きにくかったのに比べ、ルキアーノは滅茶苦茶書きやすかったです。

さて今回はセイバーと切嗣との共通点あれこれ。

これが多いのなんのって。探せば探すほど出てくる共通点の山。

もしセイバーに切嗣と同じ理想があれば、同じような人生を歩んだかもしれないね。

私たちが目指すもの……それは正義の味方だ。

生前のセイバーの主君が、まだゼロというコードネームで呼ばれていた頃に、当時の部下達に言い放った一言である。

この世界にも昔『正義の味方』に憧れていた男がいた。

男の名は衛宮切嗣。誰よりも平和を祈るロマンチストでありながら、現実という壁に絶望したりアリスト。冷徹無比な正義の味方。

だが両者の『正義の味方』の意味合いは大きく異なる。

一方はただのプロパガンダとして、一方は本気で目指し摩耗した暗殺者として。

どちらが正しいかは、恐らく当人達にしか答えは出せないのだろう。

「おのれ！ おのれおのれおのれエ！」

街から外れた廃工場。

そこに寂れた場内には似つかわしくない人影が二つあった。

「アーチャーめツ！ 狙撃などという卑劣な手段で我が魔術工房を攻撃し！」

あまつさえ……あまつさえソラウを傷つけるだど！」

蒼い服を纏った西洋人。ランサーのマスターであり時計塔のエリート講師であるケイネス・エルメロイは嘗てないほどに怒り狂っていた。

もしこの場に教え子であったウェイバーがいたならば、今まで見たことのないケイネスの憤怒の形相に驚きと恐怖を感じただろう。それほどケイネスは怒っていた。

「すまねえな。俺とした事が……」

ランサーの視線の先にはケイネスによって魔術的治療が施されたソラウの姿がある。

当初一時的に安全な場所<sup>廃工場</sup>に退避した時のソラウの状態は酷いもので、顔や体にも傷があつたのだが、そこは卓越したルーン魔術師でもあるランサーと、最高峰の魔術師であるケイネス。

今ではソラウの傷は見る影もない、がそれでも宝具によるダメージは未だにソラウを眠りにつかせていた。

ランサーとしても歯がゆい。

まったく最速の英霊ともあるうものが何てザマだ。

アーチャーの狙撃に気付かずマスターの『婚約者』を傷つけるなんて。

尤もあの突然の狙撃にマスターだけは大した傷もなく守りきつたというだけでもランサーは十分優れているといえるのだが、彼ほどの英雄にそんな言葉は救いどころか侮辱にしかない。

常識的な理屈など関係ない。常人が一人しか救えない鉄火場でも鼻歌交じりに全員救ってみせるのが英雄なのだ。

「ランサー！ 先ずはソラウをこの冬木から離れた安全な地へ移す」

「いいのか？」

ランサーが確認する。

現在ケイネスはサーヴァントへの魔力供給をソラウが、令呪などのマスターとしての機能をケイネスが行うという分担を行っている。これは卓越した降霊術の専門家でもあるケイネスならではの離れ業である。並みの魔術師では到底不可能であろう。

この特殊な契約によりケイネスは、他のマスターのようにサーヴァントの魔力供給で力を制限されることもなく、常に全力の魔術行使を可能としている。

だがソラウを冬木から離れた安全な場所へ移すというのは、その恩恵を捨てるという事も意味するのである。

「構わん！ そうだ、思えば幾らこの私がいるとはいえ、ソラウがこのような場所に来る事自体が最初から間違いだったのだ」

ケイネスは思い直す。

そうだ恩恵がなんだ。その程度のアドバンテージなどなくても、自身の誇る最強の礼装と魔術師としての技量があれば、極東の魔術師など相手にもならない。

「そうか。で、その後はどうするんだ？」

分かりきった事をランサーは尋ねる。

するとケイネスは、先程の激昂よりも獰猛な笑みを浮かべ。

「決まっている。」

無粋な奇襲を仕掛けてきたアーチャーを、見つけ出して殺す！」

だがケイネスも、そしてランサーも知らない。

自分たちを狙撃してきたのがアーチャーのサーヴァントではないことを。

二人の矛先がアーチャーに向く事こそが狙撃手の狙いだということ。

ケイネス・エルメロイは考え付かなかった。

冬木市を預かるセカンドオーナー。

遠坂時臣の邸宅で、今代の頭首であり聖杯戦争のマスター。遠坂時臣は優雅に紅茶を愉しんでいた。その余裕、もし一般人が見れば油断しているのかと思うだろう。

だがそれは似ているようで違う。

聖杯戦争中であつても常日頃と同じ生活リズムを保ち続けている時臣にあるのは『余裕』だ。

遠坂家には一つの家訓がある。

『常日頃から余裕をもって優雅たれ』

遠坂時臣は正にその家訓を体現した人物といえた。

魔術師の最高学府たる時計塔に特許を持ち、他の多くの名門とされる魔術師達が権威と名声に夢中になつていたとしても一心不乱に魔術師の到達点たる『』を目指し続ける。魔術師としての自分に誇りを持ち血の責任を受け止め、尚且つ気品もあるときた。

はつきり言おう。確かに魔術師として遠坂時臣の才能はケイネスなどに及ばない。だがしかし、遠坂時臣こそ聖杯戦争に参加したどのマスターよりも完璧な魔術師であると。

けれど雁夜などは知らないだろうが、遠坂時臣とて影では凄まじ



いほどの鍛錬を重ねてきている。幼き頃より魔道を唯一の道と定め研鑽してきたその業。決してケイネス・エルメロイの水銀に劣る物ではない。一見優雅で完璧に見える人間ほど影で努力をしていると言うが、遠坂時臣は正にそれであった。

「そうか。ありがとう、綺礼」

自身の協力者である言峰綺礼との連絡を終える。

聖杯戦争序盤は上々といっている出来だ。

予想していたサーヴァントとは別のサーヴァントが召喚されたことは予想外であったが、それも結果オーライといえる。

呼び出されたサーヴァントは時臣と言峰を満足させるには十分な能力を有していたのだから。

(さて、後はアーチャーがどう動くかだが……)

時臣はアーチャーの力は信用しているが信頼してはいない。

言い難いが行動が読めない所があるのだ。今は時臣の采配に従っているものの、その心の底では何を企んでいるのか分かったものではない。

(まあいい。どちらにせよ聖杯戦争を勝ち抜くまでだ)

時臣の手の甲には未だ未使用の令呪が三角ある。

聖杯を使い、自身の目的である『』に到達する為には、聖杯にサーヴァントを七騎生贄にする必要がある。そう七騎だ。世界の内に對する願いには六騎で事足りるが、『』という世界の外にあるものへ到達するには七騎必要なのだ。

だから『』を指すマスターは、最後に必ず令呪を一角残しておきサーヴァントを自害させなければならぬのだ。

(しかし、まだ情報が足りない。  
ランサーの真名は、アーチャーがいうにはアイルランドの光の御子  
とのことだが……。)  
バーサーカーとは交戦したが、監督役である璃正神父によると生き  
ているらしい。だがアーチャーの能力の敵ではないから、心配はい  
らないだろう。  
やはりセイバー、そしてライダーの真名と宝具を知らなければなら  
ないな。  
そして、なによりも )

キャスター。

未だにその姿を確認していない唯一のサーヴァント。  
だが逆にそれさえ暴いてしまえば、

(全てのカードは、我が手におちる)

「なあライダー。どうすんだよ。」

三人のサーヴァントが見てる前で真名をばらして「

ウェイバーが今にも怒り出すような形相で睨むが、当のライダー  
ことイスカンドルはどこ吹く風だ。というより全く気にした様子も  
なく笑っている。

「そう気にするでない。」

大体王であるなら自分から真名の一つや二つ堂々と名乗れんでどう  
する！

王とは誰よりも堂々と、誰よりも大きく、自身の名を天地に向かって叫ばねばなるまいて」

「たく何時の時代の人間だよ、お前は！」

「何時の時代も何も、イスカンドルたる余は古代マケドニアの人間に決まっておろうが。」

「確かこの時代の暦でいうのであれば、紀元前三百年ほど前であるがな」

「そういう事を聞いてるんじゃない、この馬鹿！」

「分からない奴だな、お主も。」

では一体どのような事を聞いておるのだ？」

「ああもう！　だ・か・ら！」

なんで突然真名ばらしたんかいつ！」

「それはイスカンドルたる余の名をだな」

「だから違うって言うてんだろ、この馬鹿はああああああああ！　僕は真名をばらした合理的な理由を説明しろって言うてるんだよ！」

「ああ、それな」

イスカンドルはうんうんと頷く。

「あの場にいた者達。」

英霊の座に招かれるだけあって全員が胸の熱く猛者共であった」

「それで？」

「そう思うと是非とも我が臣下に加えたくなつてのう。  
んで手始めに我が真名を知らしめ、その上で勧誘したみたのだが…  
…」

「見たのだが？」

「残念ながら断られてしまった。勿体ないなあ」

「アホかア」

「ッ！」

ウェイバーの中で何かがキレた。  
もう色々と限界だったのだ。

「まあまあ、ものは試と言うのではないか」

「ものは試で真名ばらしたんかいっ！」

ウェイバーとイスカンドルの言い争いは続く。  
尤もイスカンドルが適当にウェイバーをあしらうだけなのだが…  
…。

他のマスター達が腹黒い事を考えている間、この二人は一番平和だといえた。

## SEARCH10 魔術師（後書き）

そんなこんなで他魔術師達のページ。

それと最後に、キャスターはしっかりと型月のキャラクターです。

コードギアスのキャラはルキアーノで終わりです。

まあ個人的にアーサーVSアルトリアとかやってみたいですけどね。

女は男によって磨かれる、と同じように男は女に影響される。

この世界には性癖や趣味は其々であっても、性別は男と女の二つしかない。

女は男を意識して自分を磨き、男は女に影響され変わる。

冷酷なる殺人マシーン衛宮切嗣もその一人。

果たして彼がアイリスフィール・フォン・アインツベルンに影響されたのは幸か不幸か。

衛宮切嗣が拠点とした日本邸宅は平和だ。

元々魔術師の拠点としては不都合な家だけあって、魔術師であるマスターがここに注目する事もない。また邸宅内にある土蔵はそれなりに魔術を使う環境が整っている。

こんな聖杯戦争にはお逃れ向きの拠点を探してきたその手腕は、流石というべきだった。

ちなみに当の衛宮切嗣はいない。

助手である女性と共に偵察に向かってしまった。

サーヴァントもつけずに一人で外出する。聖杯戦争のセオリーか

らは随分と外れた行為であるが、そのセオリーから外れた行為を意図的に行い敵の目を欺く事こそ魔術師殺しの真骨頂だ。

「ふう」

そして勝敗を左右する七騎の中でも最優を冠したサーヴァントであるセイバーといえば、これまた呑気に珈琲を飲んでいた。

といつてもセイバーは怠けたくて怠けている訳ではない。

切嗣から詳しい理由を聞かされてはいないが、アイリスフィールは聖杯を手に入れる為に必要不可欠な人物であるとのことで、絶対に傷つけられたり敵の手に渡す訳にはいかないということだ。

(アイリスフィールが、ねえ)

気にはなるが特に理由を聞くことは思わなかった。

彼がまだ下っ端といえる立場だった時は理由なんて聞かされずに「あれを倒せ」だと「あれを守れ」などと命令されるのは日常茶飯事だったし、軍の上層部といえる地位になった時も命令が与えられても、それが具体的にどのような効果があるのかなどは知らされなかった事も多々ある。

セイバーにとって重要なのは命令を完遂することだ。理由などは関係ない。一度下された命令はあらゆる手段を用いても確実に遂行する。それがセイバーにとっての騎士道であり誇りだ。

「それにしても、美味しいわね。」

こんなに美味しい珈琲をブレンドするサーヴァントだなんて……」

「俺の数少ない趣味だ。」

普通の料理のほうは何故か知らないけど忌避されるが、こと珈琲に

関してはアースガルズでもかなり好評だった。  
よくオレンジやスザク……………友人と飲んだよ」

「アースガルズ……………。そう、平行世界の英霊なんですものね」

「残念か？ ご期待通りアーサー王じゃなくて？」

「そんな事ないわ。

確かに最初は戸惑ったけれど、今は貴方が切嗣のサーヴァントで良かったと思ってる」

「ま、あいつでも切嗣とは相性いいと思うけどな。その願いの的に」

「え？」

「だからアーサー王だよ。

知ってるか？ この世界のアーサーはどうだか知らないが、俺の世界のアーサーの願いは恒久的世界平和。お前の旦那様と同じ願いだ」

「アーサー王……………けどセイバー。

貴方は確かこの時代の技術レベルより上の平行世界の英霊、だったわよね。

なのにアーサー王を知ってるの？」

「ふふふふ。アイリスフィール、お前も勉強が足りないな。  
知らないのか？ アーサー王は『いつか蘇る王』だ。

この世界はどうだか知らないが、俺の世界では蘇っただけの話だよ」

「……………ねえ」



「ん？」

「聞かせてくれない？ セイバー、貴方の世界のことを」

「俺の、世界かあ」

ふと思い起こしてみる。

己が生きて、伝説を築き上げた世界。

「この時代と比べると、物騒な世界だったな」

「物騒？」

「ああ、戦争をしてたからな。

信じられないかもしれないが、この国も我が祖国であるブリタニアの植民エリアの一つだったんだぞ」

「植民、エリア。昔の欧米諸国と同じような？」

「まあ、そんなものだ。

そうやってブリタニアは他国を次々に侵略して、世界の三分の一を制した大国になったんだよ」

「貴方もそれに参加していたの？」

「当然。俺は神聖ブリタニア帝国皇帝、シャルル陛下の直属たる十二騎士ナイトオブブラウンスの一人。先陣きって参加していたさ。

けどそんな戦争も色々あって、クーデターでシャルル陛下は御隠れになり、逆族に乗っ取られた祖国を取り戻すために戦ったって訳だ。

そら、どこにでもあるありふれた英雄譚だろう」

それにしても懐かしい。

あの時、とても忙しくて休む暇なんてなかった日々だけれど、こうして英霊の座に招かれてからは本当に大切な思い出でもある。

「そういえばセイバー。」

飛行機に乗ってた時、人間として不適合な趣味の友達がいる、なんて言っただけだったかしら？」

「ああ、ルキアーノの馬鹿か。」

そういえば、あいつとの決着をつけてなかった」

ルキアーノ・ブラッドリー。

数少ない、というより唯一の士官学校からの悪友。切欠は本当に些細な事。

ルキアーノが深夜にナイフを研いでいて、そのあまりに常軌を逸した様子に飛びかかってしまったのが始まりだった。

それからというもの、なんとなく一緒にいてなんとなく一緒に戦って、そしてなんとなく悪友といえる仲になっていた。

士官学校で唯一実力が近かったというのも大きいだろう。

セイバーは自分の人生に後悔などしていない。

自分の誇りに正直に生きた一生だ。悔いなんてある筈がないのだが、もしもセイバーにとってやり残した事があるのなら、士官学校以来の戦友との雌雄を決する事に他ならない。

「そのルキアーノってどんな人だったの？」



SEARCH 11 ナイト オブ ラウンズ（後書き）

さてさて遂に宿命？ の対決です。

このまま進むと、それは第四次聖杯戦争終結までいくのですが、五次までやるかどうか迷います。

ディルムッドとレナードが苦勞話したり、アーサー王とアルトリアがガチで戦ったり、そこにランスロットが乱入してきてギスギスした雰囲気になったり、ルヴィアが倫敦からきたりするカオスな聖杯戦争……やりたくてもプロットがまだ未完成なんですよね。

ユーモアは会話の調味料であり、食物ではない。

洒落や冗談だけでは会話は成立しない。それ等は会話をより彩る事は出来てもメインにはならないのだ。だから本当に上手く会話する人は、メインの中に絶妙なタイミングでユーモアを混ぜてくる。

「お久しぶりイ、レエエエナアアアアードオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

吸血鬼、吼える。

百獣の王の咆哮すら霞むその猛々しい声。

この男こそルキアーノ・ブラッドリー。

ブリタニアの吸血鬼と、他国だけではなく自国の人間からも怖れられた男。

曲者揃いのラウンズの中であって更に異端。

もしも実力を是とする皇帝シャルルのもとでなければ、絶対にラウンズの地位に至ることはなかっただろう。

実力は一級品であっても、性格が常軌を逸している。

バーサーカーという男を例えるのにこれほど相応しい言葉はある





「ああ、そオだア。

「ロツセオで決着をつける、だったかア」

「あの時はモニカに止められたんだったな。

俺も、あそこで問題を起こす訳にはいかなかった」

「だが、ここには」

「俺達を縛るものは」

「なにもない」

「「そう」

「俺たちは」

「お互い」

「「敵同士だ」」

そして再び笑った。

味方ではなく敵として存在してくれていたことを喜び合うかのよ  
うに。

嘗ては味方だった。

だから本気の本気で決着をつけることは出来ない。

この二人が本当に決着をつけようと思えば、どちらか一方が死ぬ  
ことは確実だったから。



だが神は二人を見放してはいなかったのだ。  
今正に二人は敵同士。

であるのならば、誰にも遠慮することなく殺し合うことができる。

レナードが剣を展開する。

ルキアーノがナイフを呼び起こす。

それ等は生前二人が好んで使用した二つの武器。  
宝具ではないが、信頼に足る一品である。

そして激突。

スピードは互角。

けれどパワーに差があった。

だがルキアーノとてそんな事は分かっている。

というよりナイフと剣が戦えば、ナイフが負けるのは必然。

それ以前にルキアーノ・ブラッドリーの技量は、レナードに及ばない。確かにルキアーノとてレナードが戦死と報告されてからも鍛え続け、技量は上がっている。だがブリタニア歴代最強騎士と後世に謳われたその技量には一歩及ばない。

「ギャハハツハハツハハ！ 楽しいいなア！」

それでもルキアーノの顔に絶望はない。

ただひたすらに笑顔で、世界の果てで実現した殺し合いを愉しんでいた。

「そうかい ツ！」

レナードの蹴りが炸裂し、ルキアーノが吹っ飛ぶ。

普通なら貫通する筈だった蹴りが貫通せずに吹っ飛ばすだけに留

まったのは、ルキアーノが直撃の寸前に自分から後ろに飛んだからだ。

しかし致命的な隙が生まれた。

それを最上の直感を持つレナードが見逃すはずがない。

レナードの手にはもう剣は握られていなかった。

代わりにその両手にあるのは二丁のサブマシンガン。

（ほほう。あれはレナードの開発チームの主任。

あの女が投げ渡したのかア）

瞬時に、ルキアーノはそう理解した。

如何して主任までレナードと共にいるのかについては疑問に思わない。理由など簡単だ。ようは主任という女がレナードを誰よりも理解しているのと同じくらい、ルキアーノはレナード・エニアグラムという男を理解しているだけだ。

「

」

レナードはサブマシンガンを二丁同時に持つなんて非常識を平然とやってのけた。これが彼等の世界で当然だったコイルガンなら分かる。それなりに熟練した者ならば片手でサブマシンガンの一丁や二丁ぶつ放すだろう。だがこの世界のサブマシンガンはコイルガンなどという上等なものではなく火薬を使ったものだ。当然腕にかかる負荷は比べ物にならないし、サブマシンガンを二丁同時に扱うなんていうのはあり得ないことである。

だがサーヴァントの身は、そんな常識を容易く凌駕した。

「神に祈れ」

「馬鹿か。吸血鬼が神様にお祈りするかア」

二つの銃口から魔弾が飛ぶ。

レナードの能力によって宝具化した銃弾は、サーヴァントでさえも致命傷に至らせる破壊力を内包した鋼鉄の矢だ。

その矢がルキアーノ・ブラッドリーという男を貫いていく。

如何にサーヴァントの耐久力といえど、別にルキアーノには銃弾を跳ね返す防御力も、炎に焼かれても意味をなさない鋼鉄の肉体などない。

最後に止めとばかりに顔面を破壊され、そして。

「ヒヤハハツハハツハハハハハハ」

あっさりと起き上った。

魔弾によって空いた空洞が塞がっていく。  
数秒もすると、ルキアーノの体からダメージは消え去っていた。

「成程、それが英霊としてのお前の能力か」

「あア。ヴァンパイア・オブ・ブリタニア吸血鬼の如き肢体。

人間以上の生命体を殺した数だけ、私の命にするとっておきだア」

「それは、またお前らしい宝具を。つまりなんだ」

適当にレナードが大口径の銃をぶっ放す。

それは正確にルキアーノの頭部に命中したが、直ぐに元通りになる。

「その命のストック分殺さない限り、お前は死なない訳か」

「Exactly! 流石は総帥様。良く理解していらつしやる。私がこれまで殺したイレブン共は五百匹、どうだア？」

「まさか五百人もの人を、殺したというの!」

これに反応したのはレナードではなくアイリスフィールだった。彼女からしたら聖杯戦争と関わりのない一般人が五百人も殺されたという事にショックと怒りを隠せないのだろう。

「その美女は、なんだ？ また口説いたのか？ それともマスターか？」

「マスターだよ」

「へエ。当たりを引いたなア。」

あア、そうだレナードのマスターの女ア。

私は今日まで猿どもを殺してきた。その中には女もいたし子供もいた!

まだ生まれて間もない赤ん坊もなア!」

常人の不快を誘うような口ぶりでルキアーノは言った。

事実、アイリスフィールはその瞳に確かな怒りを滲ませていた。

「で、お前は俺にどういう反応を望んでいるんだ？」

笑ってほしいのか？ 義憤してほしいのか？ 泣いてほしいのか？ 犠牲者である五百人の死を悼み、神に祈りを捧げればいいのか？」

レナードの表情はまったく崩れなかった。

彼は五百人の死者の事などを全く考えていない。レナード・エニアグラムの中にあるのは唯一つ。五百もの命を内包したルキアーノ

を効率的に殺す方法だけだ。

「それでいい。その無関心な反応こそ、私は望んでいたア」

なに簡単なことだ。

ある意味レナードという男は、あの時代のブリタニアを象徴した騎士というだけ。

レナードとルキアーノの生きたブリタニアは『弱肉強食』の時代。貴族であろうと弱者は侮蔑され、平民であれ強者であるならば称えられる。

つまりレナードにとってルキアーノに殺された五百人は『弱者』でしかない。そして弱者を侮蔑するのがブリタニアという国だ。

もし仮にその五百人がレナードに仕えた領民や、帝国の臣民であったのなら話は違うだろう。レナードはブリタニアの軍人であり、領民の命を預かる貴族だ。だからこそ自身の領民と帝国の臣民は命を懸けて戦い守る。それこそがレナードにとっての真の貴族である。

だがその五百人はレナードの領民でも帝国の臣民でもない。

全く違う世界の、日本人だ。だからこうまで無関心になる。生前彼は日本人である藤堂や枢木スザクなどに敬意や友情を抱いたが、それは二人が『強者』だったから。もしも二人が弱者であったのなら、レナードは興味すら抱かなかっただろう。

「そつだ。そついう男だからこそ、殺し甲斐があるッ！」

ルキアーノが跳躍した。

ただ真つ直ぐにナイフを構えて突っ込んでくる。

レナードも剣を構えて突進するが、

「捨て身か！」

ルキアーノは自分の身を守るどころか、逆に自分の体を盾にして襲いかかってきた。

咄嗟に横なぎに払い、ルキアーノの上半身と下半身を真っ二つに切り裂くが、それでもルキアーノは止まらなかった。血のアーチを作りながら上半身だけとなったルキアーノが飛んでくる。

「その程度じゃア私は死なないんだよオ！」

「そうかい」

ケラケラと笑いながら突っ込んできた上半身を、今度は盾から真っ二つにする。

けれどその剣筋が鋭かったのが悪かった。縦から真っ二つになったルキアーノは、それでもレナードの間合いをつめることに成功する。復元していく肉体。数メートル離れた位置に放置された下半身は動かなかったが、上半身は完璧にくつついていた。

「さアて、到着ウツと」

そのままルキアーノは口を開き、レナードの首筋に、噛みついた。

「！！！」

突き立てられる牙。

永遠にも感じられるその行為は、時間にして数秒。

ランクAを誇る筋力のレナードの前に成す術もなく引き離されたルキアーノは、そのまま空中で七分割されて吹き飛ぶ。

「くそつ。なんて奴だ。アイリスフィール、治癒を頼む」



なんだそれは？  
そう言う事も既に来なかった。

┌

┌

声にならない絶叫。  
その場にいた者は誰もが目を見開いた。  
アイリスフィールは恐怖で。  
主任は驚愕で。  
ルキアーノは……………歓喜で。



やがて絶叫が止まる。  
そのまま、ふわりとレナードは立ち上がる。

肌は死人よりも白く、純白の騎士服は完全なる漆黒に。  
碧眼の瞳は黄色に変色したその姿。

「ぎゃは」

濁ったような黄色い瞳がルキアーノを射抜く。

最初にその口から洩れたのは、そんな彼に似つかわしくない笑い声だった。

オウル・ハイル・ヴァンパイア  
吸血鬼に血肉の宴を

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：30人

ルキアーノが対象の血肉を喰らう事で発動可能。

対象の理性を薄め、反転。その人物の暗黒面を晒しだす。

狂化と違い思考能力を奪う事はないが、大抵の場合この宝具を受け  
た者は狂暴化ないし暴走してしまう。特に強固な理性をもって行動  
しているモノはその本能を晒される。

ただし元々本能のみに従っている者や既に反転・黒化している者に  
は効果がない。

ルキアーノが消滅するか、一定時間すれば効果がきれる。

SEARCH 12 歴代最強 対 歴代最悪（後書き）

ルキアーノだけではなくレナードまで狂っていく。

本来、絶対に狂わない男を狂わせられるのが聖杯戦争。

今回はレナードオルタVSルキアーノです。

反転。

文字通りその性質が真逆になる事である。

元々霊体であるサーヴァントに対しては、黒化といったほうが適当だろうか。

ルキアーノ・ブラッドリーの宝具によりレナードは反転した。

彼は、絶対に外に出さなかった本能を露わにされ、そして牙をむく。

「ぎゃは」

レナードの第一声はそんな有り得ないものだった。

少なくとも生前、そして英霊になってからも、そんな狂気に満ちた声を出したことは一度たりともないだろう。

幼い頃からの教育、教訓によって培われた鋼鉄の理性。どのような状況、どのような悲劇、どのような惨劇、どのようなイレギュラーを前にしてもレナードは狂う事はない。否、出来ない。本能を表に出そうにも、それを押しとどめるもう一人の自分がいて、その先にはKMFの装甲よりも分厚い理性の壁があるのだ。

だから決してレナード・エニアグラムの本能を見ることは出来ない。



ルキアーノが跳躍する。

両手に持つているのはナイフ。常人なら目視すら叶わぬ速度で投擲されたそれらを、レナードは意図もたやすく叩き落とした。

「その程度かア。だとしたら、拍子抜けだろオがア！」

如何に黒く染まったとしても、その実力までもが衰える訳ではない。

レナード・エニアグラムは反転して尚も最強であった。

敏捷性がやや下がったものの、反比例するように上昇した筋力によって振られた剣がルキアーノを縦から真つ二つにした。

「ふっ。私が斬られたくらいでエ」

言葉通り直ぐに再生するルキアーノの体。

数にして後四百二十。それだけの数を殺さなければ、ルキアーノの体が死滅することはない。

けれどレナードは笑う。心底愉しむかのように。

「馬ッ鹿だろオ、ルキアーノオ。」

確かにお前をブチ殺すには、一度潰したくらいじゃ全然足りない。それは認めてやるよオ。

ただどさア。なら何万回でも切り刻めば、いいだけだろオがよオ」

「レナード

「！」

斬る斬る斬る斬る斬る。

一切の容赦も情けの欠片もなく、ひたすらルキアーノという人間をバラシテいく。

「そオーらア。しつかり数えるよオ！  
一イ！二イ！三ツ！四ツ！五オ！六ウ！七ア！ハイ！九ウ！十ウ！  
十桁突入ウおめでエとオオ！ つウー訳でエ、もう一遍死ねやア！  
あはぎやははっはふっはうあっははっははひやははっははははは  
はは！」

再生する暇すら与えない。

徹底的にルキアーノを切り刻んでいく。

だがルキアーノとてただ成す術もなく切られている訳ではない。

幾度となく殺されながらも、僅かな機会を見出し、懐に忍ばせていたナイフでレナードの右手首をきった。

「あア？」

クルクルと回りながら飛んでいく右手。

顔面に右ストレートを叩き込もうとしていたレナードは、仕方なくそれを停止  
しなかった。

「下らねエなア。右手が吹っ飛んだならよオ。

右手の付け根で殴ればいいだけだろオがア！」

「ぶっア」

嘘は言わなかった。

レナードは右手を失いながらも、その切断面でルキアーノに強烈な右ストレートを叩き込んだ。サーヴァントのパンチの直撃を喰らったルキアーノは、顔面どころか脳髓までぐちゃぐちゃにシエイクされ吹き飛ぶ。けれど、ブリタニアの吸血鬼はそれだけでは終わらせなかった。

吹き飛ぶ直前、ナイフを投擲しレナードの左目を刺した。

「クッククッククック」

ゆっくりと立ち上がるルキアーノ。

その顔は愉悅に満ち溢れている。

「どオだア？ 右手と左目とバイバイした感想はア？」

「大したことねエなア。大体な、忘れてないかア？」

俺たちはサーヴァントなんだぜエ。おオイ！ アイリスフィールツ  
！」

「えっ。あ、はい！」

慌てているのか、驚いているのか、そんな声を上げるアイリスフ  
ィールに、レナードはお構いなしに告げる。

「さっさと治癒しろ。それが役目だろオがア」

「わ、分かったわ」

返事と共にレナードの体中の傷が癒えていく。

当然ながらその左目も、切断されていた右手も綺麗にくっ付いた。

「ホント、便利だよなア。

魔力さえあれば理論上、俺達サーヴァントは両手両足が爆発しよオ  
が、腹アのだ真ん中にデカイ風穴ができようが、心臓と頭さえ無事  
なら復活できる。

ま、貧弱な魔術師がマスターだところはいかねエがなア」

レナード本人のマスターは衛宮切嗣だが、治癒魔術を行使するのはアイリスフィールにも出来る。そしてアイリスフィールは優秀なマスターにもなれるように製造されたホムンクルスだ。並みの魔術師とは魔力量の桁が違う。

左目の消滅と、右手首の接合程度ならば、人間に使用するのとは別にしても、霊体であるサーヴァントならば難なく再生させられる。

「ヒヒヤハハハッハハハッハハハ、これは愉快だなア。

レナード、まさかこの私と再生勝負でもしよってエいっのかア？」

「はっ。冗談は性癖だけにしろ、この馬鹿が。

大体なア、ルキアーノ。お前痴呆で頭がイカれてるんじゃないかア」

「なに？」

「俺の掲げた騎士道を思い返してみろ。

そして聖杯戦争のセオリーを思い起こせ」

レナード・エニアグラムの騎士道。

それは確か、

「我が騎士道に正々堂々の文字はない、だつたかア？」

「大正解、そして聖杯戦争のセオリーといえバア？」

聖杯戦争の常套手段。

サーヴァントはサーヴァントをもってしても打倒し難い。

であれば何をどうするか。なに難しい話じゃあない。

サーヴァントを相手にするのが難しいのであれば、より貧弱な。



「まさかッ！」

「遅いって、気づくの」

瞬間であった。

ルキアーノに対して今の今までであった魔力供給が消滅した。

【クラス】セイバー

【マスター】衛宮切嗣

【真名】レナードオルタ

【性別】男性

【身長・体重】190cm 81kg

【属性】秩序・悪

【筋力】A+ 【魔力】B

【耐久】A 【幸運】E

【敏捷】D 【宝具】B

【クラス別能力】

対魔力：B

最高ランクの対魔力を誇っていたが、反転した影響でランクが下がってしまった。

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。

大魔術、儀礼呪法等を以ってしても、傷つけるのは難しい。

騎乗：C

乗り物に騎乗する才能。

生前の彼が騎乗を得意とすることもあって、完全には失われていない。

### 【保有スキル】

直感：A++

最高ランクの直感。

本能がより前に現れている為か、失われていない

悲恋：

反転した影響で消滅している。

どうやらこのスキルは、元のレナードにだけ作用するものであるらしい。

出世運：A

レナードが望む望まないに関わらず、あらゆる運に恵まれ異常なスピードで出世していく。その力は三年で一パイロットから軍総帥の地位に到るほど。

心眼（真）：

修行・鍛錬によって培った洞察力。

反転した影響でその洞察力は失われている。

### 【宝具】

オール・ハイル・ソルジャー  
軍人に栄光を

ランク：A+

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：30人

セイバーが触れた物はなんであろうとランクD〜E相当の武器として自らの宝具とする事が可能。宝具化した兵器・武器のランクはセイバーのその武器に対する熟練度で決定し、使い慣れた武器ならばD、使い慣れない武器はEとなる。

また元からそれ以上のランクである宝具を手にした場合は、そのままのランクでセイバーの支配下におかれてしまう。

デーモン・オブ・ブリタニア  
魔人の如き銃口

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：2〜4

最大補足：1人

セイバーの象徴と言うべき宝具。

彼の撃った弾丸は必ず頭部を吹き飛ばす、という逸話が一つ概念となった一つの業。

近々中距離では使用出来ないが、遠距離から一方的に、因果逆転の呪いである”必ず命中する”という効果の銃弾を発射するので非常に殺傷能力に優れている。

狙う場所はセイバーの意思で選定可能。

SEARCH 13 魔人 狂う刻（後書き）

さて漸く切嗣がその真骨頂を發揮、というかレナードが暴走し過ぎです。

普段は冷静な人間ほど本能をむき出しにすると怖くなる、という良例ですね。

そして最後に、雁夜……………生きるッ！（来世で）

常軌を逸しなさい。達人の域に達する人は、常軌を逸する能力があるものです。

英雄というのは、大抵常軌を逸した性格や能力がある。

ルキアーノ・ブラッドリーなら殺人に快楽するという異常性があり、レナード・エニアグラムやケイネスのサーヴァントであるランサーなどは、殺し合いを愉しむなどという感じに。

能力面でもそう。英雄と呼ばれる人間には、なにかしら他人を圧倒する能力があるものだ。

レナード・エニアグラムという人間が消えた後のブリタニアは、比較的平穏だった。

嘗ての侵略戦争は終わり、ナンバーズに対する弾圧も徐々に減り、アイスランドやハワイなどは完全にブリタニアと同化する動きすらあった。

ブリタニアの侵略戦争から始まった大戦は、実質的にルルーシュ率いるブリタニアとそれに協力した中華連邦、イタリア、ドイツなどの各国であり、逆に日本やイギリスは一時の勝者から一転して敗者となった。ただルルーシュ皇帝はこれらの国に責任を問うつもりは特になく、世界へ平和への道を辿りはじめていた。

それもこれも、大戦の英雄であり第一の功労者であるルルーシュ・ヴィ・ブリタニアの手腕が大きいだろう。彼は持ち前の優れた才覚を存分に発揮し、それを支えるようにコーネリア、オデュッセウス、ナイトオブ라운ズの面々などの人間がついていたブリタニアは、技術的にも財力的にも国際的地位においても正に繁栄の黄金期といえた。

ただし、それでも争いはなくならない。

ルルーシュ皇帝やブリタニアを恨む者達も確かにいるし、シユナイゼルやゼロの信望者は根強く残っていた。

必然、テロや争いは起きる。そうなれば、それを鎮圧する者も必要となってくる。

そんな仕事を一手に引き受けたのがルキアーノ・ブラッドリーだ。戦場と言う最高の狩場を失った吸血鬼は、積極的にそういった戦場モドキに行つては、そういったテロリストや死刑囚などを皆殺しにしていた。

けれど足りない。テロや争いなんて、そう毎度毎度起こるものでもない。ルルーシュの治世のもと時が流れるにつれてテロは減っていった。

そんなルキアーノの渴きを一時的にしる癒したのは、ゼロの正体が蘇ったアーサー王というやけに信憑性の高い噂が流れてから誕生した一つのシミュレーターだった。

ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアの命令で、ロイドやセシル、またまた元黒の騎士団の技術顧問ラクシャータまでも巻き込んで、歴代最強のナイトオブワン、レナード・エニアグラムの実力を再現した一品である。

世界屈指の技術者三人がその脳髓の全てを使って作り上げたそのデータは強かった。レナードの実力を最も良く知るルキアーノからしたら、本人の約80%程度の出来であるが、それでも歴代最強の80%だ。実際、そのデータに勝てる者は誰一人としていなかった。同じラウンズであったアーニヤもモニカも実姉であるノネットも、ユーフェミアの騎士である枢木スザクも、誰もそのデータに勝つことは出来なかった。そう唯一人を除いては。

唯一そのデータに勝利した男、ルキアーノ・ブラッドリーは最強であった。ルルーシユ皇帝が自身の在位中はナイトオブワンを任命しないと宣言していた為に、ナイトオブワンに任命されることはなかったが、その強さはその時代最強とあってよかった。事実として帝国史上最初に特に優秀な活躍をした者に与えられる『レナード・エニアグラム勲章』を最初に授与されたのもルキアーノだ。

けれどルキアーノ・ブラッドリーの渴きは癒えない。レナードの実力を再現したシミュレーターは一時的にルキアーノの渴きを癒したが、それもほんの僅かな間だけ。

やはり本物でなければ。本物のレナード・エニアグラムと殺し合いがしたい。それがルキアーノの望みだった。

そしてそんな吸血鬼にも最期が訪れる。

彼の死因は………自殺。遺書には最後に自分を殺してみたかったと書かれていた。

だが彼は最期に契約をしたのだ。死後も誰かに大切なモノを奪い続ける、つまり誰かを殺したいと。そしてレナード・エニアグラムと殺し合いをしたいと。

だからこそルキアーノは守護者となった。世界の危機とやらの掃除を愉しみつつ、ただ待ち焦がれた。レナード・エニアグラムと本気で潰しあう舞台を。





間。戦闘行動をするならば数分程度が限度だろう。

「いいねエ。それでこそ teme だ、この糞馬鹿ア」

それでも笑いあつた。

レナードは分かる。ルキアーノは別にマスターを殺すというレナードの選択肢を怒っている訳ではないと。何故なら二人とも望んでいたからだ。

本当の本気で殺し合いをすることを。他の英雄は知らないが、この二人にとつての本当に本気の殺し合いとは、どのような手段を用いてもターゲットを抹殺する事にこそある。だからこそレナードもまた、どのような卑怯な手段を用いてもルキアーノを抹殺する事に全力を注いだ。それだけである。

だが、まだ終わらない。

魔力供給が途絶えたとはいえルキアーノの体は動く。後数分の命といえど、まだ彼から勝機は失われていない。

故に二人は本当に最後の最期の激突をした。

レナードが握るのは生前使い続けた愛剣。

ルキアーノが握るのは生前使い続けたナイフ。

剣とナイフが交差する。

そして静寂。

クルクルとナイフによつて弾かれた剣が飛ぶ。

静かに、レナードが口を開いた。

「残念だ」

ふと、レナードの黒化は解かれていた。

今そこにいるのは真正銘、歴代最強の騎士と崇められたナイトオブワン、レナード・エニアグラムだ。純白のマントと純白の騎士服がそれを証明している。

対するルキアーノの心臓には、レナードの左腕が深々と刺さっていた。ルキアーノのナイフは、レナードの首薄皮一枚を斬っただけで致命傷には届いていない。

勝者がどちらなのかは、明白であった。ルキアーノはレナードの剣を弾く事には成功したが、それは単なる囮。そのまま首を裂こうとした吸血鬼に、抗いようのない強大な杭が撃ち込まれた。それだけの話である。

「ハッ

ああ……負けたか……」

負けたというのにルキアーノの顔は穏やかなものだ。

理由など問うまでもないだろう。ルキアーノ・ブラッドリーの聖杯戦争はただレナード・エニアグラムと決着をつける為だけにあった。その結果として敗北しても、そこに後悔や無念などある筈がない。何故なら唯それだけを焦がれていたのだから。

「最後だから、うっかりと要らぬことを零すが……」。

実の所、俺はお前にならば負けてもいいと思っていた。だから残念だよ。

これからもう、俺は負けることが許されない」

ブリタニア帝国歴代最強騎士。

その名は決して軽くない。

歴代最強ということ即ち、レナード・エニアグラムの敗北は歴代ブリタニアの騎士全ての敗北となってしまうのだから。

だがルキアーノは違う。ルキアーノは数少ないレナード・エニアグラムに比肩できる帝国騎士である。もしレナードがルキアーノに負けたとしても、歴代最強の名がルキアーノに継がれるだけであって、ブリタニアの敗北にはならないのだ。

けれどレナードは勝利した。だからもう、レナード・エニアグラムに敗北は一切許されない。

尤もそんな理屈とは関係なく、レナードは心からルキアーノになれば殺されてもいいと思っていた。それは奇妙な友情で結ばれているからでもあるし、本能をそのまま曝け出すルキアーノに多少なりとも憧れがあつたからでもある。

「気が合うなア……私もだ。

寿命や他人に私の命を奪われるなど虫唾が走る。

だが、お前にならば殺されてもいい。そう、思っていた」

それはルキアーノも同じ。

自身とよく似た異常性を持ちながらも、その鋼鉄の理性により決して表に出さないレナード。それに多少なりとも憧れがあつたのかもしれない。

二人は余りにも対照的に見えて、どこか似た者同士であつた。レナードの左手がルキアーノを貫いたまま立ち尽くす。その様子はまるで抱き合うかのようでもあつた。

「そろそろ時間だア。

私は先に英霊の座に戻るとしよう」

「おお、またな」

あっさりとした別れの言葉。  
それで十分。ルキアーノは最後に皮肉気に笑い、そして跡形もなく消えていった。

「終わった、の……？」

脅威が去ったのを悟ったアイリスフィールが声をかけてくる。  
レナードもああ、と答えようとして。

「伏せる、アイリスフィールッ！」

跳躍。その直感により数手先の未来を知ったレナードは、慌ててアイリスフィールを庇う。腕に走る衝撃。外面よりも内部を破壊することを主とした、その業は。

「アサシン、か」

「呵呵呵呵呵呵。良くぞ見破った。  
流星はブリタニアの魔人！ 如何に圏境で姿を消したところで意味なしか！」

言葉通り意味がないと判断したのだろう。姿が露わになる。

そこには燃えるような真っ赤な髪をした、青年      アサシン  
が立っていた。

切嗣はつい先ほど自分が殺害した魔術師を見る。

転がった魔術師の名は間桐雁夜。

たった一人の少女の救いを願い、地獄に身を投じた男は、こんな

誰もいない廃ビルの屋上でひっそりと命を落とした。

「……………」  
けれど衛宮切嗣の心には、なんの感慨も浮かばない。

ライバルを一人蹴落とした爽快感も、達成感も何もない。

間桐雁夜に対してもそれは同じ。精々切嗣が雁夜に対して抱いた事といえば、魔術師にしても実にお粗末であり倒しやすかったという事くらいだろう。

事実、雁夜を抹殺するのに切嗣が浪費したのは弾丸一発である。なんの魔術も使わずに敵マスターの一人を抹殺できたのは僥倖ではあるが、まだ全く油断はできない。

敵には雁夜のような粗末なマスターではなく、ケイネスや遠坂時臣などといった魔術師としての技量において自分を上回るような相手が多くいるのだから。

そんな時、ジャリと嫌な音が響く。

それは間違つて音を立ててしまったというより、わざと気づかせるために足音を立てたというのが正しい。真っ暗な闇よりも深い漆黒の僧服。それが切嗣が見た最初の光景。

「言峰、綺礼」

「待ち侘びたぞ、この時を。」

衛宮切嗣。お前には私の長年の問いに、答えてもらおう」

薄闇の中、二人は邂逅する。

言峰綺礼と衛宮切嗣。二人の雌雄を決するときは、こんなにも早々に訪れてしまった。



SEARCH 14 闇に潜む影(後書き)

漸く吸血鬼を倒したと思ったら、今度は間髪入れずに暗殺者+外道  
神父が襲い掛かってくるといふ罫。

## SEARCH 15 朋友の教え

人間にとって最大の敵は人間である。

自然界には人間より筋力、敏捷性が？い生物は幾らでもいる。でありながらも人間は事実上の生物ピラミッドの頂点として君臨しているのは、人間に他の生物にはない頭脳があるからだ。頭脳があるからこそ、人間は技術を手に入れた。だからこそ人間の最大の仇敵は人間である。

夜の闇よりも暗い僧服を纏い、衛宮切嗣の直感が最も警戒を告げた相手。

元聖堂教会の代行者であり現在は魔術協会に鞍替えした男、言峰綺礼は確かな愉悦さえ浮かべて、そこに佇んでいた。

（令呪を使うか……）

切嗣はそう思索する。

見た所、言峰の傍にサーヴァントはいない。  
今セイバーを呼べば、

「令呪を使おうとは思わない事だ」



「視覚を共有すれば分かるだろうが、お前がセイバーを呼べば、アサシンが聖杯の器を手に入れる」

(先手をとられたか……)

ここでセイバーを召喚するのは簡単だ。  
けれどそれをすれば、間違いなく言峰は先程言ったことを実行に移すだろう。

もし此処にいるのが遠坂時臣であるならば、聖杯の器たるアイリスフィールの心臓を破壊するなんて事はないと思うが、この言峰綺礼に限っては何をするか分からない。

仮にセイバーを呼び寄せて、高速で言峰を殺したとしても、言峰が最後の足掻きにアサシンにアイリスフィールの『破壊』を命じたら………切嗣の願いは、恒久的世界平和への道は閉ざされてしま

う。

「では答えてもらうぞ、衛宮切嗣。」

お前は長きに渡る行動の果てに、なにを掴んだ」

返答は銃弾であった。

言語道断とばかりに放たれた銃弾はまっすぐ言峰の眉間にとび、

「私としては、戦う気はないのだがな」

あっさりと避けられた。

それに切嗣は驚愕する。言峰は別に魔術を使った訳でも教会の礼装を使った訳でもない。

信じがたい事だが、この男は自身の身体能力だけで高速で飛ぶ弾

丸を避けて見せたのだ。それも鼻歌交じりで。

「お前がその気ならば仕方ない。

手始めに動きを止め、その上で再度貴様に問おう。

衛宮切嗣、お前が得た解答を」

早急にアサシンを倒し、この場に駆けつける。

自身のマスターである衛宮切嗣から下された命令はそんな内容であつた。

召喚されてそれなりの時間がたち、レナードにも少しばかり衛宮切嗣という男が分かつてきた。だから分かる。衛宮切嗣は決して甘くない。確かに完璧な殺戮マシンとしては少し歪んできているが、それでも妻を守るために世界平和を諦める男ではないという事くらいは知っている。

しかし衛宮切嗣は遠まわしにアイリスフィールを守護しろという命令を下した。マスターである自分の身の安全よりもアイリスフィールを優先したのだ。

事情は良くわからないが、アイリスフィールが勝利に必要な鍵だという事くらいは予測がつく。

だったらレナードのやる事は単純だ。

与えられた命令は確実に遂行する。それだけだ。余計な感傷はいらない。ただそれだけを考える。

幸い大がかりな宝具を使用しなかったとはいえ、ルキアーノとの連戦。苦戦は必至。それに先程の圏境による姿の消失といいアサシ

ンは並大抵のサーヴァントではない。

本来呼ばれる山の翁よりも強敵と考えていいだろう。決死の覚悟をもって挑まねば、負ける。

「まったく趣味が悪いな、アサシン。

今の今まで覗き見していたのか？」

「左様。一部始終しかと見届けさせて貰ったぞ。

いや愉快愉快。よもや異なる平行世界の英雄同士の決着をこの目で見る事が出来ようとは。

それだけで、娑婆に呼ばれた甲斐があるというもの」

「チツ、そりゃあんなに二人で真名を連呼してればバレるわな。

たつくるキアーノも面倒な宝具を……。俺とした事がなんて

何気ない仕草で、そのままアサシンに突きを放つ。

「醜態だ。奇襲の失敗も踏まえてな」

けれど猛烈な勢いで放たれた突きは、アサシンの両手によって受け止められていた。

否、ただ受け止められた訳ではない。威力が、破壊力が殺されている。円のような動き。外よりも内部への破壊に重点をおいたソレをレナードは知っていた。

「呵呵呵呵、そう自嘲することはない。

儂の目から見ても中々の功夫だ」

「それはどうも、八極拳士」

「」

「！」

再び拳と拳が交差する。

アサシンは圏境を使って姿を消そうとはしない。分かっているのだろう。レナードに不可視の肉体など意味がないと。

目を閉じていたとしても、物の位置だけではなく色の判別すら可能とってしまう直感に、視覚に影響する隠蔽の類は一切効果がない。それでも二人の攻防は見えなかった。

レナードとしては一刻も早く切嗣の下へ行かなければならない。けれど攻め急げば待っているのは

確実な敗北だ。

しばしレナードは迷う。

自身の愛剣はルキアーノによって吹き飛ばされ、約数十メートルの場所にある。

だがそれを取りに行くことは出来ない。そんな暇はない。

ならば自身の肉体を武器として戦うのみだ。

アサシンの拳。それがレナードの顔面に迫った。

もしこれの直撃を受ければ、レナードの脳髓を内部から破壊するだろう。そしてサーヴァントの急所は脳髓と心臓。即ち脳を破壊されれば、サーヴァントは消滅を免れない。

だがそれはレナードがわざと見せた隙。狙い通りその隙に攻撃してきたアサシンの拳を払い、逆に心臓に突きを放った。だが直感によってレナードは知る。

「未熟未熟、功夫が足りぬよ」

心臓への突きは、無駄に終わった。確かにレナードの拳はアサシンの心臓がある部分に当たりはした。けれどインパクトの直前、アサシンは突きが当たる部分に発勁を使い威力を殺したのだ。なんと  
いう神業。本来なら発勁とは手で放つもの。いや例え手で放つにしても発勁という技は並大抵の修練で身に付くものではない。それを胸で放ち、突きの威力を殺すなど。神業と、そういう他ない。

そして渾身の突きを放ったレナードには、明確なる隙が生まれてしまっている。

アサシンはそれを容赦なく突いた。

「ふっ

」

だがそれを、あろう事かアサシンと全く同じ方法で防ぐ。即ちインパクトする部分に発勁を使い、威力を殺したのだ。  
そのまま後方へ跳躍する。

「儂の技をそのまま盗むとは。

はは！ 世界は広い。こうでなくてはなあ！」

愉快気にアサシンが笑う。

「世界は広い、ねえ。確かに広いな。

そんな神業、俺の全力を賭けてやってみたが、いや中々に至難だ。  
現に……」

ゴホッ、と血を吐く。

幾らレナード・エニアグラムが人知を超えた魔人といえど、彼は  
正真正銘の拳士ではない。拳と拳の技ではアサシンが1枚上手だ。  
例え圏境という最悪の技を封じていたとしても。

「仕方ないなあ」

チラリと自身の愛剣を見る。

そこには既に主任がいて剣を確保しているが、その剣を受け取る時間がない。例え刹那の隙であってもアサシンは確実にそこに付け込んでくるだろう。

先程の防御にしても、同じ手はこの男に2度とは通用しない。

(隙を、作る必要があるな)

静かに覚悟を決める。

なに簡単な事だ。倒すのではない、ただ時間を作るだけでいい。ほんの僅かでもアサシンの目を晦ませられれば。

「どうした。そちらから来ないのであれば、こちらから」

「その必要はない。これから行ってやる」

疾走。己がバネの全てを使って走り、体を捻る。

「喰らえ。枢木スザク直伝！

ひのほりりゅうまことせいでんせんぶうしやく  
陽昇流誠壹式旋風脚、通称

「

レナードの体が回転していく。

それは彼の友人の一人。枢木スザクが最も得意とした技。嘗て枢木スザクの師匠、藤堂鏡志郎が伝授した奥義中の奥義。その名は、

「くるくるキックッ！」

「な、なんとッ!？」

この世界にいる人間、いやレナードの世界の人間にとっても未知の攻撃。

初見であれば先ず避ける事は不可能な必殺技である。

それはアサシンの体を吹っ飛ばして、

「主任!」

「分かっています、総帥」

剣を受け取る。

そして構えようとして、

「我が八極に二の打ち要らず!」

「!」

アサシンは既に立ち直っていた。いや、それどころか構えていた。先程のレナードの一撃すら霞む、真正正銘必殺の一撃を放つための構えを。

心臓が早鐘を告げる。あれだけは受けてはならない。衝撃を殺すだとか、そういった理屈ではない。指先一つでも触れれば、間違いないで死ぬ。そういう技だ。

「憤ッッ! 覇アアアッ!」

無二打、二の打ち要らず。

中国拳法史上、最強の一人と名高い拳法家に贈られた二つ名。

この称号を贈られた拳法家は八極拳の使い手であり、仕合におい

て、どのような軽い手であれ、触れれば相手の命を奪ったという。  
その一撃は、今、確実にレナード・エニアグラムに直撃した。

レナードの体が吹っ飛び、地面に倒れる。

静寂。レナードの体はピクリとも動かなかった。



## SEARCH 16 内助の功

困難は耐えられるが、軽蔑は耐えられない。

生きていれば必ず困難に直面する時がある。その度に人はそれを超えていく訳であるが、他人から軽蔑されるとするのは耐え難い。なぜならば軽蔑とは、無関心の一歩手前なのだから。

廢ビルの屋上。

二人のサーヴァント同士が戦っている間、マスターである二つの影もまた戦っていた。

戦いは一方的である。

一方的に言峰綺礼が衛宮切嗣を圧倒していた。

「カ

ハッ  
」

弾丸を使う暇すら与えられなかった。

衛宮切嗣は言峰綺礼の

恐らく手加減したであろう

一撃を腹に受けて切嗣は吹っ飛んだ。

「はぁ……」

心臓の脈動、それをもって切嗣は自分がまだ生きていることを確認する。

切嗣にとっても今回の邂逅は完璧にイレギュラー中のイレギュラーであった。本来ならばここでバーサーカーのマスターを早急に抹殺した後に、この場を離れる算段であったというのに。

切嗣が事前の情報で掴んでいた言峰綺礼の戦術。それは八極拳による近接戦闘、そして遠距離にいる敵に対しては黒鍵による攻撃。しかし黒鍵はかなりの命中精度と威力を誇るが、言峰が最も得意とするのは八極拳による近接戦。逆に切嗣が得意とするのは暗殺・狙撃・奇襲。正面きつての戦闘ならば固有時制御による体内時間の加速と銃火器によって翻弄し、一撃必殺たる奥の手を放つことを主とする。

ようするに切嗣は近接戦闘よりも長距離戦に向いている訳だ。

だからこそ切嗣が言峰と戦うのであれば、切嗣は言峰と一定の距離を保って攻撃をし続けなければならないのだ。

だということに、あるうことが初っ端らから切嗣は言峰に近付かれてしまっている。言峰の思惑は分からないが、かといって敵の有利なテリトリーで戦ってくれるほど生易しくはないだろう。それは言峰綺礼が腕利きの代行者として屠ってきた敵の数が証明してくれている。

だから切嗣は先ず、如何にして言峰と距離をとるかを考えなければならぬのであるが。

接近戦においては衛宮切嗣では言峰綺礼に絶対に勝利できない。

それは確実。かといって離れようとしても言峰は八極拳独特の歩法をもって容易く距離をつめてくる。体内時間が二倍では足りない。だから切嗣は固有時制御の過負荷による反動を度外視して詠唱を開始した。

「固有時 制御 三倍速  
Time aliter・triple accel!」

「！」

更に加速するとは言峰も思わなかったのだろう。ほんの一瞬驚いたような表情を浮かべた。その間、切嗣は全力で後方へ下がっていた。通常時の三倍の速度で動く切嗣のスピードは、オリンピック選手どころか並みの吸血鬼をも上回る。

しかし代償はある。体にかかる負荷。激しい痛み。それを無視して切嗣は切り札を構えた。

魔術師殺しの異名をとる衛宮切嗣の必殺。それは彼の第十二肋骨を摘出して作り出した弾丸である。切嗣の起源は「切つて嗣なく」。この弾丸を魔術を用いて受けた場合、その魔術師は魔術回路の全てを出鱈目に繋がれてしまいショートする。つまり魔術師として使い物にならなくなり、運が良くても全身麻痺、悪ければ死に至る。

その必殺の弾丸を放とうとして、

脳裏に走る光景。

自身のサーヴァントであるセイバーが、アサシンの必殺の一撃を受けて倒れた。

そして次にアサシンが狙うのは  
アイリス  
フィール。

「あ」

もしも嘗ての衛宮切嗣だったならば、こんな光景を見た所でなんら動じなかっただろう。昔の切嗣は完璧なる殺戮マシンだ。そしてマシーンが感情で行動を止めるなんて事はない。

けれど今の切嗣は悲しいまでに「人間」であった。アイリスフィールの夫となり娘を授かり、父となった切嗣は「人間」だった。

だからこそ、妻の危機にほんの一瞬、動きが止まってしまった。皮肉なことに『人間』だったことが衛宮切嗣の必殺を不殺にしてみよう。

胸に走る衝撃。

至近距離で手榴弾でも爆発したのではないかと勘違いするような破壊。言峰綺礼の一撃は、確実に衛宮切嗣に入った。

アイリスフィールはただ茫然とするしかなかった。全サーヴァント中最優と呼ばれるセイバーが倒れている。最速といわれるランサーと互角に戦い、飛行機での突然の襲撃にも鼻歌交じりに切り抜けたセイバーが、あるうことが暗殺者と真つ向勝負をして破れて倒れているのだ。

これは夢だと否定したくても、肌にさす空気の感触がこれが紛れもない現実の光景だと告げている。

アサシンがこちらを見る。青年でありながら好々爺のような笑いを零して歩み寄ってきた。

「呵呵呵呵、女。残念であったな。

いや誇つていい。異界の英傑、中々の功夫であった」

「ッ！」

一瞬逃げようと思考するが、無駄だと悟る。

先の戦闘で見たアサシンの敏捷性。到底アイリスフィールが逃げ切れるような相手ではない。

もしこの場から脱する方法があるとすれば、

「主任さん！」

本当に一か八かだった。

セイバーが召喚したらしいあの女性。直接の戦闘力は分からないが、アイリスフィールよりかは打倒できる可能性は高いだろう。

けれどそれも無駄に終わる。先程までそれとなくセイバーを援護していた女性は、地面に倒れていた。それはそうだ、とアイリスフィールは納得する。主任はセイバーが呼び出した存在。とうのセイバーがやられてしまえば存在出来ないのだ。

「そう怖がるな。一瞬で終わる。」

ああセイバーの助演を期待しているのであれば無駄だ。

儂の拳は二の打ち要らず。一度入れば死は免れん」

「くっ……」

逃げられない。勝機もない。

ならばアイリスフィールに出来るのは、捨て身覚悟で一太刀浴びせるくらいだ。

覚悟を決める。切嗣に教わった魔術。それでかすり傷一つくらいは、

「おい。誰が死んだって、神槍李」

「！」

正に瞬であった。

素人であるアイリスフィールには視認することすら不可能だった。まるで閃光のように、アサシンの両腕が綺麗にポトリと落ちる。

吹き飛ばすに、音すらなく落ちたのは圧倒的なスピードで斬られた証だ。

「何故………生きている？」

「知らないのか？ 魔人は不死身なんだ」

そういつてセイバーは 二振り の剣を構えて立つ。

一振りは言うまでもなく主任から受け取った剣。

問題なのはもう一振り。英霊ならば、否、英霊でなくても少し『とある伝説』を齧った者であれば見間違える筈もないその聖剣。

「エクスカリバー、それに双剣。呵呵、失念しておったわ。

ブリタニアの魔人が何を打倒した英雄なのか、誰を師とした騎士なのか」

前者は言うまでもない。エクスカリバーとは彼の王の所有物。ならばセイバーが打倒したのは彼の王に他ならない。

そしてセイバーの師。その女性は嘗て起こった帝国史上最大の権力闘争『血の紋章事件』をたった一人で解決した英雄。その女性の名はマリアンヌ・ヴィ・ブリタニア。その女性の異名は『閃光』としても一つ。

「双剣のマリアンヌ。彼の騎士本来の得物は双剣であり、その状態となった彼女には魔人の前のナイトオブワンをもってしても数分立つのがやっとなつたという話であるが……。

つまり、それがお主の全力ということか」

「無駄口を叩くな、行くぞ李書文」

セイバーが走る。

時間は与えない。両腕を失った李書文は全力どころか、本来の実力の半分出せるかどうかも怪しい。だから回復させない。する前に全ての決着をつける。

先の无二打といひアサシンの真名は間違いなく李書文。中国の河北省滄州市塩山県出身の「二の打ち要らず、一つあれば事足りる」と謳われる、中国拳法史上、最強の一人に数えられる拳法家である。

正直言つてその実力は規格外。もしもセイバーの直感によって圏境という姿を消失させるスキルを無効化出来なければ、あっさりと負けていた可能性すらある。

一撃でその両腕を奪えたのは、不意打ちによる所が大きい。恐らく李書文にとって自身の必殺が不殺に終わるなど有り得ない事だったのだらう。

こんな好機はもう二度とない。

今こそが必殺の時だとセイバーは確信した。

「はあああああああああああああああああああッ！」

その疾さ、光の如し。

その動き、閃の如し

之、彼ノ業ガ異名也。

「いや、見事な套路であつた……」

李書文が口から血を零しながら言つ。

「こちらこそだ。」

先の一撃で不意打ちをしなければ、敗れたのはこちらだっただらう

な

「しかし解せぬ。なぜ生きておる。確実に……………入ったと思ったのだがな」

「色々と女運に恵まれていてね」

「嗚呼、そうか……………。しかし久方ぶりの娑婆。中々に愉しめた。詫びは言わんが、礼は言うぞ。綺礼」

それだけ言うと、アサシンはあっさりと消え去っていった。するとレナードはとある『女性』のもとに駆けよる。主任、レナードが召喚した女性であり彼の一部というべき存在。

彼女は今、なんの傷もないのにグツタリと倒れていた。まるで今正にその命の灯を消そうとしているように。

「エルザ。ご苦労だった」

「……………はい」

李書文の必殺から逃れられた理由。それは主任という存在だった。彼女は嘗てレナードを彼の王の必殺から逃れさせた事がある。だからこそ彼女は自身の命を盾とすることで、一度のみレナードの命を守護することが出来る能力が備わっているのだ。

「ではな」

それだけ言うとレナードは行くこうとする。自らのマスターである衛宮切嗣の下へ。



「セイバー！」

それがアイリスフィールには理解できなかった。  
だから呼び止める。

アイリスフィールの目から見て主任とレナードは、そんな簡単に死に別れて良いような関係には見えなかった。もし切嗣の下へ行かなくてはならないにしても、後少しくらいは。

「俺と主任に、言葉は不要だ」

それだけ言い残し、今度こそレナードは切嗣の所へ向かっていった。

後にはアイリスフィールと、うつすらと体の消えかかっている主任が残される。

そんな彼女にアイリスフィールは妻ではなく『女』として一つ尋ねてみた。

「ねえ主任さん。貴女は、幸せ」

「勿論ですよ、マダム。私は幸せな女です」

「そう。でも、ありがとう。貴女のお蔭で私は助かったわ」

うつすらと微笑み、主任という女性が消えた。

アイリスフィールは最後の別れに彼女の真名を呼ばなかった。呼ぶ権利はないと思った。

## SEARCH 16 内助の功（後書き）

なんだか内助の功という言葉は正に主任の為にあるような言葉だと思ってみたり。

さて今回は切嗣が熱血しそうですね、言峰相手に。

それにしても二騎のサーヴァントが脱落しておきながらも、未だに姿を現さないラストサーヴァント。イレギュラーか正統派か。

当てた人には………なんだろう？ 禁書×冷蔵庫の話でも先行配信とか………はないですね。

それは兎も角。ラストサーヴァントの真名が色々と今後に関わることは間違いないです。ランサーやらライダーに倒されましたってオチはないです。

地獄の沙汰も金次第。

金というものは、人を動かすに足る理由の一つだ。

根っからの善人は金で動く事を浅ましいと思うかもしれないが、それでも無人島でたった一人で暮らすのでもなければ、人が社会で生きていく上で金が必要なのは仕方のないことであり、金があればある程幸せを手に入れ易いというのも残酷なる事実だ。

無論人にとつての幸福は金だけではない。しかし金が重要なのもまた事実である。

体が、重い。

どうやら自分は生きているらしい。

衛宮切嗣は彼らしくもなく、ぼんやりとそんな事を思った。

(手加減されていたのか……?)

そうとしか考えられない。

言峰綺礼の本気の一撃をモロに喰らって、身体機能的にはただの人間でしかない衛宮切嗣では生きていく筈がないのだ。

戦闘を始める前にも、なにやら自分の話があったようであるし、恐らく殺さないように配慮しているのだろう。

(だが……)

死んでいないというのと戦闘不能は別問題だ。

喰らったのは腹のあたりだけだというのに、まるで全身の骨がハンマーで打たれているような激しい痛みがある。

もしも切嗣が戦闘のプロでなければ、今頃余りの痛みに叫び声をあげていただろう。それでも切嗣はここで負ける訳にはいかなかった。

事前の調査で言峰が霊媒治療に特化した魔術師であることは分かっている。例え言峰が衛宮切嗣に用があり殺せなかったとしても、そのサーヴァントにまで用があるとは思えない。言峰は衛宮切嗣と話をする為に、切嗣のサーヴァントを排除するだろう。令呪の抽出という手段を用いて。いやそんな面倒な手段を使う必要はない。ただ切嗣の令呪が刻まれた腕を切断すればいいのだから。

「さてお前に『答え』を話させる前に、その厄介なモノを奪わせて貰おうか」

予想通り、言峰は切嗣のサーヴァントを奪うべく近付いてきた。目に力が灯る。そうだ、自分はこんな所で負ける訳にはいかないのだ。

ケリイはさ、どんな大人になりたいの？

失業したら 八八、今度こそ本当に、母親ゴッ

コぐらいしかやる事がなくなるなあ。

ふとらしくもない感傷を覚える。

正義の味方という理想の果てに、自分が切り捨ててきた二人。

人間とは実に愚かだ。

有史以来、人は戦争を延々と繰り返してきた。近代になってからも、否、近代になりより強力な兵器を手に入れてから、人はより多くの人々を殺戮してきた。

この日本もそう。日清戦争、日露戦争、日中戦争、太平洋戦争。世界中を見渡せばキリがない。延々と延々と続く戦争の歴史。幾ら死体の山を築き上げて人も人は学ぼうともせず、繰り返す。その呪われた歴史を終わらせる唯一の手段が聖杯だ。

万能の釜たる聖杯ならば、この世界から戦争という呪いを消滅させることができる。

(その為には )

言峰綺礼、お前が邪魔だ。

どうして貴様が僕を狙うかは知らない。お前がどのように生きていたのかも知らない。

けれど、もしお前が僕の邪魔をするというのならば、お前は僕の敵だ。

ならば今まで通り、全力でこれを排除する。

「 「

無言で立ち上がる。

言峰が何かを言っているが耳に届かなかった。

余計な感情を捨てる。

余計な感傷を捨てる。

余計な感覚は捨てる。

己を唯一つの機械とし、ただ目の前の敵を排除しろ。

衛宮切嗣における必殺『起源弾』使用不可。

彼の必殺は先程の一撃により手から離れてしまっている。

回収には言峰綺礼の背後まで走る事が必要。

切り札を除く手持ちの武装は十二分。

戦闘可能時間は二分。それ以上の戦闘は体が停止する為に不可能。体に走る痛みは無視する。余計な感覚だ。

「固有時 Time 制御 alter 四倍速 square accellツ！」

禁断の呪文を紡ぐ。

固有時制御。その名の通り自身の体内時間を加速させる事で、常人には不可能の速度を得る魔術であるが、切嗣がそれを大したリスクもなく使えるのは二倍速が限度。三倍速では危険域。ならば四倍速とは、狂気の沙汰に他ならない。

だがそれを切嗣は躊躇いなく使用した。彼に分かるのは唯一つ。目の前の敵を今ここで抹殺しなければ、自身に勝利は齎されない。唯それだけである。それで十分。

「！」

更に加速するとは思わなかったのだろう。

言峰がやや焦るが、それもほんの僅か。直ぐに再び立ち上がった衛宮切嗣の動きに対処する。言峰は強い。四倍速という、一部のサーヴァントを凌駕し得る加速を得た切嗣に対しても、なんら恐れはない。切嗣が殺してきた魔術師の中には、物理的攻撃手段を無効化するような相手もいたが、言峰綺礼はそうではない。銃弾を頭に受ければ死に、心臓を抉られれば死ぬ。ごく普通の肉体だ。

でありながらも切嗣に対する恐れがない。それは言峰が恐怖に鈍感なのではなく、衛宮切嗣を上回る敵と戦ってきたという実績故だろう。

事実、肉体が全盛期を迎えている言峰綺礼の力は圧倒的だ。恐らく此度の聖杯戦争のマスター達が真つ向勝負をすれば最後に生き残るのは言峰だろう。もしかしたらその実力は、聖堂教会が隠し持つ埋葬機関の代行者にも匹敵するかもしれない。

だが言峰は何故だか手加減をしている。

衛宮切嗣を殺さないようにと加減している。

なによりも迷いがある。聖杯戦争にではない。自身の人生に。

対する衛宮切嗣には迷いが無い。

手加減も躊躇もない。

ならば勝機はそこにある。

爆風。

切嗣の投げた手榴弾によるものだ。

けれど言峰はそれを容易く突破してきた。高速で後退しながらも銃を連射する。一発一発が正確な射撃は、しかし言峰には通用しなかった。

全ての銃弾を躲し切り、尚も言峰は近づいてくる。

体が軋む。固有時制御の反動が襲い掛かってくる。

持久戦を挑むは愚策。ならば、短期にて決着をつけるのみ。

後退から一転、切嗣が言峰に突っ込む。

まるで砲弾のように。懐から切嗣の持つ数少ない近接戦闘用の獲物であるナイフを取り出す。そこに今の切嗣の限界まで魔力を込めた。ありつたけの強化を受けて肥大化するナイフ。それでいい。並大抵の破壊力では、あの筋肉の鎧を突破できない。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

彼としては異例なことに、咆哮。

それはもしかしたら、嘗ての幼い頃の理想に囚われたかもしれないし、童心を思い起こしたただけなのかもしれない。

だがその咆哮には、確かな『理想』があつた。『願い』があつた。

「覇アツツッ

！」

けれど言峰綺礼が一枚上手。

ほんの僅か、スピードは圧倒していても格闘経験で圧倒されていたという一因で、衛宮切嗣のナイフは出遅れた。

ナイフが言峰綺礼の心臓を貫く前に、言峰綺礼の拳が衛宮切嗣を貫くだろう。

もはや回避不可能な運命。衛宮切嗣の敗北は定まった。

けれどその運命を、衛宮切嗣は。

「固有時 Time 制御 alter 五倍速 quintuple accells!」

更なる禁断をもって破壊する。

なに単純な事だ。運命によって定まったもの。だが衛宮切嗣は運命に抗う為にこの戦いに身を投じたのだ。ならばこの程度の運命そ規則にすら値しない。

五倍速となつた衛宮切嗣の動きが、僅かに言峰綺礼を凌駕した。

時間にしてはほんの一瞬。けれど勝敗を分けるには無限の距離。

衛宮切嗣のナイフは言峰綺礼の心臓を貫き、そして両者は同時に倒れた。

「……………」



静かだ、と倒れながら衛宮切嗣は考える。

無性に煙草が吸いたい気分であったが、生憎と指先一つ動かせない。限界の限界を超えた五倍速が原因だろう。

舞弥に居場所の分からなくなったランサーのマスターと、最初から居場所不明のライダー達の搜索を任せていたのは失敗だったかもしれない。自分が相手をしている間に、彼女が背後から襲えばこれほどの負傷をおう事はなかったかもしれないのだから。

だがそれは所詮IFの話。そして過ぎ去った歴史にIFがないのは切嗣自身が誰よりも知っている。

そう過ぎ去った歴史にIFはないのだ。  
例えそれが、どれほど残酷な歴史でも。

「死ぬかと思ったのは久しぶりだ」

「！」

切嗣は聞いた。  
絶望の具現を。

「言峰、綺礼！」

絞り出すように言う。

言峰綺礼は立っていた。どうやら万全とはいかないらしいが、胸の傷をどうにか塞ぎ、立っていた。衛宮切嗣の渾身は、言峰綺礼の命を奪うには至らなかつたというのか。その現実が切嗣に重く押し掛かってくる。

(不味い……！)

今の自分是指一本動かせない。  
気合や根性でどうにかなる問題ではなく、動かせないのだ。  
つまり言峰綺礼を止める術は、ない。

「今度こそ！ 聞かせて貰うぞ、衛宮！ 貴様の得た答」

ふと止まる筈のない言峰が止まっていた。  
ぼんやりと切嗣が見たのは、言峰の心臓付近から飛び出す黒い刃。

「背後の敵には気を付ける事だ」

気配はサーヴァント。

けれど自身のサーヴァント、セイバーの声色ではなかった。

もっと別の 何故か切嗣は自分に似ていると思っ  
てしまふ。全く似てない筈のその声色を。

「貴様、は……。何故！」

無言でそのサーヴァントは刃を引き抜いた。  
飛び散る鮮血が衛宮切嗣の頬を濡らす。

「さて、邪魔者は消えた」

コツコツ、と足音が近づく。

そこで漸く切嗣は男の全容を視認した。

全身を包む赤い外套。

色という概念を失ったような白髪。浅黒い肌。  
なによりも、摩耗しきった灰色の瞳。

「アーチャー」

どうにか声を捻り出した。体は動かないが、口はわりと自由に動かせるらしい。

この男の姿、前にセイバーに聞いた特徴と合致する。

となるとこの男が、旅客機に乗るアイリスフィール達を襲ったアーチャーなのだろう。

「何の運命の悪戯だろうな。こうして邂逅するとは。

俺の狙いは、本来ならば第五の筈だというのに」

どうにかして逃れなければ、と思うが方法がない。

言峰の相手をしてボロボロになった肉体では、サーヴァントどころか敵マスター、いやその辺にいるチンピラー人ですら相手出来ない。このままでは……。

「諦めるのが早いな、マスター」

瞬間、大砲が着弾したかのような衝撃が廃ビルを襲った。

上がる土煙。その中から現れたのは、セイバーだ。

片手に見慣れた剣を、もう片手に黄金の聖剣を携え、最優のサーヴァントは駆けつける。

そしてセイバーは、黄金の聖剣をアーチャーに向けた。

何故かアーチャーは、一瞬、それを見て言い表せないような笑みを零した。

SEARCH 17 理想と空虚（後書き）

なんだかもう………原作通りの第五次になる可能性が木端微塵に  
完膚無きにまでに吹き飛びました。

あ、それとちなみに今回の聖杯戦争にはイレギュラークラスは呼ば  
れてません。全て正規のクラスです。アヴェンジャーやらセイヴァ  
ーやらファニーヴァンプなどないです。

人は死んでも、その人の影響は死ぬことはない。

最終決戦の後、レナード・エニアグラムは遂にブリタニアに帰国しなかった。けれど彼の影響までは失われぬ。確かにレナードという異端は消えた。けれど、世界には紛れもない成果が残る。もしもレナード・エニアグラムが存在しなかったのならば、その世界はどうなっていたのか。異なる二つの歴史。どちらが正しくどちらが間違いのか。否、どちらも正しいのか。それは恐らく、その世界に生きる人々にしか下せぬ答えなのだろう。

正に間一髪のタイミング。

アサシン 李書文を下したレナードは早急に切嗣のもとへと向かい、結果として間に合った。

廃ビルで相対するのは二つ。

赤い外套を纏いし騎士と、白いマントを纏いし騎士。

(しかし、このタイミングでアーチャーか)

視覚の共有はなにもマスターからサーヴァントへの一方的なものではない。マスターの視界をサーヴァントが共有することも出来る。それを使いレナードは、言峰綺礼が目の前にいるアーチャーに殺害されたのを見た。背後からの不意打ち。幾ら人外の強さを持つ代行者といえどサーヴァントから背後に襲われれば成す術もなく敗れ

るしかない。だがそれはいい。問題なのはその後だ。

アーチャーが言峰を殺したのは分かる。サーヴァントではなくマスターを狙うのは聖杯戦争の基本戦術の一つだ。事実レナードもそうやってルキアーノを倒した。

けれどそこからアーチャーは可笑しな行動に出る。言峰の殺害後すぐに切嗣を襲えばいいものの、なぜだか知らないがアーチャーはそれをしなかった。

まるで最初から殺す気がないように、そんな錯覚すら覚える。

そんな考えをレナードはあっさりと振り払う。

考えても仕方のない事だ。アーチャーの目的がどうであれ、この相手は非常に危険だ。数K離れた場所からでもランクA相当の狙撃を放ってくる弓兵。

はつきり言ってレナードの中で一番抹殺したい相手である。

(しかし……いけるか?)

忘れてはならない事だが、レナードは今日だけでルキアーノ・李書文との二連戦をしている。見た目は万全に見えても、それなりのダメージもある。ついでにマスターである切嗣からの魔力供給も負傷のせいか殆どない。微弱すぎて無いのと変わらない程だ。

この状況での三連戦。出来れば遠慮したくもあるが、弓兵が剣士の戦場に降りてきてくれるなんていうのは滅多にない好機でもある。これを逃せば、今度こそアーチャーは遠距離からの狙撃に徹するかもしれない。そうなれば、苦戦は免れないだろう。

レナードにも長距離攻撃手段はあるが、それは命中率に重点をおいたものであって破壊力を重くおいてない。これでミサイルでもあれば話は別なのだが、流石の切嗣もミサイル弾頭までは用意できな

かった。

（奥の手は……………使いたくないな。しかし敵サーヴァントはアーチャー。）

ならば接近戦ではセイバーの俺に分がある）

対応は決まった。

早急に接近戦にてアーチャーを下し帰還する。

これが現時点で一番ベターな選択だろう。

「その聖剣……………。まさかこのような形で見る事になるとはな」

ポツリとアーチャーが呟いた。

「どうした？」

彼の騎士王と戦えて光栄か？」

敢えて自身の名を騎士王アーサーと名乗る。

大した効果もないだろうが、自分をアーサーと誤解することで、なんらかの勝機があるかもしれないと考えたからである。

「アーサー、だと。笑わせる。

因果逆転の効果を生むほどに、狙撃を極めたアーサー王がいるものか。

時空を超えて英霊の座に招かれてしまった者ならば、狙撃を得意とし尚且つその聖剣を持つ英雄は一人しか思いあたらん。

そударろう？ ブリタニア帝国の騎士」

「はは。そうかそうか。で、そういつ」

言葉の途中、レナードが隠し持っていた銃で発砲する。

「お前は何処の英雄だ」

「やれやれ。始まりの合図も無しかね」

「欲しかったのか？」

「クッ」

アーチャーが黒と白の陰陽剣を展開した。

対するレナードは聖剣と愛剣の双剣をもって応じる。

轟音。衝突する刃と刃。けれど、

「軽い」

あっさりとアーチャーは押し負ける。

当然だ。レナードの筋力Aに対してアーチャーはわずかD。これでは勝負になる筈がない。受ける事すら万力を込めて出来るか出来ないかと言う程度だ。

「解せんな。何故ここに出てきた、アーチャー！」

貴様の腕ならば、別に近づかなくとも転がっている神父諸共俺のマスターも仕留められたものを」

「簡単な話だ。

私には私の目的がある。単純かつ馬鹿らしいが、それでも俺にはその男に用があるだけだ。

それよりも、無駄口を叩く暇があるのかね」



「お前相手ならば、あるんじゃないか」

言いつつレナードが渾身の力を込めて剣を振るう。アーチャーはそれを受け止めるが、やはりパワーの差は歴然。腕が痺れているのがレナードからも丸わかりだ。

そこで、ふと隙を見つけた。右胸の下あたり、そこに紛れもなく隙があった。けれど、

「わざと隙を見せて、そこを狙う攻撃を対処しようという戦術か」

「！」

レナードは敢えてそこを狙わず、別の個所を狙う。

アーチャーの対応が一手遅れる。レナードの剣を受け止められず干将が弾き飛ばされた。そこへ更に首を狙おうとしてアーチャーの手に新たなる干将が握られていた。

「また獲物を!？」

アーチャーは巧みに双剣を使いレナードの剣撃を捌く。馬鹿正直に受け止めるのではなく、力を受け流すように。ならば、と。レナードは剣ではなく自らの足でアーチャーの腹を蹴り飛ばした。

「……………こうまで、相性が悪いとはな」

壁に叩きつけられたアーチャーがゆっくりと起き上る。

確かにこと接近戦においてアーチャーとレナードの相性は最悪の一言に尽きる。アーチャーは決して弱くない。それはランサーなどの英霊には劣るが、防御に関してならばかなりの腕前だ。しかし元々アーチャーは剣士ではない。また剣の才能もない。代わりに彼が

持つのは心眼という血の滲むような経験と修練nの果てに得た戦術眼、凡人のスキルである。

しかし、あるうことかレナードも、全く同じランクで心眼スキルを保有している。そのせいでアーチャーの心眼は上手く作用することとは出来ない。

また本来アーチャーの得意とする戦術の一つでもある、複数の武器を飛ばすにしても、レナードの能力のせいで逆にアーチャー自身の首を絞める結果になりかねない。

故に最悪。サーヴァントとしての力云々ではなく、言ってみればジャンケンにおけるグーとチョキのように相性が最悪なのだ。

けれど、アーチャーは不敵に笑って見せた。

いやそれは不敵に見えただけで自嘲の笑みだったのかもしれない。

「何を笑う？」

「ククツ、いやなに。」

今の私自身の状況と、君達を見ていたせいだろうな」

そしてアーチャーはレナードではなく、その背後にいる切嗣を見る。目に見えるほどの憎悪と敵意を込めて。

「衛宮切嗣。」

聖杯はお前の願いを聞き届けない」

「な、に？」

どうにか壁に背中を凭れ掛からせている切嗣が、アーチャーの不

可解な言葉に眉をひそめる。

「この土地にある聖杯は贋作だ。

俺も詳しい事は摩耗しきっていて分からないが、確固たる事実だ。

衛宮切嗣の参加した聖杯戦争は、街一つを飲み込んだ大災害にて終結する」

「世迷い事を。バーサーカーでもないのに狂ったのか、アーチャー」

応じたのは切嗣ではなくレナード。

剣を構えたまま尚も言う。

「聖杯が実は偽物で街一つを焼き払う、だと。

そんな戯れ事を信じて、あっさり矛を収める馬鹿がどこにいる」

レナードからすればアーチャーの言っていることは脈絡のない戯言に等しかった。

そもそもその前提条件からして聖杯があるからこそサーヴァント召喚が可能なのであり、サーヴァントの存在こそが聖杯の存在を逆証明しているといっている。尤もこの地にある聖杯が真正銘聖人の血を受けて杯ではないのは、レナード自身アイリスフィールとそれとなく聞き出した情報で察しているが、そんなものは些細な問題だ。聖杯が本物だろうと名前だけの偽物だろうと、それが願望器として機能すれば何の問題もないのだから。

大体アーチャーはただ聖杯が大災害を起こすと主張しているだけで、なんの明確なる証拠も見せていない。そんなものを信じるなど、よほどの馬鹿がお人よしくらいだろう。

そしてレナードと切嗣は馬鹿でもお人好しでもない。

「だいたい、何でお前がそんな事を知っている。

聖杯がサーヴァントに与える知識には、そんな面白おかしい内容は含まれていない。

まさかお前にだけ聖杯がサービスしたとでも言うつもりか？」

「その答えは単純だ。

この俺が未来の英霊で、この冬木における大災害の生き残りだからに過ぎん」

「……………は？」

「思えば皮肉な話だ。

英霊を呼び出し殺し合わせる鷹作の聖杯が、私のような英霊もどきを作ってしまったのだからな」

気づけば音が消えていた。

切嗣が息を吐く声だけが、妙に大きい。

その切嗣は、ただ機械のような無表情で赤い外套の騎士を見つめていた。

「今から見せてやる、衛宮切嗣。

貴様があの日、生み出してしまった存在を。

貴様があの日、呪い<sup>理想</sup>を植え付けた人間の末路を」

そして、赤い外套の騎士が唱えだす。

自らを司る言葉を。

I am the bone of my sword .  
Steel is my body , and fire is  
my blood .

I have created over a thousand  
blades .

ただの一度も  
Unknown to Death .

ただの一度も  
Nor know to Life .

彼の者は  
Have withstood pain to create  
many weapons .

故に、  
Yet , those hands will never ho  
ld anything .

その  
S o a s I pray , UNLIMITED BLADE W  
ORKS .

誰も動けなかった。

その余りの異常に。

詠唱が完了した瞬間、赤い外套の騎士を中心に、世界に炎が走っ  
た。

それはこの世との境界。もはやこの境界線からは逃れられない。

世界が変革する。

無限の如く広がる赤い大地と、そこに墓標のごとく突き刺さる剣  
達。だがただの剣ではない。刺さるもの全てが一級品の業物、或い  
は聖剣、魔剣の類。

そんな世界の中心点に、王のごとく佇む男が一人。

「これは、固有結界。なんで、お前が

「なに生前の私が剣士でも弓兵でもなく、魔術師だったということだ。

それが剣であるならば真作を見るだけで解析し貯蔵する。

固有結界、無限の剣製。アンリミテッド・ブレイド・ワークスそれが英霊としての俺の能力。

英霊の宝具がその英霊の象徴だというなら、この世界こそが私の宝具だ」

SEARCH 18 固有結界（後書き）

わりと初っ端らから固有結界を使ったエミヤでした。  
まあ流石に近接だとやばそうなので……。

そういえば適当に第五次聖杯戦争のラインナップを決めましたが……  
……なんだか恐ろしく極悪な出来になりました。四次、五次、EXTRA、の三つ全て通しても最悪のラインナップっぽいです。というより色々とかオス。原作通りペアが一組しかない。

## 魔術師。

伝説や歴史に登場する世間一般のイメージの魔術師とは違い、実在の魔術師というのは殆ど現世には干渉しない。ただだ、『』という到達点を目指し研鑽を続けていく。歴史の流れにも囚われず、世界の動きにも興味を示さず、ひがすらに『』という到達点を目指し続ける、世界で最も愚かで報われない群体。それを魔術師という。そして衛宮切嗣は正確に言えば魔術師ではなく魔術使いである。魔術を学問としてではなく、自らの為に使用する者。魔術師からしては侮蔑すべき者、人としては当然な者。それが魔術師とは異なる魔術使いなのだ。

「固有、結界……」

そう呟いたのはレナードではなく切嗣だった。

確かに、これはサーヴァントであつても魔術には詳しくないレナードよりも、魔術師である切嗣のほうが良くわかるだろう。

ましてやレナードは知らぬことであるが、衛宮切嗣の実父であり今は故人の衛宮矩賢は封印指定になるほど卓越した魔術師であり、世界に干渉されない固有結界内で無限大に時間を加速させることによって『』へ到達しようとした男だ。息子である切嗣も一般の魔術師よりかは『固有結界』という大魔術を知っている。



そもそも『固有結界』というものは人間ではなく、本来は悪魔や精霊の技である。術者の心象風景で現実世界を侵食し、世界そのものを変質させるといふ魔術。魔術師における奥義であり到達点の一つともされており、魔法に最も近いとされる魔術でもある。

アンリミット・ブレイド・ワークス

『無限の剣製』という名の通り、固有結界内に墓標のように突き刺さっているのは、全てが魔力の籠った剣だ。

天にあるのは鉄の歯車。大地には生命の存在を許さぬ赤黒い土。心象風景を具現化する固有結界。であるのならば、剣以外には何もないこの世界こそ、赤い騎士の心象なのだろう。

無限に乱立する剣軍。

レナードは一つ一つが必殺の宝具であろうがそれらが、

「実に、不愉快だ」

「気に障ったかね」

「戯けがっ。英霊にとっての宝具とは自らの半身と同義。それをこつも複製するなど、英霊に対する侮辱に等しい。

唯一絶対の価値を無視し、真作をただ模倣するだけの、何も生まぬガラクタ。

成程、お前には実に相応しい心象だろうな」

「これは耳が痛い。

確かに君の言うとおり、この結界内にあるモノは全てが取るに足らぬ贋作だ。

しかし、偽物が本物に勝てぬ道理などない」

「はっ！ それはそつだ。否、古来より技術や業とは盗み模倣する

事から始まる。

だが真正銘最初の本物から、後世に伝わる偽物が劣化するかといえはそうではない。しかし貴様の模倣はそうではない。ただ模倣し複製するに留まり、自ら新しい物を作れない。

自らには唯一つの オリジナル がない。そうだろう、お前は？」

「否定はせんよ。事実、この結界内にあるのは贋作だけだ。オリジナルは唯一つもない。

しかし、そういう君は奪い取った聖剣を我が物顔に振るっているようだが？」

「阿呆が。俺の握るこれは俺が命を懸けた戦いの果てに勝ち取ったものだ。

彼の王と戦い、そして勝利した証だ。

貴様のように唯劣なく贋作を作り浪費する贋作者フェイカーと同列にするな」

「奪い取った者を自分の者、か。

随分と野蛮な考え方だ。それも篡奪と略奪の国出身だからかね？」

「ほほう、何処の誰とも知らぬ魚の骨が、我が祖国を侮蔑するか。いい度胸だ。……………死ぬ、か？」

「さて死ぬのは良いが、果たして最初に死ぬのはどちらかな」

「分かりきった事を聞くな、痴呆か。

これだから低能の猿は度し難い」

「これはこれは。

まさか篡奪者ブリタニアの飼犬に猿と言われるとは。

私も随分と堕ちたものだ」

「墮ちるも何も、最初から底辺中の底辺の住人だろう。」

今更どこに墮ちるって……………ああ、墮ちすぎてマントルにでも突っ込んだのか。それは良かった。はつきりいつて貴様と同じ空気を吸っているだけで、無性に殺意が湧いてきてね。

マントルで塵も残さず消えてくれれば、非常にありがたい」

「長話をして良く噛まなかったものだ。」

それも神世界の住人を気取った狂犬を手懐ける術かね」

「……………」

「……………」

もはや言葉を交わす必要はなかった。

ここは戦場。相手は敵。

ならば存在が不愉快な相手を殺すのに、なんの制約もない。

レナードが走る。

ありつたけの脚力による加速。

敵までの距離は約65m。レナードの敏捷ならば数瞬で到達できる地点だ。

けれどそれは、敵の妨害がなければの話。

この結界の主が、それを許す筈がない。

「行け」

短い命令。

それで十分。この世界の主の命令に応じるように、大地に突き刺

された剣達が浮き上がる。

剣達が一斉に音速を超えた速度でレナードへと向かう。贗作といえど一つ一つが必滅の威力を秘めた宝具達。一つでも直撃すれば致命傷となりかねない。

「ただまあ。不愉快だが、その便利さは認めなければならないが」

十三の剣が一斉に大地に叩き落とされる。  
いや、そういうと語弊があるか。

十三のうち一振りがレナードに奪われ、その剣で残りの十二が叩き落とされたのだ。

「便利さ、か。そういう君の能力も相当なものだと思うが。  
それより贗作は気に食わないのではなかったのかね？」

「気に食わないからと言って、それを使わないとは言っていない。  
なにより俺の誇りとは、どのような状況だろうとどのような武装だろうと、最上の結果を叩き出すことに終始する。気に食わない贗作だろうと、使いこなしてやるから覚悟しろ」

「覚悟するのは、さて、どちらかな」

まるで猛吹雪のように剣が一斉にレナードを襲った。

だが決してレナードは足を止めない。ペースを緩める事はある。けれど前に進むことだけは止めない。難しい話ではないのだ。ようは彼はずっとそうやって生きてきた。ひたすら「前向き」に生きてきた。なら今更宝具の猛吹雪程度で前進を止めるような脆弱な行爲をする筈がない。

赤い外套の騎士が宝具を放ち、レナードがそれを奪い叩き落とす。

そんな光景が延々と繰り返される。

(流石に相性が悪いか)

赤い外套の騎士はそう考える。

レナード・エニアグラムの英霊としての能力であり宝具『オイル・ハイ  
ル・ソルジャー軍人に  
栄光を』はそこらのガラクタのみならず相手の宝具ですら自身の宝  
具へと変えてしまう。つまり彼が幾ら宝具を飛ばそうにも、レナ  
ードはそれを奪い取ってしまうのだ。だから止まらない。幾ら必殺に  
足る宝具を投擲しようとも、その歩みを止める事は不可能。

ただ、この状況はレナードの宝具のみによって齎されたものでは  
ない。

それよりも驚嘆すべきはレナードの技量。彼の飛ばしている武器  
は剣だけではない。中には槍や戦斧なども混じっているし、剣とは  
思えないような奇怪な剣もある。だが、レナードはそれら全てを使  
い慣れた得物のように扱い熟しているのだ。

己のように宝具から所有者の技量を投影している訳ではない。た  
だ自らの技量と才覚のみで、この状況を作り出している。

恐らくレナードの持つ直感スキルも密接に関わっているだろう。  
どのような武器を掴んだとしても、その最も適した使用方法を直  
感がレナードに教えているのだ。だからこそ、どんな武器でも扱え  
る。使いこなせる。

才能の違い。

皮肉でもなく明確な現実として英霊

は認める。

だが、そんな事は元より知っている。固有結界という最上級の禁  
忌を内包しているとはいえ、自身はただの人間に過ぎない。彼女

のように龍の因子を持つ訳でも半神でも、眼前にいる敵のように天賦の才に恵まれている訳でもない。

しかし凡才だったからこそ、磨かれた業がある。

愚直なまでに極めた戦闘方がある。

自身には 彼女 のように王道たる剣は振るえない。

けれど負けられない。

己にあるのは下らぬ感傷だ。

本来の狙いは此度ではなく次の儀。

第四次ではなく第五次聖杯戦争こそが真の本命。

最初それを確信した時は絶望したものだ、そんな中で一つの馬鹿げた考えが生まれたのだ。

もしも、あの大災害が起きなければ。

もしも、衛宮切嗣が を救わなければ。

もしも、過去の己が正義の味方なんぞに理想を抱かなければ。

英霊 という存在は、誕生しないかもしれない。

無論、英霊として確固たる存在となってしまうた彼が、今更この時代の が英霊にならなかつたくらいで消滅することはない。

かといって、まだ衛宮にならぬ を殺害した所で意味はない。

己が殺さなければならぬのは『正義の味方』などという壊れた幻想を抱いている男であって、この世界の何も知らぬ子供ではないのだから。

無駄な事など理解している。

例えば大災害が起きずとも、この身が守護者という呪縛から解き放たれる事もないのは分かっている。下らぬ八つ当たりだという事も分かっている。

けれど、自身と言う存在そのものを誕生させない。今はそれでいい。

己ではなく衛宮切嗣の抱いた幻想<sup>理想</sup>を破壊する。衛宮切嗣に現実を突きつける。それだけが彼の下らない八つ当たりにして、目的だった。

その為には。

手始めに目の前の敵を打倒しなければなるまい。

そう、今正に剣の吹雪を突破してきた剣士を。

鈍い金属と金属の激突音。

漸く宝具の猛吹雪を突破したレナードは、結界の中心にいるアーチャーに斬りかかったのだが、アーチャーもさるもの。レナードの強奪した双剣を、これまた結界内から呼び出した双剣をもって応じた。

「貴様……！ その剣は」

レナードの視線がアーチャーの双剣に注がれる。

彼にとってアーチャーが握っていた双剣は実に見慣れたものだった。

それは業物ではあっても宝具ではない名剣。嘗てとある女性が最強の騎士たちの一人に数えられる事となった時の、当時の皇帝より賜ったもの。

「閃光のマリアンヌとは良く言ったものだな」

「黙れ。それは貴様が扱っていいようなものではないッ！」

明確なる敵意を込めて、レナードがアーチャーの剣を弾き飛ばした。

そのまま畳み掛けようとするが、既にアーチャーの手には別の剣が握られている。だがそれも数合と打ち合わぬ内に弾いた。

「剣だけではなく技量まで投影したらしいが、オリジナルに数段劣る。

いや比べるのすら烏澁がましいほどだ」

「生憎と才能がなかったのね。

一つを極めるより、多くを修める道を選んだのさ。奇策を尽くせば、一度くらいは勝ちを掴める」

「勝利を掴む、だと……？」

見縊るな。歴代最強騎士の戦場に敗北は許されない」

「そうかね。では、こんなものはどうかな」

アーチャーの背後から二十の剣が飛ぶ。

狙いはレナードではない。もっと背後に、

「切嗣ッ！」

急いでレナードが切嗣のもとへ跳躍する。

今の切嗣はボロボロだ。良くは知らないが固有時制御とかいう魔術を酷使し過ぎた代償で、もはや満足に歩く事さえ困難な状態である。

ただでさえ必殺の破壊力を秘めているというのに、そんな状態では躲せる筈がない。



一足飛びで切嗣のもとへと到着すると、そのまま切嗣を抱きかかえ跳躍する。直後、そこに無数の剣が着弾した。間一髪のタイムイング。或いはそれすらアーチャーの予想範囲内か。

「切嗣、動けるか？」

「……魔術の反応で体中の機能にガタがきている。通常の戦闘行動どころか通常の歩行すら困難だ」

切嗣は淡々と事実のみを語った。

切羽詰まると無駄口を叩く人間と、本当に必要最低限の事しか話さなく者がいるが、どうやら切嗣は後者らしい。

「逃がさんよ」

「あいつ、また　　！」

レナードは見る。恐らく無駄と判断したのだろう。アーチャーは剣を飛ばすのではなく黒い弓を構えていた。そして弾丸は前にランサーとの戦いでブチ込んできたトンデモナイ代物。破壊力にしてAランクに届く螺旋剣だ。

素早く周囲の状況を見渡し、判断する。現状で最も良い選択を。

「 I a m t h e b o n e o f m y s w o r d .」

魔力が込められていく。

けれど、その間にレナードも切嗣を一旦下ろし、とある剣を握っていた。

それは剣の丘に刺さる宝具の一つ。嘗て赤い外套の英霊が旅客機

に放った弾丸。

「カラド、ボルグ  
偽・螺旋剣？」

「フルンディング  
赤原獵犬」

投擲された剣と射られた剣が激突する。

まるで神話の再現。贗作同士とはいえフェルグスの魔剣とベオウルフの魔剣が衝突す。ここに彼の両雄の戦いの一端がここに再現された。伝説の剣が、空間を歪ます螺旋剣が。空間に亀裂をいれながら衝突し、

「ブローケン・ファンタズム  
壊れた幻想」

同時に爆散する。

まるで神話の再現はただの幻だったかのように。  
螺旋剣と魔剣は跡形もなく消滅した。

再びの静寂。

剣撃の音も、言葉も、全てが消え去ったかのように静かだ。

そんな中、レナードは一つの決断をする。

レナードの手に、黄金の聖剣が現れる。

嘗て生者の世界と死者の世界の狭間の世界で、彼の王と戦い勝ち取ったものを。

このままではジリ貧。

例え近接戦闘でアーチャーを上回っていようと、両者には決定的な違いがある。マスターの存在という決定的な差が。これでアーチャーがランサーのように単一の武装しか持たない白兵戦型のサーヴァントならばよかった。しかし『アンリミテッド・フレイド・ワークス』の攻撃範囲は容易く

背後にいる動けぬマスターを射抜いてしまつ。

ならばこそ一撃で。どんな盾でも防げえぬ究極たる一撃にて勝負を決する他ない。

「決着をつける気が。ならば……」

アーチャーもまた剣の丘から聖剣を呼び寄せ、握った。

「それまで複製するか、フェイク贋作者」

「無駄口を叩くな、行くぞ」

彼の王が不在でありながら、二振りの聖剣が黄金の光を放ちだす。それは一つの合図。これから起こる奇跡の。収束される光。

両雄の視線が重なった。鷹のような眼光と眼光が交わり、そして。

「エクス約束された」

結界内に眩しいほどの光が溢れる。

無限の剣を内包するこの世界においても、究極と断じられる至高の一。

「カリバー勝利の剣！」

同時に真名が解放される。

そうそれこそが『エクスカリバー約束された勝利の剣』。聖剣というカテゴリーにおいて最上位に位置し、人の手によるものではなく星の光を集めて製造された神造兵器にして究極の幻想。ラスト・ファンタズム激突する光と光は、やがて世界の全てを埋め尽くし、そして一転して闇となった。

闇に染まった夜を、赤い外套の騎士は駆けていた。

ビルとビルとの間を軽く跳躍その姿は、あちらこちらを血に染めており、彼がかなりの傷を負っている事を伺わせる。

セイバーとの宝具の打ち合い。

有り得ぬ同じ宝具の激突の結果は

己の敗北であった。

彼の能力たる『無限の剣製』アンリミテッド・ブレイド・ワークスは決して万能ではない。彼の起源は剣であり、貯蔵できるのも剣に限られる。槍や防具も投影できる事には出来るが、それには三倍の魔力を必要とし、効果も瞬間的なものでしかない。

それに剣であるならば何でも解析し貯蔵するというのが、それは実は正しくない認識である。

例え彼をもつてしても、人の手によるものではない神造兵器の投影は不可能なのだ。

再現することは出来る。真に迫る事も出来る。けれど届かない。完璧に投影することは出来ない。

事実、魔力不足だったらしく完全ではなかったレナード・エニアグラムの聖剣をも、相殺する事すら叶わなかった。己が魔力の殆どを使い切ったというのに。

けれど、彼はそれを悔しく思う事はない。

寧ろ当然だと考えていた。

記憶にある彼女の手による本物の輝き。自分のような物が、あれに勝る筈がないのだと。

「けれど皮肉だな。  
運命というものを破壊する事を望んでいながら、最後の最期に運命に還るか」

「ああ？ 何いきなり訳の分からない事言ってるんだテメエ」

そこには待ち構えていたかのように死神がいた。  
蒼い豹のような槍兵と蒼い外套を纏った魔術師。

「ランサー。宝具の開帳を許す、一撃で仕留めろ」

「あいよ。つうわけだ。悪いがここで脱落して貰うぜ、アーチャー。  
テメエには色々と借りもあるしな！」

最速の英霊が駆ける。

レナードも速かったがランサーはそれ以上。いや違うか。ランサーは速いのではない。疾いのだ。それも圧倒的に。

「トレース・オン  
投影開始」

扱いなれた陰と陽の夫婦剣を投影。

けれど遅すぎた。最速の英霊は直ぐそこまで迫っている。

「ゲイボルク  
刺し穿つ死棘の槍ッ！」

魔槍が走る。

一瞬躲そうと思うが、すぐに無駄だと悟る。

この宝具は真名を唱えさせてはいけないものだ。

躲す躲さないの問題じゃない。真名を開放された時点で、既に心臓を穿つという結果を生み出している因果逆転の槍。これを躲すに

は敏捷性ではなく、槍の呪いを打ち消すほどの幸運が必要。そして当然のことながら彼にそんな幸運はなかった。

必然、槍は己の心臓を貫いた。貫いた個所から無数の棘が全身を貫く。

ゲイボルク 刺し穿つ死棘の槍はただ心臓を絶対に貫く槍ではない。この魔槍が本当に恐ろしいのはその必殺性だ。ゲイボルク 刺し穿つ死棘の槍は通常の槍のダメージに心臓を穿った相手の体力分をプラスする。つまり心臓を穿てば最後、それが死徒だろうと悪魔だろうと確実に殺す魔槍なのだ。これを防ぐには、槍の威力を上回る防壁をもつか、因果を逃れられる幸運をもつか、心臓を穿たれてからも蘇生できる手段をもつかしかない。

「クツ

」

真紅も魔槍が己が心臓を貫いた状態で、尚も赤い騎士は笑う。

「なに笑ってやがる？」

「あの時こうして死んでいれば、と思っただが今こうして君に殺された。運命は元に戻った」

全身から力が抜ける。

もはや完全に致命。霊核を完全に破壊され、後僅かでのこの身は消え去るだろう。

思い起こすのは誰もいなくなった校舎。記憶は摩耗しきってしまった鮮明に思い出すことはもはや出来ないが、あの時も未熟な自分はこの槍で心臓を貫かれたのだ。そして、そんな死ぬはずだった己を救い上げたのは、果たして誰であったか。

「よくよく私も運がない。大した事は出来なかったが……………」。  
あの男に一つ呪いを遣せた。それで、よしとするとしよう」

最後に皮肉気に笑い、赤い外套の騎士は消えていった。

「こちとら赤枝の騎士の意地つてモンがあるんでね。そう簡単には負けれねえ」

ランサーが槍を引き抜く。

そして虚空を見つめる。正確に言えば、先程まで二人のサーヴァントが戦っていた廃ビルを。

「ランサー、どうした？」

「ああ分かったよ、マスター。直ぐに行く」

今度ばかりは見逃してやる。さっさと傷を癒してこい。負傷したテメエを相手するなんて面白くねえ真似はしたくはねえしな

ランサーはそんな風に関心の中だけで言うと、ケイネスと共に夜の闇へと消えていった。

衛宮切嗣は廃ビルの屋上で斃れていた。

思ったよりも傷が深い。流石に固有時制御の五倍速は無理があったのだろう。

今後の戦闘にも支障が出る。

(それにしても……)

去り際に敵サーヴァントが残した言葉。

ただこちらの考えを狂わせる作戦の筈なのに、頭から離れようとはしない。

俺の真名はエミヤシロウ。貴様が生み出し、貴様の理想を継いだ慣れの果てだ

男の言葉が正しいのならば、あのサーヴァントは切嗣となんらかの関係があり、切嗣の願いを継いだ英霊という事になる。

だがそんな事は有り得ない。自分の理想を継いだ者が英霊に祀り上げられ、この聖杯戦争でその自分の敵になるなど。宝くじで一等賞をとるよりも低い確率だろう。

「セイ、バー」

ふと切嗣は自らのサーヴァント、セイバーを見る。

セイバーは苦しそうに断片的に息を吐いており、やがて力を失ったかのように倒れた。

けれどそれは切嗣も同じ。体が動かせない。戦闘が終わって緊張の糸が切れたからなのか、徐々に視界がぼんやりとしてくる。

衛宮切嗣が最後に見た者。それはこちらに駆け寄る久宇舞弥の姿だった。



たぶん誰もが予測しなかったであろう、このタイミングでのエミヤ脱落。

レナードとの勝敗は痛み分けなので実質引き分けなのに、追い打ちとばかりにランサーが迫るといってトラップ。

切嗣陣営も切嗣負傷でレナード魔力枯渇でボロボロ状態。平穩無事なのはランサーとライダー、そして登場すらしてないサーヴァントだけ。

<余談>

さてさて今回脱落した英霊エミヤ。

良く二次創作で無双したりする彼。はっきり言って二次創作ごとに強さが異なります。

なので本作品は他の二次創作を全く参考にせず、アニメや映画も無視して、ただコンマテと原作Fateのみを参考にしました。

ちなみにコンマテ情報ですが、無限の剣製は神造兵器の投影は不可能らしいです。つまりエクスカリバーやアヴァロンは投影不可能。ただエクスカリバーについては原作の情報から劣化版カリバー、通称レッカリバーなら投影できるっぽいです。

アヴァロン（たぶんカリバーン）についても、聖杯戦争終了と共にイメージが消えているので投影できないとか。これは明言されているのでガチです。士郎がFateルートでバリバリ投影してましたが、あれはサーヴァントがアルトリアの時限定であって、それ以外

の場合は不可能とのこと。イメージにしても聖杯戦争終了とともに消滅するらしいです。それに精密機械も投影できず、投影できるものも白兵戦縛りがあるとのこと。

なので本作品の無限の剣製の性能は。

ゲイボルク〓投影可能、ただし効果は瞬間的なものであり三倍の魔力が必要。

エクスカリバー〓投影不可能、ただしレッカリバーは可能。ペルレフォン以下の破壊力だと思われる。

宝石剣〓かなり劣化したものが投影できるけど扱えない。

アヴァロン〓投影不可能

ヴィマーナ〓投影不可能

戦斧系宝具〓投影可能。ただしゲイボルクと同じような制約がある。

ただの布〓投影可能

マグダラの聖骸布〓投影不可能

天の鎖〓投影不可能

乖離剣〓無理

カリバーン〓投影不可能、ただしアルトリアの参加した聖杯戦争中であり尚且つエミヤではなく衛宮士郎ならばかなりの精度で投影可

能。

干将「OK

総額二十万三千円にもなる釣り竿「投影不可能。ただしギャグ時空ならば可能。

とまあこんな感じですよ。ただし一部は独自設定なのでご容赦を。では次回は漸くの休息……というか休養タイム。

SEARCH20 エターナル メモリーズ(前書き)

今回は前作「反逆しない軍人」の総集編みたいな感じですよ。

前半の臓硯のところ以外は読み進めてしまつて問題ありません。

前作をド忘れしてしまった方はご覧下さい。

自分が歩んできた過去を振り返ってみると、何とたくさんのすばらしい一生に一度の出会いがあることか。

人と人の出会い。それは掛け替えのないものだ。

恋人や親友、そして生まれて初めて出会う親という存在。

人は一人で生きていくことは出来ない。交流というものがあるからこそ、人は生きていくことが出来る。それ故の争いもまたあるが、それ故に人は美しい。

間桐邸の地下で、間桐の支配者たる翁は静かに桜の修練と言う名の地獄を鑑賞していた。この家に来た当初こそ苦悶に顔を歪めていたが、もうそんな事はない。桜という少女にあるのは、ひたすらに無表情。なんの色もない無感情である。桜という少女は、もう殆ど壊れかかっていた。

(しかし雁夜の奴も存外と不甲斐ないものよの)

表向きこの臓硯の息子であった間桐雁夜の遺骸は、今この蟲蔵で蟲の餌となっている。

臓硯としても僅か一年足らずで仕立て上げた雁夜が最後まで勝ち抜くなどは到底思っていなかったが、それにしても最初に脱落するというのも面白みにかける展開というものだ。

遠坂邸に攻撃を仕掛け、あっさりと撃退されて、あまつさえ令呪を二画も消費するなんて愚を犯した雁夜はもうバーサーカーを抑えることも出来ず、最終的にはバーサーカーがセイバーと戦っている間に衛宮切嗣の手によって殺されてしまった。

尤も臓硯としては此度の聖杯戦争は最初から静観する予定だったので、雁夜が死のうと惨殺されようと絶望しようとは損はない。

遠坂もアインツベルンも愚かだ、と臓硯は思う。第三次聖杯戦争を正しく認識しているのであれば、此度の聖杯戦争になにか異常が出るであろうことは予測出来て然るべきだというのに。

遠坂の子供もアインツベルンのホムンクルスも、未だに聖杯の異常に気づくこともせず馬鹿正直に戦っている。

「まあ良い。聖杯戦争は此度で終わりと云う訳でもない。それまでに必勝の策を用意すればよい」

臓硯は手にある触媒達を握りながらそう考える。

翁の手にある触媒の中には、彼の騎士王の甲冑の欠片もあった。

けれど間桐臓硯は知らない。この甲冑の欠片が、己が身を焼き尽くす業火の欠片ということを。

間桐臓硯は気づかず、静観を続ける。

闇よりも深い闇の中。

夢と言つ名の幻想世界に、魔術師殺し衛宮切嗣はいた。

彼が見る夢は一つの真理。とある英雄の辿った有り触れた英雄譚。

切嗣が見ているのは建物の中。  
どうやら教室のようだ。

「ほほう、どうやら君とはお別れのようだね。  
どうする、君も教官に嘆願すれば楽しい最前線へ行けるかもしれないが？」

「いやいや、お前じゃあるまいし、誰が好き好んで最前線なんで行かなきゃならんだ。  
しかも卒業したばかりで。」

「まあそれもそうか。じゃあ。」

ルキアーノの出した手を握る。  
そういえば握手なんて初めてだ。

しっかりと、ルキアーノの手を握る。  
思えばこの三年間、なんて最悪な奴だろうと思ったが、いざ別れるとなると寂しいものだ。  
そうして二人は別れる。互いの戦場に向かう為に。

光景が変わる。  
星を見る限り恐らく欧州だろう。  
そこに一人の少年と一人の少女が対峙している。

「なあ、こういつ時さ。  
三流の映画とかだと『それでも、君は殺せない』だとか言って、お互い軍から大脱走。  
逃げた先の浜辺でキスしたりして、終わるんだろうな。」

「そう、かもしれないな。」

「だけど、これは映画じゃない。」

銃を取り出す。

照準はしっかりと、彼女の心臓。

「だから、俺はお前を殺す。」

最後の警告だ、フランカ・シード。

武器を捨て投降しろ。」

最後の確認。

いや、俺にとっては一つの合図かもしれないかった。

「断る。私は投降はしない。」

「そうか、なら」

互いの指が引き金にかかる。  
もう、迷いはない。

あっさりとした、銃声。

二つの音が響き渡った。

一つは引き金を引いただけの音。  
そしてもう一つは、紛れもない銃声。

フランカという少女の体がゆっくりと倒れる。



最後に何か、一言呟き、そして、永遠にその瞳を閉じた。

神聖ブリタニア帝国皇宮、ペンドラゴン宮殿。

天を衝くような本宮の周辺には、近代的な高層建築と、ブリタニア特有の貴族文化を融合させた建物が数多く並ぶ。

その宮殿の偉大さ、複雑さ、巨大さは、各植民地におかれた総督府の比ではない。

内部も凄まじい。

そこいらの平民ならば、見ただけで気絶してしまうほど装飾華美な宮廷内。

飾られている皿一つでも、平民なら一年は暮らせる額になるだろう。

そこは正にブリタニアの、否、世界の中心といって過言ではなかった。

そして宮殿の更に中心。

玉座には、この世界の誰よりも権力を持つ男が、この国の皇帝が、威風堂々と座っていた。

神聖ブリタニア帝国第98代皇帝シャルル・ジ・ブリタニア。

帝国、いや世界で最低限の学力のある者ならば、この男の名を知らぬ者は恐らくはいない。権力争いで腐敗しきった帝国を建て直し、世界の三分の一を支配する大帝國にまで成長させた英雄皇帝。

いや皇帝だけじゃない。

宮殿内にはブリタニアにおける数多くの重鎮達が揃っている。

第一皇子オデウツセウス、帝国宰相シュナイゼル、第一皇女ギネヴィア、早々たる面々だ。

その者達が全員、これより来る一人の男を待ちわびている。

やがて、宮殿内に一人の男が歩いてきた。

ラウンズ専用の騎士服、そして夜よりも暗い漆黒のマント。

ナイトオブナイン、ノネット・エニアグラムの弟、レナード・エニアグラム。

それが男の名である。

普段の飄々とした雰囲気は完全になりを潜め、正に貴公子然とした態度で、王の下に進んでいく。

そして皇帝の前に立つと、恭しく跪き、頭を垂れる。

皇帝シャルル・ジ・ブリタニアが作法に則り声をかけた。

「レナード・エニアグラム。汝、ここに騎士の制約を立て、我がブリタニアの騎士として戦うことを願うか」

「イエス、ユア・マジエステイ」

レナードは、頭を下げたまま静かに言葉を返した。

「汝、我欲を捨て、この皇帝シャルル・ジ・ブリタニアの正義のため、剣となり盾となることを望むか」

「イエス、ユア・マジエステイ」

レナードは答え、腰に差していた儀礼用の剣を抜き、皇帝に差し出す。

皇帝はそれを受け取り、レナードの肩を剣の平で軽く打った。

「よかるう。汝を帝国最強の十二騎士、ナイトオブラウンズへの加入を認める」

廠かでありながら、豪快なる宣誓と共に剣が返される。

レナードはそれを受け取り、再び腰に収めた。  
皇帝の手の動きに従い、背後を振り返る。

瞬間、一斉に拍手の音が鳴り響く。

皇族から大貴族まで、全ての人間が拍手をする。

その中には見知った顔もあれば、見知らぬ顔もあった。

(そうか、俺はラウンズになったのか……)

実感が唐突に襲ってくる。

しかし、だからといって恐縮したりはしない。

あくまでも静かに、現実を受け止め、理解した。

今度はどうやら学校の屋上のような。

黒髪の少年と東洋人らしき少年、そしてレナードがいる。

「久しぶり、というべきか。

あの空港以来だな、ルルーシュ。」

「レナード卿はルルーシュを!?!」

「幼馴染だよ。

俺の姉がマリアンヌ様……ルルーシュの母君に稽古をつけて貰っていてね。

その縁で知り合った。」

枢木の疑問に簡潔に答える。

それよりルルーシュが生きていた。

その事実を噛み締める。

「今は、どうしてるんだ？」

「察しはつくだろう。」

ブリタニアの皇子ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアは記録上死んだ事になっている。

今はルルーシュ・ランペルージ、それが俺の名だ。」

「成る程、アツシュフォードか。」

確かにこの家はヴィ家の後援貴族の筆頭だったな。」

「ああ。前より随分と頭がまわるようになったじゃないか。」

それで、お前はどうするつもりだ。」

「！」

視線だけで人を殺せるような殺意が貫く。

ルルーシュは聞いている。

それを知った上でお前はどうするのだと。

決まっている。

レナードは皇帝陛下の騎士、ナイトオブブラウンズ。

その力は皇帝陛下の為にだけ振るわれる。

ならば、死んだと思われていた皇子が見付かったなら、俺のとるべき選択肢は、一つしか残されていない。

「あいたたたたたっ！」

わざとらしく頭を抱えるレナード。

「どうした？」

訝しげにルルーシュが訊ねる。

「いや実は最近なんだか『認知症』に掛かったみたいでさ。子供の頃の記憶が薄れてるんだよなあ。

ルルーシュって一体全体どんな奴だったか、いや、そもそもルルーシュって名前だったか全然思い出せない！ああ、こんな記憶が不鮮明じゃ陛下に報告する訳にもいかないわな。」

今度も学校。

けれど屋上ではなく、テラスのようだ。

車椅子に座る少女と、当然のようにレナードがいる。

「レナードさん……………実は伝えたいことがあるんです」

「なんだ？」

ゆっくりとナナリーを見る。

頬が紅潮していた。緊張しているらしい。

「私は、貴方が好きです。レナードさん」

「……………」

レナードは黙って、静かにナナリーの言葉を受け入れた。彼は鈍感じゃない。

ナナリーの気持ちにも、なんとなくだが気がついていた。

もし仮に自分がナナリーに「俺もナナリーが好きだ」なんて言え

ば、今日から恋人同士になるのかもしれない。

（俺の返答次第か……。好きです、と言われちゃ答えなければならぬからな。自分がどう思っているかを）

ナナリーを好きか、だと？

好きに決まっているじゃないか。

たぶん、初恋なのだろう。

八年前はまだ自分の感情を理解しきれなかったが、今でははっきりと分かる。

だからこそ、答えも決まっていた。

「悪いけどナナリー。」

俺はお前とは付き合えない」

「そう、ですよね……」

ナナリーは特に驚いた様子もなく頷いた。

彼女も馬鹿ではない。

レナードが好きでも嫌いでもなく”付き合えない”といった理由も分かっているだろう。

もしかしたら、そう返されると分かった前提で想いを伝えているのかもしれない。

もしレナードがナナリーと付き合い恋人同士になったとしよう。そうなると、メディアや貴族達もその恋人を注目するだろう。なにセブリタリア国内において、少なくとも影響力を持つレナードの恋人だ。

誰しもが興味を持つだろう。

そしてそれは、ナナリー・ランペルージという少女が、ブリタニアの皇女ナナリー・ヴィ・ブリタニアとバレる可能性を格段に増す事となる。

同時にその兄であるルルーシュも。

ナナリーは分かっていた。

レナードも分かっていた。

ただナナリーは、それでも自分の想いを秘めたままにいてるのが嫌で、伝えたのだろう。

「じゃあ、ナナリー。」

俺はパーティーに戻る。風邪ひくなよ」

今度はパーティー会場のようだ。

ドレスで着飾った女性とレナードが談笑している。

「だから、貴方も一仕事終えて暇が出来たらアッシュフォードに顔出しなさい。

これは命令じゃなくて、お願いね」

「……………分かりました。では、人を待たせているので失礼します」

レナードは気まずい雰囲気を感じ取り早足でその場を去った。

別にミレイから言われた、アッシュフォードに顔を出すというのが嫌だった訳じゃない。

寧ろそれもいいかもしれない、と考えていた。

だが再び学園に通うことは、もうない。

エリア１１でアッシュフォード学園に通っていた一っだけ分かつ

た事がある。それは他の皆と自分との明らかな違い。

レナードから見てアッシュフォードの学生達は羊だ。平和を喜び、草を食べて暮らす羊。

対して自分は謂わば狼だ。戦争の中でこそ充実し、肉を食い血に飢える獣。

根本的に違う。

狼が羊の群れで暮らせる訳がない。

だが同じパイロットであるスザクは違う、ルルーシュもだ。

あの二人は確かに自分と同じように戦場に身を置いている。しかし二人は羊でも狼でもなく、例えるならば人間。肉だけじゃなく草も食べるし、血に飢える事もない。だから羊とも一緒に暮らせる。

たぶん、自分は一生軍人として生きるだろう。

そしてどこかの戦場で死ぬ。

戦争のない世界、というのは考えた事もなかった。

いや考えたくなかった。

戦争がなくなれば自分のような狼はどこで生きればいい。

だが考えなくてはいけない。もし何十年も生きたいのならば。

やがて戦争は終わる。

世界はいずれブリタニアの色一色に染まるだろう。そうすれば戦争はもうない。あるのは反政府勢力による抵抗活動だけ。そしてそれさえも終われば……自分のような獣は必要なくなってしまう。

「狡兎死して走狗烹られ、高鳥尽きて良弓蔵る……」。

俺も長生きしたかったら、雑食にならないといけないのかもしいないな」

レナードの呟きは誰にも聞かれることなく虚空へと消えた。



今度は病室だ。

幾たびの戦場を超えてきた切嗣には分かる。

ここは病室であり、分かれの場なのだ。

「そうか。ならばレナードよ。

お前は新しきナイトオブワンとしてルルーシュを支えるのだ」

「ご冗談を。私はたかが十八年しか生きていない若輩者です。他に適任者がいるでしょう」

「帝国最強の騎士ナイトオブワン。ただ強いだけでナイトオブワンにはなれぬ。

ナイトオブワンには実力だけではなく、世界を見渡す視野の広さ、部下を思いやる優しさ、主君へ尽くす忠誠心、時に肉親すら切り捨てる非情さが必要だ。

ラウンズでそれ等全ての条件を備えているのは、レナード。お前だけだ」

「恐縮です。ですが他にも適任者はいます」

「ほう。誰だ、それは？」

「姉上などはどうでしょうか。他にもジノやドロテア、モニカも」

「ヴァインベルグには忠誠が足りぬ。ドロテアには視野の広さがない。い。

エニアグラムは猪突猛進な所があり、モニカは優しすぎる。

……お前の実力を買って指名するのだ。だが、引き受ける自信がないというのであれば、無理強いはせん」

「……………謹んでナイトオブワン拝命致します」

レナードがシャルルに対して頭を垂れた。

「ルルーシユ。名君には師があり、普通の君主には友があり、暗君には奴隷しかいないという。

此処に居るレナードは、お前の騎士であり朋友であり助言者となってくれる男だ。

この男を重宝すれば、お前が後の世に暗君と呼ばれることはないだろう」

言い終わると、シャルルが体をベッドへ預ける。

「陛下！」

只ならぬ様子を察してか、レナードが叫ぶ。

他の物も続いた。

「愚かなものよ。一つの目的の為に生きておったが、最後の瞬間になって迷いが出た。

ならば、この結末も当然、か……………。

ふふふ、兄さんが来ておるわ。そうだな、そろそろ逝くとしよう」

そして運命の日がやってきた。

彼が『悲恋』という名を背負う事になる決定的な出来事。

幼い日より恋い焦がれた少女との別れの日が。

レナードの目の前には一人の少女が寝かされている。

彼女の名はナナリー・ヴィ・ブリタニア。レナード・エニアグラムという少年が愛した女性の一人であり、恐らく最も焦がれた女性。

「……レナードさん……ご迷惑かもしれませんが……言わせてください……」

「なんだ………ナナリー？」

静かに耳を傾ける。

精一杯笑おうと思い、止めた。

せめてこの日だけは演技ではなく正直な自分でいたかった。

「レナードさんは……一杯駄目な所があります……。女癖が悪かったり……直ぐに私をからかったり、日常がいい加減だったり……でも、私は……そんな駄目な所も良い所も全部含めて………私は、レナードさんが好きです」

嗚呼、今ならば確信できる。

例えこの身が煉獄に堕ちようとも、この時の記憶を永久に忘れることはない。

「ああ。俺も好きだ！ ナナリーの黒い所もアホな所も、暴力的な所も全部ひっくるめて、俺はナナリーのことが好きだ！ だから……！」

永遠のような刹那の時間。

それで衛宮切嗣の夢は終わる。

まだ聖杯戦争は終わってない。

切嗣は夢から離れ、現実を歩み始めるだろう。己のサーヴァント

と共に。

残りサーヴァント、四体。

依然として、最後のサーヴァントは姿を現さない。

エクスカリバー  
約束された勝利の剣

ランク：A++

種別：対城宝具

レンジ：1～99

最大捕捉：1000人

アーサー王が生前一時的に精霊から授かった聖剣。人ではなく星に鍛えられた神造兵装であり、人々の「こうあって欲しい」という願いが地上に蓄えられ、星の内部で結晶・精製された「最強の幻想」である。彼が死ぬ間際のアーサー王から譲り受けた（強奪した）モノ。

本来は所有者であって使い手ではないのだが、もう一つの宝具であるオール・ハイル・ソルジャー軍人に栄光をと併用することで使い手としての真名解放も可能。神霊レベルの魔術行使を可能とし、所有者の魔力を光に変換、集束・加速させることで運動量を増大させ、光の断層による“究極の斬撃”として放つ。攻撃判定があるのは光の斬撃の先端のみだが、その莫大な魔力の斬撃が通り過ぎた後には膨大な熱が発生するため、結果的に光の帯のように見える。その威力は絶大でこと聖剣という力テゴリーの中では頂点に位置する。威力的にはアーサー王の放つソレと同等。贗作ではなく本物であり、なによりレナード自身がアーサー王を打倒したというのも大きい。

信用は黄金よりも尊い

額にもよるが意外にも失った金を取り戻すのは、それほど難しくはない。

けれど一度失ってしまった信用を取り戻すのは、並大抵の事では出れない。

人からの信用とは長い間積み重ねなければ得られないモノであり、一度の裏切りで全てが崩壊してしまうほど脆いものだ。

全身の気だるさを耐え、レナードは拠点の縁側でぼんやりと星を眺めていた。

自身の世界とは異なる歴史を歩んできた並列世界。技術力も思想も全てが違うこの世界ではあるが、前の世界と変わらず存在するものも確かにある。

その一つが星空だ。排気ガスやら何やらで多少見えずらくなっているが、それは普通の人間の話。サーヴァントの視力ならば都心のど真ん中でも海のような星空が見える。

「セイバー、そこにいるの？」

「アイリスフィールか」

アイリスフィールからは霊体化した己の姿は見えない。なので実体化して姿を現す。

「切嗣は……」

「言わずとも分かる。ラインで繋がっているからな。まだ、目が覚めていないんだろう」

レナードから見ても切嗣の傷は深かった。

魔術には疎いレナードでも、切嗣の使った固有時制御五倍速というのが、どれほど危険な魔術なのかは分かる。この世界は常に一定のスピードで動いている。それが自然の摂理であり真理だ。だがそれを自身の体内時間とはいえ加速させるなど、普通の魔術師では到底不可能な魔術だ。ましてや五倍速など、レナードのようなサーヴァントや死徒などの再生能力を持つ化け物でもない人間には負担が多すぎる。必然、切嗣は斃れた。人の身に余る魔術を行使した代償として。

「でも切嗣だけじゃないわ。

セイバー、貴方の方は大丈夫なの？」

「……………味方に隠し事しても仕方ない、か。

正直かなり不味い状況だ。ルキアーノ、アサシン、アーチャーとの三連戦。それによるダメージ。追い打ちを掛けるかのように固有結界内の宝具一つと、エクスカリバーなんて代物の真名解放を行ったんだ。寸前で聖剣の威力を抑えたからどうにか消えずに済んだが、もし全力で放っていたら今頃俺は座に戻っていた。追い打ちをかけるかのように切嗣があれば。戦うにしても今の俺はサーヴァントになる前のただの人間だった頃以下の能力しかない」

「それじゃあ、今敵のサーヴァントが来たら。残っているサーヴァントは貴方を除いて三人。まだ過半数が残っているのに」

「孫子曰く三十六計逃げるにしかず。だが逃げられるかどうか怪しいな。」

戦には五つの要点がある。戦意があるときに闘い、戦えなければ守り、守れなければ逃げる。あとは降るか死ぬかだ。相手がライダーなら降るといふ選択肢があるかもしれないが、ランサーでも来たら潔く自決するしかない。

実際、今襲われたなら数合と持つかどうかすら怪しい」

「そんな……」

「せめて主任がいればな。もしかしたら切嗣の傷もどうにかなったかもしれないが。」

俺にも医学知識がない訳じゃないが、医者 of 真似事が出来るくらいだ。主任のようにプロフェッショナルという訳じゃあない。アイリスフィールの治癒魔術は？」

「掛けたわ。けど……」

「そうか」

その顔だと大した効果はなかったのだろう。

勘違いされ易いが魔術とは別に万能ではない。魔術の基本とは等価交換。つまり魔術を使うにはそれなりに等価を払う必要があるのだ。

そも確かに魔術は火を起こすことも建物を爆発させることもでき

る。けれど考えてみればいい。火を起こすならライターを使えばいい。建物を爆発させたいなら爆弾を使えばいい。そして世界を焼き尽くしたければ核の炎を使えばいい。なにも面倒な手順を踏んで魔術に頼る必要などないのだ。魔術師の総本山たる時計塔には治癒魔術師もいるにはいるが、はつきり人を治すという一点において魔術に頼らない医者のほうが殆どの治癒魔術師よりも優秀だ。

「それよりもアイリスフィール。お前こそ大丈夫か？」

「えっ！」

「言つたろう。医者 of 真似事 なら出来ると。」

見た限り、かなり具合が悪いだろう。外に出るのは初めてらしいし、もしかすれば性質の悪い風邪でも引いたんじゃないか？ 悪い事は言わない。休めるときに休んだ方がいい」

アイリスフィールは隠そうとしていたが、彼女の頬には玉のような汗があり、顔もどこか無理をして笑っているように見えた。

「……本当、貴方つて隠し事が通じないわね」

「幼い頃から周囲がそういう大人ばっかだったからな。権力の中核にいと権謀術数にも自然と長けてくる。なにより、俺は友達の嘘を見抜くのが得意中の得意なんだ」

ニヤリとレナードが笑う。

旅客機内でアイリスフィールが言ったことを覚えていたのであろう。

「ごめんなさい。ここに来てちょっとだけ疲れが出ちゃったみたい。切嗣や貴方が戦っているのに、本当に情けな

」



「アイリスフィール、さつきも言っただろう。俺は 友達の嘘を見抜くのが得意中の得意 だって」

「どづいこと？」

「ルキアーノ……バーサーカーを殺した時、そしてアサシンを殺した時。苦悶に顔を歪めたらう。そしてアイリスフィールは残りサーヴァントが俺を除いて三体といった。俺はアーチャーには逃げられたと言ったのに。となると、だ。アイリスフィール、君のその体調の悪さはサーヴァントの消滅と密接な関係があると考えた次第だが、如何？」

アイリスフィールが少し戸惑っていたが、やがて隠し通せないと察したのか真っ直ぐにレナードの目を見る。強い瞳だ。今正に正体不明の病に体を蝕まれているとは思えない程に。

「そうよ。貴方の考えは正しい。少し話をしましょうか。冬木の聖杯戦争が、どのようなものなのか？」

アイリスフィールから語られた聖杯戦争の真実とは驚きの連続だった。

先ずは聖杯と言うシステム。聖杯は願いを叶える者を選定する為に魔術師達にサーヴァントを召喚させて殺し合わせるという話だったが、それは正しくはなかった。

選定させる為にサーヴァントが必要なのではない。アイリスフィールの話によると、願いを叶えるためにサーヴァント同士を殺し合わせる必要があるということだ。

レナードは魔術師ではないので上手くは分からないが、つまりは

こういうことだ。

冬木市には自然界の魔力を長い年月をかけて集めサーヴァントを召喚させる土台を整える大聖杯と、消滅したサーヴァントを一時的に世界に止めえる小聖杯の二つがある。サーヴァント、つまり英霊とはそれ単体が膨大な魔力と神秘の塊だ。小聖杯に脱落したサーヴァントという力を注ぎ、十分な力が溜まった所で大聖杯にある魔法陣を起動させる。それにより大聖杯はサーヴァントという膨大な力を使って、願いを叶えるための願望器として作動するらしい。

ちなみに本来の大聖杯の使用方法は魔術師の到達点たる『』に辿り着くための手段であり、『』という世界の外へ繋げるにはサーヴァント六体ではなく七体分を注がなければならぬらしい。ただ世界の中に作用する願いに関しては六体に事足りるとか。

だがレナードが真に驚愕したのはそんな事ではない。  
もっとクレイジーで凄まじい事。

「アイリスフィールの心臓が、小聖杯だって？」

「そうよ。第三次までの聖杯は無機物だったのだけれど、第三次はサーヴァントとの戦闘の余波で聖杯が壊れてしまって、結局は失敗に終わったそうよ。」

聖杯を造る役目を担うアインツベルンはその失敗を踏まえて」

「無機物ではなく有機物。」

ホムンクルスの心臓を小聖杯にした訳か」

「驚いた？」

「まあな。しかし随分と詐欺じゃないか。」

英霊の座で暇してた俺に与えられた情報は、他の六人のサーヴァントを潰せば願いが叶う、ってだけだったというのに」

「ごめんなさい。今まで騙していて」

「いいさ。それくらいのリスクに怯えてビビッてるようなら、俺は英霊なんてなつてない。

しかし分らないな、アイリスフィール。聞いた話だと切嗣が勝利しても敗北してもお前に待っているのは死だけだ。なのに如何して戦う？」

アイリスフィールの心臓は聖杯だ。

その人間としての機能は消滅したサーヴァントを取り込めば取り込むほど失われていく。

もう後一体でもサーヴァントを取り込めば、今度こそアイリスフィールは動けない体になるかもしれない。そして六体も取り込めば、間違いなくアイリスフィールは人間として終わるだろう。

「切嗣には内緒にしていることなのだけど。

本当はね。切嗣の言う世界の救済とかは良く分からないの。私は切嗣のように戦場を渡り歩いた訳でもなければ、ずっとその願いを抱き続けた訳でもないから。それに私の世界なんてアインツベルンの城くらい。正直、世界平和なんて言われてもピンとこなかったわ」

「なら、なぜ？」

「……理由なんて大したことじゃないわ。

ただ切嗣は約束してくれたわ。世界の救済を成し遂げた後はイリヤの為に生きてくれるって。

それに私達が失敗すれば、今度はイリヤが聖杯の役目を与えられる

でしょうね。

私の願いなんてそんなものよ。夫と娘を守りたい。そんな有り触れた願い。

切嗣の恒久的世界平和と比べ物にならない小さな願いよ」

「そっか」

レナードは立ち上がる。

もう少し魔力の溜まる場所にいったほうが、ちょっとは回復を促進できるかもしれない。

「ちょっと、待って」

だがその途中、アイリスフィールに呼び止められた。

「どうした？」

「貴方のダメージ、そして切嗣を治す。

その二つを同時に成し遂げる方法が一つあるわ」

「そんな都合の良い方法がどこに」

「ここよ。私の中にある」

そっとアイリスフィールはレナードの手を掴む。

するとどうだろう。不思議とアイリスフィールの病状が和らいだかのような錯覚を覚えた。

「これは一体……」

「最初に貴方が召喚された時の事を覚えてるかしら。そう召喚された貴方を騎士王アーサーと勘違いしたあの時を」

「当然覚えてるが」

「英霊の召喚には触媒が必要よ。

そしてアインツベルンがアーサー王を呼び出す為に用意した触媒は、これ」

どのような魔術を使ったのかは知らない。

けれどアリスフィールの体から黄金の光が漏れたかと思うと、やがて一つの物体が現れる。それは失われた宝具。彼の騎士王の眠る妖精郷を現す聖剣の鞘。所有者の老衰を停滞させ無制限の治癒を与える時まで言われている最上級の結界宝具。

「アヴァロン全て遠き理想郷……」

「余り効果はなかったのだけれど、ないよりはマシだからと言って切嗣が私の体に埋め込んだの。これはアーサー王の所有物。これを扱えるのもアーサー王だけ。

けれど、貴方なら。アーサー王の聖剣を持つ貴方なら、使えるはず」

確かに使えるだろう。

レナードのオール・ハイル・ソルジャー軍人に栄光をとば物体を宝具化するだけではなく、どのような宝具の使い手になれる能力でもある。

なによりレナードは実際にアーサー王と戦い勝利した英雄だ。だからこそ彼の騎士王と同等程度に聖剣を使いこなせるのだ。ならば聖剣の鞘を使えたとしても、可笑しくはない。

「いいのか？」

最後に確認をする。

確かに微弱とはいえど、この鞘はアイリスフィールに多少の治癒を与えていただろう。

それを失うという事は、アイリスフィールの病状が更に悪化することを示している。

「勿論よ。けど約束して。

必ず切嗣を聖杯戦争の勝者にするって」

儂くも強い笑顔。

それに対して、レナード・エニアグラムは。

「イエス、ユア・ハインス」

最上級の礼をもって応じる。

ここに契約は完了した。これよりレナード・エニアグラムは、本当の意味で切嗣を聖杯戦争の勝利者にする為に忠義を捧げる一つの剣になる。

レナードは恭しくアイリスフィールに頭を垂れ、聖剣の鞘を受け取った。

拠点である衛宮邸の廊下を歩く。

目指す場所は唯一つ。衛宮切嗣がぐうすか眠っている部屋だ。

「たつく、他人の女には手を出さない主義だが。俺とした事が人妻にトキメクとはな」

苦笑する。

けれどそこには独特の清々しさがある。

取り敢えずレナードがやる事は一つ。切嗣を勝者にすることだ。赤い外套の騎士が最後に言った言葉が思い起こされるが、それはレナードの歩みを止める事にはならない。現状あの騎士が言った事はただの戯言、虚言と見るのが妥当であり、聖杯戦争を止める理由にはならないのだから。

第四次聖杯戦争の小聖杯であり、ホムンクルスとして嘗ての聖杯戦争の記憶を持つアイリスフィールが、そんな事はないと断じたのだ。可能性がごくごく低いと考えていいし、事の真偽は勝者となつてから確かめればいい。

「なあマスター。お互い良い女に恵まれるじゃあないか」

虚空に向かって呟く。

と、丁度衛宮切嗣の眠っている部屋に到着した。

そしてレナードは思いつき扉を蹴破った。

「起きろ、マスター！ 愉快に苛烈で最後の戦争の時間だ！」

SEARCH 21 騎士の誓い（後書き）

改めてFate/zeroのヒロインはセイバーではなくアイリス  
フィールと再確認した今日この頃。あ、ちなみにレナードがアイリ  
スフィールとくっつくことはありませんよ。あくまでアイリは切嗣  
の嫁です。レナ×アイリとかないです。

次回は遂に登場する最後のサーヴァント……………と見せかけておい  
てイスカンドルVSランサー！。

P.S.

活動報告のアレは今日の十八時から午前0時あたりに投稿できそ  
うです。



人は他人のために存在する。何よりもまず、その人の笑顔や喜びがそのまま自分の幸せである人たちのために。そして、共感という絆で結ばれている無数にいる見知らぬ人たちのために。

本当にそうだろうか。私は知っている。たった一つの馬鹿みたいな夢を目指して、ただ己の欲望の赴くままに駆け抜けた一人の大王を。その在り様は暴君であっただろう。愚かであっただろう。けれど王は惹きつけたのだ。その馬鹿みたいにデカい夢で。そして結びつけたのだ。死して尚も断ち切れぬ、強靱なる結束。これを否定することとは、誰にも出来ない。

時刻は午前9時を過ぎ午前10時。

当然ながらこの時刻になると開発中の新都は兎も角として、このような広間には人なんていない。しかもケイネス・エルメロイが人避けの結界を張っているのだから、一般人が紛れ込むことは確実にないだろう。

「来たかね、ウェイバーくん」

ケイネスが声を掛ける。

するとケイネスの背後で息をのむような音が聞こえた。

「……………ここ、ここで決着をつけるんですか？」

ケイネスとウェイバーがここでこうして対峙しているのは完全なる偶然だ。

ただ偶々ケイネスが夜の街を散策している所に、何故かアドミラブル大戦略と描かれたTシャツを着た征服王イスカンドルに引きずられていたウェイバーに出会ったからだ。

「余としては、ランサーとセイバーに決着をつけさせてから見えようと思っていたのだがのう」

ウェイバーの背後を守るかのように  
何故か現代風の服装をして  
立っていたイスカンドルがケイネスに言う。けれどそれに嘲笑をもつて応じた。

「彼の征服王が狡い考えをするものだな。大方ランサーとセイバーを戦わせ疲弊した所を狙おうという腹だったのだろう」

「はあ、狡いのは貴様のほうではないか。何故余がそんな面倒くさい真似をせにやなんのだ。大体、余が真に勝利のみを追い求めるのであれば、前に三体のサーヴァントが集結した時に全員纏めて叩き潰しておるわ」

流石に呆れて声も出なかった。

イスカンドルは本気だ。挑発でも妄想でもなく、本気で三体同時に相手するつもりだったのだろう。けれどイスカンドルはそれをしてない。何故かと言うと、

「だが戦場の花は愛でる性質でな。ランサーとセイバー。共に胸の厚くなる英雄達であった！ ならばその勝敗をつけさせたいと思うのは、余のような王ではなくとも当然の事であるうに」

「……………ウェイバーくん。君も同じ考えなのかね？」

「えっ、僕？」

ケイネスはイスカンドル相手では埒が明かないと考えたのか、ウェイバーへ矛先を変えた。

「さてウェイバーくん。君と私は聖杯を求めて殺し合う関係となったのだが……………そうだな。君のような三流といえど弟子は弟子。多少の情けはある。」

どうかね。もし君が三角の令呪をもって己がサーヴァントを自害させ、泣いて謝るといっているのであれば私はこれまでの事を水に流してあげようじゃないか」

「……………!!」

ケイネスはウェイバーに道を提示した。

別にケイネス自身が戦うのが嫌な訳じゃないし、別にウェイバーを殺すのを戸惑っている訳じゃない。だが楽出来るところは楽をしようと考えただけだ。

しかしそれはウェイバーとて同じ。ウェイバーが本当に降参すれば命は助かる。命を懸けた殺し合いなどせずとも生きる事は出来る。つまり『楽』な選択肢だ。

対して彼の征服王をサーヴァントとしているとはいえ、自身の師であり魔術師としては足元どころか足元にすら届かないケイネス・エルメロイと戦うのは『苦難』な道だ。普通なら『楽』を選ぶ。人間とはそういうものだ。けれど、



既に武装を済ませていた。その巨体とマスターであるウェイバーの体は神威ゴルディアス・ホイールの車輪の中に。

神威ゴルディアス・ホイールの車輪はその派手さと突撃力にばかり目が行ってしまいがちだが、実は防御面においても優れた宝具だ。雷による防御、なによりも時速300Kのスピード。イスカンドルに攻撃を加えるのは並大抵のことではないだろう。

けれどその程度でランサーが怯むなど有り得ない。ケイネス以上に獐猛な笑みを浮かべてイスカンドルと対峙した。

しかし、この場にいるランサーもケイネスも、マスターであるウェイバーですら見誤っていた。征服王イスカンドルが『王』であることを。

なによりもイスカンドルが真に『征服王』である証があることを。最初に異変に気付いたのはランサー。

「これは砂塵？」

ランサーは砂塵が流れる中心点を探すと……程なく発見した。なんてことはない。目の前にいるイスカンドルの背後から砂塵は溢れて来ていた。

いや溢れてきているだけじゃない。世界が、世界が砂塵に侵食されていく。

「固有、結界……！ 馬鹿な、征服王は魔術師だったともいうのか!?!」

この中で最もその魔術に詳しいケイネスが思わず叫ぶ。

無理もないだろう。固有結界とは魔術の奥義にして魔術師達にとつて一つの到達点。

時計塔のエリート講師であるケイネスですら、発動する事の出来

ぬ大禁呪なのである。

それをあろううことか魔術師でもないサーヴァントが使つなどとは。

「勿論違う。余一人で出来る事ではないさ。

これは嘗て我が軍勢が駆け抜けた大地。余と苦楽を共にした勇者が、等しく目に焼き付けた景色だ。

この世界、この景観を形に出来るのは、これが我等全員の心象であるからだ！」

征服王イスカンダルの周りに騎兵達が次々に実体化していった。

その中にはそれ単体で伝説を背負うに相応強い英雄もいる。いや全員が全員、伝説を成し遂げた英雄たちであった。

「サーヴァントの連続召喚だと……。そんな無茶苦茶な」

十人や五十人では留まらない。

その全てが無双の英霊で構築された騎兵達は膨れ上がり、やがて全てが集結する。

総数は約千。だがただの千ではない。全てが英霊として招かれしサーヴァントで構成された千だ。雑兵の集まりとは格が違う、密度が違う。

認めざるをえない。

この絆と結束。イスカンダルは『王』であった。

間違いなく『王』であった。時計塔の名物講師たるケイネスも、クランの猛犬と謳われたランサーでさえ認めざるをえない真実。

恐らくこれを否定することは神であらうと、原初の英雄王でさえ不可能。

「肉体は滅び、その魂は英霊として『世界』に召し上

げられて、それでもなお余に忠義する伝説の勇者たち。時空を超えて我が召還に応じる永遠の朋友たち。彼らとの絆こそ我が至宝！ 我が王道！

『アイオニオン・ヘタイロイ 王の軍勢』なり

！！！」

SEARCH 2 王の軍勢（後書き）

なんだかタイトルを決めるのが一番簡単だった今日この頃。

次回はランサーの活躍、そしてそろそろ最後のサーヴァントが姿を見せるかも。



SEARCH 23 王(前書き)

遂に現れる最後のサーヴァント。  
当たっている人は……いるのでしょうか。

クランの猛犬。

アイルランドの大英雄の異名でもある。

そして今、アイルランドの大英雄とマケドニアの征服王が激突する時が来た。

相手は無双の軍勢。けれど彼の騎士は軍勢を相手にする戦場に慣れ親しんだもの。

勝敗は、神のみぞ知ることであろう。

目の前に広がる英傑の軍勢。

不覚にもケイネス・エルメロイは膝が震えるのを止められなかった。

けれど無理はないだろう。固有結界という大魔術に囚われただけならまだしも、千人のサーヴァントと対峙して恐怖という感情を抱かないなど、魔術師とはいえどただの『人間』の精神ではないケイネスには不可能だ。

だが征服王イスカンダルはそんなケイネスの事は気にした様子もなく、彼のサーヴァントであるランサーに告げた。というよりは最後通牒を叩きつける。

「ランサーよ。戦いを始める前に問うておく事がある」

「なんとなく予想がつくが………いいぜ。なんだ？」

「槍の騎士ランサー！これが最後の問答だ。」

改めて我が盟友として朋友として、余に降り我が軍勢に加わらんか？」

ランサーは征服王の問いに答えなかった。

変わりに自らのマスターであるケイネスを小突く。

「だそうだけ、マスター。ご高名な征服王のことだ。」

俺が降ればお前の命は見逃してくれるんじゃないか？

ケイネスの舐めるかのような発言に、怒りでみるみる顔が赤くなっていく。

膝の震えは自然と消えていた。

「ふ、ふざけるなッ！誰が三流魔術師がマスターのライダー風情に膝を屈しなければならぬ！お前はどこまで愚鈍なのだ！？」

「なら簡単じゃねえか」

何でもないかのようにランサーは言った。

肩をすくめて、やれやれというようなジェスチャーをする。

「なに？」

「こちらとた万を超える軍勢を相手にしてきたんだぜ？たかが一万程度なら釣りがるってもんだ」

そう怯える必要などなかった。

迷う必要すらなかった。

ケイネス・エルメロイは、恐らくこの聖杯戦争に参加したマスターの中でも最高の魔術師だ。その最高の魔術師が召喚したサーヴァントが、最高でない筈がない。

だからケイネスの言葉は決まっていた。

「我が僕たる槍の騎士よ。令呪をもって命じる。

目の前の木端を粉碎せよ！」

ケイネスの手から令呪の一角が消え去る。

自らのサーヴァントに下せる絶対遵守の命令権たる令呪。だが令呪とは何もサーヴァントを縛る為だけのものではない。

マスターとサーヴァント。お互いの合意によって下された命令は、サーヴァントの能力を一時的にブーストすることも可能なのだ。

「さて、と。っていう訳だ、征服王。

返答はする必要もねえよな？」

「然り。勿体なくはあるが仕方あるまいて。

槍の英霊たるランサーよ。余もまた汝の誇りに敬意をもって、全力にて相手をしよう。

朋友たちよ！ 相手もまた余と同じく聖杯によって招かれし無双の英雄！

相手にとって不足無し！ いざ益荒男たちよ、眼前の敵に我らが絆と覇道を見せつけようぞ！」

『おおおおおおおッ！！！！』

イスカンドルの号令に軍勢が一度に吼える。

まるで天にまで届く、いや天をも犯す叫び。

それを前にしても槍の英霊に恐れはない。ただ駆けた。生前の戦いと同じように、ただ駆けた。相手がマケドニアの征服王が引き連れた軍勢だろうと神様の軍勢だろうと、ランサーは怯まない。元よりそんな困難などつくの昔に潜ってきたのだ。

「そついやテメエには俺の真名を言つてなかつたけな」

全身をバネのようにしてランサーが跳躍する。

棒高跳びの選手にも似ていたが、跳躍した高さが以上だ。天高く、文字通り軍勢全てを見下ろせるほどの位置まで跳躍すると、ランサーは己の体を弦のように捻り、そして。

「我が名は赤枝の騎士が一人、クー・フリーンツ！」

この一撃魂に刻め！ ゲイ・ボルグ 突き穿つ死翔の槍ッ！」

槍が投擲される。

嘗て赤い騎士に放ったものが対人用だとすれば、今ランサーが行ったのは対軍用であり、真紅の魔槍本来の使用方法。そうソレはそもそも投擲する為の槍。対人用のそれはランサーが独自に編み出したものに過ぎない。

真紅の魔槍が飛来する。音速を遥かに超えた速度で投擲された槍は、軍勢の一角に落ち、そこいら一体に炸裂弾のように弾けた。

「これは惜しいのう。彼の猛犬を勧誘し損ねるとは。

だがクー・フリーンよ。見事な一撃ではあるが、それで我が軍勢を打倒できると考えているならば、形原痛い」

イスカンドルが軍勢に指示を飛ばした。

一見馬鹿に見えるイスカンドルだが、実は頭は決して悪くない。それは彼の持つ軍略のスキルが証明している。そう馬鹿と頭が悪いのは違う。ようするにイスカンドルは頭のよい飛びつきりの大馬鹿者ということであった。

征服王の軍略が全軍に浸透する。

騎兵達が一斉に槍を構えた。殲滅対象は無論、英霊クー・フリーン。

対するランサーは槍を投擲した後、重力に従い落下していた。どいう手段を用いたのか投擲した筈の槍は既にランサーの手に戻ってきている。

地表まで残り数メートル。そのまま落下すればランサーに待っているのは騎兵達による串刺し刑だろう。

だがそうはならない。

ランサーは地表に落下する前に、虚空に一つの文字を描いた。

もしケイネスやウェイバーならば気づいただろう。それはルーン。しかもランサーが操るのは原初のものだ。その効力は、現代のルーン魔術師とは比べ物にならないだろう。

ルーンは直ぐに効果を発揮した。

空中にあるランサーが重力を無視して左方に跳躍する。だが相手は千の軍勢だ。落下地点が多少ずれたとしても膨大な波からは逃れられない。

それでも串刺しにならずには済んだ。

ランサーが戦場を駆け抜ける。

異なる歴史においては、無数の縛りを受け弱体化していた彼だが、

今この時においてそんな無粋な縛りは存在しなかった。

優秀なマスターに恵まれ、令呪によるブーストを受けたランサーは、嘗てないほど絶好調である。

槍だけではない。その卓越したルーン魔術師としての腕をも存分に使って戦場を駆けていく。

だが戦場を駆けながらも彼はサーヴァントとマスターのラインを使った思念通話により、マスターであるケイネスより一つの情報を授かっていた。

ケイネス曰く『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』には弱点という訳ではないが欠点がある。それは確かに召喚されるサーヴァントは一騎一騎がサーヴァント。それが千騎もいるのだ。普通なら相手になる筈もない。

けれどここで重要になってくるのは、『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』によって連続召喚されるサーヴァントは、共通してマスター不在ということだ。

通常マスター不在のサーヴァントは力を発揮することは不可能だ。魔力量云々ではなく、自らにある魔力生成機関を稼働することが不可能となるのだから。ケイネスは知らない事だが、そのことはマスターを失い敗北したルキアーノ・ブラッドリーが証明している。

その論理でいくと『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』のサーヴァントも魔力生成機関を稼働させることが出来ず戦闘どころではない筈なのだ。

それを覆しているのが結界内のサーヴァントが等しく保有する『単独行動スキル』。ランクにしてE-相当。だがそれだけあれば最大30ターンは行動できるだろう。

けれど所詮はマスター不在のサーヴァント。大規模な宝具の行使は不可能であるし、なによりランサーのような正規のサーヴァントと比べたらその能力値は劣る。

「だあああああああああああッ！」

けれどそれは『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』が弱いという事にはならない。

確かにステータス上では正規のサーヴァントであるランサーよりは下だ。けれど如何に全開ではないとはいえ相手は歴史に名を遺した英雄達である。雑兵とは比べ物にならない。

雑兵相手ならばランサーの槍の一突きは雑兵五人を貫くかもしれないだろう。けれど英傑のみで構成された軍勢にそれは通用しない。ランサーの一突きは相手の槍によって裁かれ、無防備な所をより多くの槍で狙われる。ならばランサーの選択肢は一つしかない。

「ゲイボルグ刺し穿つ死棘の槍ッ！」

因果逆転の槍が軍勢の一騎を殺し尽くす。

この結界に囚われてからランサーが真名を開放した数は十二回に到達しようとしている。

けれど一向にランサーの魔力は枯渇しない。そも対人用の刺し穿イボルグつ死棘の槍は非常に燃費の良いことが特徴の一つだ。因果逆転という一撃必殺の効果を持ちながらも、その槍は一度の魔力供給で七度の真名解放を可能とする。

つまり理論上、ランサーは一度の魔力供給のみで聖杯戦争を終結させることも可能なのだ。

ましてやランサーはマスターであるケイネスより多大な供給と呪いによるブーストを受けている。刺し穿つ死棘の槍を二十回放った所で魔力は枯渇しない。

ヒット&amp;アウエー。一撃離脱を繰り返しランサーは着実に軍勢を消耗させていく。



けれど、それを優秀な軍略家でもある征服王が見逃す筈がない。巧みな指揮でヒット&amp;アウエーを繰り返すランサーの行動を先読みし回り込む。そこを数の暴力で粉碎する。

単純にして明快。数で上回ったイスカンドルに小手先の策など不要なのだ。彼はただ『数』という最大にして最高の利点を活かせばいい。

既にランサーが結界内に囚われてから一時間。戦いは泥沼の兆しを見せていた。

そして終焉の鐘がなる。

聖杯戦争が始まり幾何かの時が流れた。

その間にも聖杯戦争は進み、今や自身のサーヴァントを除けば、セイバー、ランサー、ライダーが残存しているのみ。

しかもその三体全ての真名をその男は知っていた。どうやら動く時がきたようだ。男はそう結論する。

このまま戦局が進むのを待ち、サーヴァントが最後の一体になるまで傍観するという選択肢もあるにはあるが、男はそれを選ばない。最善は尽くした。勝利の為の布石もった。

ならばこそ、ここは堂々と打って出るべきだろう。それでこそ聖杯は己が勝利を認め、その願望の釜を開くのだろうから。

なにより唯一の懸念事項であった征服王イスカンドルの宝具。

その正体も既に分かった。ならばもう恐れるものなどない。躊躇う必要もない。

全ての手札は、我が手に揃った。

戦いも三時間が経ち、流石のランサーも疲弊の色を隠せずにはいた。無論彼のような英雄が三時間の戦闘で疲弊するなど普通はあり得ない。けれど相手にしているのは英雄だけで編成された千の騎兵である。消耗するスピードも桁違いであるし、ランサー自身もかなりの負傷をおっていた。

傷を負う都度にケイネスから治癒魔術を受けるなりルーンで治癒するなりしているが、それが間に合わない。腹を槍で突き刺された事もある。もしランサーが英霊ではなく通常の間人ならば出血多量でとうに死んでいただろう。

「チツ、キリがねえ」

そう愚痴るランサーだが、やはり賞賛すべきはランサーの技量だろう。

イスカンドルが戦略レベルでの戦争をもつて戦っていたのに対して、ランサーはあくまで戦術レベルの戦闘をしていたのだ。

とある男がよく「戦術が戦略に勝てる筈がない」と零していたがそれは真理である。戦術とは戦略の下にあるものであり、例えば戦術的に勝利しても戦略的に敗北すれば「負け」なのだ。

けれどランサーの技量はそれを覆した。

令呪の二画目を使用し更に力をブーストさせ、真紅の魔槍を対人・対軍の両方を駆使して振るった結果、軍勢は約半数まで減少してい

た。

けれどランサー自身も手一杯。

普通のサーヴァントなら既に倒れていても可笑しくはない負傷。

「へっ。まだ、まだア！」

ランサーが再び跳躍した。

これまで何度となく繰り返してきた一動作。

対人用ではなく対軍への攻撃方法。

「ゲイ・ボルク突き穿つ死翔の槍ッ」

文字通り渾身の一撃であった。

真紅の魔槍が軍勢の一部を弾き飛ばす。

同時にランサーは自身の中にある魔力が残り僅かな事実気づく。恐らく対人用のものですら、あと放てて一撃。それで打ち止めだろう。

だがランサーの奮闘は決して無駄ではなかった。

その証拠に、砂塵が消えていく。照りつけていた太陽が消失し、再び現世の、夜の闇が戻ってきた。

イスカンドルの固有結界『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』が解除されていくのだ。

これが『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』の欠点のもう一つ。『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』は結界の維持を軍勢全てで行う為にイスカンドルの負担が少ないというメリットがあるが、それは同時にデメリットでもある。軍勢全てによって維持されていた結界は、軍勢の半数を失えば瓦解する。ランサーの最後の一投により、どうにか軍勢の半数を倒すことに成功していた

のだ。

「先ずは天晴と言うておこつ、クー・フリーンよ。余の軍勢の半数を打倒し、尚も衰えぬその気概。故に惜しい。これより余はお主をぶつ潰す訳ではあるが、その前に最後に問つておこつ。

余に降り、その気概を余の下で振るう気はないか？」

「ハッ

」

征服王の勧誘にランサーは嘲笑をもつて応じた。そんな問いの答えなど考えるまでもない。

「言つたろうが。騎士の誇りを舐めるんじゃねえと。大体今になつて裏切るようなら、テメエの軍勢の半数を鎮めるんなざ出来る訳ねえだろ」

「左様か。ならば仕方あるまい。余もまた王の誇りをもつて、貴様を打倒しよう」

「そうかい。けど、アンタは数多いる王の中の王だ。それは認めるしかねえよ」

ランサーが槍を構える。

対するイスカンドルは騎兵にとっての剣たるゴルディアス・ホイール神威の車輪に騎乗する。最後の対決は一对一。

だというのに。

「戯け。この我を差し置き、王の中の王などとは片腹痛い」

豪雨のように降り注ぐ圧倒的な破壊力を秘めし弓矢が、ランサーとライダー。二つのサーヴァントのいる大地を破壊した。

ランサーとイスカンドルが咄嗟に後方へ避ける。その選択は正解だった。もし元いた場所に留まっていたならば、あの圧倒的な破壊に巻き込まれていただろう。

数瞬もすると降り注いだ弓矢はまるで幻の如く消えていった。けれどそれが本当に幻ではないのは、眼前にある破壊の後が明確に証明している。

「何者だ　？」

低く、底冷えするような声でランサーがソレに問う。

二人の戦場から、僅かに離れた建物の屋根にソレはいた。

背負うものは月。

纏いし甲冑は黄金。

血のように赤い真紅の瞳とインゴットのような黄金の髪。

圧倒的なまでの威厳と威容を誇りながら、黄金の男はまるで英霊すら超えた超越者の如くそこに君臨していた。

明らかにサーヴァント。

しかし、サーヴァントの中にあってもアレは『異常』だった。

「まさか……キャスターのサーヴァント？」

ウェイバーがそう零す。

理性があるからバーサーカーではない。

そしてウェイバー主観ではセイバー、ランサー、アーチャー、ライダー、アサシンが出そろった今、あのサーヴァントはキャスターでなければおかしいのだ。

けれど信じられない。

あの破壊、あの暴力を振るったのが仮にも自分と同じ魔術師などとは。

「ハッ。この我を魔術師風情と見間違えようとは、もはや雑種とも呼べぬ節穴よなあ」

「ほほう。ではお主はイレギュラーのクラスということか？」

いち早く混乱から立ち直ったイスカンドルが問いを投げる。

けれど、それすらも不正解。

「征服王、あの威容を見て多少は貴様を認めてやったが、この私のクラスすら分からののか？」

パチンと黄金のサーヴァントは指を鳴らす。

飛来する無数の魔弾。しかも恐ろしい事に、それら全てが宝具。

一つでもあたれば致命傷になりかねない。そう悟るイスカンドルは戦車を巧みに操りそれを避けた。

「……………まさか、そういう事か！」

ケイネスが震えた唇でそう言った。

「ほう、察したか。」

魔術師にしては多少見どころのある雑種だ」

なにそう難しくはない簡単なトリックだ。

今まで自分たちは、セイバー、ランサー、ライダー、アサシンが一堂に会した時に無粋な狙撃を放ってきた赤い外套の騎士こそをアーチャーと思っていた。

だがそれが、アーチャーの素養を備えたキャスター魔術師だったならばこの黄金のサーヴァントこそ真にアーチャーに他ならないのではないか。

そしてケイネスは漸く気づいた。

黄金のサーヴァント                      アーチャーの傍に立つ魔術師の存在を。

ケイネスも顔だけは知っていた。時計塔でもそれなりに名が知れており、聖杯戦争の始まりの御三家の一つ遠坂家の頭首、遠坂時臣。その顔には紛れもない『勝者の余裕』があった。

さてランサー頑張りました。彼は生前から一人で軍勢を相手にすることが多かったので、そういう意味では相性は決して悪くなかったんですね。

それでもボロボロで事実上はランサーの敗北ですけど。

そして……………驚き桃の木のギルガメツシュ登場。なんか土壇場で物凄い詐欺をあらかしたRYUZENです。

エミヤ「アーチャーかと思っていたらキャスターでしたというオチ。いや、色々と伏線はあったんですよ、一応。例えばエミヤ視点では赤い外套の騎士や自分とは表記してもアーチャーとは表記していません。他の例えばレナード視点だと思いつきりエミヤ「アーチャーと勘違いしているのでアーチャー」という表記が使われていますが。

臓硯の爺さんが「雁夜が遠坂邸を襲撃した」なんて言っていたり。ここで、あれ？ エミヤが戦ったのって遠坂邸じゃないよな、という事に気づけば遠坂のサーヴァント「エミヤに非ず」ということに気付いたかもしれないのに。

ちなみにルキア「ノはギルがアーチャーと気づく間もなくバラバラにされましたw

逆に一番の引っかけは「SEARCH10」での時臣サイドでの地の文。

予想していたサーヴァントとは別のサーヴァントが召喚されたことは予想外であったが、それも結果オーライといえる

実はこれ時臣のアーチャーではなく言峰のアサシンのことを言っている



いたんですね。つまり予想していたサーヴァント「ハサン」だったけどハサンより強い李書文だから結果オーライという意味だったので。

ちなみにエミヤを召喚したのは、どこぞの三流魔術師。分不相応な夢を見て聖杯戦争に参加したのはいいが、結局触媒を手に入れる事が出来ず、触媒なしの召喚に挑んだ結果、偶々街でぶつかに服に付着していた『とある少年』の髪の毛が触媒になってしまった訳です。

騙された方は申し訳ありません。読者を騙するのがR Y U Z E Nクオリティーなのです。

看破していた方はおめでとうございます。あなたはクロサギになれる素養を持っているかもしれませぬ。

ちなみにエミヤの魔術のランクはC - であり本来はキャスターのクラスには該当しないサーヴァントですが、既にアーチャーのクラスが埋まっていた為、半ば強引にキャスターのクラスになってしまった訳です。

ではでは、次回に  
また会いましょう。

史上最強。

世界において最強を冠した英雄豪傑は少なくはない。

三国志最強とされる呂布、円卓最強の騎士ランスロット。

けれどそれ等の最強と史上最強が違う事は唯一つだ。

普通の最強はその時代、国だけにおける最強で、史上最強とは全ての時代、国において不変の最強ということなのである。

黄金のサーヴァント、アーチャーの瞳は冷たかった。

恐らくアレはマスターであり魔術師の自分達の命なんてそこいらの路傍の石と同程度にしか考えていないだろう。そうウェイバー・ベルヘットは考える。

そんな思考があっさりと出来たのはタイプは違えど征服王という王と関わっていたかもしれない。事実として堂々とビルの上上に立つサーヴァントからは、明らかな王<sup>オーラ</sup>気を感じた。

人として、大望を掲げたイスカンドルとも違う、孤高たる絶対者としてのカリスマ。

「アーチャー。テメエが何処の英霊だかは知らねえが、決闘に割って入るとはいい度胸してるじゃねえか。我らの戦いを侮辱する気か？」

殺意を込めてランサーが言い放つ。けれどウェイバーなら膝が震

えてしまう程の殺気を浴びてもアーチャーの顔は涼しいままだ。殺気というものを浴びなれているのか、或いはそもそもランサーの事でさえ眼中にないかだ。

「フム。我としても、雑種の遊びを最後まで見届けるのも一興と思つたのだが」

ランサーとイスカンドルの激戦を 遊び と一言で断じたアーチャーに、ウェイバーは怒りを通り越して得体の知れない存在に底冷えすらする。イスカンドルが誇る王の軍勢は誇張抜きにしても最強と胸を張って宣言できる宝具だ。ランサーにしても、その王の軍勢と真つ向から戦い生還出来たほどの英傑である。

そんな両者の戦いを 遊び と言つたのだ、アーチャーは。けれどそこには微塵の驕りも嫌味もない。つまりアーチャーは王の軍勢を遊びと断じる事が出来る程の能力を備えているのではないか。

なによりもウェイバーは実際に目撃した。

ランサーとイスカンドルの戦いに横やりを入れた攻撃。無数の弓矢の正体は宝具だ。それも同じ宝具が分身するだとかそういう次元じゃない。一つ一つ別の種類の宝具が戦列を並べて一斉に襲いかかってきたのだ。基本的にサーヴァント一人に対して宝具は一つ。多くても二つ三つが限界だろう。或いはギリシヤの英雄ペルセウスならもつといくだろうが、それでもアーチャーのように二十個近い宝具を一斉に投擲してくるなどは不可能だ。

「しかし、だ。ランサー、貴様は言つたな。その雑種こそ 王の中の王 であるうと。」

この雑種風情がっ！ この我を差し置き『王の中の王』を語るなどなんと愚かしき大罪よ。

故に死ぬ。これが王の決定だ、狗」

取りつく暇もなかった。

アーチャーが指を鳴らすと、虚空より四十の宝具が一斉に射出される。

「可笑しな事になりやがったなこりゃッ！」

ランサーはマスターであるケイネスを抱え、後方へ跳躍し避ける。幸いランサーには『矢避けの加護』という射撃や投擲攻撃に対処するスキルがある。

けれどそれは、アーチャーの宝具軍に対しては大した成果をあげられなかった。

「なにっ!？」

ランサーが驚愕する。四十ある宝具の五つが避けたランサーを、そのまま追尾して襲い掛かってきたのだ。叩き落とそうとするランサーであったが、五つの宝具が狙っているのは生憎とランサーだけではない。背後にいるケイネス・エルメロイ、即ちランサーのマスターも標的だったのだ。

あのアーチャーのことだ。マスターも狙ってランサーの動きを封じるなんて戦術は考えていないだろう。アーチャーにとってケイネスだろうとランサーだろうと等しく邪魔な障害の一つであり、等しく宝具の狙いとしたただけだ。

けれど、例えアーチャーにそんな気はないにしても、もうそれは戦術的な価値がある。つまりランサーが『矢避けの加護』で回避出来たとしてもマスターであるケイネスは回避できないのだ。



「ヴィア・エクスナグナティオ遙かなる蹂躞制覇ッ！」

ランクにしてA+。対軍宝具の強烈なる一撃がアーチャーに迫った。

その威力、アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢抜きにしても必殺に足る威力であった。けれど、そんなものは、

「口を閉じる、舌をかむっ！」

「！」

何が何だか分からなかったがウェイバーは咄嗟にイスカンドルの指示に従った。

瞬間、黄金の光がウェイバーの視界を奪う。それでイスカンドルの誇る戦車チャリオットは粉碎してしまう。

「その程度か、征服王。貴様の宝具、雑種にしては上々として期待していたが、やはりこの我を興じさせる事は叶わぬ、か。では幕だ」

アーチャーの背後にある空間が歪む……いや、開く。

それは黄金郷へと繋がる扉。思わずウェイバーは言葉を失う。アーチャーの背後にあるソレは全てが一級品の宝具。あれが一斉に放たれば死ぬだろう。理屈ではなく本能で理解出来た。

「こらアーチャー、余所見とは良いご身分だな」

けれど槍の英霊はまだ屈してはいなかった。

一足飛びでアーチャーのもとへと跳躍すると槍を構える。恐らくは、最後の真名解放をする為に。

「刺し穿つ死棘の槍ッ！」  
ゲイ・ボルク

因果逆転の槍。一度真名を開放すれば確実に心臓を貫く真紅の魔槍は、果たして黄金のサーヴァントにはなんの効果もなかった。

「因果逆転の呪い。しかしその程度の兇戯、更に呪いを上書きすれば、これほど脆弱なものはない」

槍はアーチャーではなくあらぬモノを突いていた。それは人型をした良く分からないモノ。恐らくは原初よりある呪い移しの魔術の一種だろう。

「そして」

槍を放ったランサーを一つの槍と一つの剣が貫いていた。確実に致命傷。幾ら生き残る事に特化したランサーでも生還不能な傷。

「デメエ、そいつは」

「見覚えでもあったのか、狗？」

見覚えがない筈がない。その槍はゲイボルク、ランサー自身の魔槍。

そして剣のほうはカラドボルグ。ランサーの親友が振るった魔剣。

「俺としたことが……」

ランサーはそう言い残し消えていった。

余りにも呆気ない。これがアーチャー。凡百の英霊では到底及ば

ない領域にある規格外の英霊。

「ら、ランサーツ！」

ケイネスの叫びが響き渡った。

信じられないような顔をしていたが、その腕にある令呪が消失しているのが、ランサーが消滅した紛れもない証拠だった。

「坊主、そしてランサーのマスターよ」

低く、けれど確かな威厳をもってイスカンドルが口を開く。

「ここは余一人で相手する」

「ふざけるなっ！ お前まさか殿でも

「阿呆！」

ウェイバーの額に強烈なデコピンがさく裂する。

「痛っう~~~~~！ 何考えてるんだ、この馬鹿！」

「余の力を未だに信じておらんな、坊主。負け戦と思うでない。坊主、その令呪の三角全てを使用したならば、多少キツいが再度『王の軍勢』を展開することも可能であろう。勝利するために、余は疾走するのだッ！」

それは正しい選択なのだろう。

アーチャーは恐らく途轍もない量の宝具を所有しているサーヴァントだ。その数は百か二百か、或いは千にも届くかもしれない。



そんなものとイスカンドルの軍勢がぶつかれば、傍にいるウェイバーとケイネスも唯では済まないだろう。敢えてイスカンドルがケイネスにも逃げると言ったのは、激闘を繰り広げた好敵手への手向けか。

「……………いい加減にしろよ」

けれどそれをウェイバーは振り払った。

例えそれがマスターとして正しい選択だとしても、ウェイバーにはそれが正しい選択とは思えなかった。イスカンドルを一人で戦わせるなどとは。

「お前は世界征服するんだろっ！ クリントン倒すんだろ！」

僕は決めたぞ！ お前がクリントンだかワシントンだかを倒すって言つなら見届けてやるッ！ 勿論この戦いもだ。聖杯戦争なんて通過点に過ぎないんじゃないのかよ、この馬鹿！」

ウェイバーでも何を言っているか分からなかった。

ただ感情の赴くままに胸の内をぶちまけた。

「はっはははははははははははははははは！ 良くぞ言った、ウェイバ

ー！

ならば見届けるがよい。この征服王の戦を！」

## SEARCH 24 無敵(後書き)

ギルが最強状態です。

ちなみにSNではなくZERO仕様なので「慢心はしても油断はしない」パーフェクト英雄王状態です。

何でも楽しめる奴は無敵だ。

この世界には多くの苦難があるが、もしその苦難を全て楽しめる男がいたならば苦難は苦難ではなくなる。辛い事や悲しみも全て愉しむ事が出来たならば、その人間には不幸がない。一生においてより幸福になった量が多いほうが人生の勝者というのならば、その人物は紛れもなく勝者なのだろう。

静かだった。

つい少し前まで鳴り響いていた地鳴りや雄叫びはもう聞こえない。ウェイバーには最初何が起こったのか分からなかった。いや理解は出来ても信じられなかった。

征服王イスカンダルが誇る最強無敵の宝具。

生前自分に付き従った臣下達千人を連続召喚するというランクにしてEX。つまりは評価規格外にある切り札『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』は魔術師であるウェイバーでも最強と断言できるものだ。

事実、王の軍勢は強い。

総数約千人の軍勢と言うが、それは精鋭千人ではなく英雄千人の軍勢だ。それをたった一人の英雄で打倒するなど出来よう筈がない。ランサーなどはどうにか凌ぎきったが、それでもかなりの負傷を負い事実上の敗北と同義であった。

だからウェイバーはどうしての眼前の光景が信じたくなかった。そんな威容を誇った軍勢が、黄金のサーヴァントが放った唯一度の攻撃で崩壊するなどとは。

「……………」

イスカンドルが驚愕した。そうあのイスカンドルが驚愕していた。それ程にあの黄金のサーヴァントの一撃は途方もないものだったのである。固有結界は、征服王イスカンドルの世界を切り裂いたのだ。比喻でもなんでもなく、切り裂いたのである。世界の切断、天地を分けた剣、それがアーチャーの究極、対城を超えた対界宝具。

「ライダー……………」

蒼白な顔で見上げるウェイバーに、巨漢のサーヴァントは儼かな真顔が問うた。

「そういえば、一つ訊いておかねばならないことがあったのだ」

「……………え？」

「ウェイバー・ベルベットよ。」

マスターではなく臣として我が朋友となり仕える気はあるか？」

総身を激情が震わした。そして堤防が決壊するかのように、涙が溢れた。

所詮ウェイバーは一介の魔術師だ。いや魔術師としての技量と立場からいえば三流といって差し支えないだろう。当然自らの師であり時計塔の名物講師であるケイネスとは比べ物にならない。

けれど何よりも焦がれた問いであった。今回の聖杯戦争、常にウェイバーはイスカンドルに圧倒されっぱなしであった。

もう認めるしかない。ウェイバー・ベルヘットが征服王イスカンドルを従えるなど土台不可能なことなのである。マスターとか令呪がどうのこうのじゃない。なによりもウェイバー自身がこの征服王に従いたいと思っていたのだ。ならば前提から違っている。ウェイバーがイスカンドルを従えるのではなく、イスカンドルがウェイバーを従える事こそが自然な形だったのだ。

だからウェイバーの返答は既に決まっている。その解答は自らの胸の内に宝物のように用意していたのだから。

「あなたこそ、ボクの王だ。貴方に仕える。貴方に尽くす。どうかボクを導いてほしい。同じ夢を見させてほしい」

誓いの言葉に征服王は微笑んだ。

その笑みは臣下にとって、どんな褒美にも勝る報酬だった。

「うむ、良かろう。」

夢を示すのが王たる余の務め。そして王の示した夢を見極め、後世に語り継ぐのが、臣下たる貴様の務めである」

「！」

ウェイバーの体が比喩ではなく浮いた。

驚いて自分に身を起こった事を認識しようとする、軍勢の一つたるイスカンドルの愛馬がウェイバーを背に乗せていた。

「生きる、ウェイバー。」

それが余の王として 最初 の命である」

最期ではなく最初と言ったのが無性に嬉しく、どうしようもなく悲しかった。最初と言ったからには再開出来るということ。それがなにより嬉しく、何時会えるのか分からないのが悲しかった。

王の愛馬たるブケファラスがどんどんウエイバーを戦場から離れさせていく。唯一つだけ分かる事がある。それはウエイバーにとつての聖杯戦争はここで終わるということだ。

イスカンドルの命なのか、ブケファラスがケイネスをも背に乗せた。もうイスカンドルの姿は点にしか見えない。そして本当に、ウエイバー・ベルヘットの聖杯戦争は終結した。

戦場には二つの影が残っていた。

無傷のアーチャーと同じく無傷の遠坂時臣である。

「しかし時臣よ、雑種が二人ほど逃げ出したが追わなくて良いのか？」

「はい。サーヴァントが失われても令呪が残るのは余程聖杯に対して強い願望がある者か、始まりの御三家のマスターのみです。事前の調査でもケイネス・エルメロイとウエイバー・ベルヘットの願いは精々が功名心。聖杯が敗れて尚も令呪を残すほどのマスターでもないでしょう」

なにより別に令呪が残っていようと残っていないくても関係ない。確かにサーヴァントを失ったマスターとマスターを失ったサーヴァントが再契約する事はある。けれど今の現状でそれは先ずないだろう。バーサーカー、アサシン、キャスター、ランサー、ライダーの五体が既に脱落した今、残っているサーヴァントはインツベルン

のセイバーと、この遠坂時臣しかない。  
だからもう、そんな再契約が起こる訳もないのだ。

「しかし興ざめだ。時臣、貴様の采配は堅実ではあるが実に面白味に欠ける」

「それは……………申し訳ありません」

深く時臣が頭を下げる。

一見するとウェイバーとイスカンドルのように主従が逆転しているかのようにも見えるが、この両者に限ってはやや異なる。

時臣は一人の貴族として、アーチャーの事を尊敬しているし敬意も払っているが、それは著名な人物の肖像画を敬うのと変わりない。つまり必要とあれば切り捨てる。遠坂時臣にとってアーチャーは敬意を払うべき偶像であると同時に強力な兵器であり切り捨てるべき道具なのだ。

「しかしセイバー、最優のサーヴァントか。  
運もあるとはいえ最後まで残った賊であるならば、この我自らが見えてやるしかあるまい」

アーチャーが獰猛な笑みを浮かべる。

その言葉に嘘偽りはないだろう。アーチャーは最後の最後まで残った英雄を打倒する為に、その実力の一端を開放する。思わず身震いする。先程の征服王を相手している時でさえアーチャーは本気ではなかった。もしこれで、セイバーがアーチャーの本気を引きずり出してしまったらどうなってしまうのか。

(まさかこの冬木が……………)

脳裏に浮かぶ最悪の光景に、思わず息を呑む。

しかし有り得ない事ではない。先程このアーチャーの放った一撃が、もしこの街に向けられたのならその光景は容易く実現するだろう。

これがアーチャー。無双の英霊達の頂点に立つ孤高なる王。その實力はガイアの守護者たる真祖にも匹敵するのではないかと思わせる。

「して王よ。セイバーとの戦いは

」

「任せる。決戦の場を整えるのは臣下の仕事だ」

「畏まりました。では場を整えるまで暫しの時間を」

「許す」

軽く会釈をして遠坂時臣は思考を巡らせる。

もはや策を弄する刻限は過ぎている。遠坂時臣にとって掛け替えない同志であり、今は亡き弟子である言峰綺礼の齎した最後の報告でセイバーの真名は判明していた。

当初こそ レナード・エニアグラム というセイバーの真名に全く心当たりのなかった時臣であったが、アーチャーにそれを離すと簡単に答えは帰ってきた。

平行世界の英雄。

幾度とない激戦を潜り抜け、最後には彼の騎士王を打倒した英傑。武芸のみならず軍略や政治にも秀で、主君を勝利に導いた魔人。

平行世界の英霊というのは驚いたが、真名と能力さえ分かれば問題はない。



なにより例え平行世界の英霊であろうと、英霊である限りアーチャーに勝利するのは不可能であるのだから。

遠坂時臣は笑みを浮かべると同時、静かに黙禱を捧げた。

それは亡き弟子に対するせめてもの礼儀。言峰綺礼は遠坂時臣の為に戦いそして死んだ。彼の為にも自らに敗北は許されないのだ。

そして二つの主従は戦場から去っていく。

第四次聖杯戦争、終結の時は……………近い。

「よし、万全だな」

体の具合を確認すると、すこぶる調子が良い。

足が手が、体全体が活性化しているようだった。

バーサーカー、アサシン、アーチャー、との三連戦によって負った甚大なダメージは妖精郷の鞘の力により癒えている。正に最優のサーヴァントの完全復活であった。

「それでマスター、残りサーヴァントは何体なんだ？」

けれどレナードや切嗣達に起こった出来事はそれだけではない。

レナードのマスターである切嗣の妻であるアイリスフィールが倒れたのだ。だが別に彼女は病気という訳ではない。更に多くのサーヴァントが注がれた事により、人間としての機能を維持できなくなっていたのである。

「アイリの体を調べた結果だが……………残っているのは二体。つま

り」

「この俺ともう一体のサーヴァントしか残っていない、そういう事だな。」

「それで残っているサーヴァントが何なのかは分かったのか？」

「舞弥が偶然目撃していた。詳しい説明を省いて結果だけ言えば、ランサーとライダーの二体をアーチャーが抹殺した」

「……………アーチャー？ 生きているのは知っていたが、聖剣の一撃を受けて二人のサーヴァントを倒すとは思ったよりもガッツのある奴だな」

「違う。お前の言うアーチャーはアーチャーではない。キャスターだ。」

「アーチャーは既に脱落していて、遠坂時臣のサーヴァントである真のアーチャーがライダーとランサーをやった」

意味の分からない言葉の羅列。

けれどレナードはアーチャーと思っていたサーヴァントの 宝具の事などを思い出し、一つの答えに辿り着く。

「……………そういうことか。」

「まんまと騙された。俺がアーチャーと思っていたアーチャーは実はキャスターで、本当のアーチャーは別にいたとはな。」

固有結界なんて魔術が出てきた時点で気づくべきだった。

「まあ過ぎた事はおいておこう。それより、そのアーチャーの力の詳細は？」

勝手に勘違いしていた自分が腹立たしくもあるが、それよりも先

ず最後まで残ったアーチャーの力を知っておきたい。

どこまでいっても変わらない「前向き」さ。これがレナードの長所でもあった。

「古今東西ありとあらゆる宝具を投擲する」

「はあ？」

「聞こえなかったのか。古今東西、あらゆる伝承神話に登場する宝具を使い射出する。それがアーチャーの能力だ」

「……………冗談だろ？」

「事実だ」

切嗣の表情を見て冗談ではないことを悟る。

しかし信じられない事だ。本来、英霊にとって宝具は一人につき一つ。どんなに多くても二つ、三つが精々である。だというのに切嗣の話では、そのアーチャーが宝具を湯水の如く所持しているかのようではないか。

レナードがさらに切嗣に疑問を投げかけようとした所で、衛宮邸に一羽の梟が舞い降りた。

「マスター、それは？」

「宝石で製造した梟。となれば宝石魔術に秀でた遠坂の頭首、時臣の使い魔だろう」

作り物の梟はゆっくりと木の上に降り立つと、口から手紙が落ちる。

罨の可能性もあるので先ず対魔力のスキルがあるレナードが拾い、何も無い事を確認してから切嗣に渡した。

「……………遠坂時臣、如何にも誇り高い魔術師らしい言い回しだ」

皮肉気に切嗣が笑う。

「で、どういう内容だ？」

「招待状だよ。いや招待状を送るのを急かす招待客といったところか。

聖杯の器を握る僕にさっさと聖杯を降霊する場所を指定させ、その場所を追って通達しろ、と。どうやら真っ向からの決戦をお望みらしい」

「受けるのか？」

「ああ、受ける」

やけにあっさりとした解答に、レナードは眉を背ける。

この切嗣に限って、今更正々堂々と雌雄を決しようなんて考えはないだろう。となると、これも考えあつてのことだ。

「奴さんのお望み通り正々堂々の勝負をしてやるぞ。

降霊場所は、そうだな……………」

暫く間が空く。

迷っているようでもあり、悩んでいるようでもある。だがやがて切嗣は口を開く。確固たる意志をもって。

「『柳洞寺だ』」

SEARCH 25 終わる 戦場（後書き）

これでライダーも脱落し、残るサーヴァントは二体。

ちなみに切嗣が正々堂々云々言ってますが………当然、本当に正々堂々戦う訳じゃありません。

偉大なる嘘つきは、偉大なる魔術師だ。

人は嘘なくしては生きられない。生きていく上で必ず人間は嘘を吐く。

けれど嘘にも色々の種類がある。人を傷つける傷つけない、ではない。それが大いなる嘘か小さな嘘かだ。嘘は大きければ大きい程に良い。小さな嘘など、つまらないだけだ。

午後11時。この時間になると繁華街は兎も角、この辺りは静かだ、と遠坂時臣は思う。

時臣がいるのはアインツベルン側が聖杯の降霊場所に指定してきた柳洞寺の石段の前だ。柳洞寺とは冬木市にある寺、というのが一般人のイメージであるが、冬木のセカンドオーナーであり魔術師の時臣からするとやや意味が異なる。

この柳洞寺は第一次聖杯戦争（当時はそのような呼称はなかったが）つまりは最初の聖杯を降霊した場所なのだ。その後、二次は遠坂の土地にて、第三次は冬木教会で。そして第四次聖杯戦争、降霊場所は一巡して元の場所に戻る。

実は先にあげた三つ以外にも聖杯を降霊できるほど霊的に優れた

土地はもう一つあるのだが、それは街の開発などにより後から生まれた者であり、霊的意味における価値では柳洞寺とは比べ物にならない。万全を期して聖杯を降ろるのであれば、やはり柳洞寺が一番だろう。

柳洞寺、かの地こそ決戦の場。

時臣は石段を上がるうとした所で、ふとアーチャーがある事に気付いたらしく立ち止まる。

「待て時臣」

「どうしましたか、王よ？」

黄金のサーヴァント、アーチャーに問いを投げる。

「出迎えの者がいるようだ」

出迎えの者？

そう言う前に石段の前に白い外套を纏う騎士が現れた。

聖杯戦争において最優を冠した英霊、セイバーのサーヴァント。

その真名は平行世界における大英雄レナード・エニアグラム。

平行世界の英霊であるが故にその伝承や伝説などは知らぬ時臣であったが、マスターとして見たセイバーのステータスはどれもAかB。油断ならない相手だということは分かる。

「アーチャーのサーヴァント、そして遠坂家当主、遠坂時臣殿で宜しいか？」

厳粛に、セイバーが言った。

時臣にも分かる。元々の気品と誇り、正に誇り高き白騎士という



ところか。

剣の騎士の名は伊達ではないということだろう。

恐らくこの最後の決戦にも正々堂々の決闘を望みとするに違いない。

だがそれでいい。元より正々堂々の決選こそ時臣の望むところだ。このアーチャーと正面から戦って勝てる英霊など存在しないのだから。

「そうだ。私が遠坂時臣で間違いない。

こちらは我が王であり恐れながら我がサーヴァントでもあるアーチャー」

「結構。我がマスターより貴卿等を境内まで案内せよと仰せつかっている。

既に残ったサーヴァントは我等のみ。最後の勝負はこのような手狭な場所ではなく、我等が全開を出せる場所のほうがいいだろう」

「私には異論がない。王よ、貴方は

「良い。貴様の采配に任せる、時臣」

アーチャーからの許しを得た時臣はセイバーに向き直る。

どうやら境内は既に人払いの魔術を使用しているらしい。寺の住職や僧達は残ってないだろう。

「では案内を頼もう、剣の英霊。

遠坂家当主としても最後の戦いを、外来の魔術師やマキリの出来損ないなどではなく、荣誉あるアインツベルンと決することが出来るのは喜ばしい」

「……私は御三家の因縁については詳しくは知らない。けれど、我が主の為にもその因縁に決着をつけるのは望むところだ。では着いてこられよ、我がマスターがお待ちだ」

セイバーの先導に従い石段を進む。

一步一步、石段を上るにつれて時臣は心が高揚するのを抑えきれずにいた。

第一次聖杯戦争。遠坂永人、マキリ・ゾオルケン、そしてアインツベルンの聖女ユスティア・リズライヒ・フォン・アインツベルンの御三家の頭首達によって誕生した聖杯。

最初の儀より二百年、聖杯の降霊は聖杯戦争という戦いとなり二百年の時間が流れた。

だが全てはこの時の為。

遠坂家ばかりでなく魔術師全てにとつての悲願がる『』への到達。今ならば断言できる。遠坂時臣が魔術師として歩んだ人生はこの時、この戦いで勝利する為にあったのだということ。

やがて山門の前に到着する。

覚悟を決めよう。ここを潜った時、決戦が始まるのだ。

二百年の聖杯戦争の歴史。それを終結させ相応しい用法で聖杯を起動させ、聖杯を終わらせる為の戦争が開幕するのである。

「アーチャーのマスター」

けれど潜る前に先を歩くセイバーが問いを投げてきた。

「なにかな、セイバー？」

けれど時臣はその自信を崩さない。

例え最後の戦いにおいても遠坂時臣は優雅さを失わないのだ。それが遠坂の家訓であり矜持である。

「これから我らは、雌雄を決するべく戦う訳であるが。別に

「

時臣が気づいた時には、二つの影が交差していた。

金属と金属が衝突する喧しい音。その音の正体は時臣に向かって剣を振るったセイバーと、それを黄金の甲冑で受け止めたアーチャ―であった。

「今ここで殺しても構わないか聞こうとしたのだが、いやはや残念だ。

俺とした事が失敗してしまった。

マスターのほうは兎も角、そちらは気づいていたのかな、アーチャ―？」

「然り。元より己が騎士道に、正々堂々が存在しない騎士こそ貴様であろう、雑種」

「卑怯と罵るか？」

「戯けが。力の弱き者が力ある者に勝利するために、戦術を組み策を弄するのは至極当然の事。無礼討ち？ 暗殺？ 卑怯？ ハッ！ そのような戯言は真の王に値せぬ弱者の言い訳よ。慢心してこそ王！

下々の策や戦術を慢心して尚も正面より殲滅してこそその最強の英雄である」

「成程。史上最強の存在に戦術など不要か。正に王道。」

実を言うと俺も王道が好きでね。王道で勝てるに越したことはない。尤もあの頃は余りにも戦力が離れすぎていて王道じゃあ到底勝てなかったんだけどな」

セイバーは笑う。

壮絶に、そして狡猾に。

「ま、今回もそのクチでね。

俺としても、宝具を湯水の如く持っているなんて規格外と、正面から戦うなんて馬鹿はしたくないからな。こういう手を取らせて貰おうか」

「!」

驚きはアーチャーではなく時臣のもの。

石段の上ではなく下に黒い外套を纏った暗殺者がいた。

事前のデータで顔写真を見ている。衛宮切嗣、アインツベルンに雇われたヒットマン。

魔術師殺しの異名を持つ、対魔術戦のプロフェッショナル。

アーチャーはセイバーの相手をしていて、直ぐにこちらの守りに入る事は出来ない。

約四秒。それが時臣がサーヴァントの守りを得られぬ空白の時間だ。

時臣は炎の障壁を展開した。

衛宮切嗣の武装は銃。しかし宝石によるブーストもあるこの炎の壁ならば、高速で飛ぶ弾丸であろうと時臣を貫く前に溶かし尽くす事が可能だろう。

だがそれが全ての間違いだった。衛宮切嗣の攻撃を馬鹿正直に魔

術で防ごうとしてしまった。それが時臣にとって人生最大の失敗。

「起源弾」

ポツリ、と切嗣が呟く。

時臣が意味を分かりかねていると、その解答は直ぐに出た。

炎の壁に弾丸がぶつかった瞬間、時臣の体中にある魔術回路が暴走、ショートした。

「馬、鹿な

」

時臣が最後に見た者。

それは衛宮切嗣の無表情であった。

SEARCH 26 遠坂家 に 伝わりし 呪い（後書き）

最後の最期の命が懸かった重大な局面でこそ「うっかりエフェクト」が発動する。それが時臣クオリティー。

如何にも正々堂々を重んじる騎士になりきったレナードにあっさり  
と騙されると。まあギルが時臣にレナードの事を説明しなかったの  
も悪いんですがw

害することができる者は、益することもできる。処刑できる王は、善政もできる。

厳しいだけで人はついてこない。優しさがなければ人を率いることはできない。

それと同じく人を傷つける事が出来なければ、人を救う事も出来ないのだ。

清濁両方備えてこそその人間であり、それが摂理である。

けれど知っているだろうか。とある世界には、悪のみを担った王がいた。人間として当たり前な、小さな願いを抱いた少年は、世界に反逆し、そしてこの世全ての悪を担ったのである。悪逆皇帝の、真名と共に。

正々堂々と戦うふりをしてアーチャーを狙う……と見せかけてマスターである遠坂時臣を狙うというのが切嗣の作戦であった。

宝具を湯水の如く持つ規格外の英霊。そんな相手と真正直に戦うなど愚策。聖杯戦争において最も良い戦術は強力なサーヴァントではなく、脆弱なマスターを狙う事だ。

そして勝者に最も近い位置にいたマスター、遠坂時臣は意識すら

失い倒れている。だが僅かに心臓の鼓動があるので辛うじて生きてはいるようだ。だが魔術回路の全てが焼切れた今、マスターとしても魔術師としても再起は不可能だろう。

倒れた遠坂時臣に、アーチャーはなんとも呆れ果てた視線を向けている。

そこに焦りもなければ危機感もない。ただ純粹たる 侮蔑 という言葉が適当か。

「時臣。つまらぬ男であつたが、貴様の堅実さだけは評価していたのだが。仮にも我が臣下を名乗っておきながらその醜態。我をどこまで呆れさせれば気が済むのだ？」

時臣は答えられない。

意識を失つた時臣にはアーチャーの呆れと侮蔑の真つただ中にも、それに気づくことはなかった。ただ時臣は「何故こんな事になつたか分からない」とでも言うかのような顔をしたまま倒れているだけ。

「もうよい。この我を招いた義理、そして我に対する礼があつた故に臣下と認めていたが、撤回するぞ時臣。お前の如き雑種など、この私の臣下を名乗るに値しない」

突如アーチャーの背後より黄金の鎖が出現する。鎖は時臣を木に磔にし、その心臓に一振りの剣が突き刺さつた。

時臣は剣が刺さつた一瞬目が見開いたが、うめき声をあげる間もなく再び意識を失つた。

「命を現世に突き刺す剣だ。アレが刺さっている限り、脳漿が割れようと五体が裂けようと 死ぬ ことはない。雑種、貴様如きが我



の臣下を名乗ったのだ。ならばその不甲斐なさを挽回するべく、その命を焼き尽くすのは当然の事であろう?」

アーチャーはサデイスティックな笑みを浮かべて、時臣が磔にされた木の周囲にまた別の鎖を展開し覆った。それは内部と外部を縛る鎖。つまりは結界だ。時臣へ追い打ちをかけるには、あの結界を突破せねばならないだろう。

「さて邪魔な雑種は失せた。で、あれば」

レナードは嘗てない悪寒を感じ飛び退いた。轟音、黄金の紫電がアーチャーの周囲を破壊し尽くした。破壊の中心でアーチャー一人が笑う。

切嗣はどうやら時臣へ奇襲をかけて直ぐに身を隠したようだ。その姿は見当たらない。アーチャーの逆襲を警戒したか、或いは危険を察知したか。

(セイバー)

と丁度その時、切嗣からサーヴァントとマスターのラインを使った思念通話があった。

(切嗣か。今何処にいる?)

(そんな事はどうでもいい。

いいか、セイバー。あのアーチャーは桁外れの単独行動スキルを有している。更には事前に遠坂時臣から供給されていた魔力は、この一回の戦闘する為のものは十二分にアーチャーにある)

(ならマスターがズタズタになった弊害はない、と?)

(いや僕の見た限り、魔力・筋力・敏捷が下がっている。対するお前は万全だ。言っている意味が分かるな?)

(……………遠坂時臣の周りにある結界を突破する事は?)

(少なくとも魔術師である僕には不可能だ。ならばお前にやらせたい所だが、それをアーチャーが許してはくれないだろ)

(そうだ、なッ!)

アーチャーの背後から十の宝具が射出されてきた。

それをどうにか捌き、後方へ飛ぶ。気づけばそこは柳洞寺の境内。皮肉な話だ。境内で正々堂々戦うというのは嘘だったのに、結局はこうして嘘が本当になっている。切嗣が時臣を攻撃することが出来ない現状、これはレナードとアーチャーの一騎打ちとなってしまうっていた。

「どうした。最優のサーヴァントを語るのならば、少しは我を興じさせる」

(だからお前は一つだけ考えればいい。

令呪の制約に従い、衛宮切嗣が我が傀儡たるサーヴァントに命じる。全力をもってアーチャーを打倒しろッ!)

令呪によるブースト。

サーヴァントとマスターの同意によって為された命令は、強要ではなくレナード自身を強化する効果を得る。

(いい命令だ、マスター。実にシンプルで分かり易い。

安心していい。俺は今まで与えられた命令は確実に遂行してきた。それが誇りでもある。

お前が俺に『アーチャーを打倒しろ』と命じた瞬間にアーチャーの敗北は動かぬこととなった)

(無駄口を叩くな、行動で示せ)

「イエス、マイ・ロード」

もはや出し惜しみなどする必要はない。

ただ命令に従い、アーチャーを打倒する。それだけでいい。

「フン。令呪による強化、か。

対するこちらはマスターが再起不能。ステータスもやや低下している。が、良いハンデだ」

アーチャーの背後から次々に宝具が連続射出されていく。

一度贗作を見たレナードには分かる。放たれた宝具は全て前に戦った赤い外套キャスターの騎士とは違う、全てが紛れもない真作。それでも皮肉なことに贗作と真作の違いはあれど戦闘方法は似ている。そしてその対処方法も知っていた。

「ハッ  
！」

進む、ひたすら進む。

飛来する宝具を掴み『オール・ハイル・ソルジャー軍人に栄光を』で自らの宝具にしていく。

真作故に贗作よりも威力が高いが、逆に真作故に奪い取った宝具は贗作よりも性能が良い。

「手癖の悪い剣士よ。ならば」

再び今度は七つの宝具が飛んできた。

けれどレナードのやる事に変わりはない。飛来する七つの宝具を掴もうとして。

ゾワツ、と言いようのない悪寒を感じて、自らの双剣で叩き落としました。

「これ、はー！」

地面に転がる七つの剣。

形状も出自も全てが異なっているであろうそれらは、一つだけ共通点があった。禍々しい気配を発しているという共通点が。

「宝具とは何も、所有者に勝利と栄光を齎すものばかりではない」

アーチャーは背後の空間より一振りの剣を取り出し、指でなぞりながら言う。

「中には所有者に敗北と絶望を齎す、災悪の剣もあるということだ」

つまりさっきレナードが七つの剣を掴んでいれば、使い手になっ  
てしまったが故に剣達はレナードに牙をむいただろう。

危なかった。直感スキルがなければ、確実に罠に掛かっていただ  
ろう。

「それを持ってケロツとしてるお前は……………いや、それ以前に宝  
具を湯水のごとく所有している英霊なんて聞いた事がない。一体ど  
この英霊だ？」

「我が拝謁の栄に浴してなお、この面貌を見知らぬと申すなら、そ

んな蒙昧は生かしておく価値すらない。故に死ね、と言う所であるがそうさな。仮にも最後まで生き残りし英霊。良かるう。褒美に、我の全てを見せてやる」

その時、例えではなく空気が歪んだ。

「  
ゲイト・オフ・バヒロン  
開け、王の財宝」

それが合図だった。アーチャーの背後の空間が開いていく。これがアーチャーの宝具。空間が扉のごとく開いていき、やがて繋がる。差し込む光の正体は黄金。やがてその蔵から無数の宝具がこれ見よがしに出現する。そのどれもが一級品と断じられる宝具だ。

北欧系、中華系、ギリシヤ系、東洋系、全ての宝具が揃っている。だが無論それらは贋作ではない。正真正銘の紛れもない真作だ。

「馬鹿な。一体どこの英霊だ。

共通点も何もない。そんな大量の宝具………しかも全てが本物の宝具を持つ英霊なんて、存在する訳がない」

「それは早計だな。嘗て世界が一つだった時、この世の全ての財宝はたった一人の王の所有物であったのではないか」

「世界が一つだった頃………まさかッ！」

その国、その王は世界の誰よりも強く気高く、彼の王は世界中の財宝全てを収集し尽くしたという。その王はクー・フリーンや征服王イスカンドルよりも遠い伝説を起源とする最初の英雄。

「ギルガメツシュ。人類最古の英雄王。それがお前の真名か、アーチャーッ！」

「然り。この身は貴様等英霊の敵うべくもない、最強の英霊だ」

最強、それは歴代最強の帝国騎士と謳われたレナードも、認めざるを得ない事実であった。

英霊が英霊である限り、必ず死因となった出来事や弱点、宝具がある。レナードと同様。レナードでいえば最期に致命傷を負った原因でもある 聖剣 や、先の七つの剣のように所有者に災厄を齎す宝具などがそれに当たる。けれど原初の英雄王は全ての宝具を所有しているが故に、全ての英霊の弱点を突くことが出来るのだ。

(ならば……ッ！)

まともな戦い方では彼の英雄王を打倒することは不可能。

しかし不可能を可能にしてこそそのナイトオブワン。元より歴代最強騎士の戦場に敗北は許されない。相手が原初の英雄王であり尊い幻想であるならば、こちらも最強の幻想をもって挑む他ない。

レナード・エニアグラムが所有し使い手にもなった最強の聖剣をもつて。

「ほう。人々の願いにより生まれ、星の鍛えた聖剣。

いいだろう。ならば、こちらにも相応しいモノで相手をしてやる。

正真正銘、この英雄王しか持ち得ぬ

剣でな！」

ギルガメッシュが蔵より取り出したのは、一振りの異形の剣であった。いや、あれを本当に剣という枠に収めてしまった良いのだろうか。円柱状の刀身を持つ突撃槍のような形状をしている。レナード・エニアグラムが保有する最高ランクの直感であっても、あの剣が『理解』出来ない。他の宝具ならば、なんとなくその力が事前に分かっていた筈なのに。けれど人間としての生存本能が早鐘を打つ

て告げている。逃げると。逃げなければ、負けると。

（何を、馬鹿な。エクスカリバーは最強の対城宝具。あの奇怪な剣が対城宝具だか対軍宝具だかは知らないが負けはしない）

ギルガメツシュの持つ円筒形の剣が突風を巻き起こす。ゲイト・オブ・バヒロン 王の財宝の他の宝具は展開されていない。否、出来ないだろう。あの剣が巻き起こす旋風が他の宝具を弾き飛ばしてしまうので、展開したくても展開出来ないのだ。

けれどそんなものは関係ないのだろう。恐らくギルガメツシュにとって王の財宝の宝具全てと比して尚も信頼に足る宝具なのだろう。ゲイト・オブ・バヒロン ならばこそ、自分もまた最大の一撃をもって迎え討たなければ負ける。聖剣を構え、そして。

「約束された勝利の剣ッ！」エクスカリバー

星の光を集めた究極の幻想が、今解き放たれた。

前に放ったのは赤い外套の騎士との戦いでのことであつたが、あの時はルキアーノと李書文との二連戦の後だつた為に全力ではなかつた。

故にこれは真正銘最初の本気の聖剣である。けれど、

「天地乖離す開闢の星」エヌマ・エリシュ

それはギルガメツシュの放つ暴虐によって押し返された。

真名の解放。乖離剣エアの真名たるエヌマ・エリシュ。

嘗て天地を斬り分けた剣にして世界を開闢させた究極の剣。

「なっ！」

相殺すら出来なかった。

それは英雄王ギルガメツシユの誇る対界宝具。  
人々の望んだ幻想は、打ち砕かれた。

レナードの体が衝撃に耐えきれず飛ぶ。

けれど死んではない。エクスカリバーは相殺こそ不可能であったものの、威力を軽減させることには成功したのだ。

「ははははははははっ！ 人類最強の剣もこの程度、相殺すら出来んのか」

「くっ……」

体のあちこちがエアの一撃により傷ついている。  
けれどそんな傷は、直ぐにあっさり完治した。

（流石は、聖剣の鞘か）

今レナードの体内にはエクスカリバーの鞘たるアヴァロンがある。  
強力な治癒不可の呪いでもなければ、レナードのダメージを残すことは出来ない。

立ち上がり、ギルガメツシユの眼光を見る。

「立ったか。よいぞよいぞ。

我としても、あの程度の一撃で斃れられても興ざめというもの」

「生憎と、この程度で倒れる程ヤワじゃなくてね」

アヴァロンがあつて良かった。

もしなければ、負傷した状態で彼の英雄王と戦う羽目になってい



ただらう。

「人型自在戦闘装甲騎だったか、お前が戦場で駆っていたのは」

「なに？」

「この世にある伝承、武器、創作、その全てに元となった原典がある」

「それが、どうした？」

「分かっておらん。それは何も宝具だけではない。現代の世界を支配する 科学 とて例外ではないのだぞ」

「……………まさか？」

乖離剣の時とは、また別の絶望。乖離剣は正体不明だからこそその悪寒だったが、正体が分かるからこそその悪寒がレナードを支配する。

「人型自在戦闘装甲騎とは人の模倣。つまりは」

ナイトメアフレーム  
ゲート・オブ・バビロン  
王の財宝より黄金甲冑を纏う巨体が現れる。

全長4mの巨人。人間ではない。人間はあそこまで大きくはない。

「……………  
ゴレムだ」

SEARCH 27 天地乖離す 開闢の星（後書き）

そんな訳でギルが原作にない宝具を使いましたが………まあヴェイマーナや古代核弾頭まであるんだから、あれくらいはあるでしょう。

さて今回はちよろつとレナードの弱点的なものが出ました。

え？ レナードは本当に聖剣の一撃で死んだかって？

・  
・  
・  
・  
・

実は幻想入りしてゆかりんと………だったら面白そうですねw

自分自身を支配できる者が男だ。

自分を支配出来ぬ者に人を支配することは出来ない。人間にとって最初にして最大の敵とは、まず己自身であり己に勝てぬならば他者に勝利する事も不可能。

人間の最大の味方は己であり、最大の敵もまた己なのである。

それは嘗てレナードが、いや当時の戦士達の剣。KMF。神聖ブリタニア帝国が初めて実戦投入した最強の陸戦兵器。だがその陸戦兵器は、ブリタニア帝国の伯爵であり技術者ロイドの開発した『フロートシステム』のより陸・空を支配する戦場の覇者となる。

そんなレナードにとって最も頼りになる剣であり、同時に最大の敵でもあった兵器KMF、その原典が彼に牙をむく。

「おいおい。何でもアリか、その蔵？」

「戯け。我が王の財宝はこの世の全ての至宝を集めし宝物庫ぞ。この中には文字通り、この世の全ての源流が眠っている。無論、この時代の戦士の主武装たる銃火器の類もまた然り。さて、では踊れ」

瞬間、黄金のゴーレムが動いた。

その巨体に似合わぬスピードで距離をつめたゴーレムは、その身

の丈に合う矛で地面を抉る。けれど、レナードとて伊達にソレと同種の兵器を駆ってきた訳ではない。あっさり回避けるとゴーレムに接近していく。

そう幾らソレが四メートルの巨人であろうと宝具であることに違いはない。いや宝具だろうと宝具でなくとも変わらない。レナードの軍人に栄光をオイル・ハイル・ソルジャーならばゴーレムだろうと宇宙戦艦だろうと問答無用に全ての制御を剥奪し支配することが可能だ。そしてゴーレムを自分の支配下においてしまえば、ギルガメッシュに特攻させて壊れたブロックンファンタズム幻想で爆破させるなり、踊りを披露させるのも自由自在だ。

けれどそんな事はギルガメッシュとて理解している。だからそうさせない為に、無数の魔弾がレナードを襲った。

「面倒なものを出してきたものだ……！」

レナードはゴーレムに接近するのを止め下がる。

だがそこを狙い澄ましたかのように黄金のゴーレムが巨大な矛でレナードを突いてきた。筋力云々の前に体格や重量が違いすぎる。まともに受けるのは不可能。

そう判断したレナードは境内にある大きな石を蹴りあげ手につかむと、思いつきり矛に投げつけた。

幾ら高速で飛ばすと、幾ら大きな石であろうと、所詮は常識的な物質。仮にも宝具であろうゴーレムが振るう矛になんの影響も与えることは出来なかつただろう。

しかし生憎とレナードの投擲した石は普通の石ではない。レナードの軍人に栄光をオイル・ハイル・ソルジャーにより宝具化した石だ。それは高速で矛に激突すると、壊れた幻想により爆破した。当然、所詮ランクにしてEかD

の宝具化した石では矛を破壊することなど出来ない。けれど速度を減衰させることは十分可能だ。そして減衰した矛ならば避けるのは容易い。

これが軍人に栄光をの隠されたもう一つの使用方法。レナードの掴むないし触れた物質は例外なくレナードの宝具になる。そしてサーヴァントは自身の宝具を壊れた幻想により爆発させることが可能だ。

この二つの特性を利用した爆弾化。チェンジボム理論上、レナードはビルだろ  
うが旅客機だろうが自分の意思次第で何時でも起爆可能の爆弾  
に変える事が出来るのである。

だがしかし。

それ等の能力を駆使しても、英雄王の頂は遠く険しい。

「そらそら。どうしたセイバー。」

逃げてばかりでは面白味に欠けるぞ。

貴様とて英雄ならば、その抗いにて我を興じさせよ！」

ギルガメツシュが魔弾を飛ばしてくる。

だがレナードはそれを自身の宝具へとすることは出来ない。アレ等は所有者に害を齎す災厄の宝具だ。レナードが自分の宝具にすれば、自分の宝具がレナード自身を蝕んでしまう。

なのでレナードはその宝具を掴む事はせず、自らの武具である双剣で叩き落とした。

だが間髪いれずにゴーレムが攻撃してくる。正に休む間もない攻撃の連続。原初の英雄、英霊の中で頂点に君臨する英雄王は、こつ  
も強い。

「ハッ

」

だがそれがなんだというのだ。

強い敵など、絶望的な状況など幾らでも潜り抜けてきた。

絶望的というのならば国に追われ、逆賊の烙印を押されていたあの頃。

総人口三十億の連合を、総勢千人の精鋭で相手をしようとしていた当時の方がより絶望的であったではないか。

ならばレナードはこの程度で諦めてはいけない。そもナイトオブワンの証たる純白のマントを先帝より授かって以来、この身に敗北は許されなくなった。ナイトオブワンとは帝国最強騎士。その敗北はブリタニアの騎士全ての敗北となる。それだけではない。実に面倒なことだがレナードは歴代最強の帝国騎士でもある。つまり自身の敗北は、誇りある神聖ブリタニア帝国そのものが英雄王ギルガメツシユに屈してしまったという事になるのだ。

今正に黄金のゴーレムが矛をレナードに向けていた。徐々に迫る矛。大地を抉り、城塞を破壊する一撃。それを前にしてもレナードは平然としていた。平然と、矛を真正面から受け止めた。

「ほっ」

感嘆の声はギルガメツシユのもの。

対するレナードはといえば、そんな言葉を洩らす事など出来ない。彼の思考が少しでも他に向けば、その瞬間にレナードの体は吹き飛ぶだろう。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！」

レナードの筋力はAだ。けれど重量の差というのは馬鹿に出来ない。黄金のゴーレムの矛はかなりの筋力を誇るレナードをも押しに行っている。やがてその矛がレナードの力を圧倒するのは確実だろう。もって後数秒というところか。

「クッ

」

それでもレナードは笑う。数秒、その数秒があればいいのだ。数秒あればレナードの軍人オール・ハイル・ソルジャーに栄光をは効果を正常に発揮する。

「……………奪った」

言った瞬間、レナードの体がどのような体術を使ったのか、大きく左方へと飛んだ。

それはゴーレムからではなく、爆心地から逃れるための逃走。爆風が届かぬ場所まで飛ぶと、レナードは紡いだ。一つの鍵を。

ブローケンファンタズム  
「壊れた幻想」

レナードにより篡奪された矛が爆発する。

先程の石とは違い、真正正銘の宝具の爆発に、黄金のゴーレムの胴体が抉れた。

だが流石は英雄王の奴隷巨人ゴーレムといったところか。胴体の一部が抉れ、あちらこちらに甚大な傷があるが完全には破壊されず踏みとどまった。それが逆に主の災厄になるとも分からずに。

レナードは跳躍する。

黄金のゴーレムの頭上に。着地すると即座にレナードの宝具が作動し、ゴーレムの制御を完全にのりこった。後は簡単。レナードは唯一つ 英雄王ギルガメッシュに突進せよ という命令だけ出すと

再び地面に着地した。だが黄金のゴーレムのほうは止まらない。制御を奪われた宝具は十数秒はレナードの手から離れても解除されない。レナードが離れた後も黄金のゴーレムは、レナードからの命令を忠実に実行し、英雄王ギルガメッシュへと突進していった。

「戯けが。王の宝物が、王に牙を剥くなど万死に値する非礼である。そのようなゴミは我が宝物に加えるに値せん」

パチンと指を鳴らす。それだけの動作で、レナードが苦戦した黄金のゴーレムが爆ぜた。柳洞寺全体に伝わるほどの爆風。けれどその爆風の中心付近にいた筈の英雄王は、全くの無事であった。

「さて、そろそろ幕だ」

英雄王ギルガメッシュが、残酷な決定を告げた。

「これ以上戦い、我が宝物を篡奪されるのも莫迦らしい。あの鉄屑ゴレムにしても変えは幾らでもあるとはいえ、民草共が奪い合った結果街一つが焼き尽くされた品。なによりも飽きた。故に終わらだ。死ね、セイバー」

英雄王が宝物庫から抜いたのは一振りの剣だ。

乖離剣エア。嘗て天地を分けた神造兵器にして、英雄王が誇る天地創世の光。

「我が宝物を奪い合い、そして最後まで勝ち残った褒美だ。至宝たる乖離剣。その真価を仰ぎ見るがよい」



SEARCH 28 遊興（後書き）

飽きた、の一言で戦い終了宣言、それがギルクオリティー。

民衆は君主の行うことを模倣する。

王が暴虐を働けば、民もまた暴虐になる。

王が法を絶対とするならば、民もまた法を遵守する。

民は王を見て人の在り方を知り、王もまた民を見て自らの在り方を知る。

柳洞寺の境内は、一つの闘技場であった。

原初の英雄。英霊の中でも最強の座に君臨する英雄王ギルガメッシュ。

それに挑むのは、この世界とは異なる平行世界の英霊。神聖ブリタニア帝国において歴代最強とまで謳われた騎士にして魔人、レナード・エニアグラム。

英雄王が今正に振り下ろさんとする剣は、嘗て天地を分けた神造兵器。その出力は全力でなくとも最強の聖剣を凌ぐ。

けれどその暴虐の力に、最初の激突と同じように聖剣を構えるレナード。

正真正銘これが最後の激突だろう。

第四次聖杯戦争。

征服王イスカンダル、クランの猛犬クー・フリーン、ブリタニアの吸血鬼ルキアーノ・ブラッドリー、錬鉄の英霊エミヤ、最強の拳

法家と名高き李書文。過去の聖杯戦争を見返してもこれ程に凶悪な面々が揃ったのは今回だけだろう。

思えば最初はアーサー王に勘違いされる事から始まった。

旅客機で赤い外套の騎士に狙撃され、冬木について早々にランサー、アサシン、ライダーと一同に会した。そして今度は嘗ての悪友と最強の拳法家と固有結界の術者との三連戦だ。

「クツクツクツ」

気づけば笑いが零れていた。

本当にどうなっているんだろうか。

死ぬ前はまだ帝国最強の騎士だったというのに、お次は歴代最強の騎士、そしてこうして聖杯戦争にサーヴァントとして呼ばれたら史上最強の英雄王に戦いを挑もうとしている。

「どうした、狂ったように笑い出して。

まさか手加減して欲しいのか？」

ギルガメツシュが言う。

「してくれるならしてくれ。相手が手加減していようと油断していようと、俺は勝利と言う名の華さえ手に入ればそれでいい」

「では全力をもって叩き潰すでしょう。

最強の聖剣というわりに大したことのない玩具であったが、だからこそこの英雄王が誇る最強の剣の真価を教えてやらねばなるまい」

「……………嫌な王様だ」

「フム。良く言われる」

実際の所勝算は低い。

彼の英雄王はその実力、宝具量もそうであるが、この世全ての財宝を収集した眼力とて並大抵のものではないのだ。けれど勝算は低くとも皆無ではない。ゼロではないのだ。0と1の僅かな違いこそ、活路があるのだ。

「切嗣」

ポツリと虚空に向かって呟く。

するとレナードの体内にある魔力量が一時的に跳ね上がった。

「令呪か。悪くない手ではある。

貴様の聖剣では天変地異が起きたとしても我が乖離剣には勝てん。で、あれば令呪の補助によって聖剣の威力を底上げするしかないか」

「……………」

「ならば、貴様の抱いた希望を打ち砕こう」

「ッー」

見間違いではない。ギルガメッシュの乖離剣から発せられる力が数段跳ね上がった。

もはやその力の総量を、認識する事すら出来ない。というより、あれを認識できるような存在がこの世界にいるのか。それほど濃密なエネルギーが乖離剣を中心に渦巻いていた。

「何をした…………？」

「大したことではない。我が王の財宝はエアゲート・オブ・バヒロンを使う間他の剣や槍などを投擲することは出来ぬ。が、我が蔵にあるのが、よもや武器兵器だけだとも思っていたのか？」

「！」

「蔵の中には、宝具の威力を高める効果を持つ宝具など幾らでも存在する。

そら等全てを使い乖離剣の威力を高めたならば、言うまでもなからう」

「……………」

もはや語るまでもない。

乖離剣エアは最強の威力を誇る宝具だ。それを更に強化するといふ事は、最強を超えて無敵の宝具になるといふことだ。

「ほう屈さぬか」

「……………絶望的な戦いには慣れていてね」

ギルガメッシュがこちらを一瞥した。

そして、最強を超えた無敵の一撃が放たれる。

「天地乖離エヌマ・エリシュす開闢の星ッ！」

滴定する全てを粉碎する破壊。

だがレナードはそれから逃げるでも迎え撃つでもなく、真っ直ぐに飛び込んだ。

「ハッ。血迷ったか、セイバー。エアの前に特攻するなど」

「  
」

確かにギルガメッシュの言うとおり乖離剣の破壊力は絶望的だ。

防御する事も相殺することも不可能だ。もし仮に出来るとするのなら、唯一英雄王ギルガメッシュと並び立った英霊であるエルキドウくらいしかないだろう。

そう、防御も、相殺も、逃げる事も出来ない。だから最初からレナードに残された選択肢は一つしかなかったのだ。防御も相殺も離脱も不可能ならば、全てを遮断するしかない。

必勝のタイミングは刹那の中の刹那。一瞬の中の一瞬。

近づきすぎればエアの破壊に巻き込まれ、遠過ぎればエアを凌いでも英雄王に悟られる。

0.000000000001秒にも満たぬタイミングを、魔人はピタリと合わせた。

「アヴァロン全て遠き理想郷ッ！」

「なッ!？」

金色の英雄王の光を、妖精郷の鞘が遮断する。

無敵の力を破る事は出来ない。防御する事は出来ない。逃げる事も出来ない。

だからこそ『遮断』する。全てを『遮断』してしまえば無敵の力は届かない。

アヴァロン全て遠き理想郷。



「……………」

けれど切嗣はただ黙々と作業を続ける。  
アイリスフィールになど目もくれず。

ただ切嗣はアイリスフィールの死を悲しまなかった訳ではない。  
いや誰よりもアイリスフィールの死を悼むからこそ、聖杯を完成させようとしているのだろう。もし聖杯が完成しなければ、その死が無駄になってしまうだろうから。

アイリスフィールが死んだのは、実はつい先程のことである。  
ただでさえサーヴァント五体を注いだアイリスフィールは、最後の最期に最愛の夫と言葉を交わし、そして眠るように死んだのだ。

聖杯が完成すれば、このような悲劇はなくなる。  
世界の全てを救う事は出来ない。だから常に一を切り捨て九を救ってきた。だが聖杯が完成すれば、真の意味で世界中の十を全て救う事が出来るのだ。

戦争の消滅。地獄すら霞む飢餓の国。それ等をなくすことは、英雄であろうと不可能。だからこそ奇跡に委ねる。聖杯という万能の釜をもって救世を成し遂げる事こそ衛宮切嗣の願い。

実はアーチャーとセイバーの決着など切嗣には興味がない。いや万全を期すのであればセイバーが勝った方がなにかと都合が良いが例えセイバーが敗れアーチャーが勝ち残ったとしても、聖杯にサーヴァントが注がれる事実には変わりはない。サーヴァントがいなければ聖杯で願いを叶える事は出来ないなどというのはサーヴァントを操る為の詭弁。もしサーヴァントがいなければ聖杯を使えないのであれば、根源を目指す遠坂時臣はそれを為す事すら出来ないのだから



ら。

果たして聖杯に最後のサーヴァントが注がれた。

まだ自分とのラインが消失していない事から、どうやらセイバーが生き残ったらしい。

救世の為に正義を捨てた男、衛宮切嗣は頭上を見上げる。そして、

SEARCH29 屁理屈(後書き)

そんな訳で一応の決着です。

禁書のssを書いてるせいとか、地の文に一方通行が進行してきたりしましたが、兎にも角にも決着です。

そして切嗣には最後の性質の悪いサプライズが。

この世全ての悪。

ソロアスター教に登場する悪神アンリ・マユ。北欧神話、ギリシャ神話、ケルト神話などに登場する神々というのは大抵が嫉妬したり憎んだりといった人間らしい部分がある。しかしアンリ・マユはそうではない。悪しか持ち得ぬ、単一神だ。無論それは英霊を超えた神霊。聖杯戦争におけるサーヴァントとして召喚することなど不可能。しかし、実際にアンリ・マユは呼ばれたのだ。三度目の儀に。

奇妙な沈黙だった。

目の前には乖離剣を下ろし、ただ堂々とそこに立つ英雄王。

対するは息も絶え絶え、まるで漸くエベレストの頂上に辿り着いた登山家のような顔をしているレナード。勝者がどちらなのかは明白。なぜならば堂々と立つ英雄王は、その鎧は破壊され、体は聖剣によつて霊核を破壊され尽くされているのだから。

「その光、その究極の一。間違いなく全て遠き理想郷<sup>アヴァロン</sup>だが解せぬ。何故それを貴様が持っている？」

英雄王の疑問は尤もだった。

この鞘を持つ英霊は唯一人アーサー王のみである。



れが決定事項。であればアーサー王が眠る場所は、妖精郷でなければならぬのだ。

そして思い返してみるがいい。レナードの世界の騎士王が最期どこで眠ったかを。そこで騎士王と同様に倒れたのが誰だったかを。

「皮肉なことだが、俺もアーサー王と同じ場所で眠る英霊だったということだ。

まあ屁理屈もいい所であるし、本来ならマスターの望み通り騎士王が呼ばれた筈だというのに、どこで歯車が狂ったのやら」

「何処まで我を笑わせれば気が済む。だが、良い。イレギュラーがあつてこの世界。全てが望み通りのままにいく世界など面白味に欠ける。時にこの我に反逆するほどの愚昧が現れ、我に並び立つ朋友が現れるからこそ、この世界は美しい」

「そうか。確かに、そうだ」

英雄王の眼光がレナードを見る。

「ではなセイバー。いいや、中々に愉しかったぞ」

最古の英霊ギルガメッシュは、最後に快活に笑い、消えていった。同時に第四次聖杯戦争の勝利者が定まったということでもあった。

なんとなく、予感があつた。赤い外套の騎士。本当はアーチャーではなくキャスターであつたサーヴァント。その男は言っていた。

この土地にある聖杯は贗作だ。

俺も詳しい事は摩耗しきっていて分からないが、確固たる事実だ。衛宮切嗣の参加した聖杯戦争は、街一つを飲み込んだ大災害にて終結する。

ただの戯言と、ただの策略と聞き流したかった。そう切り捨てる出来事の筈だったのである。

俺の真名はエミヤシロウ。貴様が生み出し、貴様の理想を継いだ慣れの果てだ

赤い外套の騎士が残した呪いは、あれから何時までも衛宮切嗣の中に残っていた。

そして今日、第四次聖杯戦争は終結を迎えようとしている。アーチャー、ランサー、ライダー、キャスター、アサシン、バースーカーの六体のサーヴァントは脱落し残るはセイバー。即ち切嗣のサーヴァントを残すのみとなったのだ。

本来ならこれで大団円となる筈。

この世界に存在する全ての争いは消滅し、恒久的世界平和は為される。

無神論者である切嗣は悟る。この世界に神様は存在する。神様はしっかりと衛宮切嗣のことを見ていて、そして切嗣が不幸になるのを見て楽しんでいるのだ。

切嗣は頭上を見上げる。

そこにどす黒い、全てを呪う暗黒の釜があった。

これが現実だ。

覆しようもない、否定しようもない。

聖杯は事実として呪われていて、英霊エミヤと名乗ったサーヴァントの言葉は事実だった。これはそれだけの話。

「……………切嗣」

「セイバーか」

振り返らず声をかける。

セイバーはもう理解しているようだった。

聖杯がどんなものか。そして赤い騎士の呪いが真実だったことに。

切嗣の体から力が抜けていく。

全ては徒労。この土地にある聖杯は切嗣の願いを叶えない。恒久的世界平和を叶えない。この聖杯は破壊だけにしか使えないエネルギーの塊だ。所有者の願いを『破壊』という手段だけで叶えてしまう。この世全ての悪を呪い殺す力を秘めた災厄の釜だ。

もしこんなものに 恒久的世界平和 などと願えば、聖杯はこの世全ての人間を殺戮する事で、結果的に何の争いもない平和な世界を創造するだろう。

「どうするんだ、切嗣？」

「何がだ」

「俺はこの聖杯戦争中

つまりこの聖杯をどうだかする

まで

はお前に従うと決めている。もしお前がこいつ

を使って世界征服なり地球大爆発なり願おうと、別に止めはしないさ。実際、これがあれば人類抹殺なんて夢物語でも何でもないだろうしな」

「……………」

「まあ、割り切れというのも無理な話か。なにせこの聖杯は完璧に偽物だった。これは到底お前の望む世界を創る事はない。つまりアイリスフィールは無駄死にという訳だからな」

「だから、どうした？」

「おいおい怖い顔するな。別に俺は難しい話をしてるんじゃない。どついう命令<sup>オーダー</sup>をくれるのか尋ねてるんだ」

「そんなことは……………」

決まっている。

衛宮切嗣はこれまで一を切り捨て十を救ってきた。そしてこの聖杯は存在するだけで十を破壊するものだ。ならば衛宮切嗣の選択肢など最初から一つしか残されていない。

「セイバー。聖杯を、破壊しろ」

「イエス、マイ・ロード」

セイバーは黙って聖剣を振り上げる。

言葉は不要。そして、

「<sup>エクスカリバー</sup>約束された勝利の剣」

短い一言。

真名を開放された聖剣は黄金の輝きを放ち、巨大な閃光が黒い釜を貫いた。



けれどやはり神様は切嗣のことが嫌いだった。

破壊された聖杯から溢れ出した、いや出てきた巨大な泥が衛宮切嗣、そして聖剣の真名解放を行い後少し、後一分足らずで消滅する筈だったセイバーを飲み込んだ。





「……………ああ、なんとか動ける」

立ち上がる。あの聖杯から落ちてきた泥を浴びてしまったせいか、体が重病に冒されているかのように重い。ただ大気に満ちる（どす黒いとはいえ）濃密な魔力のお蔭で不思議と魔力だけは十二分であるが。

だがそんな事は直ぐに切嗣の頭の中から吹き飛んだ。

黒い聖杯があった場所から、夥しい、ただ悍ましいとしか形容できない肉塊が溢れだしている。サーヴァントの受肉。そんな言葉が脳裏を過る。

（まさか……………この世全ての悪が）  
アンリ・マユ

切嗣には何がどうして聖杯の中に、あんな代物があるのかは分からない。

けれどアレがこの世界全てを殺すものだということとは分かる。あれに直接接触れた切嗣は、あれの内面をまじまじと見せつけられたのだ。

「切嗣……………」

「アレを破壊する」

「……………分かりました」

舞弥が懐から銃を抜いた。

実際の所、アレを切嗣でどうにかなるとは思っていない。あれは切嗣自身が率いたセイバーや、あの黄金のアーチャーよりも最悪の

相手なのだろう。そんなものを、所詮はただの魔術師でしかない切嗣に倒せるはずがないのだ。けれど、あれはまだ誕生していない。ならば、もしかしたら切嗣にもどうにか出来るかもしれないのだ。

「クッ」

思わず切嗣は自嘲する

そんな事がある筈がない。アレは人間では太刀打ちできないような災厄だ。人間が台風や地震などといった自然の猛威に抗う事が出来ないように、この世全ての悪にただの人間が挑み、そして倒す事など出来るはずがないのだ。

それでも、切嗣は挑む。不可能と分かっているとしても、呪いに冒された身でも、世界を救うとそう決意したのだから。退却の二文字は存在しなかった。

けれど、この世全ての悪。その中心から一つの黄金の閃光が舞い上がり、切嗣は足を止めた。

あの輝きを知っている。あの尊さを知っている。全てが悪に染め上げられた世界で尚も、輝きを失わなかった光を切嗣は知っていた。

「セイ、バー？」

そうだ。如何して気づかなかった。

自分の手には、まだ令呪の輝きが残っている。

即ち、セイバーは。レナード・エニアグラムは生きていた。

「あー。死ぬかと思った」

そんな場に合わない声で、その剣士はゆっくりと歩いてきた。

純白の騎士服と純白の外套。剣の英霊は召喚したその時と、全く変わらぬ様子のままそこに存在していた。

「無事だったのか？」

思わずそんな言葉が口から洩れる。だが仕方ないだろう。あれはサーヴァントであつても、いや霊体であり魔力の塊であるサーヴァントだからこそ、免れる事の出来ぬ呪いのはずだ。なのにセイバーには呪いに冒された気配が全くといってない。

「あの程度の呪いを飲み込めずして何が英雄かッ！ ………………」  
と、いいたい所だがあんな極大の呪い、どんな英霊だろうと浴びれば即死、運が良くても反転は免れないだろうさ。  
俺が助かったトリックは、これだよ」

そういつて自分の体をトントンと指さすセイバー。  
そこで漸く理解した。

「聖剣の鞘の守り」

「ご名答。流石は五つの魔法すら寄せ付けぬ究極の守り。  
あんな世界を犯す呪いですら跳ね除けた辺り、そのキャッチフレーズに嘘偽りなしだな。

お蔭でほら、見る。サーヴァントのような夢幻たる影ではない。確固たる肉体をもって、この俺はこの世界に存在している」

「肉体……まさか、受肉を？」

「あれだけの魔力の塊だ。サーヴァントの一人や二人受肉しても可笑しくないだろ。」

けどまあ、受肉しといて何だが、直ぐに魂を焼き尽くす羽目になりそうだ」

レナードが受肉して、この世に生まれかかっているアンリ・マユに向き直る。

完全なる誕生が近いのだろう。生命の脈動が、離れているこちらにも聞こえてきた。

「チツ。ルキアーノの馬鹿が四百人も食ったせいか。あいつに殺された人間たちの憎悪やら恨みやらが一つの方向性に収束してるな。聖杯を聖剣で吹っ飛ばしたにも関わらず、ああやって誕生しようとしているのも、それが原因かな、これは」

厳密に言うとそれだけではない。

レナードも、そして切嗣も知らぬ事であるが、最後に倒した英雄王ギルガメッシュは魂の比重にして通常のサーヴァント三分を誇る。極端な話をすれば、聖杯には六体ではなく八体分のサーヴァントが注がれたのと同義なのである。

更にルキアーノ・ブラッドリーの体内に溜め込まれた四百人もの人間の魂が、恨みを晴らしたいという一つの方向性に集まった結果、この世全ての悪は誕生しようとしているのだ。一つ幸いなのは、聖杯に収まっていた時に、エクスカリバーによって吹っ飛ばされたので、完全体とはいえぬことであるが、それでもあれが誕生すれば冬木……………いや下手すれば日本そのものが終わりかねない。

「セイバー。アレを…………倒せるのか？」

だから切嗣は尋ねてしまった。

あんな巨大な怪物に、果たして勝てるのかと。

答えなど当の昔に分かっていたにも関わらず。

「……皮肉な話だが、死んで初めて物事の本質に気付くという事はあるものだな」

「なに？」

「ワイアードギアス。俺の直感スキルの大本だが、その力の本質というものに、生前の俺は全くといっていいほど気づいていなかった。黄昏の間を無意識化で開けたのも、元の世界に還る際にコレが一つの道標になったのも、全てが繋がっていたからだ」

「何を言っている、セイバー！」

「能力の本質。それはこの世界へと繋がる道であり、黄昏の間へと通じる扉。直感などは、その副産物に過ぎない」

瞬間であった。

アンリ・マユ

この世全ての悪が消える。

切嗣は驚き周囲を見渡すと、レナードの背後から巨大な不死鳥の文様が描かれた巨大な扉が存在していた。それはこの世とあの世の境。生者と死者が邂逅する土地。黄昏の間へと伝わる唯一の道であった。

「尤も、こんな代物。サーヴァントといっても所詮は個人でしかない俺に出来る事ではない。ただでさえ異なる世界には通用しない世界を持つてくる事でさえ、多大な負荷があるというのに。だが不幸中の幸いだな。アヴァロンが完全にアンリ・マユを遮断しなかったのが有利に働いた。アレは余程この俺が好きらしい。魔力が、満ちている！」



「……まさか、アンリ・マユとラインが繋がっているというのか？」

眼が見開いた。信じられない事だが、今のレナードにはマスターが二人いた。令呪を持つマスターこそ切嗣であるが、魔力供給をしているマスターは二人。一人は言うまでもなく切嗣自身、そしてもう一人は。

「アンリ・マユがお前のマスターだと？」

「ああ。どういう理屈だかは知らないがどうもそうらしい。今の俺には無尽蔵を超えた無限の魔力が送られている。切嗣、お前の方にも異常はないのか？」

言われてみれば、体に魔力が満ちている。最初はどうも不思議に思っていたのだが、謎が解けた。難しい話ではない。アンリ・マユからレナードに送られ、それでも収まりきらない魔力がマスターである切嗣に逆流していたのだ。

「何はともあれ、無限の魔力供給の恩恵として、俺も無茶ができる。異なる世界に、こちらの世界の理を持ってきて、更にそれを適用させ繋げる事すら出来る。

今ならどんな相手にも負ける気がしない。まあ、あそこで生まれかかっているアンリ・マユが存在している間だけだから、期間限定の無敵状態というところか。そういう訳だから」

「待て。何処に行く？」

展開した巨大な扉に歩いて行こうとするセイバーを呼び止める。

「何処って決まってるだろう。一時的に黄昏の間にアンリ・マユを

送ったが、あのまま放置しておけば必ず出てくるぞ。これを閉じても同じことだ。やはりあれを如何にかするには、完璧に滅ぼし尽くさなければならぬだろう。おおっとマスター命令は聞かないからな。言つたらう？ 俺は聖杯戦争中はお前の騎士として働くが、逆に言えば聖杯戦争が終われば俺にお前の命令を聞く道理などない。俺は俺なりに、この世界の果てで出会った友達の為に、この世全ての悪をぶち殺そうという訳だよ」

「セイバー、お前は……」

「聞いたぞ。娘がいるんだろう？ そして約束したんだろう、アイリスフィールと。聖杯戦争が終われば後はイリヤとかいう娘の為に生きるぞ。」

このままお前が腑抜けていれば、アイリスフィールとお前の関係は完全に『悲恋』で終わる。だが、もしお前が娘と共に生きて幸せになれば『悲恋』では終わらないんだから」

切嗣は思い出す。

あの冬の城で誕生した自分の娘を。

イリヤスフィール。この世に二人といたくない大切な、大切な一人娘。

「悲恋は俺だけの特権だ。誰にも譲る気はない」

「待て！」

思わず呼び止めた。

理由なんてない。ただ呼び止めた方がいいと思ったから呼び止めた。

「ではな、切嗣。時の果てで巡り合いし我が朋友よ。幸せになる事

だ  
」

「……負けるな、セイバー」

「俺を誰だと思っている？」

それで終わり。

切嗣の手に甲にあった最後の令呪が消える。

恐らく先程の言葉が、絶対遵守の命令となったのだろう。

負けるな、という実に単純明快な命令が。

これで、終わり。

衛宮切嗣にとっても、アイリスフィールにとっても。そしてレナ  
ード・エニアグラムにとっても。

何一つ生み出さず、けれど一人の男に微かな希望を遺した戦い。  
第四次聖杯戦争は、静かに終結した。

だが戦いは終わらない。

聖杯戦争が終結しても、この誰もいない世界。あの世とこの世の

境目である黄昏の間には、漸く誕生し形をもったアンリ・マユと、  
たった一人の英雄が対峙していた。

「

ッ！！」

「おうおう、生まれたばかりの癖して良く泣く。安産祈願の祈りは  
届いたか」

この永久に朝も夜も来ない場所の名は、黄昏の間。

Cの世界と呼ばれる死者の世界と、人々の生きる生者の世界の中  
間地点。

「しかし子供は成長が早いというが、早すぎだろ」

最初は巨大とはいえ柳洞寺の一角に収まる程度だったというのに、  
今はKMFの闘技場を埋め尽くすほどのデカさに成長している。聖  
杯であった頃にエクスカリバーで吹っ飛ばしたお蔭で、完全な人型、  
つまりは完全体ではなく、醜い肉塊のままなのが幸いであるが、も  
しあのまま柳洞寺の放置していれば冬木には地獄が具現していただ  
ろう。

「これは不味いな。流石はこの世全ての悪。神霊クラスの怪物に、  
英霊とはいえサーヴァント一体が勝てる筈がない」

けれど何故だろうか。レナードには世界中の全ての人間が嫌悪し  
敵意する筈の『この世全ての悪』がどうしても憎めない。

肉塊はじりじりと距離をつめてくる。恐らく魔力の塊であるサー  
ヴァントを吸収し、自分をより完全とする為に。

「ああ、俺一人じゃあ勝てないなあ」

瞬間、黄昏の間が脈動する。

そう。ここはこの世とあの世の境目。そしてレナードがまだ英霊の座に招かれる前、生者だった頃にここを訪れた事もある。ならば逆に考えてみればいい。生者に訪れる事が出来るのならば、死者が訪れる事の出来ない道理はない。

「来たれッ！ 神聖ブリタニア帝国の旗の下に集いし戦士ッ！ ジェミアッ！ アーニヤッ！ 姉上ッ！ ルキアーノッ！ モニカツ！ スザクッ！ そして五百万の戦士達ッ！」

黄昏の間の奥より、天空を埋め尽くす軍勢が現れる。

それは正に最終戦争<sup>ウオーレクイエム</sup>。各々其々がKMFや戦艦などを引き連れて現れる。ランスロットが。ジークフリートが。パーシヴァルが。フロレンスが。そして無数の戦艦達の中においても目立つ圧倒的な黒、戦艦アースガルズが君臨している。

「<sup>デッドナイト・オブ・アースガルズ アンリ・マユ</sup>神世界の魔王軍。この世全ての悪、楽しい侵略戦争を始めようか」

デッドナイト・オブ・アースガルス  
神世界の魔王軍

ランク：E X

種別：対軍宝具

レンジ：計測不能

最大捕捉：計測不能

ブリタニア帝国史上最強の騎士レナード・エニアグラムの、本来は発動すら不可能な宝具。

何故反則かというところ、発動する為に必要な魔力が出鱈目に多く、発動するとしたらイリヤスフィールクラスの魔力量の持ち主が、五秒程度発動出来れば御の字というほど。なので一応あるのはあるが発動は不可能と言う欠陥宝具。

しかしイレギュラーな事態により繋がってしまったアンリ・マユからの魔力供給は無尽蔵を超えた無限であり、令呪のサポートなど面倒な事なしで発動可能。

レナード・エニアグラムには繋が<sup>ワイアート</sup>り者であり、すべての根源の渦であるこの世界と繋がっている。その繋がっている”道”を膨大な魔力を使うことで、強引に現実世界を侵食、全く違う理の世界に対象を飲み込む。

その世界は生者の世界と死者の世界の狭間であり、レナードは死者の世界の住人たる神聖ブリタニア軍全軍を呼び出すことが可能。<sup>アイオニオン・ヘタイロイ</sup>イスカンダルアイオニオン・ヘタイロイの王の軍勢とは違い、英霊の座ではなく死者の世界全てに号令をする為、戦う意思があれば普通の人間として一生を終えた者であっても戦場にはせ参じることが可能。

枢木スザク、ルキアーノ・ブラッドリー、アーニヤ、モニカ、ノネット、ダールトン、コーネリアなど嘗てのナイト・オブ・ラウンズや英雄豪傑も問題なく召喚され、どのような相手だろうと圧倒的な数の暴力で鎮圧する。総数は約500万。黄昏の間のシステムと

オイル・ハイル・ソルジャー

軍人に栄光をの効果によりランクDの宝具状態で武装も実体化され、その中にはパーシヴァルやランスロットといった元々宝具のKMFBも存在し、この空間でのみレナードの搭乗機であるマーリン・アンブロジウスや最悪の宝具であるフレイヤが使用可能。

更にアンリ・マユからの魔力供給が無限である為に、Cの世界内の全てを倒さない限りこれが解除される事もなく、召喚された全ての者はその能力をなんの制限もなしに行き来するという、究極の反則。別名たった一人で最終戦争。最終回限定のパワーインフレなので他の場面で使われることはない。

SEARCH 31 神 世 界（後書き）

ラストのあれは少年漫画によくある最終回限定のパワーインフレです。終わればしつかりと使えなくなりますが……というかこれ一回きりです、はい。

次回はエピローグ。切嗣のその後、そしてレナードは、的なるもので



死。

人はいずれ死ぬ。否、人だけではなく花も草も星も最期には死に絶える。

では人は死ぬと何処に行くのだろうか。夢のない人は、死ねば脳の活動が停止して無になるとでもいうのだろうか、それはなんとも怖い。どうせなら死んだあとには天国に行けると思った方が楽しい。もしかしたら、そのために人は神を信じるのかもしれない。天国へ行けると、信じて。

第四次聖杯戦争から五年後。

その日は月の綺麗な夜だった。

嘗て魔術師殺しと畏れられ、第四次聖杯戦争において勝利者となったマスター、衛宮切嗣は何をするでもなく、縁側で月を眺めている。

冬だと言うのにそう気温は高くない。僅かに寒いだけで、とある騎士ならば月を肴にして酒を飲みだしていたかもしれない。

傍らには一人の『少女』がいた。切嗣の妻と同じ銀髪と赤い瞳、だがまだ幼いせいかアイリスフィールの凛としたそれに比べ、可愛らしい雰囲気を感じさせる。名前はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。切嗣の實の娘であり、あの聖杯戦争で全てを失った切嗣に残った、最後の救いだ。

アインツベルンの領地から、愛娘を救い出すのは並大抵のことはなかった。

久宇舞弥の援護、そして自身のサーヴァントより溢れ出した魔力の恩恵がなければ切嗣は、娘を救い出すどころか愛娘と邂逅する事すら叶わなかったろう。

五年も経つと子供っぽかったイリヤも少しだけ大人っぽくなってきた。ずっと見ていたアニメを「あんなもの子供が見るもの」だと言って見なくなり、ケータイにも興味を示し始めた。

けれどこの五年間は、衛宮切嗣にとっての一生でも最も輝いた時だと思う。

近所に住む藤村家の一人娘である藤村大河がイリヤの姉分になり、静かだった家が良い意味で騒がしくなり、切嗣もイリヤと遊園地に行ったり映画に行ったり、そして漫才とアニメでチェンネル戦争をしたり。普通の、在り来たりな日常。だが切嗣にとっては、まるで宝物のように耀いだ思い出だ。

だがそんな『日常』にも終わりが来る。

今まで他人にばかりに感じていた死神の気配を、自分に感じるようになってきたのだ。

しかし切嗣はそれを誰に言うでもなく平凡にいつも通りに過ごした。イリヤも薄々は感づいていたのかもしれないというのは、日頃の雰囲気から察せた。

「……………子供の頃、僕は正義の味方に憧れていた」

ふとそんな言葉が出た。

恐らく自分は今日死ぬのだろう。なんとなく理解出来た。

考えもしなかったことだが、死ぬと人はどこに行くのだろう。仏教ならば極楽か地獄か。基督教ならば最後の審判を待つのか。英雄ともなれば英霊の座に招かれるのかもしれないが、自分はその中には招かれないだろう。自分はそんな正義ヒロウの味方ではなく、ただの夫であり父親なのだから。

「憧れてたって、諦めちゃったの？」

「うん、残念ながらね。ヒーローは期間限定で、大人になると名乗るのが難しくなるんだ。

けどね正直な所、後悔はしてないんだ」

聖杯戦争の終結寸前に現れた悪魔の大本は、まだ円蔵山の地下深くに潜んでいる。だが既に切嗣は手を打った。あの戦いから持ち越した爆薬の類をやりくりし、数年がかりで何か所かの地脈に手を入れて、円蔵山に流れ込むレイラインの一部に『瘤』が発生するように細工を施しておいた。

いずれ地脈から集まるマナは長い時間をかけてその瘤に堆積し、臨界点を越えた所で、ごく局地的な大地臣を円蔵山直下に引き起す事になる。早ければ三十年、遅くとも四十年のうちに瘤は破裂するはずだ。これが精一杯、幾ら魔力があっても切嗣では大聖杯の破壊など到底不可能。それ故の苦肉の策であったが、それでも来たるべき六十年後の聖杯戦争は起きないのだろう。

「なんで、後悔しないの？ 夢、叶えられなかったんでしょ」

「そうだね。確かに夢は叶えられなかった。

けれどそのお蔭で、僕はイリヤの父親になることが出来たからね」

無駄ではない筈だ。

何よりも大切な娘には、魔術なんてものには関わって欲しくない。この少女の未来に聖杯戦争なんて呪われた戦いは不要だ。けれど衛宮切嗣には、たった一つイリヤに残さなければならぬ魔術がある。

「イリヤ、手を出してくれるかい？」

「なに？」

切嗣が魔術を詠唱する。

恐らく人生最後の魔術の行使。

そして長いような短いような時が終わると、イリヤの手の甲にあるモノが移っていた。

「僕と友達とのちよつとした絆さ。

もしこれが完全に消える事があつたら、教えてほしい。僕もお礼を言わなくちゃならないからね」

「分かった。良く分からないけど絶対に教える！」

嗚呼、最後の魔術を行使した影響だろうか。寿命がまた少し減ってしまったようだ。

まったく神様に嫌われている。最後の会話すら許してくれないとは。

最期に愛娘に残してあげる言葉はなにがいいか。口は上手いほうだと思うが、こんな時に限って何を言えばいいか分からなかった。

だから特に考えず、ただ胸の内にある言葉をそつと遺した。

「イリヤ。僕は正義の味方にはなれなかったけど、イリヤのパパになれて嬉しかったよ」

イリヤがキョトンとした表情を浮かべる。  
「ただ満面の笑顔でこう答えてくれた。」

「うん、切嗣が悔しがるくらい幸せになるんだから！」

それでいい。イリヤはこれから先の人生を幸せに生きてくれるだろう。

中学生になって高校生になって大学生になって就職して結婚して、やがて老いて死ぬ。

それは、なんて素晴らしい事なのだろうか。

「そうか。                    ああ、安心した」

ケリイはさ、どんな大人になりたいの？

眩しい日差しの中で、彼女にそう訊かれる。

その微笑みを、その優しさを、決して失いたくないと。

こんなにも世界は美しいのだから、今この瞬間の幸せが永遠であってほしいと。

そう思うから、誓いの言葉を口にする。

今のこの気持ちを、いつまでも、決して忘れずにおきたいから。

僕はね、正義の味方になりたいんだ

時の果てで巡り合いし我が朋友よ。 幸せになる事だ。

黒く染まった夜空の下で、その男にそう言われる。

その言葉を、騎士より主君に下された命令を、この五年間忘れた事はないから。

自分の人生は、決して悲恋ではなかったと、悲劇ではなかったと、胸を張って言えるから。

そう思っからこそ、自慢の言葉を口にする。

これは勝利宣言だ。高らかに宣言しよう。

僕はアイリスフィールを妻として、イリヤの父となれて最高に幸せだった

そして衛宮切嗣が縁側で静かに、その一生を終えてから二年の月日が流れた。

移りゆく時の中、私は街を歩く。この辺りは変わらない。急速に発展していった新都とは違って、ここらの街並みは昔のままだ。

嘗て私が父と歩いた、昔と同じ。

普通の人より遥かに複雑な出生である私だが、もう中学生。再来年には高校受験を控えている。志望校は家からも近い穂群原学園が第一志望。私に付き纏うワカメが同じようにそこを志望校としているのが気になる所であるが、ワカメ如きのために志望校を変えると言うのもなにか負けたようで悔しい。

ただまあワカメ以外の友達も穂群原学園を目指している子は多いし、たぶん高校生になっても上手くやっていけるだろう。

唯一の懸念事項としては隣に住む虎が教師をしていることだが、あれで教師としればそれなりに信用されているようなので大丈夫だ

と思う。

今日も何時ものように夕食の食材を購入すると、帰路に就く。私の家は今の時代には珍しい木造建築で、結構な広さを持つプチ豪邸だ。その広さ故に友達が入り浸るようになったのは言うまでもない。そんな家に私は一人暮らしをしている訳だが、隣にいる雷画もよくしてくれているし、大河も入り浸っているので寂しいとは思ったことはない。いやそう言っていると嘘になるか。やっぱりちょっとは寂しい。なにせ昔は父である切嗣と二人で暮らしていたんだから。けれど友達だっているし、姉貴分もいる。つまり何が言いたいかと言うと、私は今のままでも十分に幸せだという事だ。

ふと手の甲にあるソレを見る。

普段は見えないが、少し私が見ようと思うと浮かび上がってくる。恐らくは私の中にある魔力がコレに流れてどうたらしているのだろうが、切嗣から魔術を教えて貰えなかった私には良く分からない。

コレが消えた時に、報告してほしいと言われたが、私は未だに報告が出来ないでいる。

だけど何でだろうか。私には確かな予感があった。

コレのことを切嗣に報告するとき、切嗣が予想したのと違う報告をすることになるだろうと。

だってホラ。

直ぐその道路に、この日本ではやたらに目立つピンクのアメ車が停止した。

「んんっ」。流石に宝具化したアメ車は速いな。燃費が悪いのが難点ではあるが」

車から颯爽と降りた男は、ゆっくりと私の所に歩いてきた。目が覚めるような金髪碧眼。黒いジャケットに身を包んだ男は、まるでハリウッドスターのようにこちらに向かってくる。

「始めまして、可愛いお嬢さん」

「ふうくん。貴方が切嗣の言ってた友達？」

「たぶんそうなんじゃないか。

しかし見違えたな、この冬木も。文化レベルがミジンコからメダカに進化してみたんだ」

「それ、褒めてるの？ それとも貶してるの？」

「どちらでもない、ただの感想だよ」

気づった足取りで私を連れて男は歩く。

向かってる場所など、問うまでもないが一応尋ねてみる事にした。

「何処に行くの？」

「切嗣がアイリスフィールと宜しくやってる場所だ。というか何処にあいつの寝所があるか分からないな。案内しろ、アイリスフィール二世」

「私の名前はイリヤスフィール。そういう貴方の名前は？」

「レナード・エニアグラム。良い名前だろ？」

「そうね。私には負けるけど」



「うんうん。切嗣も良い娘を持った。  
それじゃあ案内して貰おうか。切嗣が眠る場所へ」

まるで私たちは示し合わせたかのように意気投合した。  
ただどこの出会いは偶然ではなく必然だったのだろう。  
或いは切嗣が私に令呪を譲った時から、この出会いは運命だった  
のかもしれない。

「それにしても、あの車はどうしたの？」

「ぶったまげたらう？」

「格好つけたがり屋？」

「本当に良い男ってのは、格好つけなくても、格好良いものだ」

「そういうものなの？」

「そういうものだ」

そしてレナード・エニアグラムはこんな言葉を呟いた。それはた  
ぶんそれは、彼にとってはなによりも重要で、信頼した誰かに向け  
たモノなのだろう。静かに、ただどはつきりと言った。

「俺は、ここにいる」

「

## サーヴァント一覽&登場人物

<第四次聖杯戦争>

【クラス】セイバー

【マスター】衛宮切嗣

【真名】レナード・エニアグラム

【性別】男性

【身長・体重】190cm 81kg

【属性】秩序・中庸

【筋力】A 【魔力】B

【耐久】B 【幸運】C

【敏捷】A 【宝具】B

【クラス別能力】

対魔力：A

最高ランクの対魔力。

現代のいかなる魔術師もセイバーを傷つける事は出来ない。

騎乗：A

乗り物に騎乗する才能。

ただし幻想種はその限りではない。

【保有スキル】

直感：A++

最高ランクの直感。

数手先の未来までを完全に予知し、擬似的な遠視、遠未来視すら可能とする。

また狙撃時に有利な補正が加えられる効果があり、幻覚や惑乱の類も無力化してしまう。

悲恋：C

悲恋の騎士。スキルというよりは英霊としての呪い。

セイバーが本気で恋をした女性は高確率で「死の運命」に引き摺られ決してしまい、決して添い遂げられる事はない。これを打ち破るには同ランク以上のLuckが必要。

あくまで本気で恋をした相手限定であり、洗脳などによって植え付けられた感情、ないし肉体関係を結んだだけの相手には効果を発揮しない。

女殺し：C

究極の女つたらし。異常なほど女性を魅了する天性の才覚、及びそれを成す技能。

知名度補正により能力が下がっているが、本来のランクはA。

もしランクAだった場合は魔眼でいうなら『黄金』に匹敵するほど強力な魅了、更には女性相手の戦闘で優位な補正がつけられる効果がある。

出世運：A

セイバーが望む望まないに関わらず、あらゆる運に恵まれ異常なスピードで出世していく。その力は三年で一パイロットから軍総帥の地位に到るほど。

心眼（真）：B

修行・鍛錬によって培った洞察力。

僅かでも勝機があるのならば、それを手繰り寄せられる。

## 【宝具】

オウル・ハイル・ソルジャー  
軍人に栄光を

ランク：A+

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：30人

セイバーが触れた物はなんであろうとランクD〜E相当の武器として自らの宝具とする事が可能。宝具化した兵器・武器のランクはセイバーのその武器に対する熟練度で決定し、使い慣れた武器ならばD、使い慣れない武器はEとなる。  
また元からそれ以上のランクである宝具を手にした場合は、そのままのランクでセイバーの支配下におかれてしまう。

デーモン・オブ・ブリタニア  
魔人の如き銃口

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：2〜4

最大補足：1人

セイバーの象徴と言うべき宝具。

彼の撃った弾丸は必ず頭部を吹き飛ばす、という逸話が一つ概念となった一つの業。

近〜中距離では使用出来ないが、遠距離から一方的に、因果逆転の呪いである”必ず命中する”という効果の銃弾を発射するので非常に殺傷能力に優れている。

狙う場所はセイバーの意思で選定可能。

エクスカリバー  
約束された勝利の剣

ランク：A++

種別：対城宝具

レンジ：1～99

最大捕捉：1000人

アーサー王が生前一時的に精霊から授かった聖剣。人ではなく星に鍛えられた神造兵装であり、人々の「こうあって欲しい」という願いが地上に蓄えられ、星の内部で結晶・精製された「最強の幻想」である。彼が死ぬ間際のアーサー王から譲り受けた（強奪した）モノ。

本来は所有者であって使い手ではないのだが、もう一つの宝具である軍人に栄光を《オール・ハイル・ソルジャー》と併用することで使い手としての真名解放も可能。

神霊レベルの魔術行使を可能とし、所有者の魔力を光に変換、集束・加速させることで運動量を増大させ、光の断層による“究極の斬撃”として放つ。攻撃判定があるのは光の斬撃の先端のみだが、その莫大な魔力の斬撃が通り過ぎた後には膨大な熱が発生するため、結果的に光の帯のように見える。その威力は絶大でこと聖剣というカテゴリーの中では頂点に位置する。

威力的にはアーサー王の放つソレと同等。贗作ではなく本物であり、なによりレナード自身がアーサー王を打倒したというのも大きい。

【クラス】アーチャー

【マスター】遠坂時臣

【真名】ギルガメッシュ

【性別】男性

【身長・体重】182cm 68kg

【属性】混沌・善

【筋力】B 【魔力】A

【耐久】B 【幸運】A

【敏捷】B 【宝具】EX

## 【クラス別技能】

対魔力：C

第二節以下の詠唱による魔術を無効化する。

大魔術、儀礼呪法など大掛かりな魔術は防げない。

単独行動：A

マスター不在でも行動できる。

ただし宝具の使用などの膨大な魔力を必要とする場合は、マスターのバックアップが必要。

## 【固有スキル】

黄金律：A

身体の黄金比ではなく、人生において金銭がどれほどついて回るかの宿命。

大富豪でもやっつけていける金ピカぶり。一生金には困らない。

カリスマ：A+

大軍団を指揮・統率する才能。

ここまでくると人望ではなく魔力、呪いの類である。

神性：B（A+）

最大の神霊適正を持つのだが、ギルガメッシュ本人が神を嫌っているのでランクダウンしている。

## 【宝具】

ゲイト・オブ・バビロン

王の財宝

ランク：E〜A++

種別：対人宝具

黄金の都へ繋がる鍵剣。

空間を繋げ、宝物庫の中にある道具を自由に取り出せるようになる。

使用者の財があればあるほど強力な宝具となるのは言うまでもない。

エヌマ・エリシユ  
天地乖離す開闢の星

ランク：EX

種別：対界宝具

レンジ：1〜99

最大捕捉：1000人

乖離剣・エアによる空間切断。

圧縮され鬩ぎ合う風圧の断層は、擬似的な時空断層となつて敵対する全てを粉碎する。

対粛正ACか、同レベルのダメージによる相殺でなければ防げない攻撃数値。

STR×20ダメージだが、ランダムでMGIの数値もSTRに+される。最大ダメージ4000。

が、宝物庫にある宝具のバックアップによってはさらにダメージが跳ね上がる。

セイバーのエクスカリバーと同等か、それ以上の出力を持つ“世界を切り裂いた”剣である。

【クラス】ランサー

【マスター】ケイネス・エルメロイ・アーチボルト

【真名】クー・フリーリン

【性別】男性

【属性】 秩序・中庸

【筋力】 B 【魔力】 B

【耐久】 C 【幸運】 D

【敏捷】 A 【宝具】 B +

【クラス別能力】

対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。

大魔術、儀礼呪法等を以ってしても、傷つけるのは難しい。

【保有スキル】

戦闘続行：A

往生際が悪い。

瀕死の傷でも戦闘を可能とし、決定的な致命傷を受けない限り生き延びる。

仕切り直し：C

戦闘から離脱する能力。

また、不利になった戦闘を戦闘開始ターンに戻し技の条件を初期値に戻す。

ルーン：B

北欧の魔術刻印・ルーンを所持。

ランサーは魔術師としても卓越しており、キャスターのクラスにも該当する。

矢よけの加護：B

飛び道具に対する防御。



狙撃手を視界に収めている限りどの様な投擲武装だろうと肉眼でとらえ対処できる。

ただし超遠距離からの直接攻撃は該当しない。

神性：B

神霊適正を持つかどうか。

高いほどより物質的な神霊との混血とされる。

### 【宝具】

ゲイ・ボルク  
刺し穿つ死棘の槍

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：2～4

最大補足：1人

ランサーの持つ紅の魔槍。そして彼が編み出した対人用の刺突技。槍の持つ因果逆転の呪いにより、真名開放すると「心臓に槍が命中した」という結果をつくってから「槍を放つ」という原因を作る、つまり必殺必中の一撃を可能とする。急所を穿つことにより、確実に相手を死に至らしめることができ、一対一の戦いでは非常に効率がいい。

ちなみに、発動したと同時に「相手が死ぬという結果」が成立しているため、仮に放った直後でランサーが死んだとしても、槍はひとりで動いて相手を貫く。

回避に必要なのは俊敏性ではなく、槍の作った因果を捻じ曲げる程の強運。

ゲイ・ボルク  
突き穿つ死翔の槍

ランク：B+

種別：対軍宝具

レンジ：5〜40

最大補足：50人

魔槍ゲイボルクの本来の使用方法。渾身の力を持って投擲し、相手を攻撃する。

「刺し穿つ死棘の槍」が命中を重視したものならば、こちらは威力を重視している。

しかし、因果逆転の呪い・必中の効果は健在である。なお、一人一人を刺し貫いていくのではなく、炸裂弾のように一撃で一軍を吹っ飛ばす。

【クラス】ライダー

【マスター】ウェイバー・ベルベット

【真名】イスカンダル

【性別】男性

【身長・体重】212cm 130kg

【属性】中立・善

【筋力】B 【魔力】B

【耐久】A 【幸運】A+

【敏捷】D 【宝具】A++

【クラス別技能】

対魔力：D

シングルアクション

一工程による魔術行使を無効化する。

魔力避けのアミュレット程度の対魔力。

騎乗：A+

騎乗の才能。獣であるのならば幻獣・神獣のものまで乗りこなせる。

ただし、竜種は該当しない。

### 【固有スキル】

神性：C

明確な証拠こそないものの、多くの伝承によって最高神ゼウスの息子であると伝えられている。  
父方がヘラクレス、母方がアキレウスの子孫であるとされ、ヘラクレスとアキレウス共にゼウスの子孫。

カリスマ：A

大軍団を指揮する天性の才能。

Aランクはおよそ人間として獲得しうる最高峰の人望といえる。

軍略：B

一対一の戦闘ではなく、多人数を動員した戦場における戦術的直感力。

自らの対軍宝具の行使や、逆に相手の対軍宝具に対処する場合に有利な補正が与えられる。

### 【宝具】

ヴィア・エクスラグナティオ  
遙かなる蹂躞制覇

ランク：A+

種別：対軍宝具

レンジ：2～50

最大捕捉：1000人

ゴルディアス・ホイール  
宝具『神威の車輪』による蹂躞走法。

神牛の蹄と戦車の車輪による2回のダメージ判定がある。

いずれも物理ダメージの他にゼウスの顕現である雷撃の効果があり、

ST判定に失敗すると追加ダメージが課される。

アイオニオン・ヘタイロイ

### 王の軍勢

ランク：EX

種別：対軍宝具

レンジ：1～99

最大捕捉：1000人

死してなおイスカンダルに忠誠を誓い、君主とともに英霊化した近衛兵団をサーヴァントとして現界させる。 召喚されるのはいずれもマスター不在のサーヴァントだが、それぞれがEランク相当の『単独行動』スキルを保有し、最大30ターンに及ぶ現界が可能。

【クラス】 キャスター

【マスター】 ????

【真名】 エミヤ

【性別】 男性

【属性】 中立・中庸

【筋力】 D 【魔力】 B

【耐久】 C 【幸運】 E

【敏捷】 C 【宝具】 A++

【クラス別スキル】

道具作成：B

魔術の礼装については、精々が三流以下の品を作るのがやっと。

ただし『とある魔術』を使う事で『剣』という概念ならば宝具ですら複製出来る。

陣地作成：C

魔術師として、自らに有利な陣地を作り上げる。

“工房”を形成する事が可能。

### 【固有スキル】

千里眼：C

視力の良さ。遠方の標的の捕捉、動体視力の向上。

さらに高いランクでは、透視・未来視さえ可能とする。

魔術：C-

オーソドックスな魔術を習得。

心眼（真）：B

修行・鍛錬によって培った洞察力。

窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す“戦闘論理”

逆転の可能性が1%でもあるのなら、その作戦を実行に移せるチャンスを手繰り寄せられる。

### 【宝具】

アインリミテッドブレイドワークス

無限の剣製

ランク：E→A++

種別：固有結界

錬鉄の固有結界。目視した刀剣を結界内に登録し複製（ただし能力のランクは一つ落ちる）、貯蔵する。刀剣に宿る「使い手の経験・記憶」ごと複製しているため初見の武器を複製しても、オリジナルの英霊ほどではないがある程度扱いこなし、真名解放も出来る。尚、

盾や鎧は剣投影の2〜3倍の魔力を使えば一時的に引き出せる。相手の宝具や技量を複製しただけでは、それを極限まで使いこなすオリジナルの英霊に及ばないため、他の英霊の宝具をいくつも記憶した上で、それらを効果的に運用して初めて他のサーヴァントに対抗し得る能力となる。ただしギルガメッシュに対しては、特に工夫しなくとも常に先手を取れるため、天敵となっている。彼の「強化」や「投影」はこの固有結界から零れたものであり、一般的な魔術ではない。尚、本来は魔術であり宝具ではないが、キャスターの象徴ということで宝具扱いになっている。

干将・莫耶かんしょう ぼうや

ランク：C -

種別：？

レンジ：？

最大捕捉：？

由来：古代中国・呉の刀匠干将与妻の莫耶、及び二人が作った夫婦剣陰陽二振りの短剣。キャスターを象徴する宝具。黒い方が陽剣・干将、白い方が陰剣・莫耶。互いに引き合う性質を持つ夫婦剣。二つ揃いで装備すると、対魔力、対物理が上昇する。宝具としてのランクは高くないが、投影の負担が軽いことと、先の特質から愛用している。キャスターの手によって刀身に魔除けの文句が刻まれている。また、巫術器具としてつかうことも。真名解放されたことはないが、複数個を投影し、投擲と斬撃のコンビネーション技「鶴翼三連」をキャスターは使用した。

一偽・螺旋剣（カラドボルグエー）

ランク：？

種別：？

レンジ：？

最大捕捉：？

名前通り、螺旋を描く刀身を持つ剣。「偽」や「EE」が示す通り、本来のカラドボルグとは異なり、キャスターのアレンジが施されている。

矢として放つ場面も、手に持って使う場面も両方あり、どちらとしても使える武器。

真名開放して放たれた際は空間すら擦り切る貫通力を発揮するため、直撃はしなかったメディアでも体をズタズタにされ倒されかけた。

#### ロー・アイアス 熾天覆う七つの円環

ランク：？

種別：？

レンジ：？

最大捕捉：？

キャスターが唯一得意とする防御用装備。投擲武器や、使い手から離れた武器に対して無敵という概念を持った概念武装。

光で出来た七枚の花弁が展開、一枚一枚が城壁と同等の防御力を持つ。投擲武器に対しては非常に頑強である一方、通常武器に対しての防御力は示されていない

#### フルンティンク 赤原獵犬

ランク：？

種別：？

レンジ：？

最大捕捉：？

センタービルから大橋へ弓につがえて放った剣。射手が健在かつ狙い続ける限り、標的を襲い続ける。

キャスターが剣へ魔力を込めるのにかかる時間が三十秒以内であればセイバー（アルトリア）は一応迎撃できるが、渾身の魔力を込めて放った場合の速度は約マツハ10で、令呪を使わなければ敗北は不可避。

【クラス】バーサーカー

【マスター】間桐雁夜

【真名】ルキアーノ・ブラッドリー

【性別】男性

【属性】混沌・狂

【筋力】 B 【魔力】 D

【耐久】 C 【幸運】 D

【敏捷】 A 【宝具】 B

【クラス別能力】

狂化：A++

全パラメーターをワンランク上昇させる。

また元々『狂い』を象徴する英霊である為に、狂化によって思考能力を奪われない。

【保有スキル】

心眼（偽）：B

直感・第六感による危険回避。

天性の才覚であり努力で培われたものではない。

投擲：A

ナイフを投擲する技能。

速射性と命中率に優れる。

精神汚染：B

精神が通常の人間の範疇から外れているため、精神干渉等をを低確



率でシャットアウトできる。

意思疎通には問題ないが、常識的人間からは嫌悪感をもたれ易い。

戦闘続行：A++

生還能力。瀕死の傷でも戦闘を続け、決定的な致命傷を負わない限り生き延びる。

宝具と併用する事で不死身の肉体を得ている。

### 【宝具】

オウル・ハイル・ヴァンパイア  
吸血鬼に血肉の宴を

ランク：C

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：30人

ルキアーノが対象の血肉を喰らう事で発動可能。

対象の理性を薄め、その人物の暗黒面を晒しだす。

狂化と違い思考能力を奪う事はないが、大抵の場合この宝具を受けた者は狂暴化ないし暴走してしまう。特に強固な理性をもって行動しているモノはその本能を晒される。

ただし元々本能のみに従っている者には効果がない。

ヴァンパイア・オブ・ブリタニア  
吸血鬼の如き肢体

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：30人

命のストック。人間またはそれ以上の生命体を殺した数だけ、自らの命をストックする能力。

無垢なる民草五百人を殺しつつしたのならば、ルキアーノを殺すには

五百回殺害するか、一度に五百回殺戮する攻撃をする必要がある。  
ストックする数に上限はない。  
殺せば殺すほどに強くなっているルキアーノならではの宝具といえよう。

【クラス】アサシン

【マスター】言峰綺礼

【真名】李書文

【性別】男性

【筋力】 B      【魔力】 E

【耐久】 C      【幸運】 E

【敏捷】 A      【宝具】 ?

【クラス別能力】

気配遮断： -

アサシンのクラスが持つ共通スキルだが、このサーヴァントが持つ気配遮断はそれらのどれにも該当しない。彼の持つのは、姿を隠して行動するスキルであり、その究極として透明化があるが、これは多大な魔力を使用するため「魔術が使われている」気配を残してしまう。よって、敵対者が優れた術者である場合、「姿は見えないが何者かが細工をしている」と感知されてしまうのだ。魔術にたよらず、自らの体術のみで行う透明化。それはもはや人間の域とは呼べない魔技である。

【保有スキル】

中国武術：A+++

中華の合理。宇宙と一体になる事を目的とした武術をどれほど極めたかの値。

修得の難易度は最高レベルで、他のスキルと違い、Aでようやく“修得した”と言えるレベル。

+++ともなれば達人の中の達人。

圏境：A

気を使い、周囲の状況を感知し、また、自らの存在を消失させる技法。

極めたものは天地と合一し、その姿を自然に透けこませる事すら可能となる。

### 【宝具】

无二打

ランク：？

種別：？

レンジ：？

最大補足：？

李書文の剛打は、牽制やフェイントの為に放ったはずの一撃ですら敵の命を奪うに足るものであった。

「李書文に二の打ち要らず（神槍无二打）」

无二打は、そんな彼の称号がカタチになったものである。

明確に言うとは宝具ではなく、武術の真髄。

李書文は達人であり、その勁力が優れているのは言うまでもないが、それ以上に重要なのが相手を「気で呑む」事を実践していたことにあると考えられる。

一説によると、李書文は拳の破壊力だけで相手を倒してはいないら

しい。

彼によって絶命せしめられた者たちのほとんどは内臓の破壊ではなく、

現在で言うところのショック死状態であったと伝えられる。

「気で呑む」技法は、技法としては固定された名称がなく、わずかに仙道修行の

周天行における空周天に酷似した発想があるのみである。

周天行とは気を心身に巡らせ、それによって全身を活性化した上で気を共鳴・増幅して養っていく鍛錬法的一种。そのひとつの到達点<sup>エネルギー</sup>が全身を気で満たすものであり、また、周囲の空間に自身の気を満たす事にある。

李書文はこの行法によって相手を「気で呑む」、つまり自身の気で満ちた空間を形成することで

完全に自分のテリトリーを作っていたのではないか、と考察される。

「気で呑まれた者」は、一部の感覚が眩惑され、緊張状態となり、この状態で相手の神経に直接衝撃を打ち込んだ場合、迷走神経反射によって心臓は停止する。

【クラス】セイバー

【マスター】衛宮切嗣

【真名】レナードオルタ

【性別】男性

【身長・体重】190cm 81kg

【属性】秩序・悪

【筋力】A+ 【魔力】B

【耐久】A 【幸運】E

【敏捷】 D 【宝具】 B

【クラス別能力】

対魔力：B

最高ランクの対魔力を誇っていたが、反転した影響でランクが下がってしまった。

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。

大魔術、儀礼呪法等を以ってしても、傷つけるのは難しい。

騎乗：C

乗り物に騎乗する才能。

生前の彼が騎乗を得意とすることもあって、完全には失われていない。

【保有スキル】

直感：A++

最高ランクの直感。

本能がより前に現れている為か、失われていない

悲恋：

反転した影響で消滅している。

どうやらこのスキルは、元のレナードにだけ作用するものであるらしい。

出世運：A

レナードが望む望まないに関わらず、あらゆる運に恵まれ異常なスピードで出世していく。その力は三年で一パイロットから軍総帥の地位に到るほど。

心眼（真）：  
修行・鍛錬によって培った洞察力。  
反転した影響でその洞察力は失われている。

### 【宝具】

オール・ハイル・ソルジャー  
軍人に栄光を

ランク：A+

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：30人

セイバーが触れた物はなんであろうとランクD〜E相当の武器として自らの宝具とする事が可能。宝具化した兵器・武器のランクはセイバーのその武器に対する熟練度で決定し、使い慣れた武器ならばD、使い慣れない武器はEとなる。  
また元からそれ以上のランクである宝具を手にした場合は、そのままのランクでセイバーの支配下におかれてしまう。

デーモン・オブ・ブリタニア  
魔人の如き銃口

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：2〜4

最大補足：1人

セイバーの象徴と言わなければならない宝具。

彼の撃った弾丸は必ず頭部を吹き飛ばす、という逸話が一つの概念となった一つの業。

近々中距離では使用出来ないが、遠距離から一方的に、因果逆転の呪いである”必ず命中する”という効果の銃弾を発射するので非常に殺傷能力に優れている。

狙う場所はセイバーの意思で選定可能。

【クラス】セイバー

【マスター】衛宮切嗣&アンリ・マユ

【真名】最終話でのスーパーレナード

【性別】男性

【身長・体重】190cm 81kg

【属性】秩序・中庸

【筋力】A 【魔力】EX

【耐久】B 【幸運】C

【敏捷】A 【宝具】EX

【クラス別能力】

対魔力：A

最高ランクの対魔力。

現代のいかなる魔術師もセイバーを傷つける事は出来ない。

騎乗：A

乗り物に騎乗する才能。

ただし幻想種はその限りではない。

【保有スキル】

千里眼：C

視力の良さ。遠方の標的の捕捉、動体視力の向上。

より高いレベルになると未来視・透視すら可能とする。

ブリタニア軍式格闘術：A++

合気道、テコンドー、八極拳、少林寺、柔術、ムエタイ、e t c :  
...。  
西洋問わず、古今東西あらゆる武術のノウハウを活かし、当時の天才マリアンヌ・ヴィ・ブリタニアが元々あったブリタニア軍式格闘術をより実戦的に昇華させた究極の格闘術。それがブリタニア軍全体へと広がり、軍人の必修科目に到るまでになる。  
あくまで戦場で敵を効率よく、素早く鎮圧することを至上としている為、礼儀などは度外視されている。レナードは幼少時より実父と姉、そしてマリアンヌ本人からこれを叩き込まれており、本人の才覚もあつて高いレベルでこれを修得している。

直感：A++

最高ランクの直感。

数手先の未来までを完全に予知し、擬似的な遠視、遠未来視すら可能とする。

また狙撃時に有利な補正が加えられる効果があり、幻覚や惑乱の類も無力化してしまう。

召喚：E

主任を呼び出す。

一応『召喚』というカテゴリーにあるが、主任という存在は英霊レナードにとつての内臓であり付属品なので、実際には通常の英霊が槍や剣を取り出すのと全く変わらない。

悲恋：C

悲恋の騎士。スキルというよりは英霊としての呪い。

レナードが本気で恋をした女性は高確率で「死の運命」に引き摺られ決してしまい、決して添い遂げられる事はない。これを打ち破るには同ランク以上のLuckが必要。

Fateでいうと、桜、イリヤ、ライダーなどがヒロインだったな



らば確実にBAD ENDにしなければならない。

女殺し：A

究極の女つたらし。異常なほど女性にモテる天性の才覚、及びそれを成す技能。また女性相手との諸問題など全てにおいて優位に立てる力があり、しかもそれが嫌味にならないなどかなり得な性質。

チャーム効果もあり、女性ならば問答無用で魅了してしまう。これは英霊デイルムツドのスキルである愛の黒子にも似ているが、レナードのソレはランクにしてAなので、卓越した魔術師だろうとホムンクルスだろうと問答無用で魅了し虜にする。アルクエイドの『黄金』クラスの魅了の魔眼と同等の能力。

ただレナード・エニアグラムが略奪愛というものを好まない性質なので、既に他の異性を深く愛している者には効き目が薄い。手を出す女性は肉体関係でしかない愛人まで。心の通い合った愛人や、関係が冷え切っていたとしても人妻には手を出さない。

ついでに言うとデイルムツドのように制御不能という訳ではなく自分で制御できる。最大限抑えたとしても「異性の興味を引く」程度は残るが。

イタリアに行つて三日で大統領の愛人を寝取つたり、未亡人を口説いたり、三十六股かけたりなど、その逸話には事欠かない。英雄色を好むというのを体現した人物であろうといえよう。

恐らくどんな人物が正妻になろうとも彼の女癖の悪さは治らない。というより彼は貴族で一夫多妻制が当然という文化を持っているので、一人の女性しか愛していけないという考えがそもそもない。

出世運：A

本人が望む望まないに関わらず、あらゆる運に恵まれ異常なスピードで出世していく。その力は三年でパイロットから軍総帥の地位に到るほど。

心眼（真）：B

修行・鍛錬によって培った洞察力。  
僅かでも勝機があるのならば、それを手繰り寄せられる。

鋼鉄の胃袋：B

それが料理というジャンルであるならば問題なく食す事が可能。それこそ激辛マーボーだろうと。

またギャルゲにありがちな、ヒロインが作る殺人料理でも美味しく完食出来るので、料理が壊滅的なヒロインにフラグが立ち易い。毒物を無効にする能力もある。

ちなみに彼の料理の腕は殺人級（悪い意味で）。しかも味見したとしても、このスキルのせいで自らの作った料理の異常に気付けない上に美味しく完食してしまう。

## 【宝具】

オウル・ハイル・ソルジャー  
軍人に栄光を

ランク：A+

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：30人

セイバーが触れた物はなんであろうとランクD〜E相当の武器として自らの宝具とする事が可能。宝具化した兵器・武器のランクはセイバーのその武器に対する熟練度で決定し、使い慣れた武器ならばD、使い慣れない武器はEとなる。

また元からそれ以上のランクである宝具を手にした場合は、そのままのランクでセイバーの支配下におかれてしまう。

デーモン・オブ・ブリタニア  
魔人の如き銃口

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：2～4

最大補足：1人

セイバーの象徴と言うべき宝具。

彼の撃った弾丸は必ず頭部を吹き飛ばす、という逸話が一つ概念となつた一つの業。

近く中距離では使用出来ないが、遠距離から一方的に、因果逆転の呪いである”必ず命中する”という効果の銃弾を発射するので非常に殺傷能力に優れている。

狙う場所はセイバーの意思で選定可能。

エクスカリバー  
約束された勝利の剣

ランク：A++

種別：対城宝具

レンジ：1～99

最大捕捉：1000人

アーサー王が生前一時的に精霊から授かった聖剣。人ではなく星に鍛えられた神造兵装であり、人々の「こうあって欲しい」という願いが地上に蓄えられ、星の内部で結晶・精製された「最強の幻想」である。彼が死ぬ間際のアーサー王から譲り受けた（強奪した）モノ。

本来は所有者であつて使い手ではないのだが、もう一つの宝具である軍人に栄光を《オール・ハイル・ソルジャー》と併用することで使い手としての真名解放も可能。

神霊レベルの魔術行使を可能とし、所有者の魔力を光に変換、集束・加速させることで運動量を増大させ、光の断層による“究極の斬撃”として放つ。攻撃判定があるのは光の斬撃の先端のみだが、その莫大な魔力の斬撃が通り過ぎた後には膨大な熱が発生するため、結果的に光の帯のように見える。その威力は絶大でこと聖剣という力テゴリーの中では頂点に位置する。

威力的にはアーサー王の放つソレと同等。贗作ではなく本物であり、なによりレナード自身がアーサー王を打倒したというのも大きい。

デッドナイト・オブ・アースガルス  
神世界の魔王軍

ランク：E X

種別：対軍宝具

レンジ：計測不能

最大捕捉：計測不能

ブリタニア帝国史上最強の騎士レナード・エニアグラムの、本来は発動すら不可能な宝具。

何故反則かというのと、発動する為に必要な魔力が出鱈目に多く、発動するとしたらイリヤスフィールクラスの魔力量の持ち主が、五秒程度発動出来れば御の字というほど。なので一応あるのはあるが発動は不可能と言う欠陥宝具。

しかしイレギュラーな事態により繋がってしまったアンリ・マユからの魔力供給は無尽蔵を超えた無限であり、令呪のサポートなど面倒な事なしで発動可能。

レナード・エニアグラムは繋が<sup>ワイアード</sup>り者であり、すべての根源の渦であるこの世界と繋がっている。その繋がっている”道”を膨大な魔力を使うことで、強引に現実世界を侵食、全く違う理の世界を対象を飲み込む。

その世界は生者の世界と死者の世界の狭間であり、レナードは死者の世界の住人たる神聖ブリタニア軍全軍を呼び出すことが可能。イスカンダルアイオニオン・ヘタイロイの王の軍勢とは違い、英霊の座ではなく死者の世界全てに号令をする為、戦う意思があれば普通の人間として一生を終えた者であっても戦場にはせ参じることが可能。

枢木スザク、ルキアーノ・ブラッドリー、アーニヤ、モニカ、ノネット、ダールトン、コーネリアなど嘗てのナイト・オブ・ラウンズや英雄豪傑も問題なく召喚され、どのような相手だろうと圧倒的

な数の暴力で鎮圧する。総数は約500万。黄昏の間のシステムとオウル・ハイル・ソルジャー軍人に栄光をの効果によりランクDの宝具状態で武装も実体化され。その中にはパーシヴァルやランスロットといった元々宝具のKMFBも存在し、この空間でのみレナードの搭乗機であるマーリン・アンブロジウスや最悪の宝具であるフレイヤが使用可能。

更にアンリ・マユからの魔力供給が無限である為に、Cの世界内の全てを倒さない限りこれが解除される事もなく、召喚された全ての者はその能力をなんの制限もなしに行使出来るという、究極の反則。別名たった一人で最終戦争。最終回限定のパワーインフレなので他の場面で使われることはない。

フレイヤ  
神世界の断罪

ランク：EX

種別：対国宝具

レンジ：計測不能

最大捕捉：大帝国の都市を壊滅させる程。

半径数百kmにある全ての概念・存在・物質・生命体を消滅させる。そこに例外はない。

## 【登場人物】

<セイバー陣営>

衛宮切嗣

地味ながらも本作品のもう一人の主人公。

余り活躍していないように見えるが、単体で言峰と戦ったり、時臣へ放った起源弾が勝利への大事な布石となったりと、要所ではしっかりと活躍していた。

原作と違い、アンリ・マユに冒されながらもレナードから溢れ出た魔力があつた為に、どうにか愛娘たるイリヤスフィールを救出。そして原作とほぼ同時期に死去した。

アイリスフィール・フォン・アインツベルン

レナードが召喚された早々に口説こうとした女性。

ただ人妻には手を出さない主義なので諦めた。

飛行機内でレナードと友達になり、彼女の存在がレナードを本気にした原因。

実は本編中でちよろつとだけ仄めかしたが、レナードは異性としてアイリスフィールに微かに好意を持っていた。しかし世界が変わっても 悲恋 の呪いは健在で、しっかりと原作通りに死亡した。

久宇舞弥

余り出番がなかったが、最終話で切嗣を救出したりと、地味に活躍した。

聖杯戦争終結後は、自分の子供を探して旅に出る。

レナード・エニアグラム

衛宮切嗣のサーヴァントとして召喚された『ブリタニアの魔人』

最優のサーヴァントだけあって、その能力は高く本作では合計三体のサーヴァントを撃破した。

実は最終話でイリヤと出会う一年前には、既に帰還していたのだが、魔術協会などで色々と地盤固めをしていたら遅くなった。時計塔では対魔力Aの理不尽さを存分に発揮して、魔術師相手に無双。魔術師の皆さんにとっては、自分たちの長年の研鑽が全て無効化されるは、男女平等パンチを喰らうはで散々だったとか。圧倒的な暴力と恐喝、飴と鞭を巧みに操り、ケイネスに一大勢力を築かせた。そして地盤が完全に固まってから来日。イリヤスフィールと共に衛宮切嗣の眠る場所へと向かう。

<ランサー陣営>

ケイネス・エルメロイ・アーチボルト

死亡フラグだらけの原作とは違い、生き延びた人。

聖杯戦争終結後は、ウェイバーとも和解し、角が取れて良い講師になったとか。

ただし自らのサーヴァントの影響か、やや戦闘狂気味になってしまい、時が経つにつれて講師の仕事や面倒な仕事はウェイバーに丸投げするようになってしまっ困ったちゃん。ある日ふらりと現れたレナードに利用されて、時計塔に一大勢力を築かされてしまう。

ソラウ・ヌウザレ・ソファイアリ

一応生存。ただし空気。本編には登場せず。

ちなみにケイネスが召喚したのがレナードだった場合、恐らく三角関係になっていた。

聖杯戦争終結後はなんだかんだでケイネスと結婚。尻に敷く。

クー・フリーン

我らが兄貴。レナードと決着をつける事は出来なかったが、全力で戦えたので原作よりはまし。彼のせいで本編後のケイネスは戦闘狂気味になってしまう。

<時臣陣営>

遠坂時臣

我らがミスターうっかり。

終盤まで時臣の計画通りに事が進み、さあ最終決戦だと気合を入れた瞬間、切嗣の手によって撃破されてしまった人。結果ギルにも飽きられギルの存在を繋ぎとめておくためだけに無理に生かされる。

ギルガメツシュ消滅後、死亡。魔術刻印は娘である凜に受け継がれる。

#### ギルガメツシュ

我らが英雄王。Zero仕様の慢心しても油断はしないパーフェクト英雄王。

本作においてその最強ぶりを存分に発揮し、ランサー瞬殺、イスカンドルを一撃で粉碎、など無双。レナード相手にも終始圧倒し続け、アヴァロンの存在や時臣の脱落などといったイレギュラーがなければ確実に勝利者となっていただろう英霊。

#### 言峰綺礼

外道麻婆神父。原作では生き延びたが本作では死亡。

Fate/stay nightにおける黒幕である彼の死は、完全に原作から外れたという一番の証となっている。

#### 李書文

恐らくFate史上最強のアサシン。

圏境というチートスキルを有するが、直感スキルによって完全無効化してしまうレナードとは相性がかなり悪く、それが原因となった敗退した。だが第四次が通常のラインナップだったら確実に最強の一角を担ったであろう存在。

#### <ライダー陣営>

#### ウェイバー・ベルベット

本作における癒し。時臣を除けば、ほぼ原作に準拠した結末を迎える。

しかし彼が大変なのはその後。ケイネスとは和解したが、戦闘狂になっってしまったケイネスのかわりに面倒な仕事を押し付けられ、結



果としてケイネスの後継者とまで噂されてしまう。更に教師としての才能があつたせいで、ケイネスの勢力が高まり、おまけにふらりと現れたレナードにより更にケイネス勢力がやばいほどになり、最終的にロード・エルメロイ二世とまで呼ばれるような大人物になるが、本人は全く嬉しく思っていないとか。趣味は日本のゲーム。

#### イスカンドル

俺達の王。征服王イスカンドル。

原作通りその生き様は、ウェイバーの心に強く刻まれた。

#### <バーサーカー陣営>

#### 間桐雁夜

本作で一番不幸だった人。

取り敢えず雁夜。来世では強く生きてくれ。

#### ルキアーノ・ブラッドリー

原作ZEROの雰囲気を、ほぼ一人で演出してくれた功労者。

ちなみに彼が守護者となった際の望みは「レナードと決着をつける」

「死後も人を殺したい」の二つであり前者の望みのせいで今回の聖杯戦争に招かれた。

#### 間桐臓硯

怪奇バグ爺さん。

実は十年後の聖杯戦争で、不味いものを呼んでしまい……。

#### <キャスター陣営>

キャスターのマスターである三流魔術師

本名不明。オリキャラであるが、名前もない。

三流魔術師の名が示す通り魔術の腕は三流。簡単に言うとうと士郎に毛が生えたくらい。偶然からエミヤを召喚してしまい、戦う。エミヤ消滅後は教会に保護され、そのまま彼の出番は終わった。

#### エミヤシロウ

とある平行世界で衛宮切嗣の養子になる筈だった英霊。

原作においてはアーチャーとして召喚されたが故に、本作ではトラップとして使用された。

つまりエミヤ「アーチャー」の先入観を利用した取り替えトラップ。本作において衛宮切嗣に呪いを遣し消滅。ただ彼自身、かなり歪な形ではあるが「衛宮士郎」の破壊には成功したので、本望であるかもしれない。

#### <その他>

#### 言峰璃正

言峰綺礼の父親。生存はしたものの、最愛の息子を失いかなりのショックを受ける。

本編後は遠坂凜の後継人となり、後々には時計塔への留学を勧める。なので本作の凜は高校へ行かず、そのまま時計塔に留学することになる。

ちなみに、とある部署から回されてきた銀髪の少女を、自分の孫だということに気づき家族として迎え入れた。第五次聖杯戦争の一年前、病にして死去。教会の管理は孫娘に受け継がれた。

#### イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

衛宮切嗣とアイルスフィールとの間に生まれた娘にして、本作のラストをしめる存在。

ただし魔術の知識は本当に最低限しか教わっていない。ただ内に秘める膨大な魔力はそのままであり、普段は切嗣が「とある封印指定

の魔術師」より購入した魔力殺しで隠蔽している。

## 後書き

『コードギアス 反逆しない軍人』からの皆様はお久しぶりです。  
『Infinite Sky Knight<インフィニット・スカイ・ナイト>』まで見てくれた方にはありがとうございます。  
今現在『とある魔術の未元物質』まで見てくださっている方は超ありがとうございます。

作者であるRYUZENです。

後書きもこれで三回目となり感無量です。さて恒例というかなんというか、今回も例によって分割して。

### 【レナード・エニアグラムについて】

「コードギアス 反逆しない軍人」から続投した主人公レナード。一応最優のサーヴァントなので英霊の中でも上位に位置しますが、最強ではありません。どちらかというところ作戦や戦術で強引に最強の座にくらいついている、というのが正しいでしょうか。

前作でこそ最強でも、聖杯戦争はあらゆる時代から最強を冠した英雄たちが呼ばれるので、歴代最強騎士の名も聖杯戦争では埋もれてしまいます。なので本作内で一度も圧勝した相手は存在しませんでした。

### 【ルキアーノ・ブラッドリーについて】

レナード以外で唯一続投した男ルキアーノ。

尤もこの作品の目的の一つが「コードギアス 反逆しない軍人」で書けなかったことを書くというのがあったので、ルキアーノの出演

は決定してました。彼とレナードの決着をつけさせる、というのが序盤の肝になります。後はレナードに肉弾戦で戦わせたりなど。ついでにルキアーノは原作Fate/zeroのダークでグロテスクな雰囲気をもった一人で演出してくれたので、ある意味かなりの功労者といえますね。

#### 【Fate/zeroについて】

ここまで読んでくださった皆様には一つの感想が渦巻いている事と思います。

即ち「原作から外れすぎじゃね？」ということに。

実は当初の予定ではサーヴァントもレナードとルキアーノ以外は通常通りで、ギルとイスカンダルが聖杯問答したりなどがあったのですが………書く途中で原作を書き写すのが面倒くさいという理由だけで、完全に崩壊させました。それでもプロット段階では出来るだけ原作の結末に近付けようと思ったのですが、そうなると言峰を覚醒させたりと色々面倒くさく、プロットも定まりませんでした。しかしそこで天啓のように閃いた「原作通りにする必要なくね？」という『』に到達し、原作の結末やら展開を完全に無視して、独自ストーリーに入りました。言峰が死んだり、士郎が誕生しなかったり、ケイネスが生存したりしたのが一番大きな違いでしょうか。

さて、これだけで終わるのも何なので、やるかも分からない予告を。

<次章予告>

「子供のころ、僕は正義の味方に憧れてた」

七体のサーヴァントと七人の魔術師による殺し合い。

「イリヤ。僕は正義の味方にはなれなかったけど、イリヤのパパになれて嬉しかったよ」

第四次聖杯戦争から十年。

「うん、切嗣が悔しがるくらい幸せになるんだから！」

第五次聖杯戦争、開幕。

「問おう。貴女が私のマスターか？」

滅んだ祖国の救済を願う、孤独なる騎士王アルトリア。

「我が身、我が命。汝に預けよう」

ギリシャ最強の英雄にして、最強の槍兵ヘラクレス。

「僕も何故この姿で呼ばれたかは分かりません。けどアレよりはいいと思いますけど」

原初の英霊にして、何故か幼年体で呼ばれた英雄王ギルガメッシュ。

「我が名は呂布。字は奉先。俺の邪魔をする者は、死ね」  
三国志上最強の武将にして、裏切りの将たる鬼神呂布奉先。

「龍之介。いざ共にジャンヌの下へ！」

フランス救国の元帥にして、狂気に囚われし魔術師、ジル・ド・レ  
エ。

「a r …… t …… h u …… r !」

悔恨に身を焼かれ、狂気に染まりし円卓最強の騎士ランスロット。

「まさか、このような奇怪な運命があるとはな」  
そして異なる世界の、もう一人の騎士王アーサー。

「切嗣の恐し損ねた聖杯。私が壊すんだから！」  
衛宮切嗣の愛娘イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

「覚悟なんてとづくに出来てるわ。十年前からね」  
遠坂家の若き頭首にして天才魔術師、遠坂凜。

「残念ですが、ここで脱落して貰います」  
魔術協会の封印指定の執行者、バゼット・フラガ・マクレミッツ。

「ミス・遠坂！ 第三次における雪辱、今日こそ晴らす時ですわね！」  
遠坂凜のライバルにして主席候補、ルヴィア・ゼリッタ・エーデルフェルト。

「COOL！ 最っ高にCOOLだぜ旦那ッ！」  
殺人に芸術を見出した青年、雨生龍之介。

「邪魔する者は殺す。それが例え姉であろうと」  
アインツベルンの用意した、小聖杯の少女。

「私は……………姉さんに勝ちます。貴方の為にも」  
間桐の養子にして、遠坂凜の妹、間桐桜。

「歴代最強騎士の戦場に、敗北は許されない」  
異界の英霊にして第四次聖杯戦争の勝者レナード・エニアグラム。

史上最強にして最悪の第五次聖杯戦争の幕が開く。  
RYUZENのプロットが定まり次第、始動！

そんな訳でいろいろとカオスな聖杯戦争ですね。



というかヘラクレスがランサーだったり呂布がライダーだったりと無茶苦茶です。ギルが子供だし、ランスロット無敵状態だし、騎士王は二人いるし、八体目がいるし、キャスターが青髭だしと八チャメチャですね。

しかしやるかどうかは現時点で不明です。というより、時系列的にFateだけではなく月姫に絡ませることも可能だというオチが……。いつそ五次はやらずに月姫編でもやってしまおうか。

まあそんな事はさておき、今までご覧になって下さった読者の皆様には感謝を。

「コードギアス 反逆しない軍人」から応援してくださった方には特大の感謝を。

「Infinite Sky Knight<インフィニット・スカイ・ナイト>」も見て下さった方には超感謝を。

現在進行形で「とある魔術の末元物質」をご覧になっている方には、オール・ハイル・感謝を。

RYZEN作品をコンプリートして下さった方には、ウルトラ感謝を。

そして最後に、今まで応援ありがとうございました！

ではまた何時か。今度は「とある魔術の末元物質」にて。

## 後書き(後書き)

もし続きを書くとしたら、完結設定が解除されます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1537t/>

---

Fate/not rebellion ~ 反逆しない軍人の聖杯探索 ~

2011年6月21日15時10分発行